

勝持寺旧境内

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇一一年―五

勝持寺旧境内

2012年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

勝持寺旧境内

2012年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永く、そして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかむかしの、貴重な文化財が今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、京都第二外環状道路新設事業に伴う勝持寺旧境内の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

平成 24 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 勝持寺旧境内
- 2 所 在 地 京都市西京区大原野南春日町地内
- 3 委 託 者 分任負担行為担当官 近畿地方整備局 京都国道事務所長 小林賢太郎
- 4 調 査 期 間 平成 22 年度調査：2010 年 10 月 6 日～2011 年 8 月 31 日
平成 23 年度調査：2011 年 8 月 1 日～2011 年 11 月 30 日
- 5 調 査 面 積 平成 22 年度調査：3,760 m²
平成 23 年度調査：1,770 m²
- 6 調 査 担 当 者 平成 22 年度調査：南 孝雄・菅田 薫・辻 裕司・東 洋一・尾藤徳行・
布川豊治・長戸満男・加納敬二・津々池惣一
平成 23 年度調査：辻 裕司・加納敬二・東 洋一・本田憲三・近藤章
子
- 7 使 用 地 図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「岡新田」「大原野」「小塩」
「小塩山」「金蔵寺」「善峰寺」を参考し作成した。
- 8 使 用 測 地 系 世界測地系 平面直角座標系 VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使 用 標 高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使 用 土 色 名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺 構 番 号 平成 22・23 年度調査ごとに通し番号を付し遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺 物 番 号 平成 22・23 年度調査を含め通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本 書 作 成 南 孝雄・辻 裕司
- 14 執 筆 分 担 南 孝雄（第 2・3 章）、辻 裕司（第 1・4 章）
- 15 備 考 上記以外に、調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調
査業務職員があたった。
- 16 協 力 者 調査および報告書作成にあたり下記の方々のご協力を得た。記して感謝
いたします。（五十音順、敬称略）
石井清司、市川 創、一山隆昌、伊藤 太、伊庭 功、伊野近富、上原真人、
梅本康弘、大江綾子、大村拓生、河内一浩、菊井佳弥、北垣聰一郎、木
村 勇、國下多美樹、久保智康、高 正 龍、佐藤垂聖、嶋田直人、清水みき、
鋤柄俊夫、鈴木久男、高田 徹、高橋克壽、玉井 巧、玉木玲子、中井 均、
永恵裕和、中島 正、中塚 良、永野智子、中村真容、仁木 宏、西形達明、
西川禎亮、西田一彦、西山良平、橋本清一、浜中邦弘、浜口和弘、引原茂治、
平尾政幸、福永清治、藤岡英礼、降矢哲男、堀内明博、松尾信裕、松村
英之、三好孝一、森岡秀人、森島康雄、山川 均、山中 章、和田晴吾

目 次

第1章 調査経過	1
第1節 調査経過	1
第2節 平成22年度の調査経過	2
第3節 平成23年度の調査経過	6
第4節 石塁の移築保存と石垣の現地保存	7
1. 石塁の移築保存	7
2. 石垣の現地保存	8
第2章 位置と環境	9
第1節 地理的環境	9
第2節 歴史的環境	11
第3章 平成22年度の調査	13
第1節 1区の遺構	13
1. 基本層序	13
2. 遺構	15
第2節 2区の遺構	26
1. 基本層序	27
2. 遺構	27
第3節 3区の遺構	32
1. 基本層序	32
2. 遺構	32
第4節 4区の遺構	37
第5節 1～3区の遺物	37
1. 土器類	38
2. 瓦類	49
3. 硯	53
4. 石製品	53
5. 金属製品・銭貨	54
第6節 まとめ	56
第4章 平成23年度の調査	66
第1節 5区の遺構	66
1. 基本層序	66
2. 遺構	69

第2節 6区の遺構	76
1. 基本層序	76
2. 遺構	76
第3節 7区の遺構	82
1. 基本層序	82
2. 遺構	86
第4節 5～7区の遺物	89
1. 土器類	89
2. 瓦類	92
3. 金属製品	92
4. 石製品	92
第5節 まとめ	93

図 版 目 次

巻頭図版1	石垣 65 全景（南西から）
巻頭図版2	1 石垣 65 全景（南東から）
	2 石垣 65 下半部、石垣 127 全景（南から）
図版1	遺構 1～4区実測図（1：600）
図版2	遺構 1区平面図（1：200）
図版3	遺構 1・2区平面図（1：200）
図版4	遺構 3区西半平面図（1：200）
図版5	遺構 3区東半平面図（1：200）
図版6	遺構 4区平面図（1：200）
図版7	遺構 1区石垣 65 全体実測図（1：120）
図版8	遺構 1区石垣 65 実測図1（1：50）
図版9	遺構 1区石垣 65 実測図2（1：50）
図版10	遺構 1区石垣 65 実測図3（1：50）
図版11	遺構 1区石垣 65 実測図4（1：50）
図版12	遺構 1区石垣 65 断面1断面図（1：80）
図版13	遺構 1区石垣 65 断面2断面図（1：80）
図版14	遺構 1区石垣 65 断面3断面図（1：80）
図版15	遺構 1区石垣 65 背面造成第1面実測図（1：100）
図版16	遺構 1区石垣 65 背面造成第2-1面実測図（1：100）

図版 17	遺構	1 区石垣 65 背面造成第 2 - 2 面実測図 (1 : 100)
図版 18	遺構	1 区石垣 65 背面造成第 3 面実測図 (1 : 100)
図版 19	遺構	1 区石垣 65 背面造成第 4 面実測図 (1 : 100)
図版 20	遺構	1 区造成前地形平面図 (1 : 200)
図版 21	遺構	1 区石垣 65 背面造成第 2 面石垣 127 実測図 (1 : 50)
図版 22	遺構	1 区石垣 65 背面造成第 4 面列石 403 実測図 (1 : 50)
図版 23	遺構	1 区石垣 66 全体実測図 (1 : 150)
図版 24	遺構	1 区石垣 66 実測図 1 (1 : 50)
図版 25	遺構	1 区石垣 66 実測図 2 (1 : 50)
図版 26	遺構	1 区石垣 66 実測図 3 (1 : 50)
図版 27	遺構	1 区石垣 66 実測図 4 (1 : 50)
図版 28	遺構	1 区石垣 66 実測図 5 (1 : 50)
図版 29	遺構	1 区石垣 66、門 122 実測図 (1 : 60)
図版 30	遺構	1 区石垣 66 断面 4 断面図 (1 : 80)
図版 31	遺構	1 区石垣 66 断面 5 断面図 (1 : 80)
図版 32	遺構	1 区石垣 66 背面造成第 1 面平面図 (1 : 100)
図版 33	遺構	1 区石垣 66 背面造成第 2 面平面図 (1 : 100)
図版 34	遺構	2 区石垣 69 全体実測図 (1 : 150)
図版 35	遺構	2 区石垣 69 実測図 1 (1 : 50)
図版 36	遺構	2 区石垣 69 実測図 2 (1 : 50)
図版 37	遺構	2 区石垣 69 実測図 3 (1 : 50)
図版 38	遺構	2 区石垣 69 断面図 (1 : 40)
図版 39	遺構	1 区土坑 112・121、2 区集石 391・393 実測図 (1 : 40)
図版 40	遺構	2 区土坑 8・13・15・23、柵 409 実測図 (1 : 40)
図版 41	遺構	2 区中央部平面図 (1 : 80)、土橋 408・平坦面 5 西肩・溝 24 断面図 (1 : 40)
図版 42	遺構	3 区土坑 230・231・溝 240、柵 411 実測図 (1 : 50)
図版 43	遺構	3 区集石 155・157・171・172・201・327 実測図 (1 : 40)
図版 44	遺構	3 区暗渠 14・集石 17 実測図 (1 : 50)
図版 45	遺構	3 区列石 309・溝 342 実測図 (1 : 50)
図版 46	遺構	1 1 区石垣 65 全景 (南から) 2 1 区石垣 65 全景 (南西から)
図版 47	遺構	1 1 区石垣 65 全景 (南東から) 2 1 区石垣 65 全景 (東から)
図版 48	遺構	1 1 区石垣 65 東端部、礫敷 373 (西から) 2 1 区石垣 65 西端部 (西から)

- 図版 49 遺構 1 1 区石垣 65 中央部礫敷 372 (南から)
 2 1 区石垣 65 中央部、列石 371 (南東から)
 3 1 区石垣 65 天場石、列石 371 (東から)
- 図版 50 遺構 1 1 区石垣 65・66 コーナー部 (南東から)
 2 1 区石垣 65、石罫 69 接合部 (南から)
 3 1 区石垣 66、石罫 69 接合部 (北東から)
- 図版 51 遺構 1 1 区石垣 65 天場石 2 段目検出状況 (東から)
 2 1 区石垣 65 天場 (南から)
 3 1 区石垣 65 天場 (西から)
- 図版 52 遺構 1 1 区石垣 65 背面造成第 1 面西部 (西から)
 2 1 区石垣 65 背面造成第 1 面西部 (西から)
 3 1 区石垣 65 背面造成第 1 面西部 (西から)
- 図版 53 遺構 1 1 区石垣 65 背面造成第 1 面東部 (南から)
 2 1 区石垣 65 背面造成第 1 面南東隅部 (南から)
 3 1 区石垣 65 背面造成第 1 面南東隅部 (東から)
- 図版 54 遺構 1 1 区石垣 65 背面造成第 2-2 面 (西から)
 2 1 区石垣 65 背面造成第 3 面土器溜 116 (西から)
- 図版 55 遺構 1 1 区石垣 65 背面造成第 2-2 面 (南東から)
 2 1 区石垣 65 背面造成第 2 面石垣 127 (南東から)
 3 1 区石垣 65 背面造成第 3 面列石 389 (東から)
- 図版 56 遺構 1 1 区石垣 65 背面造成第 4 面 (南東から)
 2 1 区石垣 65 断面 1 (東から)
- 図版 57 遺構 1 1 区全景 (北東から)
 2 1 区石垣 66 全景 (南東から)
- 図版 58 遺構 1 1 区石垣 66 中段 (北東から)
 2 1 区張り出し 383、石垣 66 上段 (東から)
- 図版 59 遺構 1 1 区階段 68・門 122 (北から)
 2 1 区石垣 66 上段 (北から)
 3 1 区張り出し 374 南西角石 (南西から)
- 図版 60 遺構 1 1 区石垣 66 断面 4 (南東から)
 2 1 区石垣 66 背面造成第 1 面断面 5 (北から)
- 図版 61 遺構 1 1 区石垣 66 背面造成第 1～2 面 (南東から)
 2 1 区石垣 66 背面造成第 2 面列石 406 (北から)
- 図版 62 遺構 1 2 区全景 (南から)
 2 2 区全景 (北西から)

- 図版 63 遺構 1 2区平坦面 2 (南東から)
2 2区平坦面 3 (西から)
- 図版 64 遺構 1 2区平坦面 4 (南西から)
2 2区平坦面 4 (北西から)
- 図版 65 遺構 1 2区石塁 69 南面 (南東から)
2 2区石塁 69 北面 (北東から)
- 図版 66 遺構 1 2区石塁 69 南面西端部 (南から)
2 2区石塁 69 南面東端部 (南西から)
- 図版 67 遺構 1 2区石塁 69 (北から)
2 2区石塁 69 東端部 (東から)
3 2区石塁 69 断面 (南東から)
4 2区石塁 69 東端部断面 (南西から)
- 図版 68 遺構 1 2区石塁 69 基底部全景 (西から)
2 2区石塁 69 コーナー基底部 (西から)
3 2区石塁 69 中央基底部 (北東から)
4 2区石塁 69 西端基底部 (東から)
- 図版 69 遺構 1 3-1a 区全景 (北から)
2 3-1a 区北半部 (南西から)
3 3-1a 区墓 163 (北から)
- 図版 70 遺構 1 3-1b 区全景 (北から)
2 3-1b 区全景 (東から)
- 図版 71 遺構 1 3-1b 区井戸 196 断面 (南から)
2 3-1b 区列石 309 (北西から)
3 3-1b 区土坑 231 列石 (北東から)
4 3-1b 区溝 240 (北から)
- 図版 72 遺構 1 3-1a・b 区暗渠 14 (南西から)
2 3-1a・b 区暗渠 14、集石 17 完掘状況 (南東から)
3 3-1a・b 区暗渠 14 断面 (南から)
4 3-1a・b 区集石 17 断面 (南東から)
- 図版 73 遺構 1 3-1a 区集石 155・157・160～162 (北から)
2 3-1a 区集石 172 断面 (南から)
3 2区集石 391 断面 (東から)
4 2区集石 393 断面 (東から)
- 図版 74 遺構 1 3-3 区全景 (西から)
2 4区全景 (北西から)

- 図版 75 遺物 1 区土器溜 116・断面 2 第 44 層・土坑 112 出土土器
- 図版 76 遺物 1 1 区石垣 65 背面造成土出土土器
2 1 区石垣 66 背面造成土出土遺物
- 図版 77 遺物 2・3 区出土土器
- 図版 78 遺物 軒丸瓦・軒平瓦
- 図版 79 遺物 1 硯
2 砥石・石鍋
- 図版 80 遺物 基石・金属製品・椀形滓
- 図版 81 遺構 6 区実測図 (1 : 200)
- 図版 82 遺構 6 区平面図 1 (1 : 100)
- 図版 83 遺構 6 区平面図 2 (1 : 100)
- 図版 84 遺構 6 区立面図 1 (1 : 100)
- 図版 85 遺構 6 区立面図 2 (1 : 100)
- 図版 86 遺構 6 区立面図 3 (1 : 100)
- 図版 87 遺構 6 区石垣断割断面図 1 (1 : 80)
- 図版 88 遺構 6 区石垣断割断面図 2 (1 : 80)
- 図版 89 遺構 1 5 区全景 (北西から)
2 5 区溝 90・平坦面 6 近景 (北から)
3 5 区北東部近景 (北から)
- 図版 90 遺構 1 5 区石組 167・173 検出状況 (北東から)
2 5 区石組 169 検出状況 (南東から)
3 5 区石組 199 検出状況 (北から)
4 5 区土坑 11 遺物検出状況 (南西から)
5 5 区土坑 111 検出状況 (南東から)
6 5 区土坑 170 半截状況 (東から)
7 5 区柱穴 193 瓦器検出状況 (北から)
8 5 区柱穴 198 瓦器検出状況 (南東から)
- 図版 91 遺構 1 5 区井戸 25 断割状況 (南から)
2 5 区井戸 104 断割状況 (西から)
3 5 区井戸 8 断割状況 (西から)
4 5 区井戸 172 断割状況 (北から)
- 図版 92 遺構 1 6 区東部石垣全景 (南東から)
2 6 区東部石垣断割 1 (東から)
3 6 区東部石垣断割 2 (北から)
- 図版 93 遺構 1 6 区全景 (西から)

	2	6区石垣 402 第Ⅰ・Ⅱ単位近景（南西から）
	3	6区石垣 402 第Ⅲ単位近景（南西から）
図版 94 遺構	1	6区石垣 402 第Ⅰ単位近景（南から）
	2	6区石垣 403 全景（東から）
	3	6区石垣 405 近景（南から）
	4	6区石垣 405 断割断面（北東から）
図版 95 遺構	1	6区石垣 402 第Ⅰ単位最下部近景（西北西から）
	2	6区石垣 402 第Ⅱ・Ⅲ単位裏込近景（西から）
図版 96 遺構	1	6区石垣 402 断割D断面（南西から）
	2	6区石垣 402 断割E断面（南東から）
図版 97 遺構	1	6区石垣 402 断割C断面（南東から）
	2	6区石垣 402 断割C断面（西から）
	3	6区谷 579 肩口（南西から）
	4	6区谷 579 西半（東から）
図版 98 遺構	1	6区石垣 402 断割C断面（西から）
	2	6区石垣 402 下部礫敷（東から）
	3	6区断割6 西壁断面（北東から）
	4	6区石垣 401 全景（南西から）
図版 99 遺構	1	7区全景（西から）
	2	7区西半全景（北東から）
図版 100 遺構	1	7区土坑 591（南から）
	2	7区土坑 580（南から）
	3	7区土坑 534（南から）
	4	7区土坑 524（北から）
	5	7区谷 579 全景（北東から）
図版 101 遺物		5区出土土器・刀子
図版 102 遺物		軒瓦、6・7区出土土器

挿 図 目 次

図 1	調査位置図 1（1：50,000）	2
図 2	調査位置図 2（1：5,000）	3
図 3	地区割図（1：600）	4
図 4	1区石垣 65 調査前全景（南西から）	5

図5	2区石罫69調査前全景(南西から)	5
図6	1区作業風景(北東から)	5
図7	2区作業風景(南西から)	5
図8	1・2区ラジコンヘリ作業風景(南西から)	5
図9	現地説明会風景	5
図10	5区調査前全景(北西から)	6
図11	6・7区調査前全景(南から)	6
図12	6区作業風景(西から)	6
図13	7区作業風景(北西から)	6
図14	石罫解体記録風景(東から)	7
図15	石罫移築復元作業風景(北西から)	7
図16	石罫移築完成状況(西から)	7
図17	石垣・石罫保存地点図(1:5,000)	8
図18	地形分類図(1:50,000、『土地分類基本調査』1972年による)	9
図19	周辺遺跡位置図(1:20,000)	10
図20	現況地形図(1:800)	12
図21	1・2区北壁断面図(1:100)	14
図22	石材採寸図	15
図23	1区石垣65立面図、縦・横断面図(1:120)	18
図24	1区列石371・礫敷372実測図(1:100)	19
図25	1区断面配置図(1:500)	22
図26	2区東壁断面図(1:100)	28
図27	3区東壁断面図(1:100)	33
図28	3区墓163実測図(1:20)	36
図29	3区井戸196実測図(1:40)	36
図30	1区土坑112・121出土土器実測図(1:4)	38
図31	1区石垣65背面造成土出土土器実測図(1:4)	39
図32	1区石垣66背面造成土出土土器実測図(1:4)	41
図33	1区土器溜116出土土器実測図(1:4)	42
図34	1区断面2第44層出土土器実測図1(1:4)	43
図35	1区断面2第44層出土土器実測図2(1:4)	44
図36	2区溝12・土坑90・平坦面4西辺掘形・土器溜11出土土器実測図(1:4)	46
図37	2区・3区出土土器実測図(1:4)	47
図38	墓163出土蔵骨器実測図(1:4)	49
図39	軒丸瓦拓影・実測図(1:4)	50

図 40	軒平瓦拓影・実測図 (1 : 4)	51
図 41	丸瓦・平瓦拓影・実測図 (1 : 4)	52
図 42	硯実測図 (1 : 4)	53
図 43	石製品実測図 (1 : 4)	54
図 44	五輪塔実測図 (1 : 6)	54
図 45	金属製品実測図 (1 : 2)	55
図 46	1～3区遺構変遷図 (1 : 1,500)	57
図 47	区画1～4位置図 (1 : 2,000)	58
図 48	区画1入口推定地 (西から)	59
図 49	造成過程復元図 (1 : 600)	60
図 50	勝持寺採集瓦拓影・実測図 (1 : 4)	62
図 51	「勝持寺境内図」(寛永元年) 勝持寺所蔵	63
図 52	勝持寺子院復元図 (1 : 3,000)	64
図 53	5区断面図 (1 : 100)	67
図 54	5区平面図 (1 : 200)	68
図 55	5区溝 90・187 断面図 (1 : 80)	69
図 56	5区石組 167・169・171・173 断面図 (1 : 80)	70
図 57	5区柱穴列1～3実測図 (1 : 80)、柱穴 193・198 実測図 (1 : 20)	72
図 58	5区井戸 8・172 実測図 (1 : 80)	73
図 59	5区石組・土坑実測図 (1 : 80)	74
図 60	6区南壁断面図 (1 : 100)	77
図 61	6区平面図 (1 : 200)	78
図 62	6区石垣断割図1 (1 : 80)	80
図 63	6区石垣 403 立面図 (1 : 100)	81
図 64	7区調査区断面図1 (1 : 100)	83
図 65	7区調査区断面図2 (1 : 100)	84
図 66	7区平面図1 (1 : 200)	85
図 67	7区平面図2 (1 : 200)	86
図 68	7区柱穴列実測図 (1 : 80)	87
図 69	7区土坑実測図 (1 : 80、1 : 40)	88
図 70	出土土器実測図 (1 : 4、423のみ 1 : 6)	90
図 71	出土軒瓦拓影・実測図 (1 : 4)	91
図 72	刀子・石製品実測図 (1 : 4、1 : 1)	92
図 73	平坦面配置図 (1 : 1,000)	93
図 74	平坦面変遷図 (1 : 500)	94

表 目 次

表 1	平成 22 年度調査遺構概要表	13
表 2	平成 22 年度調査遺物概要表	37
表 3	区画・坊院名比定一覧表	61
表 4	平成 23 年度調査遺構概要表	66
表 5	平成 23 年度調査遺物概要表	89

付 表 目 次

付表 1	平成 22 年度調査 掲載遺物一覧表	96
付表 2	平成 23 年度調査 掲載遺物一覧表	109

勝持寺旧境内

第1章 調査経過

第1節 調査経過

今回の調査は、京都市内を通過する京都第二外環状道路新設事業に伴い実施したものである。京都第二外環状道路は、久御山町から京都市大枝間を繋ぎ、南北に長い京都府域の交流促進・道路ネットワークの完成を目指して計画されたものである。この道路計画地内にある埋蔵文化財包含地の発掘調査を実施することになり、国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所（以下「京都国道事務所」という。）の委託を受け、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）の指導の下、財団法人京都市埋蔵文化財研究所（以下「当研究所」という。）が発掘調査を実施した。調査地点は、京都市西京区大原野地内に所在する。調査対象地は、勝持寺から南東方向に約250mの地点に位置する。調査対象地は広範なため、平成21年度調査区から平成23年度調査区に分け、3箇年にわたって発掘調査を実施した。このうち、平成21年度調査区は、平成21年8月に調査を実施し、調査成果は既に報告済みである¹⁾。従って、本報告は、平成22年度調査・平成23年度調査の各調査区で当研究所が実施した勝持寺旧境内の発掘調査の成果を掲載している。

調査地点は、勝持寺旧境内に該当する。勝持寺には江戸時代の二幅の勝持寺子院絵図が残されている。絵図によれば、山門（二王門）から勝持寺に至る参道には、山門から西行して寺に至る道と北西方向に延長して寺に至る道がある。参道沿いに多くの子院が描かれており、調査対象地にも「阿弥陀坊」・「正行坊」などの子院名が記されている。

勝持寺旧境内の発掘調査における調査対象地の面積は、平成21年度調査区が約160㎡、平成22年度調査区が約3,760㎡、平成23年度調査区が約1,770㎡あり、総面積は約5,690㎡となる。本体工事計画に従って調査対象地全体を地形ならびに遺跡の状況などによって1～7区の調査区に分けた。さらに、調査の進行や排土場所の確保などにより、3区は、3-1a区、3-1a南拡張区、3-1b区、3-2区、3-3区に分けて調査を進めた。このうち3-2区が平成21年度調査区である。平成22年度調査は、1～4区の調査を対象とし、平成22年10月6日から平成23年8月31日の間、平成23年度調査は、5～7区の調査区を対象とし、平成23年8月1日から平成23年11月30日の間実施した。本報告は、「第3章 平成22年度の調査」および「第4章 平成23年度の調査」に分けて調査成果を報告する。

第2節 平成22年度の調査経過

平成22年度調査区は、起伏に富んだ地形を呈し、調査区内に於ける想定できる遺跡の遺存状況ならびに排土場所の確保の観点から、2区から調査を開始した。なお、調査区の東側に新たな調査区を設定することになり、4区とした。調査区全体の面積は、約3,760㎡ある。2区調査終了後、3-1a区、3-1b区、3-3区の順に調査を進めたが、3-1a区については、排土場所の確保の必要性から、3-1a区、3-1a南拡張区の2箇所に分けて調査を実施している。また、1区の調査は、後述する石垣65と石垣背面の造成土の規模および構造が、大規模かつ重層的であることから、3区北半の調査と並行して実施した。1～3区の調査終了後、4区の調査を行った。

調査は、重機による表土の掘削後、人力による遺構検出、掘り下げを基本として行った。表土は、竹林に伴う盛土と調査区の全体に、さらに、3区では、近年に盛られた土が厚さ3m以上堆積し

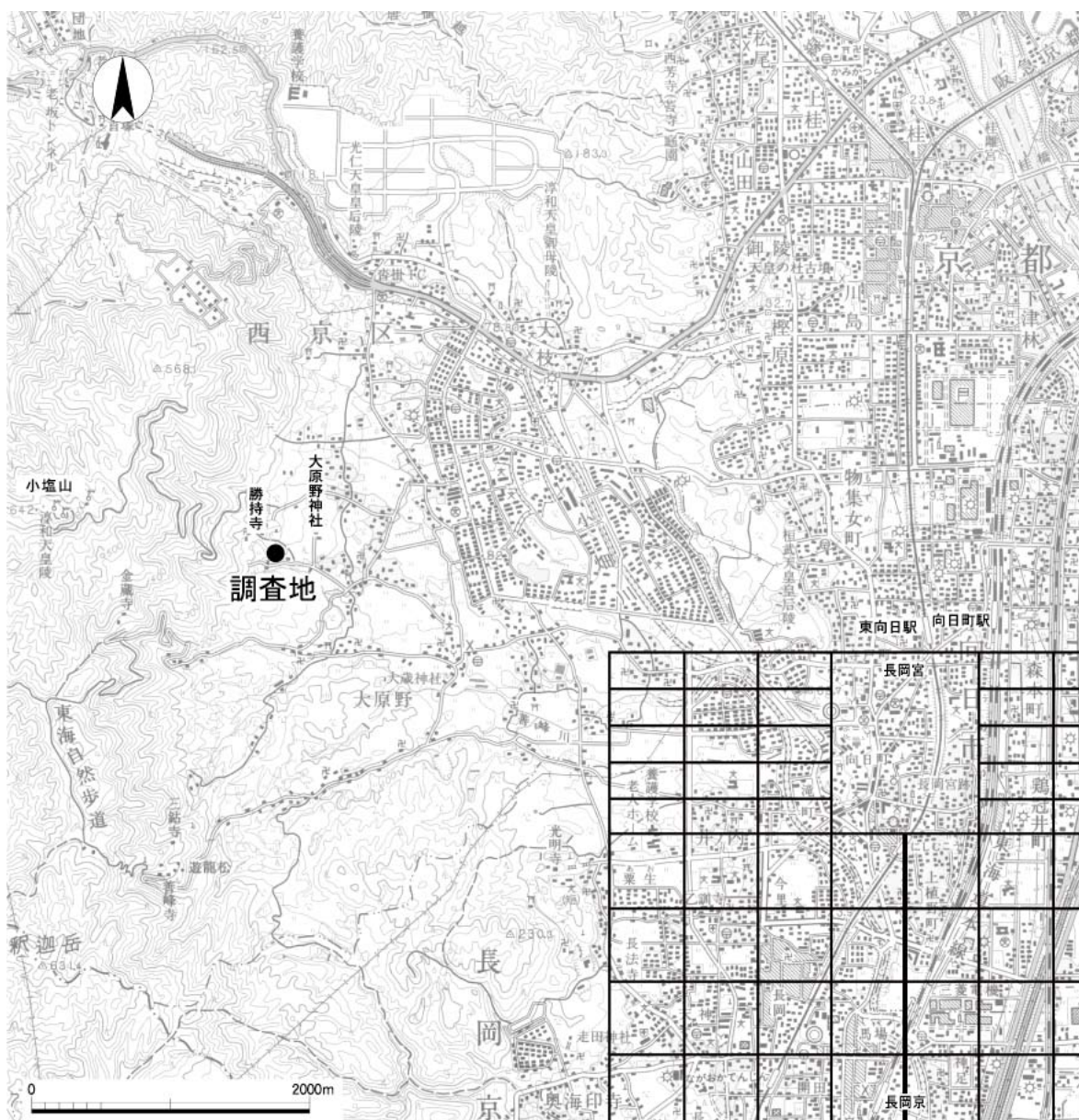


図1 調査位置図1 (1:50,000)

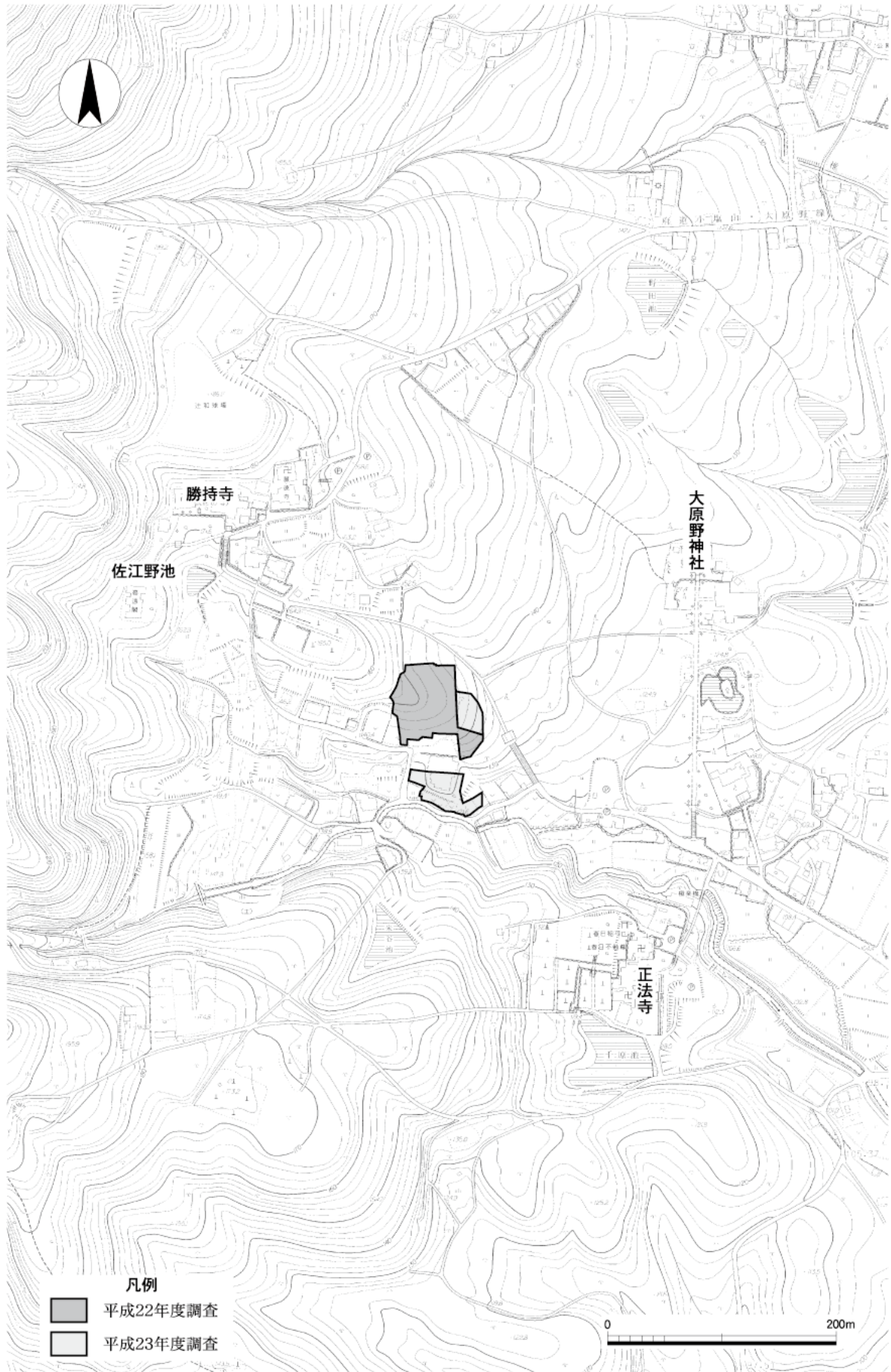


図2 調査位置図2 (1 : 5,000)

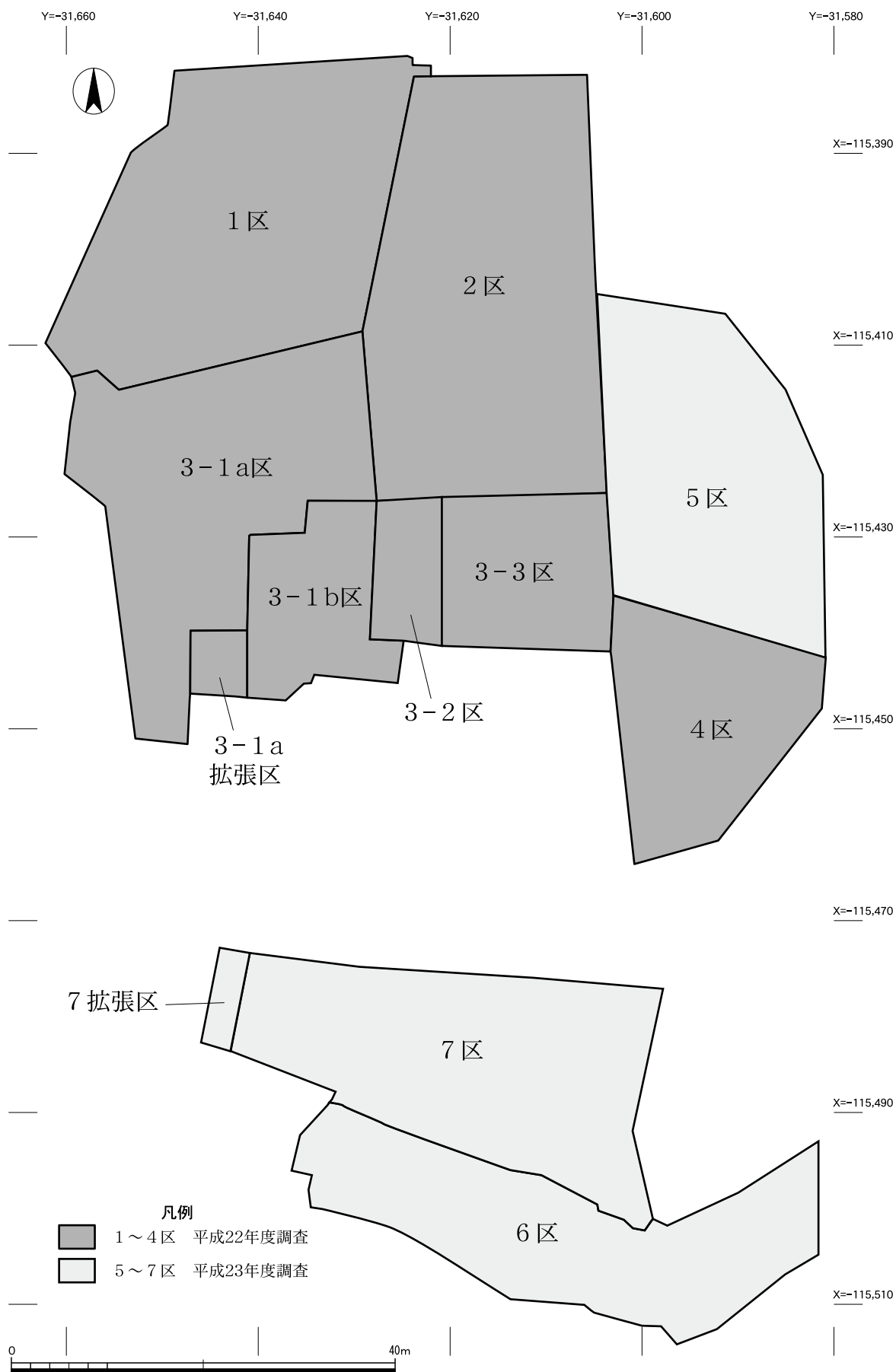


図3 地区割図 (1 : 600)



図4 1区石垣 65 調査前全景（南西から）



図5 2区石塁 69 調査前全景（南西から）



図6 1区作業風景（北東から）



図7 2区作業風景（南西から）



図8 1・2区ラジコンヘリ作業風景（南西から）



図9 現地説明会風景

ており、これの掘削と排土置き場の確保に労力を要した。

検出した遺構の記録は、調査面積が大きいこと、石垣・石塁や礫を多用した造成面などを多数検出したため、写真測量を基本とし、人力による実測は、断面図などで補助的に行った。写真測量の方法は、ラジコンヘリコプターによる写真測量と、一眼レフカメラによるオルソ測量を遺構に応じて使い分けた。

なお、1区で室町時代後期に敷設されたと考えられる大規模な石垣ならびに石塁を検出できたことから、これまでの2区および3区の調査成果を合わせ現地説明会を開催することになった。現地説明会は、平成23年3月26日に開催し、約160名の参加があった。

第3節 平成23年度の調査経過

平成23年度調査区は、勝持寺山門から西へ延長して勝持寺へ至る断続的ながら延長する参道の南側、飲食店舗跡地である。平成22年度調査では、勝持寺子院跡や先行する子院跡と考えられる造成平坦面が複数検出されており、平成23年度調査では、遺構分布の広がりを確認することを主目的に調査を進めた。調査区の総面積は、約1,770㎡ある。平成23年度調査では、本体工事に加え本体工事区の東側で南北方向に仮設進入路が敷設されることに伴い、新たな調査区を設定することになった。従って、調査区は、仮設進入路該当地区の5区および6区東部、本体工事区の6区西部・7区の4箇所にあつた。5区は勝持寺参道西側の竹林箇所、西から東に向かって緩やかに傾斜する丘陵裾部である。6区・7区は、飲食店舗跡地ならびに旧耕作地で、社家川に向かって南へ下がる丘陵南端部に位置する。

発掘調査は、平成23年8月1日に5区から開始し、5区と並行して6区東部、6区西部の調査を進めた。6区西部と7区は隣接し、遺構相互が密接な状況にあるため、同時に調査を進めた。表土は重機で掘削し、その後人力による調査を実施した。検出遺構については平面実測・断面実測・立面実測などで記録したが、5区平面ならびに石垣などの平面・立面実測についてはオルソ測量を実施した。また、石垣については断割を実施し、石垣構築方法などを観察した。各調査区で全景写真撮影ならびに個別近景写真撮影を行った。平成23年11月30日に全調査を終了した。



図10 5区調査前全景（北西から）



図11 6・7区調査前全景（南から）



図12 6区作業風景（西から）



図13 7区作業風景（北西から）

第4節 石塁の移築保存と石垣の現地保存

平成22年度調査で検出した石垣65と石塁69の位置は、京都第2外環状線道路のトンネル開口部の建設が予定されていた。石垣65・石塁69ともに類例が極めて少なく、中世の土木技術を知る上で貴重な遺構と判断された。この為、京都府文化財保護課と京都市文化財保護課が検討を行い、京都市文化財保護課と京都国道事務所との間で遺構保存についての協議を行った。協議では、全面保存の為のトンネル建設の根本的な設計変更は困難である事が明らかとなった。この為、石垣65に関してはトンネル建設工事の一部設計変更を行い、石垣65の西端部の約8m分を現状において保存する事とした。石塁69は遺存状況が良い東部の8.5m分を移築保存する事となった。これらの保存処置および移築工事は、市文化財保護課の指導の下で当研究所が実施した。

1. 石塁の移築保存

石塁69の移築する範囲は、遺存状況が良好で石積の特徴をよく表している石塁69の東部の約8.5m分を選定した²⁾。石塁の解体は調査の終了後、石塁を構成する個々の積石に番号を付し、立面図に同番号を記録しながら解体した。

移築保存場所は、平成22年度調査1区の北壁から北へ約30m、勝持寺参道から南へ約3mの地点で、現在竹林となっている場所である。

移築方向は、検出状況に準じて東西方向に行った。石塁69は東側に低く西側で高くなる地形で検出しており、移築部分は、検出時では東端と西端で1.9mの高低差を持っていた。一方、移築場所には東西の高低差が殆どない事から、移築した石塁基底面の東西方向の傾斜角度は検出時とは異なる事となった。この為、移築復元された石塁では厳密には石の組み合わせが若干異なる部分もある。

移築工事は、石塁基盤面の強度を高める為の地盤改良から開始した。遺構面に影響を与えない事を確認しながら、竹林盛土を現地表面から東西10m、南北2.5m、東西約0.9mの規模で



図14 石塁解体記録風景（東から）



図15 石塁移築 復元作業風景（北西から）



図16 石塁移築 完成状況（西から）

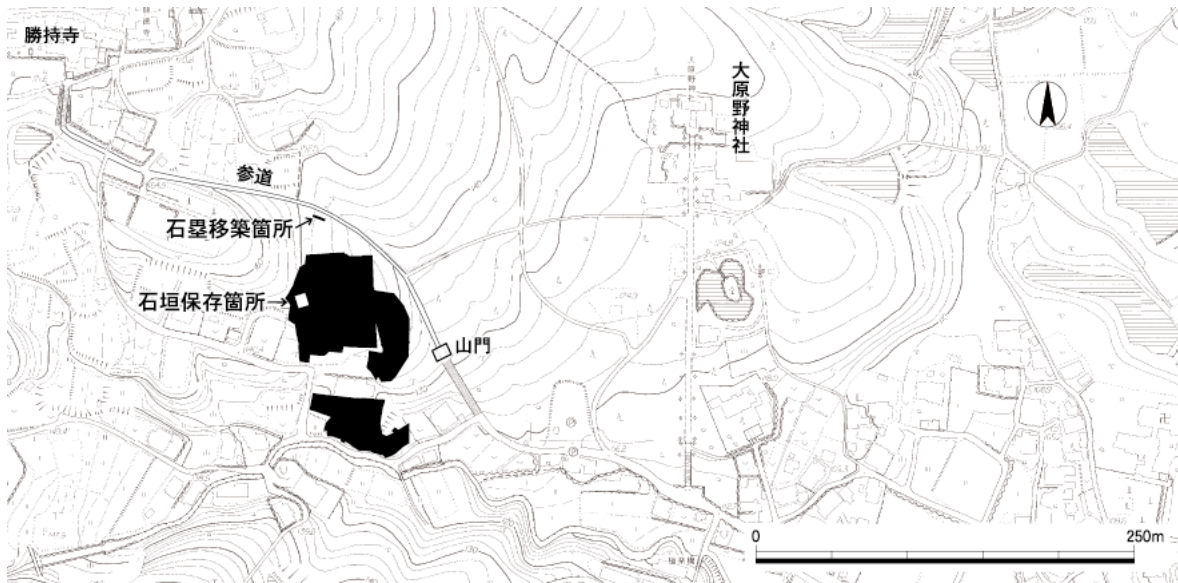


図 17 石垣・石塁保存地点図（1：5,000）

掘り下げ、この壁面には竹根侵入による破壊を防ぐ為の防竹シートを巡らせた。埋め戻しは、地盤改良材を混ぜた土によって行い移築される石塁の基盤とした。

石塁本体の移築復元は、改良を加えた基盤の上面に、石材に付した番号および平面図・立面図・写真などによって元の位置を確認しつつ、石材の積み上げを行った。石塁内部は、本来使用されていた裏込礫とともにモルタルを併用し強度を高めた。また、積石間の隙間にはエポキシ樹脂を練り込んだ土で充填し崩落防止の措置を取っている。

なお、石塁 69 の南面は遺存状況が悪く、忠実に復元すると移築された石塁が脆弱になることが予想された為、南面の一部では積石を補足し強度を高めた。

2. 石垣の現地保存

石垣 65 の現地保存箇所は、平成 22 年度調査の 1 区 65 西端部から東西方向に約 8 m 分である。当初のトンネル工事の計画では、工事掘削法面の西端が石垣 65 の西端とほぼ合致していた。この為、京都国道事務所は、保存の為にトンネル工事の一部設計変更を行った。変更された設計では工事掘削の範囲を当初よりも東側へずらす事で、石垣 65 の部分保存が可能となった。当初、道路工事完了後に保存された石垣を公開する事で協議が重ねられたが、石垣がトンネル上部に位置する事から、安全面を考慮し埋め戻し保存する事となった。

埋め戻しに関しては、石垣および石垣上端面は遺構保護土として真砂土で覆うこと、この上を覆う覆土は土壌改良材を用い固めること、覆土は法面傾斜角度は約 45° で盛ることとし、保存措置を行った。

註

- 1) 『灰方窯跡・灰方の塚跡・南春日町片山遺跡・勝持寺旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-8（財）京都市埋蔵文化財研究所 2010 年
- 2) 石塁 69 の移築範囲は、図版 37 の実測図がほぼ相当する。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境 (図18)

調査地のある西京区大原野地域は、京都市の南西部に位置している。大原野地域の西方には丹波高原に連なる小塩山などからなる西山山地がそびえている。西山山地は丹波層群と呼ばれる硬い基盤岩で、主成分はチャート・頁岩・粘板岩・砂岩などから形成される。この山地の東裾部には、

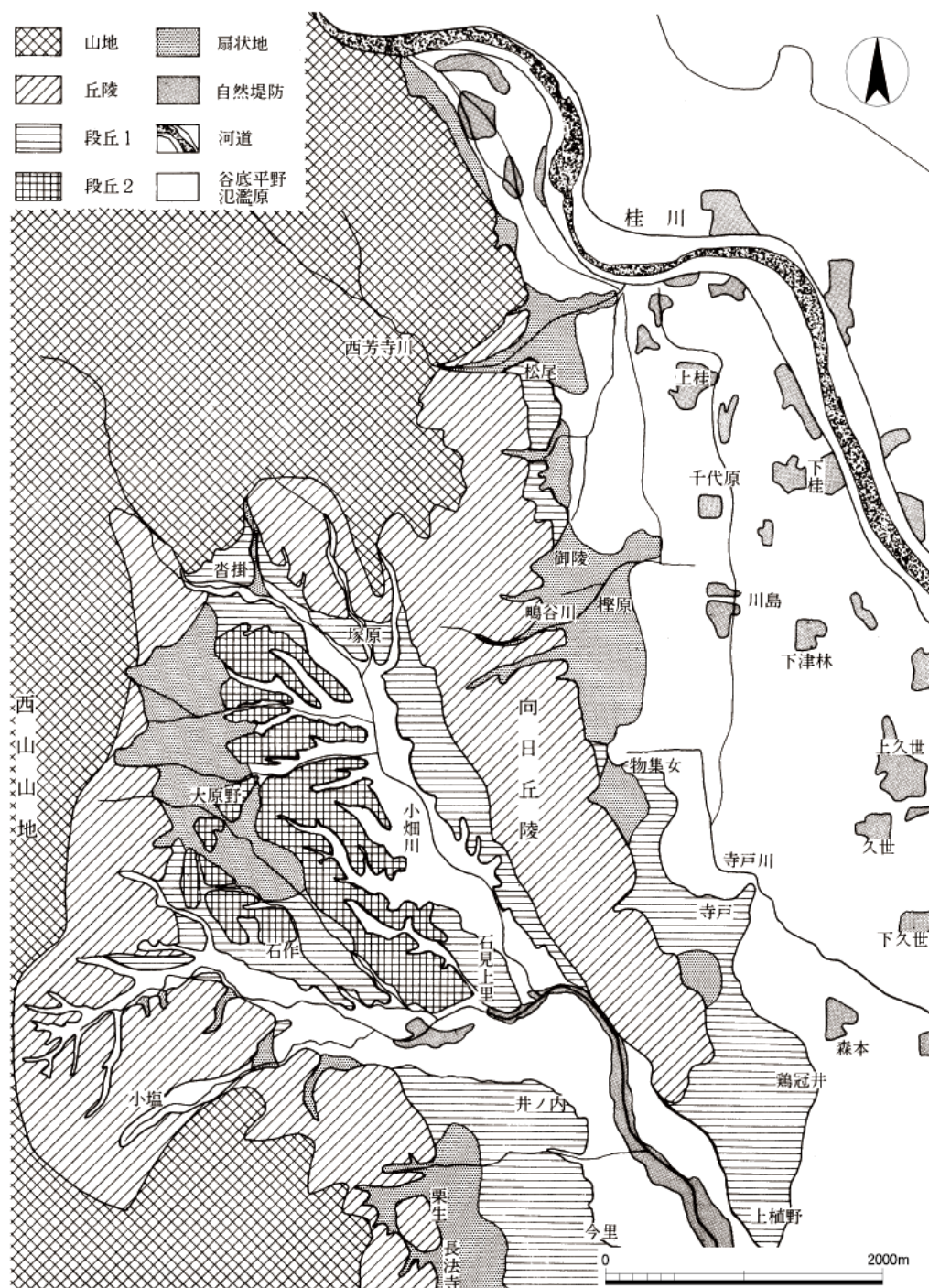


図18 地形分類図 (1:50,000、『土地分類基本調査』1972年による)

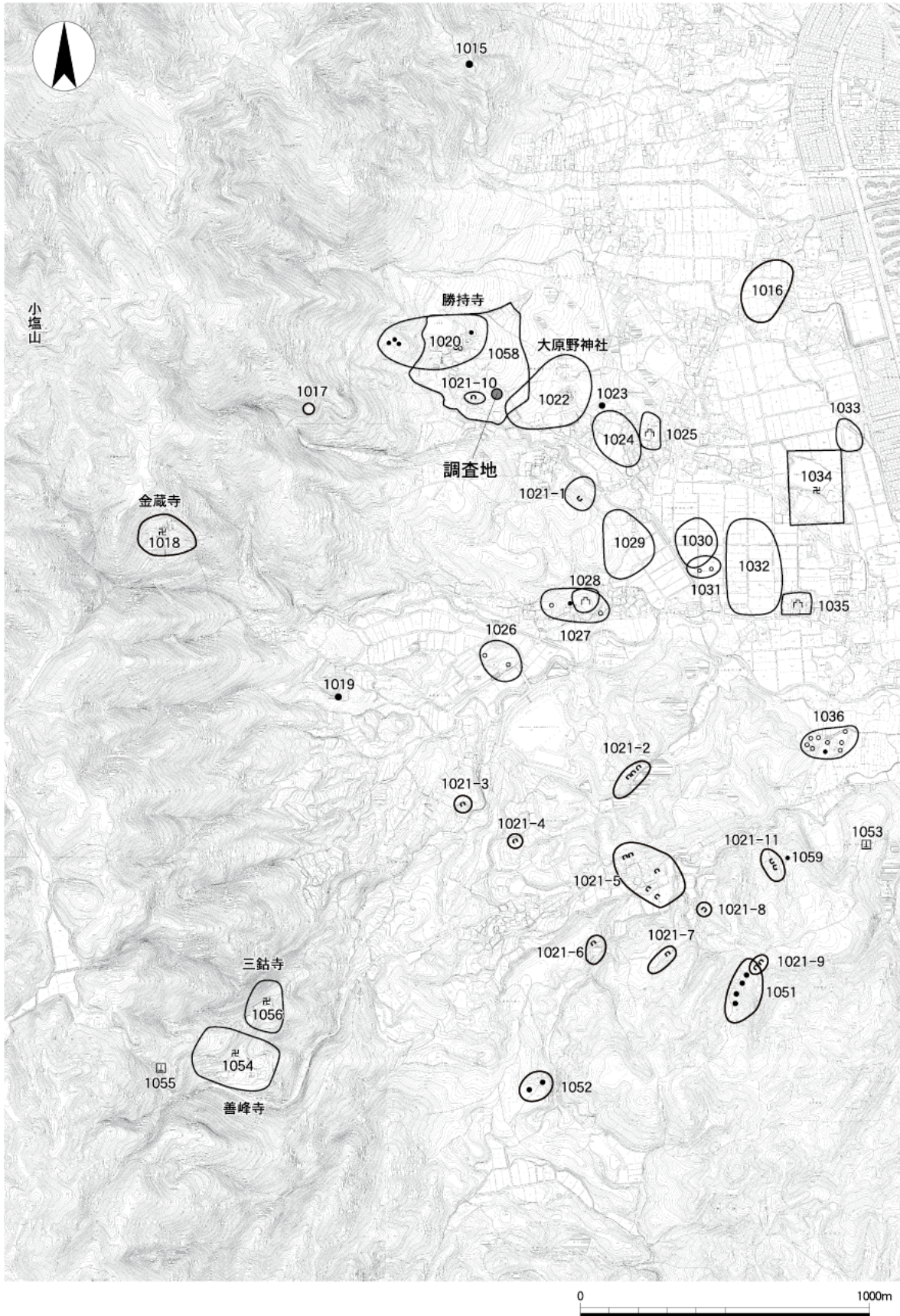


図 19 周辺遺跡位置図 (1 : 20,000)

大阪層群からなる西山山地が南北方向に延びている。一方、北には大枝山、東は北西から南東にかけて向日丘陵が張り出して、大原野は独立した盆地状の地形となっている。善峯川や社家川などの小河川が小畑川に向かって流れ込んでおり、それらの河川によって形成された高・中位段丘が多く見られる。

第2節 歴史的環境（図19）

大原野地域ではこれまでに旧石器時代から中世まで多くの遺跡が確認されている。調査地周辺の歴史的環境について、『京都市遺跡地図台帳』を基に概観する。

旧石器・縄文・弥生時代の様相は明らかではないが、小塩山の山裾に立地する大原野神社遺跡（1022）は境内で旧石器時代の石器が採取されている。

古墳時代から飛鳥時代にかけて、多くの古墳が築造される。小塩山中腹の標高315mには大暑山古墳（1015）、また大原野神社東の竹林には横穴式石室の石材が露出する大原野神社東方古墳（1023）がある。また、神社西方には勝持寺古墳群（1020）があり、境内や裏山には円墳が点在する。下西代古墳1号墳と2号墳は圃場整備に伴う調査によって発見された古墳で、丘陵部だけでなく高位段丘面にも古墳が築造されていたことがわかる。大原野石作町には狐谷古墳群（1052）、円山古墳群などがある。

奈良時代では須恵器の窯跡とこれに関連すると思われる集落が確認されている。社家川右岸には須恵器窯跡である南春日町窯跡（1021-1）がある。また、小丘陵を隔てた南東部には南春日町片山遺跡（1029）があり、1984年の調査において奈良時代の竪穴住居跡を検出し、多量の須恵器が出土した。この中には焼け歪みの激しいものもあり、窯跡と近接するという位置関係からも両者の関連が注目される。

長岡遷都から平安時代になると、西山の山中とその麓には多くの山林寺院を含む寺院や神社が開創される。西山山中には金蔵寺（1018）、吉峰寺（1054）、三鈷寺（1056）そして今回の調査対象となった勝持寺（1058）などが現在も法灯を伝える。また、小塩山の裾部には大原野神社（1022）に春日大社から春日明神が勧請される。台地上では南春日町廃寺（1034）からは奈良時代末期の塔の基壇や掘立柱建物などが発掘調査で検出されている。これらの寺院・神社がこの時期に始まるのは、大原野・西山の地が、長岡遷都以降、天皇・貴族たちの遊宴や信仰の場となった事と、現在の府道袖原・向日線がもともと乙訓から丹波へ抜ける古くからの交通路であったことによると考えられる。

平安時代前期から中期にかけては多くの緑釉陶器を焼成した窯跡が確認されている。標高約150mの高所に石作1・2号窯（1021-9）が最も早く操業を開始する。次に時期的に石作窯の次に位置づけられる灰方窯（1021-11）は、近年、灰方町の山中で新たに発見された9世紀後半の窯である。京都市内では初めてとなる緑釉素地を焼成した2基の窖窯の発掘調査が実施されている。この南西方向の山中には大向2号窯と呼ばれる西鉢伏窯跡（1021-8）と大向1号窯と呼ばれる前山窯跡（1021-7）がある。併行して、小塩川流域に小塩窯4・5号窯（1021-5）がある。

続いてその西方の天仏講池窯（1021-6）・小塩1号窯（1021-5）へと変遷する。また、このほかにも実態は明かではないが明治池窯跡群（1021-2）、花ノ戸窯跡（1021-3）、井谷窯跡（1021-4）などが小塩川の北側に存在する。

平安時代後期から室町時代にかけては、台地上で多くの建物跡や水田跡が確認されている。南春日町下西代遺跡（1030）では鎌倉時代の東西5間×南北4間の総柱建物、室町時代の濠と建物を検出している。また、大原野神社の南東部にあたる安岡遺跡（1024）では室町時代の建物跡が検出され、南春日町遺跡では奈良時代の総柱建物4棟を含む14棟の建物を検出している。これらの遺跡の周辺は地元では「下社家」と呼称されており、大原野神社との関連が推測される。また、南春日町片山遺跡（1029）では平安時代後期の水田が検出されており、山裾の段丘面の開発がこの時期から活発化したことが窺われる。

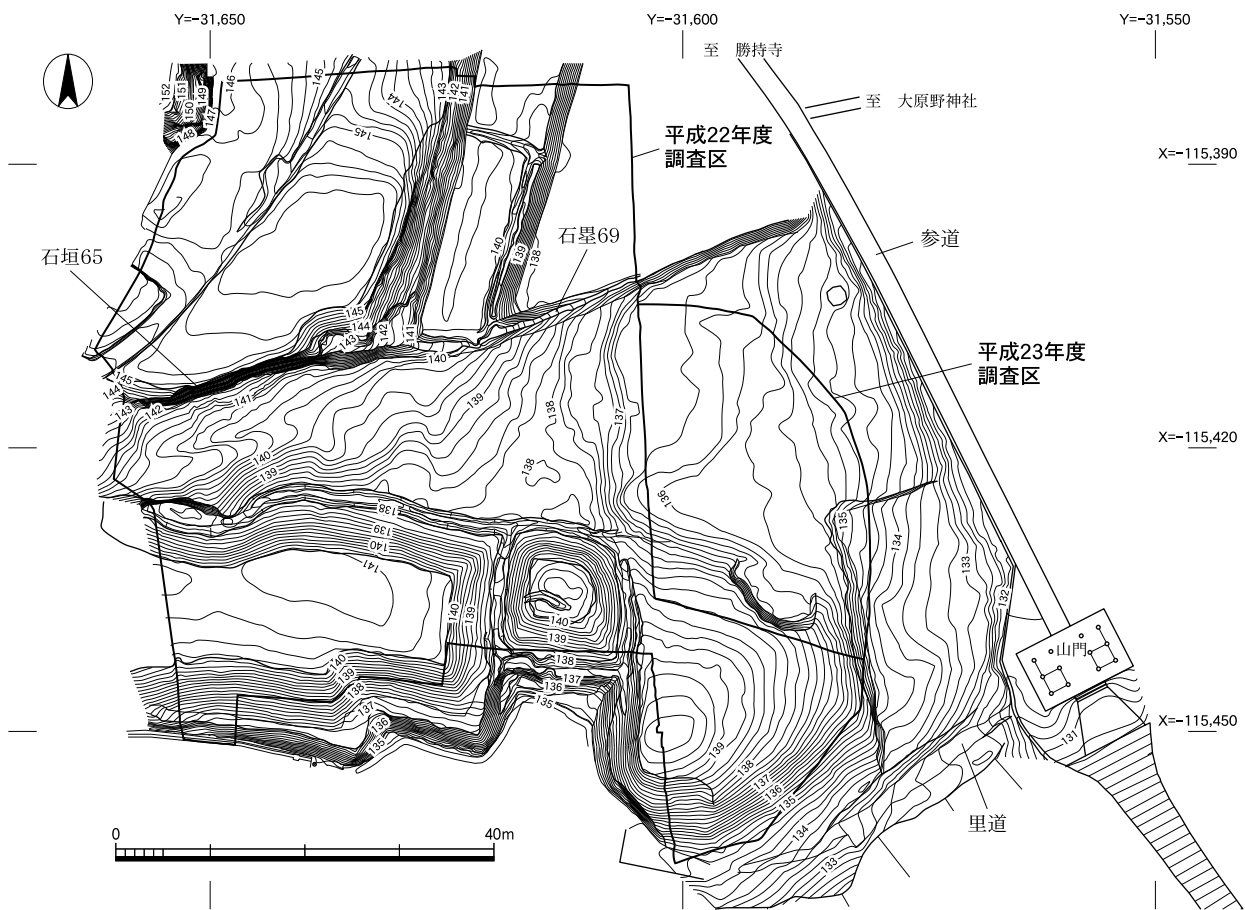


図 20 現況地形図（1：800）

第3章 平成22年度の調査

調査地は勝持寺から南東へ250m、山門の北西側に位置する。地形的には大きく2つに分かれる。1区は、調査地西側にある小塩山から東へ延びる尾根地形の先端部に位置し標高144m前後、2～4区は1区の尾根裾部の北西から南東へ緩やかに下がる傾斜地に位置しており、標高は136～140mを測る。

検出された遺構は、奈良時代の火葬墓（墓163）を除き、すべて鎌倉から室町時代の中世の遺構である。中世の遺構の多くは、調査によって確認された平坦面上で検出されている。平坦面は丘陵部や傾斜地の掘削、または斜面地に土を盛る事によって造成されたものである。平坦面は、1区で1箇所（平坦面1）、2区北半で2箇所（平坦面2・3）、2区南半で1箇所（平坦面4）、3区で1箇所（平坦面5）の合計5つが検出された。平坦面2～5は、傾斜地を削ることによって造成された平坦面である。1区の平坦面1は、まず鎌倉時代に丘陵先端部を掘削し平坦面が形成される。さらに室町時代の15世紀後半に平坦面の面積を拡張する為、丘陵先端部斜面に造成土を入れ、その造成土を止める為に造成面の南辺と西辺に石垣（石垣65・66）を構築するという大規模な土木工事を行っている。この石垣65・66のコーナー部から東へ延びる2区の石塁69は区画施設で、同時期に構築される。

以下、調査区ごとに遺構を述べる。

第1節 1区の遺構

調査区北西部に位置し、標高144.0m前後の平坦面で、石垣65・66によって南辺と東辺を画される。鎌倉時代に丘陵先端部を削平する事によって平坦面（平坦面1）が造成され、室町時代後半に丘陵先端斜面に造成土を盛る事によって平坦面を拡張している。石垣65・66はその土留め施設である。

1. 基本層序（図21）

1区の基本層序は大きく3層に分かれる。第1層が竹林盛土、第2層が近世以降の水田耕作土でこの直下が遺構面となる。竹林は、昭和30年代以降に作られたものでそれ以前は水田であった。水田耕作土からは18世紀代の伊万里焼染付が出土しており、江戸時代以降に水田となっている。遺構面の上層には土壌化した中世遺物包含層が存在しない事から、近世の耕地化によって一定の

表1 平成22年度調査遺構概要表

時代	遺構	備考
奈良時代	墓	
鎌倉時代 ～室町時代	石垣、石塁、門、階段、井戸、礫敷、列石、ピット、柵、土坑、集石、溝、暗渠、平坦面、土器溜、土橋	

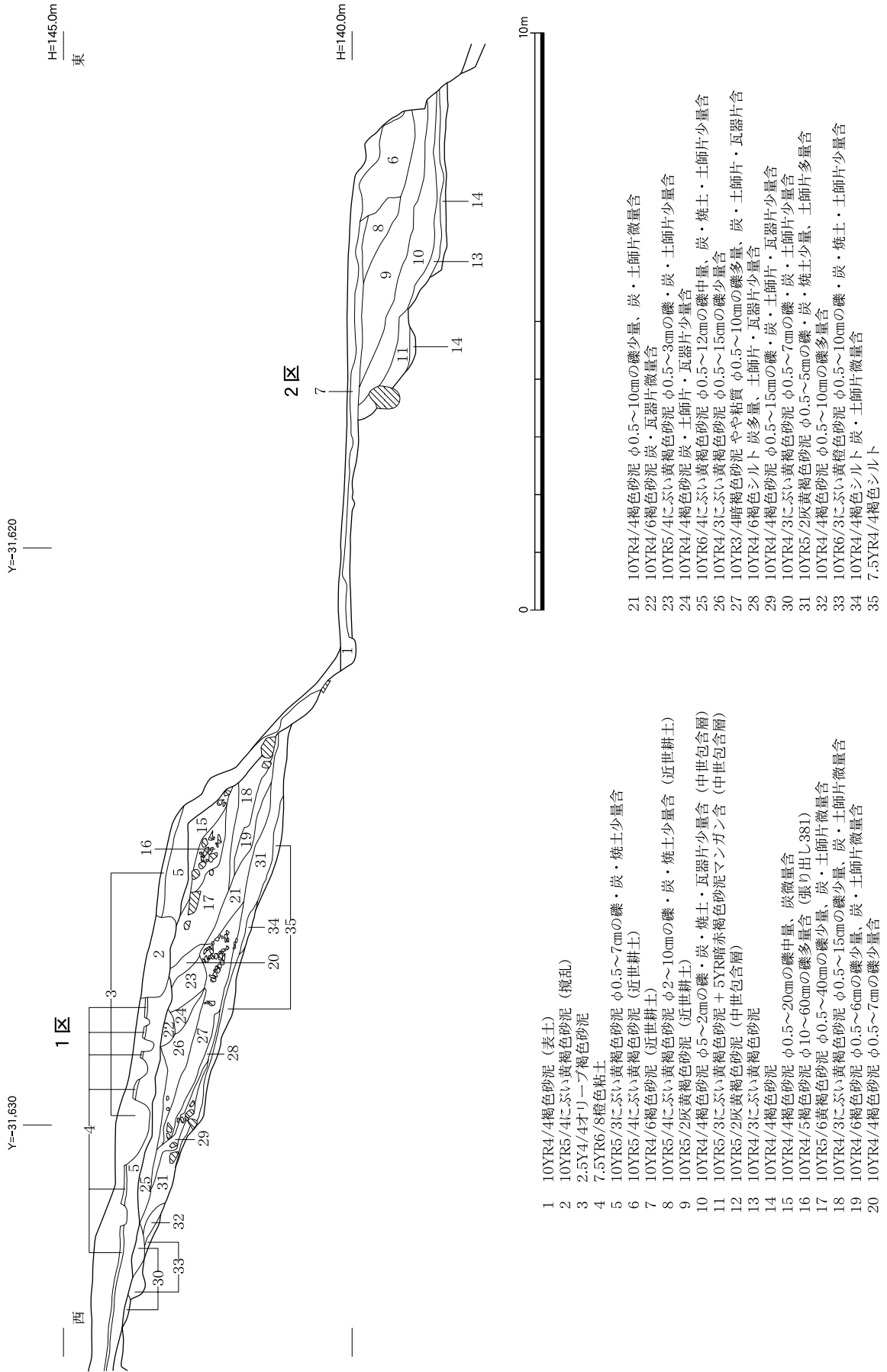


図 21 1・2区北壁断面図 (1:100)

削平が行われたことがわかる。1区平坦面上で検出される遺構が少ないのはこの事とも関連すると思われる。遺構面は、面としては1面であるが、地山の上面と室町時代の造成土の上面とに分かれ、1区の北西部が地山面、南部と東部が造成土上面の遺構面となる。門122以外の建物跡は検出されていない。室町時代の造成土の厚さは北側で約1.5m、南側では約3mを測る。

2. 遺構（図版1～3・57）

1区の平坦面上（平坦面1）で検出された遺構は少ない。地山面で検出された土坑112、室町時代の造成土の上面で検出された土坑121、門122があるのみである。1区は室町時代に丘陵先端部に造成土を入れ平坦面を拡張しているが、この造成土を留めるための石垣65を1区の南面で、石垣66を東面で検出した。また1区北端では、東に開く門122とそれに取りつく東西方向の階段68があり、階段の南北両側の傾斜面の土留として張り出し374・383を検出した。石垣背面の造成過程には、造成土中で検出された石垣127の南側と北側で一つの画期が存在する事から、石垣127以北を石垣66背面造成、以南を石垣65背面造成とに分け、それぞれで確認された造成過程について述べる。

（1）平坦面

1区で検出された平坦面は、尾根先端部を削平と盛土する事によって造成された平坦面である。

平坦面1（図版2・3・57）南北31～34m、東西21～26mを測る。現況地形から確認できる平坦面は、調査区外にまで続いており、1区北壁より30m北に位置する参道まで広がる。平坦面の南北長は合計61mとなる。1区西側は尾根先端部を削った崖面となっている。平坦面1は地山面と室町時代の造成土からなる。1区の地山面上では鎌倉時代の土坑112がある事から、鎌倉時代には平坦面が造成されていた事がわかる。この段階での平坦面は南北17～29m、東西は6～12mである。

（2）石垣および付属遺構

石垣は、1区平坦面の東辺と南辺を画する東西方向の石垣65と、南北方向の石垣66の2つの石垣を検出し、石垣65背面の造成土中では石垣127を検出した。石垣127は造成土中に構築された石垣で地上に露出するものではない。それぞれの石垣には付属する遺構として石敷などが検出されている。以下では、石垣とその付属遺構について述べる。なお、個々の石の寸法を述べる場合は、小口部分の長辺を長径、短辺を短径とし、奥行きの高さを長軸、これに直交する長さを短軸とする（図22）。

石垣65（図23、巻頭図版1・2、図版7～11・46～51）東西長26m、高さ最大2.5mの石垣である。石垣背面に盛られた造成土を留める為に構築されたものである。西端部は、崩壊しており本来の形状などは不明であるが、西端部の裏込の石と

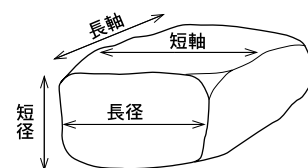


図22 石材採寸図

その掘形を検出している事から位置を確定する事ができる。東端部は石垣 66、石罫 69 の接点となっている。石垣 65 と石垣 66 は 116° の鈍角に開いて繋がる。高さは中央部が最も高く 2.5 m、西端部で 1.8 m、東端部は上部が近世以降の攪乱などにより崩落しているとみられるが、現存高で 1.2 m を測る。これ以外の崩落や石垣の面のはらみはほとんど認められなかった。石垣中央基底部には、列石 371 を伴う高さ約 1 m を測る石と土で構築した基礎部が存在する。中央部の基礎部を除いた石垣の高さは 1.5 m となる。石積み目地は縦・横方向ともにほとんど通らない。中央部に斜め方向の目地が 3ヶ所に通る。後述する背面造成の変化点とも対応している部分もあり、構築過程を示すものと思われる。石垣背面の裏込石は、東半部では中位より下で、西半部では下位でのみ検出された。石垣上位には東半部・西半部ともに存在しない。東半部に中位から裏込が存在するのは、地形的に低く造成土の造成土の厚さが増す東半部の排水機能を高める為と考えられる。

石垣の勾配は、場所によって若干異なる。高さが最も低い西端近くの断面ライン 01 ではほぼ垂直の 86° 、断面ライン 02 が 74° 、中央部の断面ライン 03 が 68° 、東部の断面ライン 04 が 69° となっている。石垣の勾配は 70° 前後を基本とし、高さが低くなる西端はほぼ垂直に積まれていることがわかる。

石垣の横断面をみると、 $Y=-31,432$ から $Y=-31,648$ までの間は、中央部が北側に小さく凹み緩やかな曲線を描いている。石垣背面の調査の結果、背面の石垣に接する部分に、造成土に土層の乱れがなく一時期の石垣である事が確認されており、この曲線は後の補修によるものではなく、当初からのものである事が確認されている。曲線部分は、石垣の基礎部を成す列石 371 の範囲とも対応しており、意図を持って作られたものと考えられる。石垣中央部の強度を高める為にアーチ構造を作った可能性もあるが明らかではない。

石垣の頂部は、精良な褐色砂泥層に覆われており天場石は地表に露出しない。天場石は径 15 cm 程度の小さい石を主として使用している。この石の下には長軸 20 ~ 30 cm のやや大きな石を並べている。この石は、下の石の直上に積むのではなく、後ろ側に立て掛け水平に対して $50 \sim 60^\circ$ の角度で積んでいる。これは、石垣天場を覆う砂泥層の流出を防ぐ事を意識したものと考えられる。(図版 51- 1)。石垣の天場は $Y=-31,648$ より西側ではほぼ水平であるが、これより東では徐々に下がり、 $Y=-31,640$ では 0.4 m 程低くなる。1 区造成面の上面の高さを水平に保つ為、石垣の天場石の標高が東へ行くに従い下がる分、天場石を覆う褐色砂泥層は厚くなる。

石垣を構成する個々の石は、表面から見える長径が 30 ~ 40 cm、短径が 10 ~ 30 cm のものが多く、奥行きは長い。大きいものでも長軸が 60 ~ 70 cm、短軸が 20 ~ 40 cm 程度である。ごく少数に割石の可能性のある石もあるが、ほとんどが自然石である。

石の積み方は、奥行きを長く持たせるいわゆる縦使いで、長軸を水平に対して $20 \sim 30^\circ$ 傾けながら、石同士が完全にかみ合うように積み重ねられている。また、石垣 65 の東端、石垣 66 との接点となる石垣 65 東の隅石の基底石 2 石は、長軸が約 70 cm を測る大きい石を使用している。最下段の石は南北方向に長軸を向け、その上の石は東西方向に長軸を向けており、算木積み状を呈している。石垣西端の 5 つの基底石より上は、後方に約 0.15 m ずらして積んでいる。これよりも上部

の石が前方にずれる事を防ぐ為のものと考えられる。

石材は、チャート・砂岩・脈石英・頁岩～粘板岩からなる。いずれも丹波帯を構成する石であり周辺で採取されたものである事がわかる。石材は、石垣 65 東部から抽出した 100 個の内訳では、砂岩が 58 個、チャート 38 個、脈石英 2 個、頁岩～粘板岩が 2 個である¹⁾。

石垣 65 基礎部 (図 24、図版 49) 石垣 65 中央部の下方にある石垣の基礎部である。東西長約 14 m、高さ最大 1 m を測る。石垣 65 基礎部は概ね標高 142 m より下の部分にあたる。この付近には長径 40 cm 程度の比較的大きな石が横方向に並び、これより下の部分は 10 ～ 20 cm のやや小さな石となっている。左右・上下の石同士が接しないものも多く、黄褐色砂泥が石の間を埋める。基礎部中央部では 5 ～ 10 cm の小さな石と粘性のある黄褐色砂泥による礫土層となる。石垣中央裾部には石垣基底石から派生して前方にせり出して並ぶ列石 371 が存在し、この中央部の礫土層の抑えとなっている。さらにその前面に礫敷 373 を施す事によって列石 371 がずれる事を防いでいる。石垣 65 基礎部から礫敷 373 の検出段階では拳大の石が確認されており、石垣 65 の基礎部は、本来はこの拳大の石によって覆われて地上には露出していなかったと考えられる。地形的に最も石垣が高くなり、構造的にも土圧が大きくなる中央部に対して、石積みの高さを抑える目的の為に基礎部を構築したと考えられる。

礫敷 372 (図 24、図版 49) 石垣 65 基礎部を構成する列石 371 を抑える礫敷。南北 2 m、東西 2.4 m を測る。長径が約 40 cm の石を並べて外郭が構成され、その内側に 10 ～ 30 cm の石を充填する。内側の石と石の間は黄褐色粘質土によって埋められる。

礫敷 373 (図版 7・48) 石垣 65 基底石前面の 3 条からなる礫敷きである。石垣 65 前面には 2 ～ 3 段の階段状に造成されている。段の幅は場所によって異なるが 0.3 ～ 1 m を測る。それぞれの法面には、礫敷 373 の拳大の石が貼りつけるようにして敷かれている。法面の土の流出を防ぐ為のものである。

石垣 66 (図版 23 ～ 28・57 ～ 60) 1 区東斜面に位置する南北方向の石垣である。南北長 24 m を測る。南端は石垣 65 との接合部、北端は階段 68 までである。遺存状態は悪く、ほとんどの部分が基底石しか残らない。斜面の裾部に沿っておらず、北端は斜面の上部、南端は斜面の裾部へとスロープ状に構築される。南端の基底石と北端基底石の比高差は 2.6 m を測る。石垣の平面ラインは中央部がわずかに突出しており、この中央部を中段、北側の高い部分を上段、南側の低い部分を下段として述べる。

上段は南北長 6.3 m を測り、基底石しか残存しない。石の大きさは長径が 30 cm、短径が 20 cm、長軸が 30 cm 程度のもものが多く、上・中・下段を通じて最も小さい石を使用する。上段基底石は、背面の造成土を盛り上げた後、造成土を一部掘削して基底石を設置し、基底石と造成土の間に裏込石を入れる。基底石の前面には幅 0.3 m 程度の平坦面が存在する。この平坦面の前にも石が並んでいた痕跡があり、平坦面の崩壊を防ぐ為の石積みが存在したと考えられる。

中段は南北長 9.0 m を測る。中段中央部には 2 段の石積みが残る。石の大きさは長径が 20 cm、短径が 20 cm、長軸が 30 ～ 40 cm 程度のもものと、長径が 30 cm、短径が 20 cm、長軸が 50 cm 程度



图 23 1区石垣 65 立面图、縦・横断面图 (1 : 120)

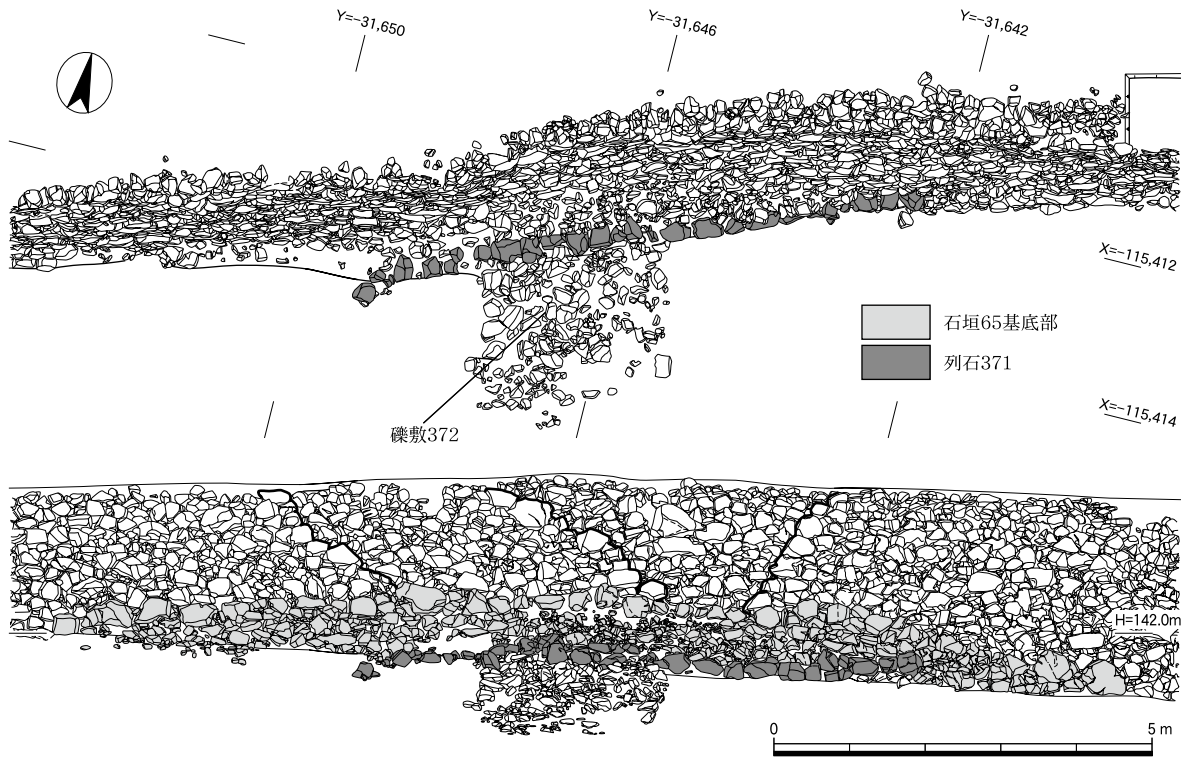


図 24 1区列石 371・礫敷 372 実測図 (1 : 100)

のやや大きい石ある。石の置き方は、長軸方向が石垣方向と平行するいわゆる横使いする石が多いが、中段南端の石は石垣方向と直交して置いている。構築変化点を強固にする為と思われる。中段基底石は、上段と同様に、背面の造成土を一定盛り上げた後、盛り上げた造成土を一部掘削して基底石を設置し、基底石と造成土の空間に裏込石を入れている。基底石の前面には幅が最大 1.4 m の平坦面が存在し、南に行くに従い狭くなる。平坦面中央部には礫敷 405 が存在し基底石の下半を覆う。この平坦面の前方には、一段下がって下段前面から続く平坦面が存在する。一部に礫が敷かれた部分も残されており、ここにも低い石垣が存在した可能性がある。

下段は南北長 8.7 m を測る。石垣 66 の接合部付近には 4 段の石積みが残し、高さ 0.7 m を測る。石の大きさは長径が 30 cm、短径が 20 cm、長軸が 40 cm 程度の石が多い。石の置き方は、長軸方向を石垣方向と直交するいわゆる縦使いする石が多い。裏込石は上部よりも下部に行くほど大きくなる。基底石の前面には幅が残存最大幅 2.0 m の平坦面が存在し、北端は張り出し 383 まで続く。

上・中・下段の前方には平坦面が存在し、それぞれの平坦面は張り出し 383 まで延びており、石垣 66 上段の前面にはひな壇状に 3 段の平坦面が、石垣 66 中段の前面にはひな壇状に 2 段の平坦面が存在する事になる。それぞれの平坦面の肩部・底面の一部には礫が検出されており、この部分にも低い石垣が存在し、その裏込石、根石の可能性が高い。その場合、石垣 66 は全体として北へスロープ状にあがりながら、中央部で 2 段、北部で 3 段の階段状の石垣が想定される。

石大きさは、大きいもので長径 40 ~ 50 cm、短径 15 ~ 20 cm、長軸 30 cm、小さいもので長径 20 cm、短径 10 cm、長軸 15 cm を測り、この他に径 10 cm 程度の礫を使用する。石は、石垣の面に対して長軸方向を並行して積まれている。石材は、抽出した 100 個の内訳では、砂岩が 65 個、チャー

ト 30 個、脈石英 2 点、頁岩～粘板岩が 3 個である。

礫敷 405 (図版 26) 石垣 66 中段前面の平坦面に敷かれる礫敷き。下部に径 5～10 cm の礫を、その上に長軸 30 cm、中軸 15 cm 程度の石を敷く。その上を黄褐色粘質砂泥で覆う。中段基底石の下半部を覆う。基底石のずれと平坦面の崩壊を防ぐ為のものと考えられる。

石垣 127 (図版 21・55) 後述する石垣 65 背面造成第 2 面で検出した東西方向の石垣。造成の完了段階では造成土の中に完全に埋没する。東西長 10.8 m、高さ最大 1.0 m を測る。石の大きさは、大きい石は、長径 30～50 cm、短径 20～30 cm、長軸 20～30 cm を測る。小さい石は、長径 20～30 cm、短径 15 cm、長軸 15 cm を測る。これらの石の間に径 10 cm 程度の石も使用する。石の積み方は、長軸が石垣の方向と平行するいわゆる横使いで、石垣 65 と比べると粗い。石材は砂岩、チャート、脈石英、頁岩～粘板岩からなる。

(3) 土坑

1 区では 2 基の土坑を検出している。鎌倉時代の土器類が出土する土坑 112 は地山面上で、鎌倉時代から室町時代の土器瓦類が出土する土坑 121 は室町時代の造成面上で検出した。

土坑 112 (図版 39) 1 区の中央部で検出した。平面形は歪んだ円形を呈する。径 1.5 m×1.6 m、深さ 0.5 m を測る。5～20 cm の石とともに鎌倉時代の土器類が出土する。

土坑 121 (図版 39) 土坑 112 の東側で検出した。平面形は楕円形を呈する。径 2.4 m×2.0 m、深さ 0.2 m を測る。10～30 cm の石とともに鎌倉時代から室町時代の土器・瓦類が出土する。

(4) その他の遺構

門 122 (図版 28・29・59) 1 区の北西部、石垣 66 の北側で検出した東面する門。新・古の 2 時期があり、北側の礎石は新・古いずれの時期も失われている。門の規模は、新段階の梁間が 0.9 m、桁行は階段 68 との関係から 2.1 m 程度と想定され、小規模な棟門と考えられる。門の方位は新段階と古段階で大きく異なる。新段階は階段 68 とほぼ並行する。古段階は、張り出し 374 の南西隅石の東面と石垣 127 北端部を繋ぐラインに並行しており、階段 68 の列石の向きが構築当初とはややずれている。

新段階：南側の親柱と控え柱が検出される。柱間距離は 0.9 m を測る。親柱の礎石は表面の長径が 50 cm、短軸が 35 cm、厚さ 30 cm を測る。石材はチャート。控え柱の礎石は、径が約 20 cm、厚さ 20 cm を測る。石材はチャート。礎石は掘形を持って据えられる。階段 68 の最上段の石段から親柱礎石と控え柱礎石の間まで黄褐色粘質砂泥による土間が検出されている。

古段階：礎石は南側の親柱の 1 石のみが検出されている。礎石は長径が 50 cm、短径が 35 cm、厚さ 20 cm を測る。石材はチャート。礎石の北側には、門の敷居を置く為の南北方向の列石がある。礎石・列石ともに掘形はなく、門周辺の整地時に据えられたものである事がわかる。列石は 7 石あり、延長 1.7 m を測る。列石の方位は N -9.5° - W である。石の大きさは長軸が 25～35 cm、短軸が 10～25 cm を測り、一番南の 1 石を除いて長軸方向を東西に置く。石材はチャートと砂岩

である。この列石は新段階の土間によって覆われていた。

階段 68 (図版 27 ~ 29・59) 調査区北端で検出した東西方向の階段。門 122 と 2 区を繋ぐ位置にある。最下段から最上段まで東西長が 3.0 m、階段の幅は遺存状態の良い部分で 3.0 m を測る。列石 (踏石) を伴う 4 つの段が検出された。上下 2 段ずつに分かれ、この間には東西幅 0.8 m の平坦面が存在する。列石は上 2 段と最下段で検出された。上段の北半は石の並びが乱れており、本来の位置からは少しずれていると思われる。下段は 1 段目が 2 石のみ、2 段目は石が抜け落ちており検出されなかった。最下段の列石とその東側の斜面裾部とは比高差が 1 m 以上ある。本来はこれより下にも階段は続いていたと考えられるが、近世以降の水田耕作に伴う掘削によって失われている。

張り出し 374 (図版 28・29・59) 階段 68 の北側で検出された小さな高まりを持つ遺構。外郭を構成する列石の中に多量の人頭大の石を充填することによって強固に構築されている。張り出し 383 と対となって、階段 68 北側の造成土の崩壊を防ぐ為に構築されたものと思われる。平面形は隅丸方形に近いが、北端は調査区外となる。南北 2.1 m 以上、東西 1.7 m を測る。列石内部の石は、検出段階で一部露出していたが、本来は褐色砂泥によって覆われていたと思われる。外郭を構成する南西隅石は他の石よりも大きい砂岩であるが、幅約 3 cm、深さ 5 mm、断面形が半円形を呈する浅い溝が東西方向に 3 条、南北方向に 3 条残されている。他に削り痕跡はなく、砥石を転用したものとは考えにくい。いわゆる「九字」を切った可能性も考えられる。

張り出し 383 (図版 27・60) 階段 68 の南側で検出された列石と盛土によって構築された平坦面。張り出し 381 と対となって、階段 68 南側の造成土の崩壊を防ぐ為に構築されたものである。平面形は三角形を呈し、北辺が 2.4 m、西辺は 3.0 m、斜辺となる南東辺は 4.2 m を測る。この三角形の内側では、2 列の放射状の列石が検出された。これは張り出し 383 の盛土の崩壊を防ぐ為のものと思われる。西側は石垣 66 が、北側は階段 68 南辺の列石が端となる。南東辺の石垣は、南半が大きく東へずれ、これより先の石垣 66 との間の石垣は存在しない。本来は石垣 66 上段に向かって延びていたものと思われる。石垣 66 上段の前面には幅 0.3 m の平坦面が存在している。張り出し 383 南東辺の石垣は、石垣 66 最上段とは直接は接する事なく、石垣 66 上段前面の平坦面を留める南北方向の列石と接していたものと思われる。

(5) 石垣背面造成

石垣 65・66 の背面には膨大な量の造成土が盛られ、1 区の平坦面 1 が形成されている。造成面の長さとは厚さは、石垣 65 背面で南北長最大 12 m、厚さ約 3 m、石垣 66 背面で最大東西長 10 m、厚さ約 4 m を測る。この造成土中では、造成過程を表す複数の造成面が確認された。それぞれの造成面で礫敷を検出した。これは造成土の地崩れを防ぐ為に施されたものである。この礫敷きは、ほぼ礫のみで構成されるものと粘質土の中に礫を多量に含むものと 2 者がある。前者は造成土の透水層を確保しつつ、斜面となる造成面の造成土同士の摩擦係数を高めることによって、地崩れを防ぐことを目的としたものと考えられる。後者は主に造成土下部で確認されており、地盤を固め

る事を目的としたものと考えられる。²⁾石垣背面の造成は、地形的に高所にある石垣 66 背面から始まり、この部分が一定終了した後に石垣 65 背面の造成が行われている。以下では石垣 65 背面と石垣 66 背面とに分けて、それぞれの造成面について述べる。造成面の平面的な認識は、礫面の検出を一つの基準として行っている。この為、断面観察における造成単位の把握とは細部においては相違している点もある。なお、文章中に礫・石の語句を併用するが、これは大きさで厳密に区分するものではなく、遺構の性格によって使い分ける。石垣・列石に用いられたものは石、礫敷きに用いられたものは礫と呼称する。

(a) 石垣 65 背面造成

石垣 65 背面では平面的には大きく 4 面の造成過程面が検出された。以下に層序に次いで造成面第 1 面から第 4 面までを順に述べる。

造成土の層序 (図 25)

造成過程を確認する為の土層断面図の確認は 3 箇所で行った。西から断面 1・2・3 である。造成土は高所である北から南へ入れられている。造成面の南北距離は西側よりも東側のほうが長くなる。また、造成土は工程を表すいくつかの単位で捉える事が可能である。石垣 65 基底部の地形は西から東へ傾斜しており、石垣 65 背面の造成土は東に行くほど厚くなる。この為、造成土単位の数はそれぞれの土層断面で異なっており、東側のほうが多くなる。西側の断面 1 では、中央の断面 2 では 5 つの造成土単位が、東側の断面 3 では 6 つの造成土単位が確認されている。

断面 1 (図版 12・56) 造成面の南北長は 7.4 m を測る。造成土単位は I ~ V の 5 つに分かれる。

造成土 I の最上層は石垣天場石を覆う比較的精良なにぶい黄褐色砂泥である。これは断面 1 ~ 3 に共通する。石垣 65 積石背面には積石への土圧を軽減する為、長軸 20 ~ 40 cm のやや大きな

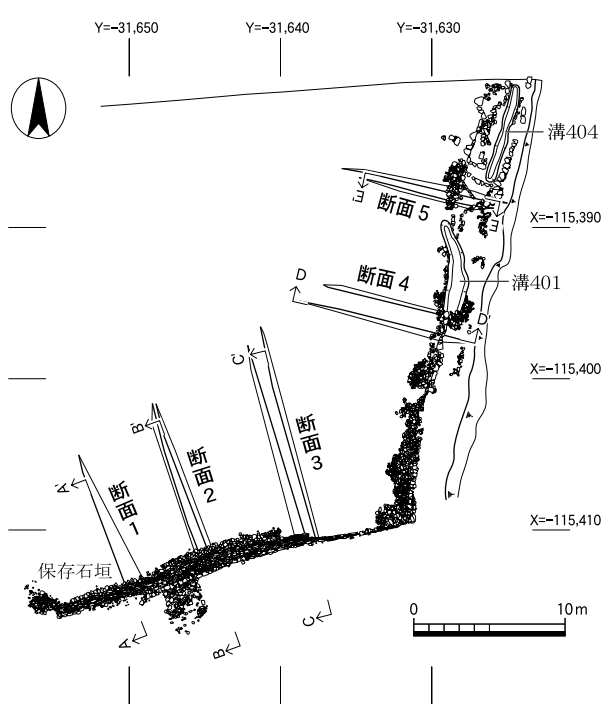


図 25 1 区断面配置図 (1 : 500)

石を積むようにして置いている。この石の背面の造成土は、砂混じりの黄褐色砂泥層に橙色粘土ブロックと 3 ~ 10 cm の礫を含む層を主として構成される。

造成土 II はにぶい黄褐色砂泥と灰黄褐色砂泥を主としている。中位に造成第 2 面の礫敷が構築されている。

造成土 III は礫を主として構成される。礫層である第 42 層は、上半に 5 ~ 10 cm の礫を、下半に 20 cm 前後の石が存在する。この礫層は造成土下部の透水層としての機能を持つものとみられる。上半に径の小さい石を用いるのは、石の間に上層の土が落ち込んで透水機能が低くなることを防ぐ為と考えられる。第 37 ~ 39 層は造成土 3 の先端部に位置する

が、断面形が畦状になっている。上層の土を留める為と思われる。

造成土Ⅳは石垣基底部を構築するものである。3～8 cmの礫を多量に含み、南端基底部を列石321で区画される。

造成土Ⅴは地山直上に盛られた土層で礫はほとんど含まない。また、中央やや北寄りに径15 cm、深さ40 cm以上の空洞が確認された。杭跡の可能性はある。

断面2（図版13）造成面の南北長は約9 mを測る。造成土単位はⅠ～Ⅵの6つに分かれる。

造成土Ⅰの最上層は石垣天場石直上の比較的精良なにぶい黄褐色砂泥である。石垣65積石背面にはほとんど礫が存在せず、黄褐色砂泥を主とする。

造成土Ⅱは黄褐色砂泥を主とする。中位に礫群375があり、その下層に造成第2-1面の礫面が構築される。下層は礫が多く第40層より上層は固く締まる。張り出し410を構築する単位である。造成面の第2・3面が含まれる。張り出し410の最上層は精良なにぶい黄褐色砂泥で、その直下に一括廃棄された土師器皿群の土器溜116の土器層がある。

造成土Ⅳは2～20 cmの礫層を主とする。礫層である第31層は、断面1の第42層と同様に上半に5～10 cmの礫を、下半に20 cm前後の石が多く存在する。石の間に上層の土が落ち込んで透水機能が低くなることを防ぐ為と考えられる。石垣の積石背面の第50層も礫を多く含むが粘質土の中に含まれており、造成土全体の下部を固める為のものである。

造成土Ⅴは石垣基底部を構築するものである。5～10 cmの礫を多量に含み、南端基底部を列石371で区画される。

造成土Ⅵは地山直上に盛られた土層で礫をほとんど含まない砂泥層を主とする。上面は緩やかに南へ下がる。

断面3（図版14）造成面の南北長は約12 mを測る。造成土の厚さは各断面中で最も厚く約3 mを測る。造成土単位はⅠ～Ⅵの6つに分かれる。他の断面に比較して下半部の土層に礫が多く含まれる。

造成土Ⅰの最上層は、石垣天場石直上の比較的精良なにぶい黄褐色砂泥である。これより下層の石垣65積石の背面にはほとんど礫が存在せず、褐色砂泥を主とする。

造成土Ⅱは、礫を多く含むにぶい黄褐色砂泥を主とし、径5～10 cmの礫がやや多く含まれる。石垣65の積石は断面には掛かっていないが、この相当部の背面には径5～10 cmの礫が多く含まれる。中位に礫群375があり、その直下に石垣127が構築される。

造成土Ⅲは、5～10 cmの礫を多く含む砂混じりの褐色砂泥を主とする。特に石垣127を覆う部分には礫が多く含まれる。礫の大きさは礫の大きさは、径が5～10 cmのものと径が20～40 cmと大きいものも含まれる。造成第1面が含まれる。

造成土Ⅳは、造成土の中に構築された石垣127に伴う造成単位である。上層は礫を少量含む黄褐色砂泥を主とし、下層は径が約10 cmの礫を多く含む土に締まりはない。石垣127背面には径が5～10 cmの礫が多く含まれる。

造成土Ⅴは石垣基底部とその背面の造成土である。5～10 cmの礫を多量に含む明黄褐色の粘質

土を主としており、造成土全体の下部を固めるものである。石垣 65 積石背面には、裏込石が畦状に積まれる。この部分の造成が石垣 65 積石の設置と裏込石を畦状に盛り上げる事から始まり、この後に造成土を背面から入れていることがわかる。礫の大きさは、径が 5 ～ 10 cm のものと径が 20 ～ 40 cm の大きいものも含まれる。造成第 2 面が含まれる。

造成土 VI は、地山直上に盛られた土層で礫をほとんど含まない砂泥層を主とする。石垣 65 構築部下は畦状に土が積まれる。造成第 4 面が含まれる。

石垣 65 背面造成第 1 ～ 4 面

大きく 4 面の造成過程面を検出している。石垣 65 は、西端部約 4 m が保存された為、この部分は背面の掘り下げを行っていない。以下の文章中での「石垣 65 東・中央・西部」は石垣 65 全体の中での位置を指し、調査範囲の中でのことではない。

石垣 65 背面造成第 1 面（図版 15・52・53） 礫群 375 と石垣 65・66 の裏込石とその背面の礫敷きが検出された。礫群 375 は径 5 ～ 30 cm の礫が、南北約 1.5 m、東西 18 m 以上にわたって検出される。水平面で検出されるのではなく、比高差が約 0.5 m あり、数層の造成土を入れる毎に同じ場所に礫を置いた結果、形成されたものである。礫の密度は場所によって違いがある。造成第 2 面において、この直下で石垣 127 が検出された。石垣の裏込石は、Y=-31,643 付近より東側、石垣 65・66 の背面で検出された。径が 20 ～ 40 cm と大きいものが多く、その間を埋めるように 5 ～ 10 cm のものも含まれる。これらの石の上面は径が 5 cm 程のやや小さな礫で覆われていた。裏込石背面の礫敷きは、南北長 1 ～ 1.8 m で東に行くほど幅が増す。礫の大きさは径が 20 ～ 30 cm のものを主とし、5 ～ 10 cm のものが間を埋めるように存在する。

石垣 65 背面造成第 2-1 面（図版 16） 石垣 127・張り出し 410・礫敷・石垣 65 裏込石が検出された。張り出し 410 は、石垣 65 中央部背面に位置する。造成土を南側へ平面形が凸形に張り出すように構築された土壇状の遺構である。この段階では東半分の輪郭のみを検出した。石垣 127 は張り出し 410 の西側に位置する東西方向の石垣である。長さ 24 m、高さ最大 2.4 m を測る。この遺構については改めて後述する。礫敷は、張り出し 410・石垣 127 の南側と石垣 65 の裏込石の間のほぼ全面で検出された。礫の大きさは、径が 5 ～ 10 cm のものを主とするが、20 ～ 30 cm のものも多く含まれる。径が 20 ～ 30 cm の礫は列をなして区画列石を形成するものがある。張り出し 410 の前面では区画列石が弧状に 2 条検出された。張り出し 410 西側と東側で段階的に礫敷を施したことがわかる。石垣 65 の裏込石は第 1 面と同じく、石垣 65 東半部と石垣 66 背面で検出された。石垣 65 の裏込石は南北長 1 ～ 1.2 m を測り、礫の大きさは造成第 1 面同様に径が 20 ～ 30 cm のものを主とし、5 ～ 10 cm のものが間を埋めるように存在する。石垣 66 背面の裏込石はこの段階で最下層まで掘り下げており、径が 20 ～ 30 cm の大きなものだけになる。区画列石が南北に約 5 m の距離を持って検出された。この南側列石の北と南で裏込石のありかたが変化している。

石垣 65 背面造成第 2-2 面（図版 17・54・55） 石垣 127・張り出し 410 と石垣 65 との間の礫敷を一層掘り下げた造成面である。土師器皿のみが出土し他の土器類は出土しない。土師器皿に型式差はなく、造成工事中行われた何らかの儀式に使用された土師器皿を一括廃棄されたもの

と思われる。石垣 127 南側の礫敷は、南北が石垣 127 と石垣 65 裏込石との間、石垣 66 から西へ約 10 m までの範囲で検出された。礫は径が 5 ～ 10 cm のものを主とし、20 ～ 30 cm のものも含まれる。径が 20 ～ 30 cm で構成される南北方向の区画列石は礫敷の西端と石垣 66 の中間で検出された。石垣 65 の裏込石は、径が 5 ～ 10 cm のものも含まれるが、約 20 ～ 30 cm の大きな石の比率が造成第 2-1 面よりも高くなる。

石垣 65 背面造成第 3 面（図版 18・54・55） 石垣 65 裏込石・礫敷・張り出し 410、石垣 127 の下層で列石 389 が検出された造成面である。張り出し 410 の構築土の一部を掘り下げ土器溜 116 を検出した。土器溜 116 は張り出し 410 構築土最上層にある土器層である。列石 389 は径が 10 ～ 40 cm の石が東西方向に約 11 m 並んで検出した。石垣 127 基底石との間には 0.1 m 程の造成土が存在しており別の遺構であることがわかる。列石 389 背面の礫敷には東西方向の区画列石が 2 条検出された。列石間の距離は約 1.5 m を測る。礫敷は石垣 65 中央部背面で検出された。礫の大きさは 10 cm 程のものを主とするが 20 cm のものも含まれる。密度は低い。石垣 65 の裏込はこの面でも Y=-31,643 付近より東側と西側で石の大きさや密度が異なっている。

石垣 65 背面造成第 4 面（図版 19・22・56） 列石 403 と石垣 65 の基礎部をなす列石 371 の裏込石を検出した。列石 403 は南北方向から東西方向にほぼ直角に曲がる列石で、南北 4 m、東西 5 m を測る。石の大きさは南北方向の列石のほうが大きく径 20 ～ 40 cm、東西方向の列石が径 10 cm 程度のを主とする。列石 371 の裏込は径 20 ～ 30 cm の大きいものを主とする。

（b）石垣 66 背面造成

石垣 66 背面では 2 面の造成過程面が検出された。以下に層序に次いで造成面第 1 面から第 2 面までを順に述べる。

造成土の層序（図 25）

造成過程を確認する為の土層断面図の作成は 2 箇所で行った。南から断面 4・5 である。造成土は西から東へ下がる尾根斜面に対して西から入れられている。造成面の東西距離は約 12 m を測る。また、石垣 66 基底部の地形は北から南へ傾斜しており、石垣 66 背面の造成土は東に行くほど厚くなる。

断面 4（図版 30・58） 造成面の東西長は 6.1 m を測る。造成土単位は I ～ V の 5 つに分かれる。

造成土 I はにぶい黄褐色砂泥を主とし、径が 5 ～ 20 cm の礫を含む。

造成土 II は灰黄褐色砂泥を主としており礫は全体としては少ないが、石垣 66 背面ではやや多く含む。石垣 66 は造成土 II を盛った後に、その先端を一部掘削して積石の設置している。裏込石は径が 15 cm 程の石を積むようにして置いている。

造成土 III は礫を主として構成される。上半は 5 ～ 10 cm の礫を主とするが、下半には 20 ～ 40 cm 前後の石も存在する。この礫層は造成土下部の透水層としての機能を持つものとみられる。上半に径の小さい石を用いるが、これは石の間に上層の土が落ち込んで透水機能が低くなることを防ぐ為と考えられる。造成第 1・2 面はいずれも造成土 III で検出した。

造成土 IV は礫を少量含むにぶい黄褐色砂泥を主とする。礫敷 405 はこの造成土 IV が盛られたの

ち、一部を掘削して構築される。

造成土Ⅴは斜面肩部に盛られた土で、径が5～20 cmの礫を含む。

断面5（図版31・60）造成面の東西長は4.6 mを測る。造成土単位はⅠ～Ⅳの4つに分かれる。

造成土Ⅰは黄褐色砂泥を主とし径が5～20 cmの礫を含む。石垣66上段は造成土Ⅰを盛った後にその東端部を掘削して構築している。石垣背面の裏込石は、径が15 cm前後の石を積むようにして置く。

造成土Ⅱは灰黄褐色砂泥を主としており礫は全体としては少ない。

造成土Ⅲは張り出し383を構築する礫層を主として構成される。5～20 cmの礫を主として、その間を褐色砂泥および5 cm以下の礫で埋めるようにして固く締められる。石垣66北端の下層部分にあたっており、造成土の崩壊を防ぐ意図をもっているものと思われる。

造成土Ⅳは礫を少量含むにぶい黄褐色砂泥を主とする。礫敷405はこの造成土Ⅳが盛られたのち、一部を掘削して構築される。

造成土Ⅴは褐色砂泥を主とし、斜面肩部にあたる西半部は径が5～15 cmの礫を東半部よりも多く含む。

石垣66背面造成第1～2面

石垣66の背面では、2面の造成過程面を検出している。

石垣66背面造成第1面（図版32・60・61）石垣66中段の背面で裏込石と礫敷を検出した。これより南側の石垣65背面造成第2面で検出した石垣127の間まで礫敷は存在しない。北側は調査区北壁まで確認されていたが、下層の礫敷の有無を確認する為、図化に先行して掘り下げを行った為に図示はされていない。礫敷の礫の大きさは、径が5～10 cmのものを主とするが20 cm以上のものも含まれる。礫敷南端近くには径が30～40 cmの石を用いた区画列石があり、この下層で造成第2面の列石389が検出された。石垣66の裏込石は径が15 cm程の石を主として用いている。

石垣66背面造成第2面（図版33・61）列石389背面、石垣66背面、階段68の下層で礫敷を検出した。石垣66背面、階段68の下層での礫敷はやや疎らであるが、列石389背面は密に施される。礫敷の礫の大きさは、径が5～10 cmのものを主とするが15～20 cmのものも含まれる。石垣66背面には鍵の手状に石が並ぶ列石406が検出された。石の長軸は20～50 cmを測る。列石406の南端から傾斜面の方向が東下がりから南下がりへ変化している。この変化点より西側の裾部には、石垣65造成第3面で検出された列石389が位置しており、それぞれの傾斜面に対して造成方向が異なることがわかる。

地山面では、傾斜面裾部で南北方向の溝401、404を検出した。何れも深さ20 cm前後を測る。埋土は造成土と同質の土であり、造成の最初に掘削されたものと思われる。

第2節 2区の遺構

調査地の北東部に位置する。2区の南北中央部では東西方向に延びる石塁69を検出した。2区はこの石塁69によって北半部と南半部に分断されている。北半部は、西から東に下がる2段

のひな壇状の地形になっている。これは近世の水田耕作に伴って形成されたもので、これによって北半部は大きく地形の改変を受けていると思われる。2区東端の標高は140.0 m前後、西端では137.0 m前後である。南半部は、北西から南東へ下がる傾斜面となっている。2区南半部北西部の標高は140.0 m、南東部は136.0 m前後である。北・南半部共に遺構の多くは、室町時代に地山面を掘り込む事によって造成された3つの平坦面、平坦面2～4の中で検出した。南半部は、3区で検出した暗渠14から平坦面4までの間では遺構は検出されていない。

1. 基本層序 (図 21・26)

2区の基本層序は石塁69を挟んで北部と南部で異なる。2区北部では大きく2層に分かれる。第1層が竹林盛土、第2層が近世以降の水田耕作土(図26-第47層)およびそれに伴う盛土(図26-第30・35・36層)で、この直下が遺構面となる。2区南部では竹林盛土層の直下が地山となる。平坦面3・4の埋土中には、鎌倉時代から室町時代の遺物包含層(図26-第24・34・52層)がそれぞれに存在する。遺構はすべて地山面で検出している。

2. 遺構 (図版1～3・62)

(1) 平坦面

室町時代に造成された平坦面は3個所で検出された。2区は傾斜地形にあり、建物などを建てるには一定の平坦面を確保する必要がある。平坦面2～3は、地山を掘り下げることによって造成された平坦面である。2区の地形は西方に高い為、平坦面の掘形は西側で深くなる。平坦面2は近世の水田耕作に依って大きく削平されており、ほとんど遺構は検出されなかった。平坦面3・4内ではそれぞれピットなどの遺構が確認されている。特に平坦面3では多くの遺構・遺物を検出した。

平坦面2 (図版3・63) 2区北端部で掘形の西辺のみを検出した。西辺は南北長10.5 m分を検出した。西辺の北側は調査区外へと続き、南延長部は近世水田区画の掘削によって失われている。掘形西辺の方位は、北に対してN-55°-W傾いている。深さは西辺の肩部では1.2 mを測る。西辺の肩部北半の掘形法面には径が10～20 cmの礫がまとまって出土している。礫は貼り付けたような痕跡は認められなかったが、肩部の崩壊を防ぐ為に意識的に置かれた可能性がある。また、西辺裾部には10 cmほど浅く溝状に凹んでいる部分もあり、溝が存在した可能性もある。

平坦面3 (図版3・63) 2区北半部の東側で検出した。掘形は北・西・南の3辺を検出した。掘形北辺は、東西長9 m以上を測り調査区外へと続く。掘形西辺は南北長8 mを測る。南辺は、石塁69と並行して1.8 mを検出しており、東壁の断面観察から東へ続いている事が確認されている。掘形西辺の方位は、平坦面2と同様に北に対してN-55°-W傾いている。深さは北肩部では0.8 mを測る。平坦面3の埋土には、室町時代の遺物包含層(図26-第34層)と鎌倉時代から室町時代の遺物包含層(図26-第52層)が存在する。断面観察からは、これらの遺物包含層はそれぞれの時代の整地面と考えられる。上面で遺構の検出に努めたが、平面では確認する事ができな

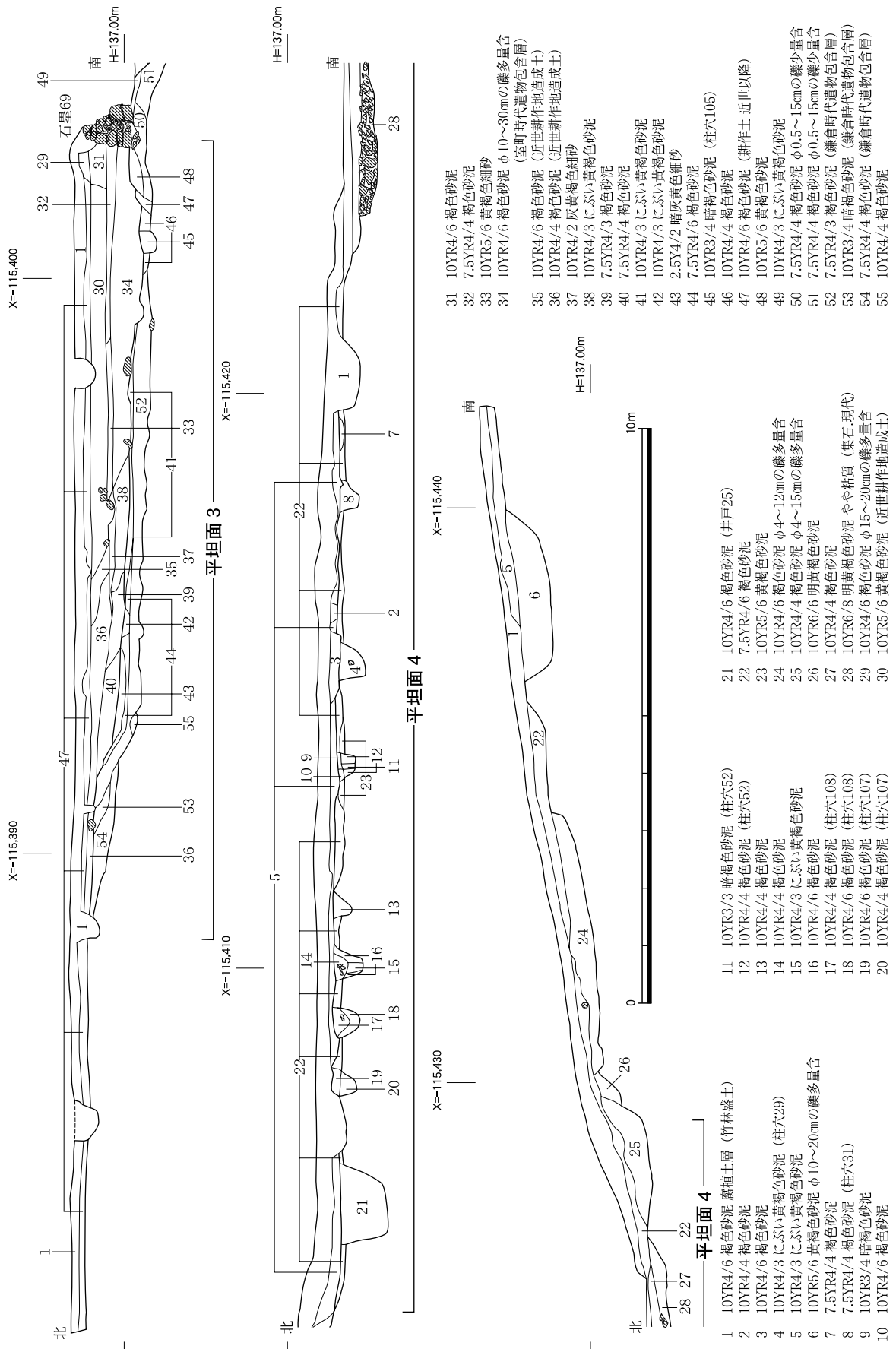


図 26 2区東壁断面図 (1 : 100)

かった。地山面で検出した遺構は、径 20～40 cm のピットがあり、礎石を持つものもある。柱穴とみられるが、建物や柵として復元できるものはない。

平坦面 4 (図版 3・64) 2 区南半部の東側で検出した。掘形は北・西・南の 3 辺を検出した。掘形北辺は、南辺は石塁 69 と並行して検出され、東西長 3.5 m 以上を測り調査区外へと続く。掘形西辺は南北長 23 m を測る。掘形南辺は 5.5 m 検出し調査区外へと続く。掘形西辺の南北方位はほぼ正方位である。深さは北肩部で約 1 m を測る。掘形南西コーナー部では 5～20 cm の礫がまともに出て出土している。貼り付けたような痕跡は認められなかったが、肩部の崩壊を防ぐ為に意識的に置かれた可能性がある。平坦面 4 の埋土には、室町時代の遺物包含層 (図 26 - 第 22 層) が存在する。断面観察からこの遺物包含層は遺構面であることが明らかである。調査時にこの上面で遺構の検出に努めたが、平面では確認する事ができなかった。遺構はすべて地山面で検出した。遺構には、鎌倉時代から室町時代のピット・溝・土坑などがある。

(2) 石塁

石塁 69 (図版 34～38・65～68) 2 区の中央部で検出した石を積んで構築した東西方向の石塁。2 区の南北を分割する区画施設である。西は石垣 65・66 のコーナー部に取りついて始まる。東は調査区外に延びる。石垣 65・66 が構築された後に設けられたものであるが、時期的には同時期のものである。

検出長 27 m、基底部幅 0.8 m を測る。Y=-31,623 ライン付近でカーブする。石塁方位は Y=-31,623 ラインより西側は E-3°-S、東側は E-22°-S である。石塁は、調査区の東側 25 m にある参道まで続く事が地表から確認できる。総延長距離は計約 52 m となる。遺存高は北側が 0.8 m、南側が 0.2～0.3 m と南側のほうが低くなっている。これは南下がりの地形によって大きく崩れた為であり、調査時には、石塁 69 南側で崩落した多数の石を確認している。この崩落石直下から 18 世紀代の染付片が出土しており、この時期までは大きく崩れることなく遺存していたと思われる。勾配は北側で 80 度を測るが、南側は遺存高が低く不明である。石積み内部は拳大の石のみによって充填されている。北面側中央部と南面西半部の基底石の下半部は覆土によって埋められている。

基底石は、固く締まる黄褐色砂泥の基底石覆土によって埋められている。南面側の基底石覆土は、5～10 cm の石を含む褐色砂泥層であり、これによって石塁 69 南面西半部は南北幅約 1.5 m の平坦面が構築されている。これは雨水などの影響で基底石覆土の流出および石塁の崩壊を防ぐ為に施されたものと考えられる。基底石覆土は、本来全域に存在したと思われる。基底石の覆土より平安時代から室町時代の土器・瓦類が出土している。

積石の大きさは、北面側では、長径が 15～30 cm、短径が 10 cm、長軸が 20～30 cm の大きさの石を多く用いる。

基底石は、長径 15～30 cm、短径 10 cm、長軸 15～20 cm のものが多い。石垣の方向と平行するいわゆる横使いで置く。東部では、長径が 50～70 cm、短径が 40～60 cm のやや大きい石を所々

に用いる。これらは設置面の地形勾配の変化点などに位置している。西部の石垣 65・66 との接合部に近い付近は、南面は基底石に長軸 50～80 cm、短軸 30～40 cm、長径が 30～40 cm の大きい石を北面よりも多く用いる。これは南に低くなる地形から、荷重が大きく掛かる為に大きい石を使用した可能性が考えられる。また南面の東端部から西へ約 6 m 石は長径 60 cm、長軸 80 cm、短軸 40 cm の白みを帯びたチャートを立てて用いている。この石の南面を石塁 69 南面と合わせるのではなく、東側を北へわずかにずらしている。構造的には立石を用いる必要性はなく、景観を意識した可能性もある。裏栗石の大きさは 5～20 cm である。

抽出した石材 100 個の内訳は、南面は砂岩が 59 個、チャート 37 個、脈石英 4 個、北面は砂岩が 59 個、チャート 38 個、脈石英 3 個と同種がほぼ同比率である。

石の置き方は、長軸方向を石塁の面に対して直交して置く、いわゆる縦使いにして積まれているものが多いが、南面基底石の長軸 50～80 cm の大きい石は、長軸方向と石塁方向を合わせて置くいわゆる横使いにして積まれている。壁面は、北面では平滑である。遺存状態の悪い南面は、やや粗いが石がずれた可能性もある。

石塁全体の横方向の構築順序は、地形的に低い東側から高い西へ行っている。一定スパンで水平面を東から西へ繰り返し作ることによって石塁を構築していく。

石塁は基底部でも幅が 0.8 m しかなく、上部に土塀などを構築することは不可能と考えられる。石塁本来の高さは不明であるが、石を垂直に近く積み上げていることから、高く積むことはできないと考えられ、1.5 m よりは低いと思われる。

(3) ピット・柵

平坦面 3・4 の中では、ピット 28・29・31・35・52・58・107・108 などの多くのピットを検出した。これらの中には礎石を持つものもあり柱穴の可能性が高いが、一つの遺構として捉えられるものは以下に述べる柵 409 のみである。

柵 409(図版 40) 平坦面 4 で検出された 3 基のピットからなる南北方向の柵。南北 3.3 m を測る。柱間は北から 2.5 m、0.8 m である。ピット内にはそれぞれ礎石を持つ。

(4) 土坑

土坑 8(図版 40) 平坦面 3 の北側で検出した。平面形は歪んだ円形を呈する。径 1.3 m、深さ 0.1 m を測る。掘形内には径 10 cm の小石とともに上面が平坦な長さ 30～40 cm 石が出土する。建物の柱穴の可能性もあるが不明である。13 世紀前半とみられる土師器皿の小片が出土する。

土坑 13(図版 40) 平坦面 3 の西肩部で検出した。平面形は楕円形を呈する。径 1.4 m×0.6 m、深さ 0.3 m を測る。

土坑 15(図版 40) 平坦面 3 の西肩部で検出した。平面形は楕円形を呈する。径 0.8 m×0.6 m、深さ 0.15 m を測る。掘形内には径 5 cm の小石とともに上面が平坦な長さ約 20 cm 石が出土する。建物の柱穴の可能性もあるが不明である。13 世紀の瓦器などが出土する。

土坑 23(図版 40) 平坦面 3 の西肩部で検出した。平面形は楕円形を呈する。径 1.2 m×1.0 m、深さ 0.15 mを測る。掘形内には径 10～20 cmの石がとともに上面が平坦な長さ約 20 cm石が出土する。建物の柱穴の可能性もあるが不明である。13 世紀の瓦器など土器類がまとまって出土する。

(5) 集石

土坑内に石を入れた集石遺構が石罫 69 の北側で 2 基検出されている。2 区は北西側に地形が高く、雨水は北西から南西に流れる。この為、東西方向に位置する石罫 69 の北面裾部に沿って雨水が流れる事になる。集石遺構は、この雨水によって石罫裾部の土が流出する事を防ぐ為に設けられた雨水浸透槽と考えられる。集石 391 は石罫 69 基底石覆土の上面で、集石 393 は石罫 69 基底石覆土の下層で検出している。構築時期に差はあるが、周辺にこれら以外の遺構が存在しない事から、集石 393 も石罫 69 に伴う遺構と考えられる。

集石 391 (図版 39・73) 石罫 69 中央部北側に位置する。掘形内に多量の石を含む土坑。平面形は楕円形を呈し、径 1.8 m×1.2 m以上、深さ 1.2 mを測る。掘形内には径 5～30 cmの石が多量に含まれる。特に埋土上半に多い。

集石 393 (図版 39・73) 集石 391 の西側に位置する。掘形内に多量の石を含む土坑。石の量は集石 391 より少ない。平面形は楕円形を呈し、径 1.7 m×1.5 m以上、深さ 1.6 mを測る。掘形内には径 5～10 cmの石が埋土上半に多く含まれる。

(6) 溝

溝は、平坦面 2・4 の掘形裾部またはその近くで、平坦面の掘形に沿って検出した。平坦面裾部の排水機能を担うものとみられる。

溝 6 (図版 3・63) 平坦面 2 西辺掘形にそって検出した南北方向の溝。近世の水田耕作に伴う削平によって一部しか遺存していない。南北長 3.5 m、幅 0.8 m、深さは 0.05～0.1 mを測る。

溝 12 (図版 41) 平坦面 4 南半部の西辺掘形裾部で検出した南北方向の溝。南北長 11 m、幅 0.3 m、深さは 0.2～0.3 mを測る。溝底は緩やかに南へ傾斜する。鎌倉時代の土器類が出土する。

溝 24 (図版 41) 平坦面 4 上の西辺に沿って検出した南北方向の溝。北端は平坦面 4 の北辺の南側で東へ曲がり、調査区外へと続く。南北長 17.5 m、幅 0.9～1.8 m、深さは 0.1～0.3 mを測る。

(7) その他の遺構

土橋 408 (図版 41) 平坦面 4 の西肩中央部で検出した。平坦面 4 の西肩ラインの掘削時に地山を掘り残す事によって形成している。平坦面 4 とその西側を通行する為のスロープ状遺構。南北 3.2 m、東西 1.3 mを測る。

土器溜 11 (図版 41) 平坦面 4 の南北中央部で検出した浅い凹みに土器がまとまって出土した。明確な掘形はなく、13～14 世紀の瓦器などの土器類が出土する。土器の廃棄場所であった可能性がある。

第3節 3区の遺構

調査地の南部に位置する調査区。石垣 65 南側の標高 136 ~ 142 m の北西から南東へ下がる傾斜面に位置する。地形は 3 区南西側で急激に下がっていく。中世に地山面に対する掘り込みによって造成された平坦面（平坦面 5）が南半部で検出されている。この平坦面上では中世の遺構を多数検出している。石垣 65 と平坦面 5 の間の緩傾斜面では奈良時代の火葬墓（墓 163）が検出されている。3-3 区は近年の大規模な削平によって遺構面のほとんどが失われていた。

1. 基本層序（図 27）

石垣 65 から平坦面 5 までの間と平坦面 5 の内側で層序が異なる。石垣 65 から平坦面 5 までの間では竹林盛土層の直下が地山となる。平坦面 5 の内側では、大きく 2 層に分かれる。第 1 層が竹林盛土、第 2 層が近世以降の水田耕作土（図 27 第 4・9・16 層）が数層あり、およびそれに伴う盛土（図 27 第 19・20 層など）で、この直下が遺構面となる。

2. 遺構（図版 1・4・5・69・70・74）

（1）平坦面

室町時代に造成された平坦面は、3 区南半部で平坦面 5 が検出された。平坦面 5 も 2 区の平坦面 2 ~ 4 同様に、傾斜地形の地山を掘り下げることによって造成した平坦面である。

平坦面 5（図版 4・5・69・70・74）平坦面の掘形は南辺を東西長約 11 m 分検出した。2 区の地形が北西側に高い為、平坦面 5 北辺を成す掘形は、西半側で深く東半側で浅くなる。北辺掘形の西側は、Y=-31,640 ラインより以西では厳密には近世以降の掘削を受けているが、この南側で確認した平坦面と遺構の広がりから見て、南へ曲がる Y=-31,648 ライン付近まではほぼ旧状を保っているとみられる。北辺掘形の東側は、暗渠 14 辺りで浅く不明瞭になる。掘形西辺の方位は、東に対して E -12° - N 傾いている。深さは北辺の西半肩部では約 0.6 m を測る。南端部では地山面は南へ急激に下がる。平坦面 5 の規模は東西約 35 m、南北約 20 m。南西部の一部で平坦面を広げる為に造成土を入れており、造成土を留める列石 309 を検出している。

（2）ピット・柵

平坦面 5 上では、多数のピットを検出した。ピット 301・233・235 からは鎌倉から室町時代の土器類が出土した。ピットは Y=-31,635 ラインよりも東側に集中する。これらの中には礎石を持つものもあり柱穴の可能性が高いものが多いが、一つの遺構として捉えられるものは柵 254 のみである。

柵 411（図版 42）平坦面 4 上で検出された 3 基のピットからなる南北方向の柵。南北 6.4 m を測る。柱間は北から 2.1 m、1.6 m、2.7 m である。ピット 287・298 にはそれぞれ礎石を持つ。

- 1 10YR4/6 褐色砂泥(盛土)
- 2 10YR4/1 褐灰色粘質土(盛土)
- 3 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 やや粘質
- 4 10YR4/4 褐色砂泥 (耕作土)
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 φ1~20cmの礫少量含
- 6 10YR4/6 褐色砂泥
- 7 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土
- 8 7.5YR3/4 暗褐色粘質土
- 9 7.5YR4/4 褐色砂泥 (近世以降耕作土)
- 10 7.5YR4/4 褐色砂泥
- 11 7.5YR4/3 褐色砂泥
- 12 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 φ1~20cmの礫中量含
- 13 10YR4/6 褐色砂泥
- 14 7.5YR4/3 褐色砂泥
- 15 7.5YR4/4 褐色砂泥 炭・土師片少量含
- 16 7.5YR3/4 暗褐色砂泥 φ1~20cmの礫少量含 (近世以降耕作土)
- 17 7.5YR4/3 褐色砂泥 土師片少量含
- 18 7.5YR4/4 褐色砂泥 炭・土師片少量含
- 19 7.5YR4/3 褐色砂泥 φ1~15cmの礫・炭・土師片少量含
- 20 7.5YR4/4 褐色砂泥
- 21 7.5YR4/6 褐色砂泥 (近世耕作土)

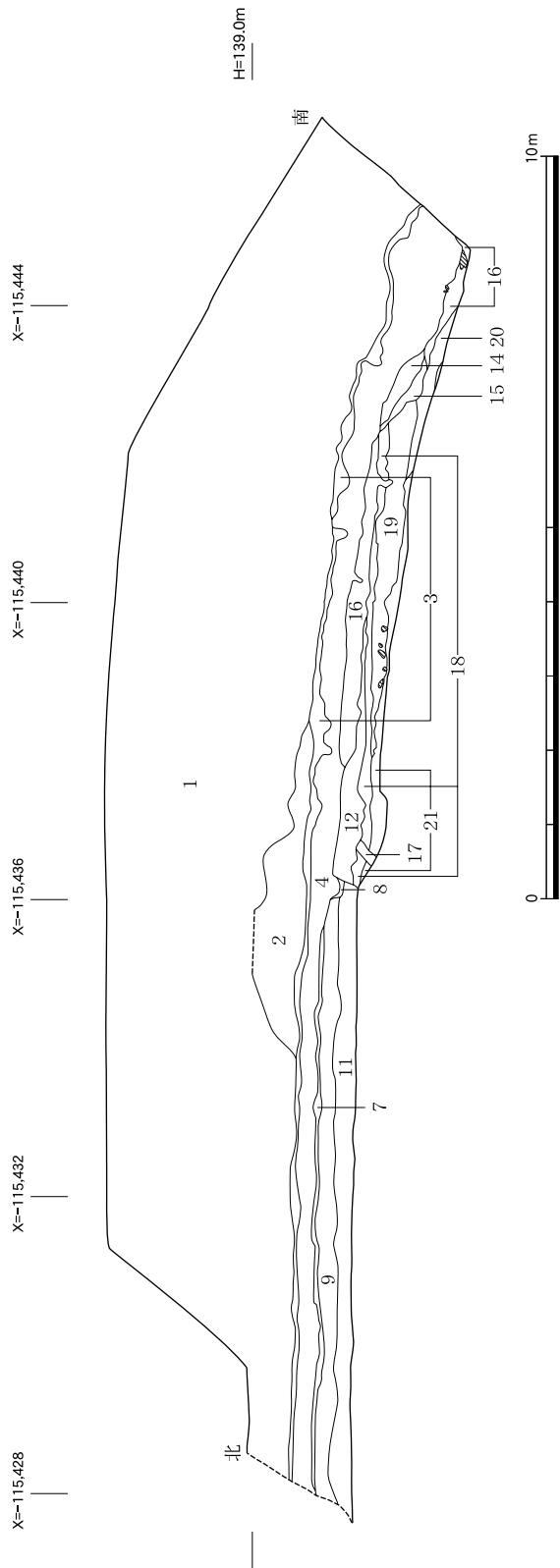
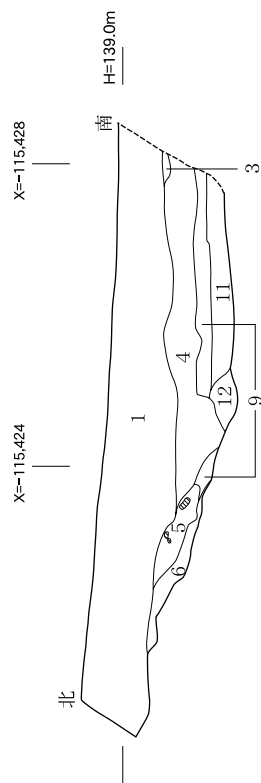


図 27 3区東壁断面図 (1 : 100)

(3) 土坑

土坑は平坦面 5 の南部で検出した土坑 231・303・330 は、溝 240 と共にセットで機能していた可能性がある。3 区の西部では室町時代の瀬戸焼の花瓶が出土した土坑 151 で検出した。

土坑 230 (図版 42) 平坦面 5 の南部で検出した。平面形は方形を呈する。径 2.1 m×1.6 m、深さ 0.15 m を測る。室町時代の土師器小片が出土する。

土坑 231 (図版 42・71) 土坑 230 の西側で検出した。平面形は方形を呈する。径 3.4 m×2.3 m、深さ 0.4 m を測る。土坑 230 との接点となる部分には南北方向に石が並ぶ。石の大きさは長軸 25～45 cm、短軸 10～20 cm の石を東に面を揃えて並べる。この列石の中央部西側には径が 5～15 cm の石が集中して検出された。埋土は比較的固く締まる。

土坑 363 (図版 42) 土坑 230 の南側で検出した。北・西辺を検出し、南と東側は調査区外へと続く。1.1 m×4.7 m、深さ 0.5 m を測る。土坑 230 との接点となる部分には南北方向に石が並ぶ。

以上の土坑 230・363 および溝 240 は、埋土からは前後関係が認められなかった。土坑 230 の南端から南北方向に延びる溝 240 との接合部には溝を堰き止めるように拳大の石が検出された。溝 240 の南端は土坑 363 に繋がる。有機的に結合して機能する遺構群として考えることができる。井戸 196 の南側に位置しており、不確定ではあるが、洗い場の遺構の可能性も考えられる。土坑 231 とその列石が洗い場、土坑 230 が水溜め、溝 240 が排水溝、土坑 363 は汚水沈殿槽にそれぞれ想定される。

(4) 集石

平坦面 5 上では土坑内に石を入れた集石遺構を多数検出した。平坦面 5 の北辺掘形裾部近くと南へ下がる地形の変化点近くで多数を検出した。土坑掘形の径は 0.6～1.2 m と幅があるが、深さはいずれも 0.2 m 前後である。土坑内には径が 5～15 cm の礫を多数検出している。平坦面 5 の北西側は地形が高く、掘形法面から沁みだしてくる水や雨水を処理する為の遺構と考えられる。またこれらの地形の変化点に位置するもの以外に、暗渠 14 南端部で検出した集石 17 がある。これは深さが 2.1 m を測り、他のものとは異なっている。以下に説明を加える集石 155・157・171・172・201・327 以外にも集石 145・160～162・193・201・293・327 などを検出した。

集石 17 (図版 44・72) 3-1b 区北東部で検出された掘形内に礫が充填された排水土坑。暗渠 14 の流末に位置する。南北 1.3 m、東西 1.5 m、深さ 2.1 m を測る。石の大きさは上部と下部では異なり、上部は径 10～20 cm のものが多く、下部は径 20～30 cm の大きいものが多くなる。排水機能を維持する為に意識的に行われたものと考えられる。室町時代の土器類が出土する。

集石 155 (図版 43) 平坦面 5 の西部で検出した。平面形は楕円形を呈し、径 0.5 m×0.6 m、深さ 0.2 m を測る。掘形内には径 10 cm 前後の石が含まれる。

集石 157 (図版 43) 平坦面 5 の西部で検出した。平面形は円形を呈し、径 0.6 m、深さ 0.2 m を測る。掘形内には径 5～15 cm の石が多量に含まれる。

集石 171 (図版 43・73) 平坦面 5 の南西部で検出した。平面形は円形を呈し、径 1.2 m、深さ

0.2 mを測る。掘形内には径5～20 cmの石が多量に含まれる。

集石 172 (図版 43・73) 平坦面 5 の南西部で検出した。平面形は楕円形を呈し、径 1.0 m×1.2 m、深さ 0.25 mを測る。掘形内には径5～15 cmの石が多量に含まれる。

集石 201 (図版 43) 平坦面 5 の中央部北側で検出した。平面形は不整形で、径 0.7 m×1.3 m、深さ 0.25 mを測る。掘形内には径5～20 cmの石が多量に含まれる。

集石 327 (図版 43) 平坦面 5 の中央部南側で検出した。平面形は楕円形を呈し、径 0.7 m×0.8 m、深さ 0.2 mを測る。掘形内には径5～15 cmの石が含まれる。

(5) 溝

溝は平坦面 5 上で検出している。平坦面 5 の中央部で溝 190、南部で溝 240、北辺掘形裾部の近く溝 258、東側で溝 342 を検出した。

溝 190 (図版 4) 3-1b 区で検出された平面形がL字形を呈する溝。溝の長さは南北方向部が 6.4 m、東西方向部が 7.4 m、幅は 1.2～1.8 m、深さは 0.1～0.3 mを測る。この溝の南東側、溝に囲まれる範囲では遺構がほとんど検出されなかった。またこの範囲のごく一部分では、他では検出されていない薄い整地層も確認された。これらの事から、ここに基壇建物が存在した可能性が考えられ、近世の水田耕地化の際に削平され失われた可能性が考えられる。その場合、溝 190 は、基壇建物の北東側を画する雨落ち溝になる。溝の幅が広いのは地形的に高い北東側からの雨水に対応するものであろう。室町時代の小片の土器類が出土する。

溝 240 (図版 42) 平坦面 5 の南部で検出した南北方向の溝。土坑 230・363 を繋ぐように検出した。南北長 3.1 m、幅 0.3～0.4 m、深さ 0.2 mを測る。溝底は南へ低くなる。土坑 230 との接点近くには径 10～15 cmの石が溝を埋めるようにまとまって検出した。埋土からは溝 240 と土坑 230・363 に前後関係は認められなかった。土坑 230・363 の項で前述したように、一連の遺構として機能していた可能性が考えられる。

溝 258 (図版 4・5) 平坦面 5 上の西辺掘形に沿って検出した東西方向の溝。東西長 16 m、幅 0.7～0.14 m、深さは 0.2～0.3 mを測る。平坦面掘形裾部の排水機能を担うものとみられる。

溝 342 (図版 45) 平坦面 5 東部で検出した東西方向の溝。東西長 5.4 m、深さは 0.6 mを測る。東半部北側には深さ 30 cmの浅い掘形があり、北から南へ2段落ちになる。溝内からは5～20 cmの石とともに土器・瓦類がまとまって出土した。埋土は固く締まっており、水が堆積したことを示す泥土も確認されなかった。排水機能を持つ溝とは形状からも考え難い。この南西側で、平成 21 年度調査において溝状の掘り込み地業である地業 3 を検出している。溝 342 はこの地業 3 と対となって1つの建物の基礎を構成していた可能性が考えられる。

(6) その他の遺構

墓 163 (図 28、図版 69) 石垣 65 と平坦面 5 の間の傾斜面で検出した火葬墓。径 0.3 m、深さ 0.15 mを測る掘形内に須恵器短頸壺を納める。上半部は竹の根により破壊されていたが、壺内部

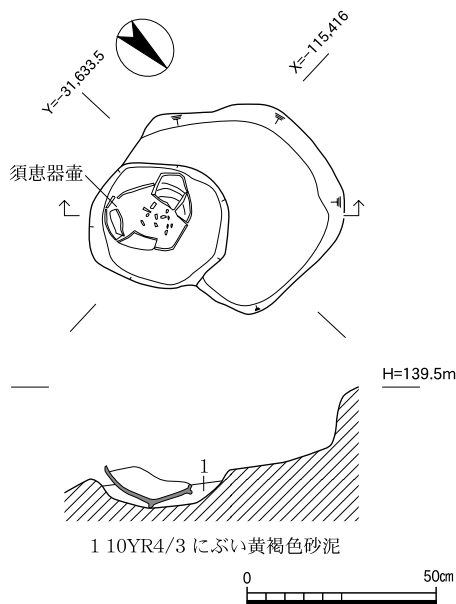


図 28 3区墓 163 実測図 (1 : 20)

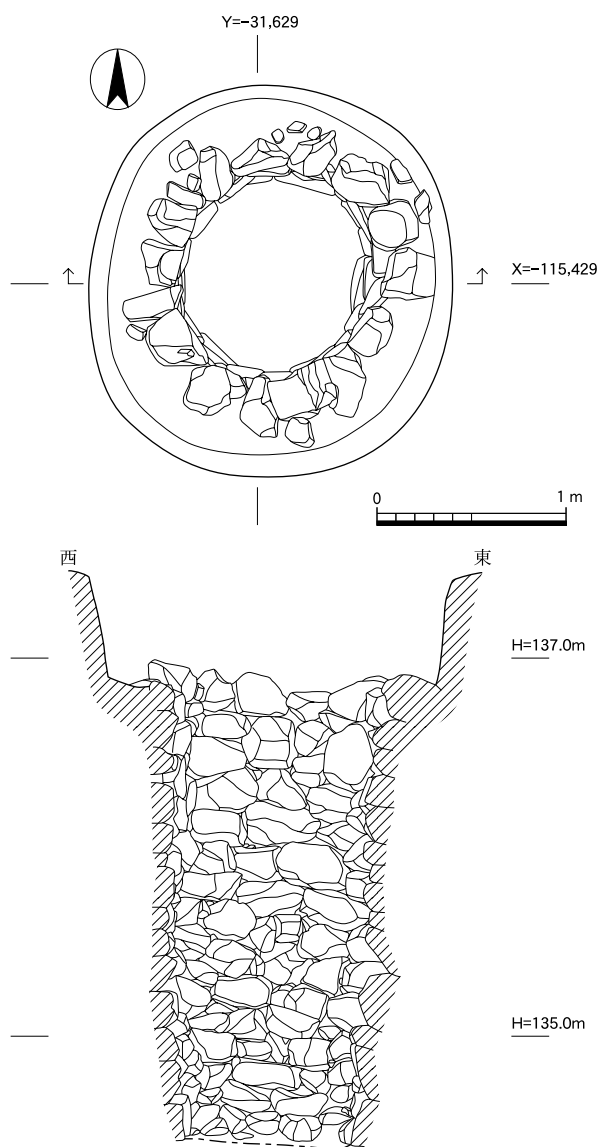


図 29 3区井戸 196 実測図 (1 : 40)

より口縁部が出土している。壺内からは火葬骨と炭の小片が出土した。時期は奈良時代後半。今回の調査で検出された唯一つの平安時代以前の遺構である。

井戸 196 (図 29、図版 71) 平坦面 5 の中央部で検出した石組井戸。石組の平面形は円形を呈する。掘形径 2.1 m、石組径 1 m、深さ 3.8 m を測る。石の大きさは長軸が 30 ~ 50 cm、短軸が 20 ~ 30 cm を測る。石材はチャート・砂岩を用いるが、チャートが多い。埋土は、最下層に厚さ 0.1 m の腐植土層が堆積するが、これより上はすべて 20 ~ 30 cm の石を多量に含む礫土層であった。室町時代の土器類が少量出土する。

暗渠 14 (図版 14・72) 石垣 69 南縁基底石から南北方向に延びる暗渠。溝状の掘形に石を充填する。長さ 16 m、幅 1.0 ~ 1.5 m、掘形の深さ 0.3 ~ 0.4 m を測る。掘形の深さは北から南に深くなる。掘形内は下層に暗褐色砂泥が 0.1 ~ 0.2 m 堆積し、上層が拳大の礫層となる。礫層の上には黄褐色の粘質土が部分的に検出されており、礫の間に泥などが入ることによって起きる、眼詰まりが生じない為に施したものと思われる。礫の間からは室町時代の土器類が出土する。暗渠 14 は石垣 65・66 のコーナー裾部に集まる雨水などの排水を促し、この部分の地盤の緩みを防ぐ為の施設と考えられる。暗渠 14 流末にある集石 17 は、排水槽としてセットで機能していたものである。

列石 309 (図版 45・71) 平坦面 5 の南西部の南端で検出した。中世の整地層を掘り下げ中に 2 列の東西方向の列石を検出した。石の大きさは 10 ~ 30 cm。地山面は列石を境にして南へ下がっており、平坦面を確保するために盛土を留める為の列石と考えられる。石の間からは、底部を穿孔した 13 世紀代の土師器皿が出土する。

第4節 4区の遺構（図版6・74）

3区南東側で、山門の約20m西に位置する。標高134.8～139.2mの独立した小山状を呈する。4区西側は、近年の削平によって崖面となっている。3区が厚さ3m以上の近年の土盛りによって小山状を呈していたことから、調査前は4区も同様に土盛りによる地形かと思われたが、調査の結果自然地形であることがわかった。南東斜面は急傾斜となっており、ある時期の人為的な削平の結果と思われる。この南側に江戸時代の絵図にも描かれている山門の脇から延びる東西方向の小道が、現在も竹林の中に里道として残されており、これの造成に伴うものである可能性もある。頂部では平坦面など人工的な地形改変は認めがたく、遺構も検出されなかった。

第5節 1～3区の遺物

遺物は平安時代から室町時代の土器類を中心に瓦類・石製品・金属製品・銭貨などが出土している。遺物出土総数は遺物整理箱で180箱である。時代別にみると室町時代が最も多く、次いで鎌倉時代、平安時代、江戸時代となる。奈良時代から平安時代前期の遺物は、墓160の蔵骨器の須恵器以外では、須恵器・緑釉陶器などが石垣背面の造成土などから中世の遺物とともに少量出土している。平安時代後期の遺物は土器・瓦類が出土する。鎌倉時代になると遺物の出土量は増加し、4区を除いた調査区のすべてから出土する。室町時代は最も遺物の出土量が多いが16世紀の前半までのものに限られる。16世紀後半の遺物は出土しない。江戸時代の遺物の出土はきわめて少なく、点数にして10点に満たない。平安時代以前の遺物とみられるものに、2-b区の包含層から出土したサヌカイトの剥片があるが時期は特定できない。

表2 平成22年度調査遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
奈良時代	須恵器		須恵器1点	0箱	0箱
平安時代	須恵器、緑釉陶器、軒丸瓦、軒平瓦、平瓦		須恵器1点、緑釉陶器1点、軒丸瓦3点、軒平瓦10点	0箱	少量
鎌倉時代～室町時代	土師器、須恵器、瓦器、灰釉系陶器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、石製品、金属製品、銭貨		土師器208点、須恵器9点、瓦器50点、灰釉系陶器1点、焼締陶器9点、施釉陶器14点、輸入陶磁器24点、軒丸瓦6点、軒平瓦4点、丸瓦5点、平瓦4点、石製品12点、金属製品18点、銭貨2点	20箱	180箱
江戸時代	染付、銭貨		銭貨2点	0箱	少量
合計		215箱	384点（15箱）	20箱	180箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物をランク分けしたため、出土時より35箱多くなっている。

以下では、まず土器類について1区から4区の調査区・遺構別に、次いで瓦類・石製品・金属器・³⁾ 銭貨の遺物種類別に述べる。

1. 土器類

1区出土土器

1区では石垣65・66背面の造成土から多量の遺物が出土している。造成土から出土する遺物は9世紀から15世紀後半の遺物がある。造成面北半部となる石垣66背面の造成第2面構築土の暗褐色土からは、13～14世紀代の遺物が比較的まとまって出土する。石垣65背面造成第2面で検出された土器溜116からは土師器皿を中心として多量の土器が出土する。全体としては、造成土の層序・地点に係らず15世紀後半の遺物が出土しており、造成が一時期に行われたことがわかる。

ここでは石垣背面の造成土出土遺物を大きく石垣127以北と以南とに分け、以北を石垣66背面造成土、以南を石垣65背面造成土として述べる。土器溜116は石垣65背面の造成土中で検出された一括廃棄された大量の土師器皿群であることから、他の造成土出土遺物とは別に述べる。1区断面2第44層は石垣65背面造成土の下層に位置する大量の土器類を包含する土層である。意図的に土器をこの造成土に入れた可能性が考えられる。これも他の造成土出土遺物とは別に述べる。

土坑121(図30 1～3) 1・2は土師器小皿である。1は口縁部が弱く外反する。2は底部から口縁部まで直線的に伸び、器壁は薄い。3は瓦器浅鉢である。口縁部の2条の突帯の間に唐草文を線刻で施す。

土坑112(図30、図版75 4～18) 4～15は土師器皿。4はコースター状を呈する小皿。5・6は口縁部が直立気味に立ち上がる小皿。7は口縁部が屈曲する薄手の小皿で、出土土器の中では新しい特徴を持つ。土坑112の最終埋没時期を示すものとみられる。8・9は口縁部が外反気味に低く立ち上がる。11・12も口縁部は小さく外反するが、立ち上がりは8・9に比べるとやや高い。13～15は口縁部が外側に開きながら立ち上がり、14は器壁が薄く口縁部が屈曲する。色調は4～6が橙色系、7・13・14が橙褐色系、9～12が橙白色系である。16～18は瓦器碗、

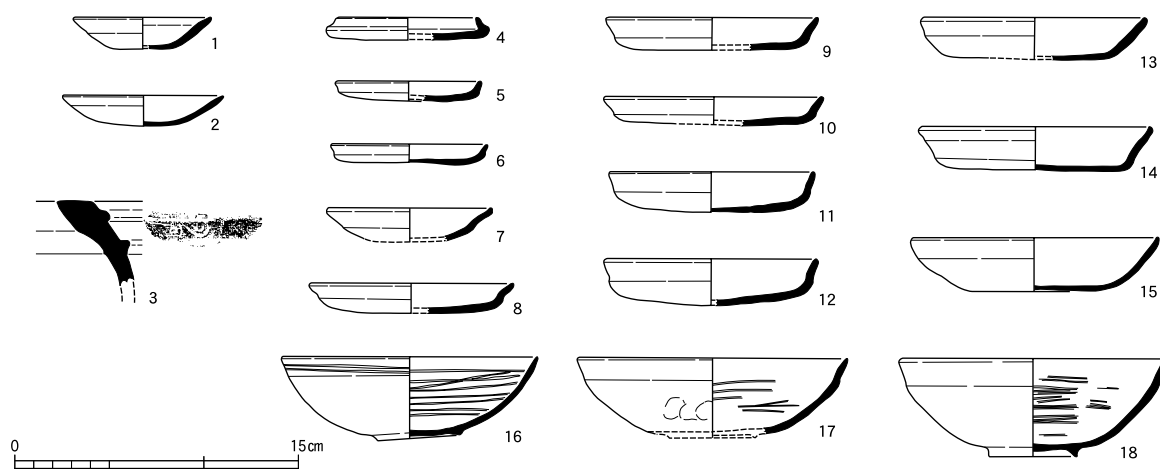


図30 1区土坑112・121出土土器実測図(1:4)

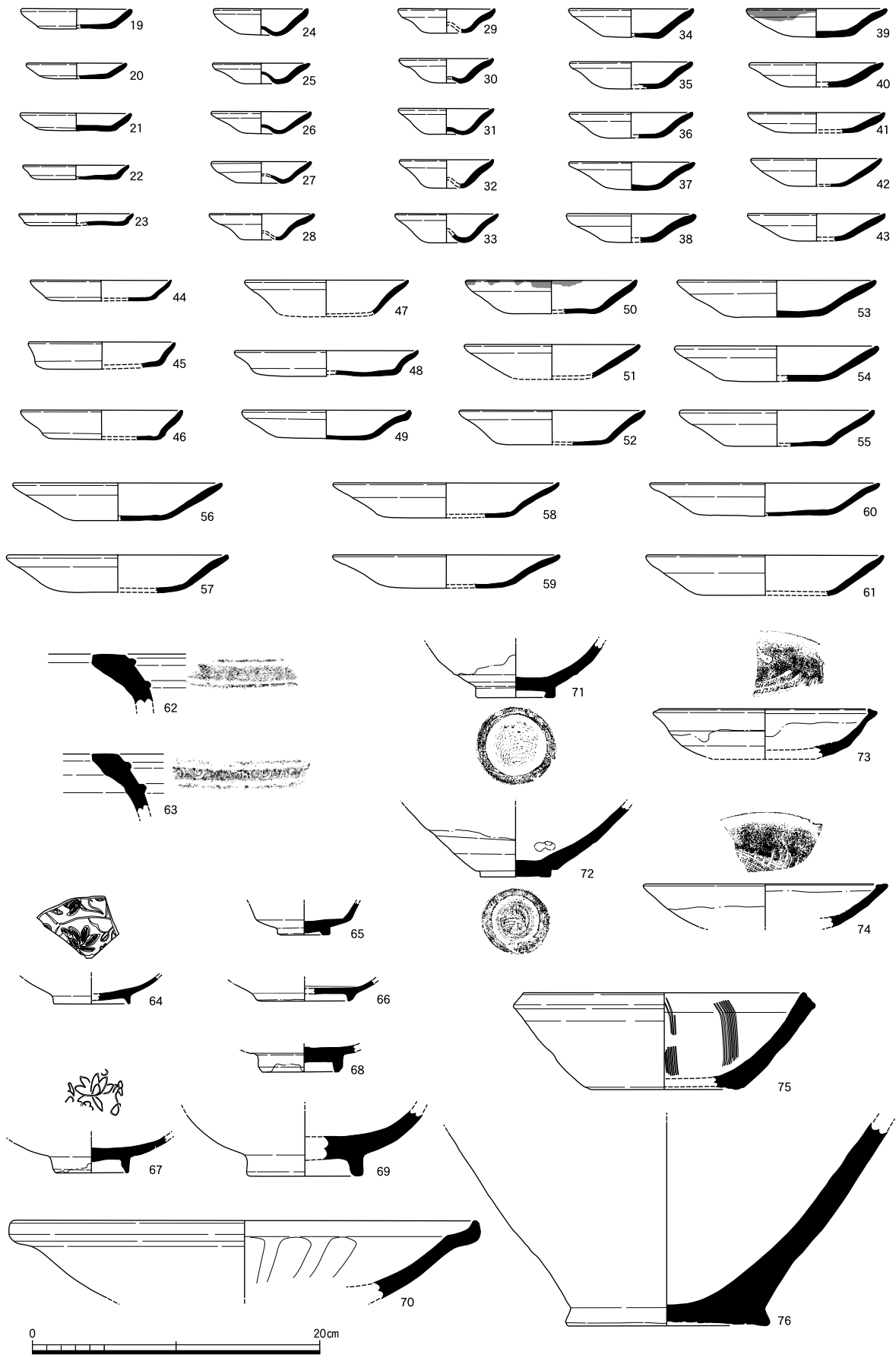


图 31 1区石垣 65 背面造成土出土土器实测图 (1 : 4)

いずれも樟葉型である。器壁は3～4mmとやや薄く、内面のヘラミガキの間隔が開いている。内面底部の暗文は磨滅のため確認できない。森島編年Ⅲ－3期である。

石垣 65 背面造成土（図 31、図版 76 19～76）13～15 世紀代の土器類が層位に関係なく出土している。19～61 は土師器皿。19～23、44～49 は 13・14 世紀代、これ以外は 15 世紀代と思われる。19～23 は口径 7.2～8.2 cm の小皿。24～33 はヘソ皿。34～43 は口径 8.4～9.6 cm の小皿。44～55 は口径 9.8～13.4 cm の皿。56～61 は大皿である。19～21 は口縁部が直線的に外側に開きながら立ち上がる。22・23 は口縁部の立ち上がりは低く、口縁端部は小さく屈曲する。62・63 は瓦器の浅鉢である。口縁部の 2 条の突帯の間に 62 は花菱文を印刻で、63 は唐草文を線刻で施す。64・65 は白磁である。64 の椀は内面に陽刻で草花文を施す。65 は小型の椀である。66 は明代染付の皿底部。高台は斜めに面取りされ、畳付にわずかに砂が付着する。高台内まで全面施釉する。67～70 は龍泉窯系の青磁。67～69 は椀の底部、70 は大型の杯である。65・68 は高台内を施釉しない。69 は高台内面まで施釉する。71～74 は古瀬戸。71・72 は平椀。高台内は、71 には糸切り痕が顕著に残るが、72 はナデにより不明瞭である。72 は高台際のヘラケズリが粗く、内面には円形のトチン跡が残る。73・74 は卸皿。75 は備前焼の播鉢である。76 は丹波焼の鉢。内面は使用により滑らかになっている。播り目は認められない。

石垣 66 背面造成土（図 32、図版 76 77～115）ここでは 9・12～15 世紀代の土器類が層位に関係なく出土している。ただし、石垣 65 背面造成土と比べると 13～14 世紀の遺物の割合が高く、特に造成第 2 面礫敷の下層からは完形に近いものが出土する。

77～92 は土師器皿。ほとんどが 13・14 世紀代と思われる。93 は緑釉陶器の皿底部。内外面に丁寧なヘラミガキを施し、高台は貼り付けによる。東海産である。94 は須恵器の壺 M である。95 は灰釉系陶器。内面は底部を除き自然釉が掛かる。96・97 は瓦器椀。96 は樟葉型の椀で、口径に対して器高が高く、高台は付かない。内面のヘラミガキの幅は極めて細く 1 mm 未満である。森島編年Ⅳ－3 期である。97 は樟葉型の瓦器椀で、内面のヘラミガキはやや粗く、二次的な被熱を受けている。森島編年Ⅳ－3 期である。98 は瓦器の浅鉢。口縁部の 2 条の突帯の間に菱形文を印刻で施す。103・104 は青白磁。103 は合子の蓋である。天井部には放射状に細弁を陽刻で施す。104 は椀である。105・106 は白磁。105 は椀で森田編年のⅣ類である。106 は椀の底部で、内面には草花文を陽刻で施す。畳付けを除き全面施釉。107～110 は龍泉窯系の青磁。107 は皿。108 は椀で、やや細弁化した蓮弁を施す。110 の椀の内面底部には草花文を印刻で施す。釉調はやや粗く、畳付けと高台内には施釉しない。99 は古瀬戸の花瓶。外面に 4 条一単位の沈線を施し、鉄釉を施釉する。100 は古瀬戸の卸皿。外面底部付近まで灰釉を施釉する。101・102 は信楽焼の甕。受け口状を呈する口縁部は深い。城戸編年の KB 3 類である。111・112 は備前焼の播鉢。111 は 4 条一単位（幅 1.3 cm）、112 には 6 条一単位（幅 1.5 cm）の播目を施す。112 には胎土に長石を多く含む。備前焼Ⅲ期の後半である。113 は瓦器の播鉢。10 条一単位（幅 2 cm）の播目を施す。114・115 は東播系須恵器の捏鉢。いずれも内面は使用により滑らかになっている。114 が森田稔編年のⅢ期 2 段階、115 がⅢ期 3 段階である。

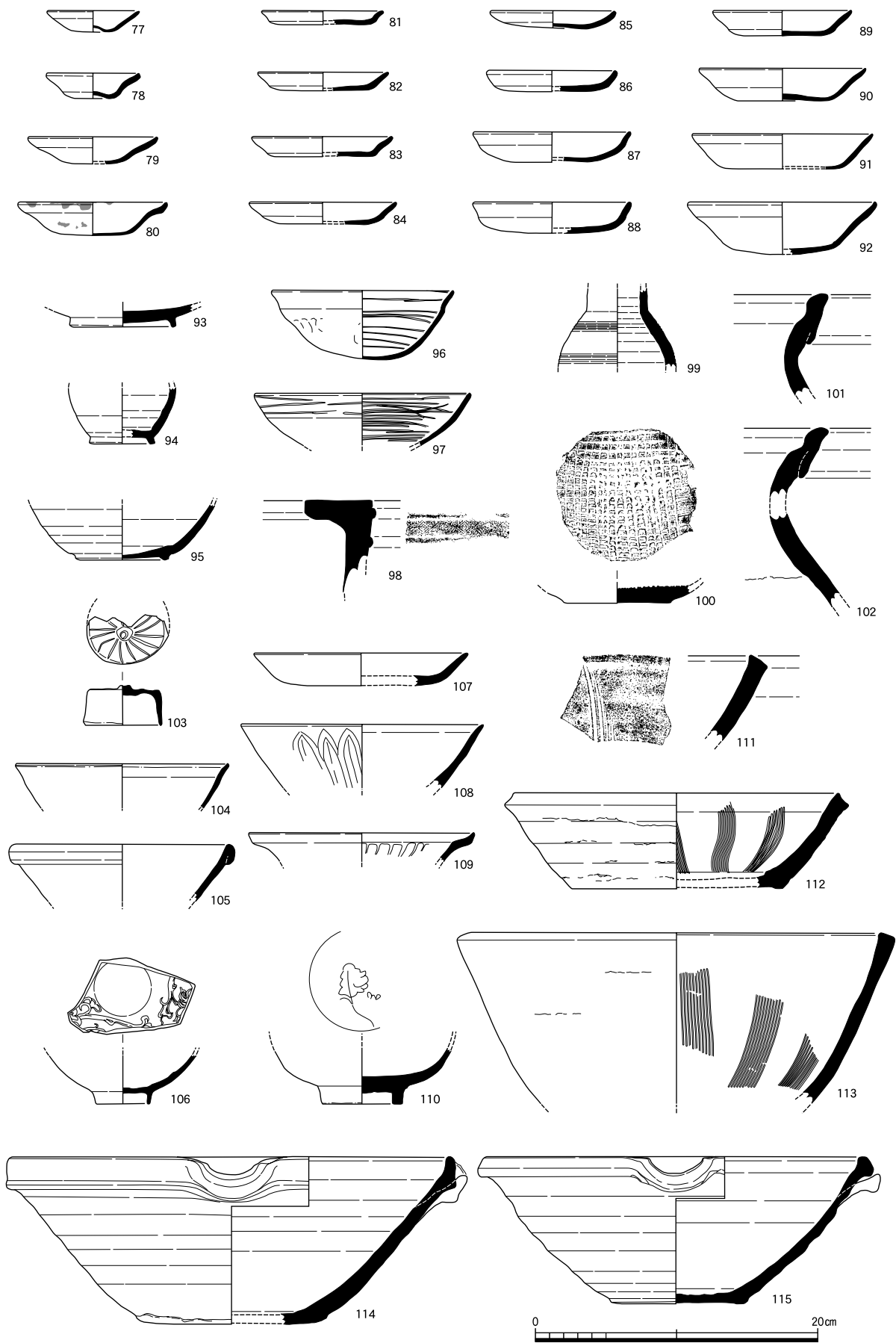


图 32 1 区石垣 66 背面造成出土土器实测图 (1 : 4)

土器溜 116 (図 33、図版 75 116 ~ 164) 室町時代後半の土師器皿が大量に出土している。重量にして約 53kg を測る。直径 12 cm の土師器皿が 1 枚の重量は 80g であり、仮にすべてがこの大きさだとすると 663 枚分に相当する。土師器の皿以外は出土していない。皿は、口径から小皿 (8.2 ~ 8.6 cm、116 ~ 139)・中皿 (12.0 ~ 13.4 cm、140 ~ 155)・大皿 (14.1 ~ 16.6 cm、156 ~ 163)・特大皿 (18.0 cm、164) の 4 つに分かれる。色調からは橙色系 (118 ~ 120、126 ~ 135、140 ~ 143、148 ~ 154、156 ~ 164)・白色系 (122 ~ 125、136 ~ 139、144 ~ 147、155)・赤色系 (116・117・121) の大きく 3 つに分かれ、橙色系が最も多く、赤色系は少ない。白色系は器壁が他のものに比べてやや厚く、胎土に砂粒も多く含まれる。

116 ~ 121 は口径 7.2 ~ 9.2 cm の小皿。器高は 0.8 ~ 1.7 cm と低い。口縁部が、直線的に外側に開く 116 ~ 118 と小さく屈曲する 119 ~ 121 がある。これらの土師器皿はこれ以外のものと形態が異なっており、時期的に異なる可能性もある。122 ~ 132 はヘソ皿。内面底部の突出は、色調が白色系の 122 ~ 125 は高いが、橙系の 126 ~ 132 はやや扁平である。133 ~ 139 は小皿。口径指数 (器高 / 口径) は、出土数の多い中皿と大皿で 0.19 前後である。

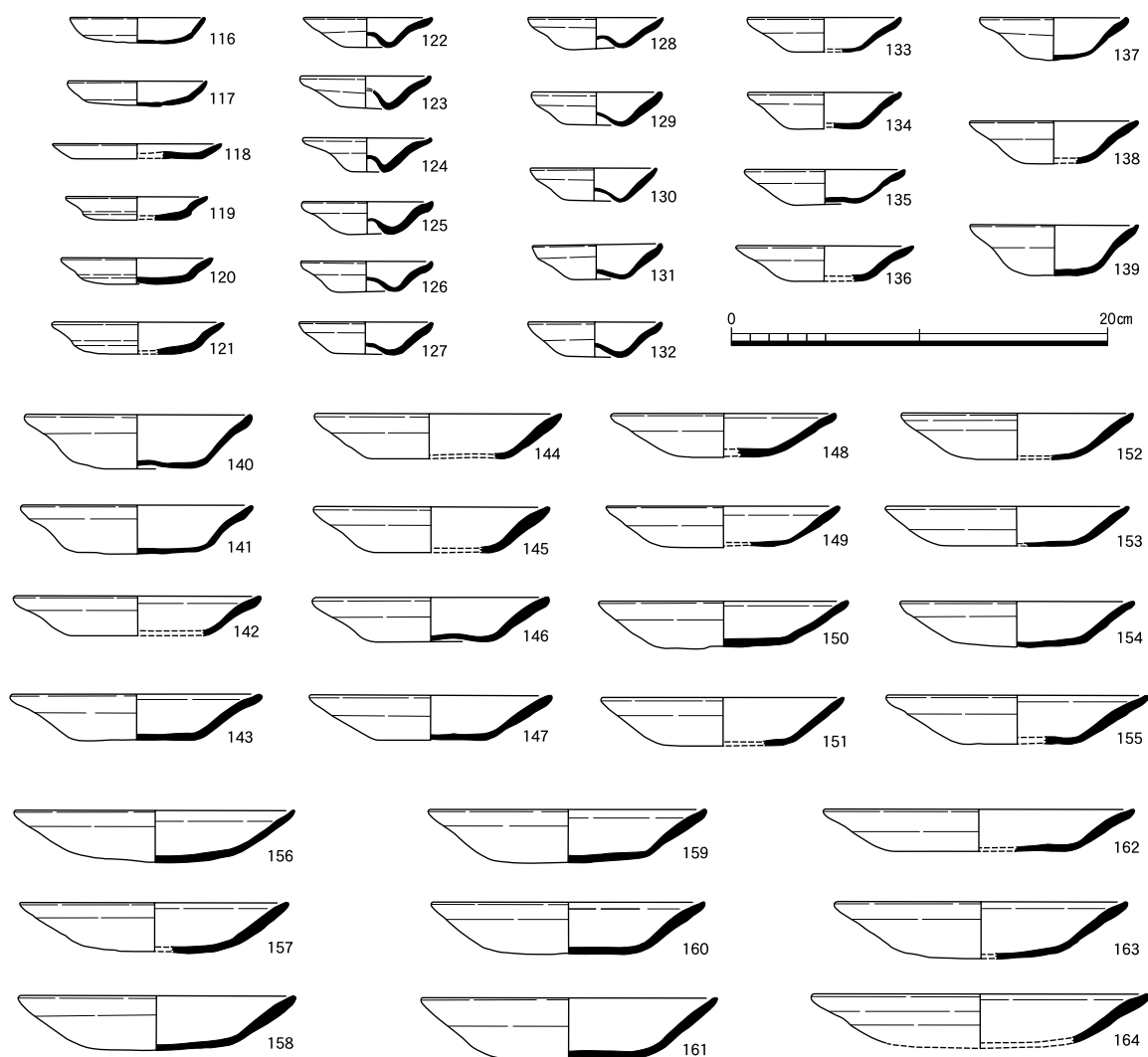


図 33 1 区土器溜 116 出土土器実測図 (1 : 4)

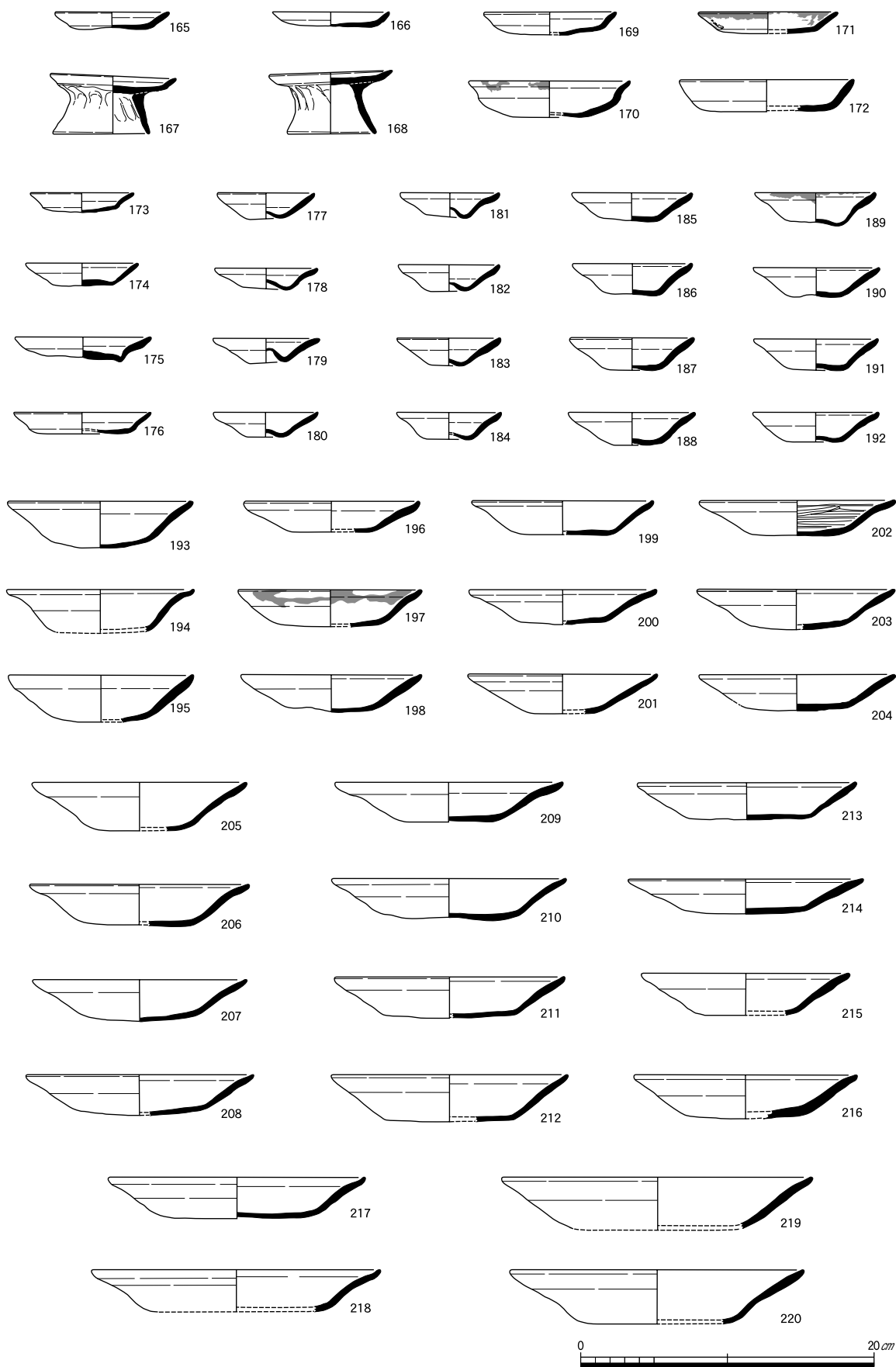


图 34 1 区断面 2 第 44 层出土土器实测图 1 (1 : 4)

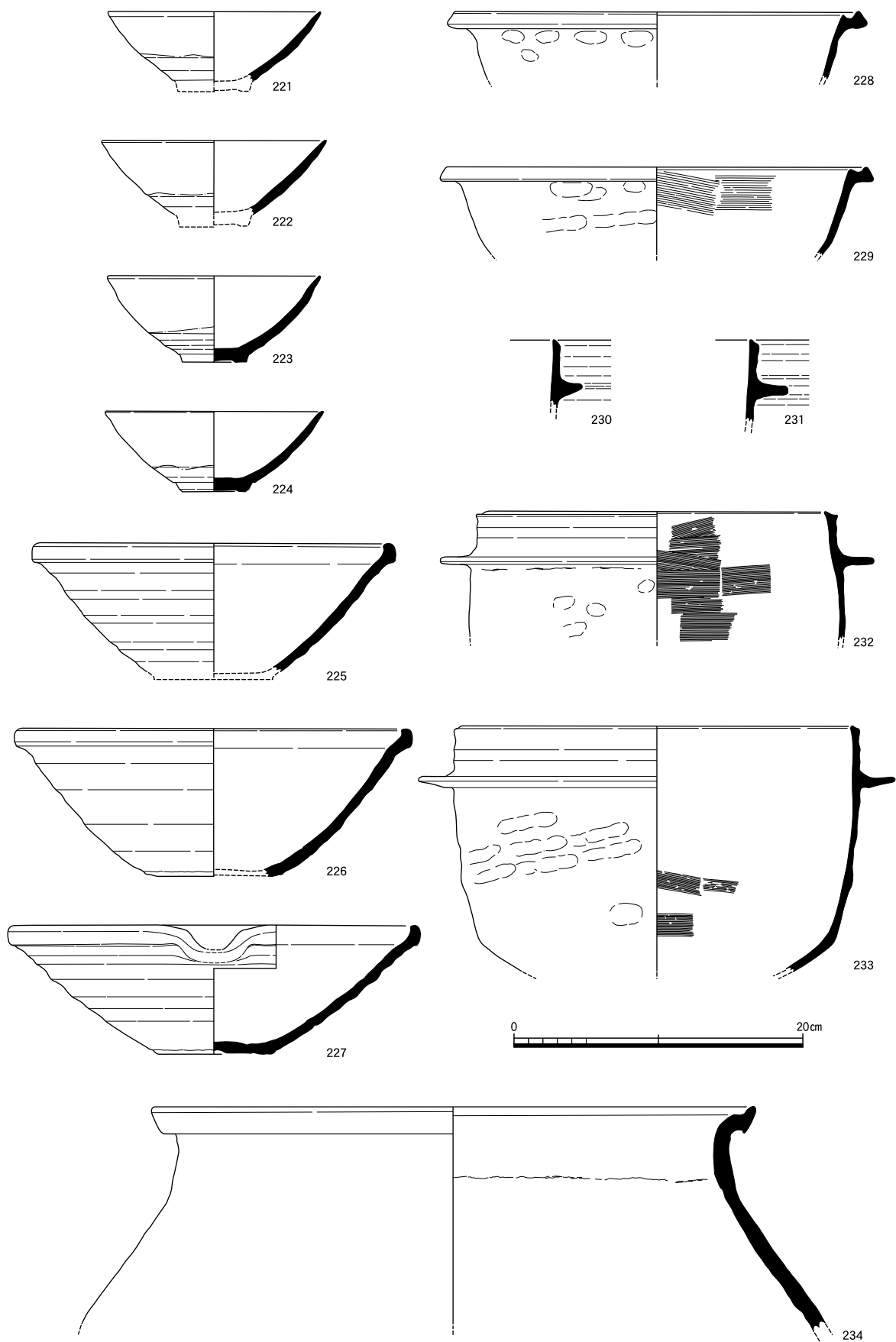


图 35 1区断面2第44层出土土器实测图2 (1:4)

140～155は口径が12.1～13.6 cmの中皿。140・141は中世京都から出土する赤系の土師器皿に形態が似る。142・143は赤系と白系の間形態である。144～155は白系に似るが、色調が白色系の144～147・155は、148～154の橙色系よりも器壁が厚く、口縁端部もシャープさに欠ける。

156～164は口径14.1～18.0 cmの大皿である。口縁部上半がほとんど外反しない156～161とやや外反する162～164がある。土器溜116出土の土師器皿は、中世京都出土の土師器皿と比較すると、器壁の厚さや胎土などは異なるが、形態的にはⅨ期新段階に相当する⁴⁾。

断面2第44層(図34・35、図版75 165～234) 鎌倉時代から室町時代の土器類が出土している。一定の時期幅がみられるが、土師器皿にはまとまりのある一群が認められる。

165～220は土師器の皿である。165～168・171・172は土師器小皿。165～168の器高は1.1～1.6 cmと低い。169・170は脚付き皿。165～172は形態から他の土師器皿とは时期的に古く、鎌倉時代から室町時代の前半とみられる。

173～176は器高が1.4～1.7 cmの土師器小皿。口縁部が強く屈曲するものが多く、形態的には中世京都から出土する赤系の土師器皿に近い。177～184はヘソ皿。185～192の小皿は口縁部が屈曲し器高は2.0～2.9と比較的高い。193～204は口径が12.3～13.6 cmの中皿。205～216は口径が14.2～16.2 cmの大皿。217～220は口径が17.6～21.2 cmの特大皿。口縁部が屈曲して端部が上方に向く217・218と口縁部が直線的に外に開く219・220がある。口径指数(器高/口径)は193～195・205が0.22～0.25、196～204・206～216は0.17～0.20となり、前者と後方で時期差があるとみられる。

1区断面2第44層出土の土師器皿は、土器溜116と比較すると、口縁端部の形状がやや異なるものもあるが、口径指数に差はなくほぼ同時期と考えられる。

221～224は瀬戸焼の平椀。223・224は体部が直線的に伸び、口縁部はわずかに外反する。高台の脇の削り込みは外側がやや深く、内側は浅く削り込む。225～227は東播系須恵器の捏鉢。口縁部は下方向への拡張が明瞭ではなく、肥厚気味に終わる。森田稔編年のⅢ期第2段階である。228～233は瓦器。228・229は鍋。口縁を屈曲させて作る受け部は小さい。230～233は羽釜。口縁端部は内側が高く尖り気味に仕上げられる。234は焼締陶器の甕である。口縁部の縁帯幅は2 cmと狭い。一見すると常滑焼であるが、口縁端部内側の受け口状を呈する部分に横ナデを施すことで窪みが生じており、胎土は緻密で長石を含み、断面の色調は灰色を呈する。これらは常滑焼の特徴とは異なっており、古い段階の信楽焼の可能性もある。

2区出土土器

2区では鎌倉時代から室町時代の土器類が出土している。

溝12(図36、図版77 235～243) 235は土師器皿。口縁部は丸みをもって低く立ち上がる。器壁はやや厚い。236～243は樟葉型瓦器椀。口径13.2～14.2 cm、器高4.2～4.6 cmを測る。ヘラミガキは幅が1.5 mm、外面には口縁部のみ施され、内面は間隔が開く。磨滅により内面底部の暗文は確認できるものはない。外面のヘラミガキは残るが法量などから、森島康雄編年Ⅲ期一2～3期と思われる。

溝12



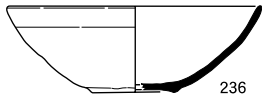
235



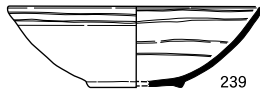
238



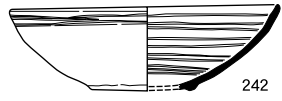
241



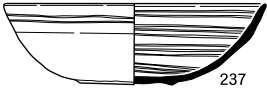
236



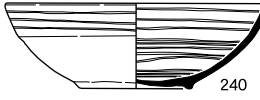
239



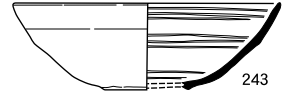
242



237

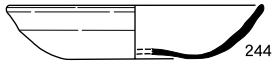


240



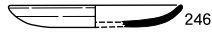
243

土坑90

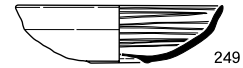


244

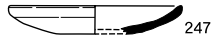
平坦面4 西边掘形



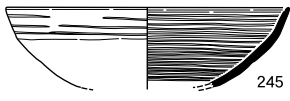
246



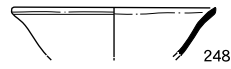
249



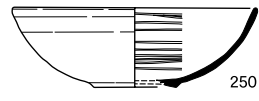
247



245



248

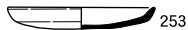


250

土器溜11



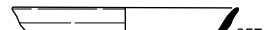
251



253



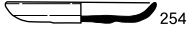
255



257



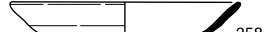
252



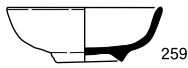
254



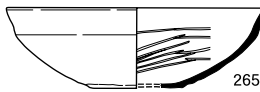
256



258



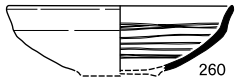
259



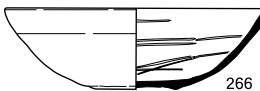
265



270



260



266



271



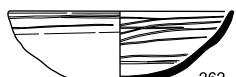
261



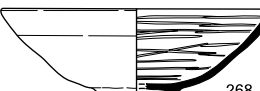
267



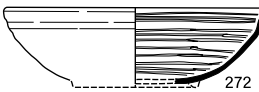
272



262



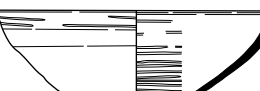
268



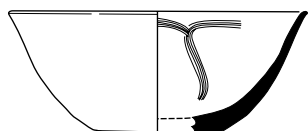
273



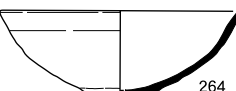
263



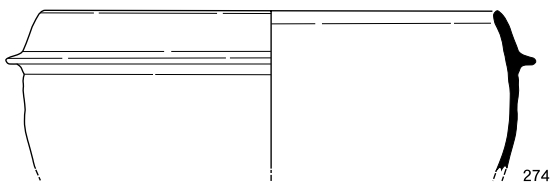
269



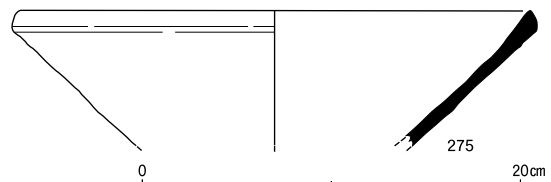
274



264



274

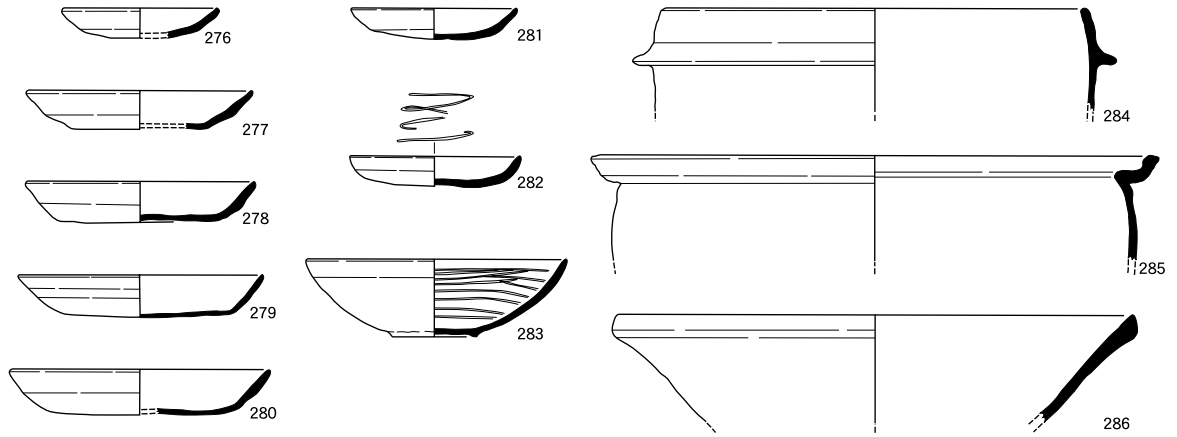


275

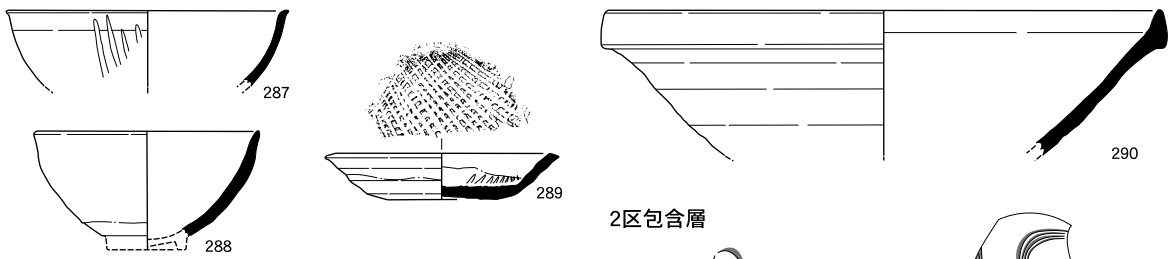
0 20cm

图36 2区溝12·土坑90·平坦面4西边掘形·土器溜11出土土器实测图(1:4)

2区土坑15



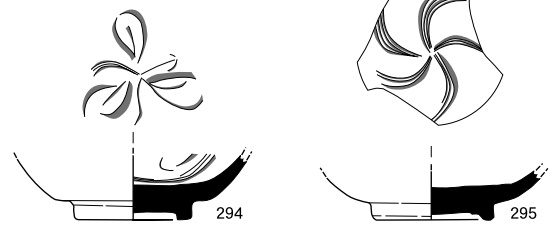
2区溝24



2区ピット58・43・28



2区包含層



3区

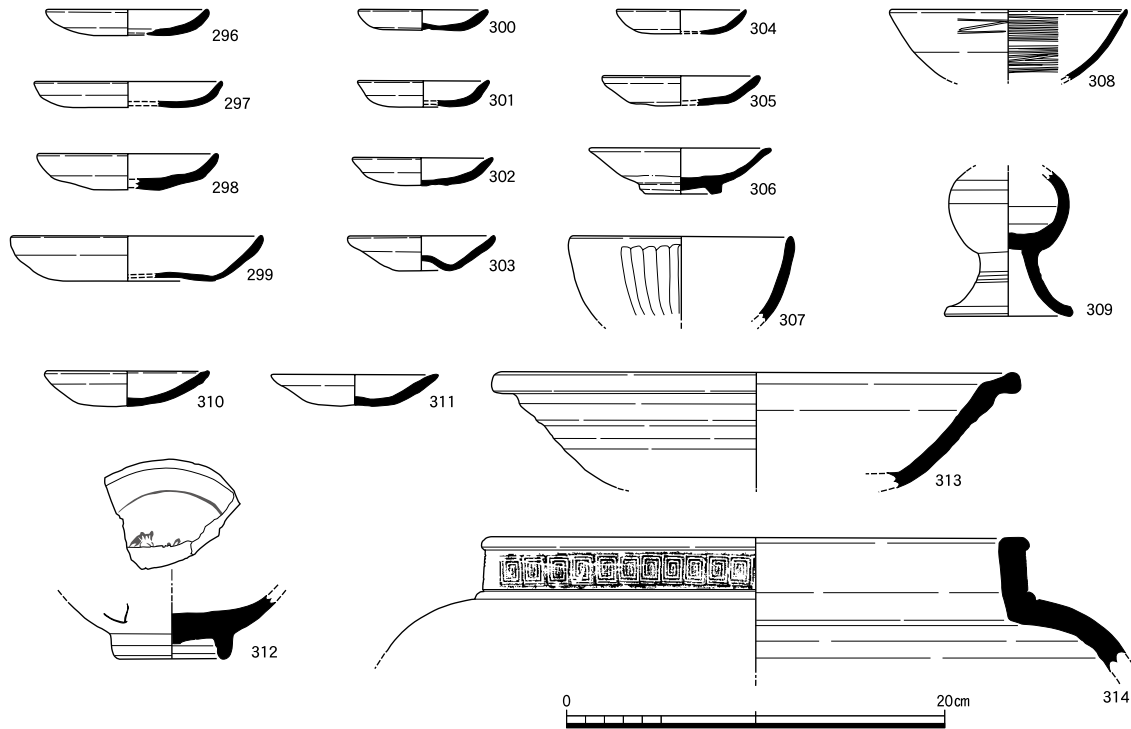


図 37 2区・3区出土土器実測図 (1 : 4)

土坑 90 (図 36 244・245) 244 は土師器皿。口縁部は丸みをもって立ち上がる。器壁はやや薄い。245 は瓦器碗。ヘラミガキは外面が磨滅により不明、内面はやや間隔が開く。

平坦面 4 西辺掘形 (図 36 246～250) いずれも平坦面西辺掘形の肩部埋土から出土した土器である。246・247 は土師器皿。口縁部は外側に開きながらわずかに立ち上がる。248 は青白磁の碗。249・250 は樟葉型瓦器碗。250 のヘラミガキは内面にのみ施され、幅は 1 mm 程度と細い。森島康雄編年Ⅳ期－1 期である。

土器溜 11 (図 36、図版 77 251～275) 251～258 は土師器皿。251 はコースター状を呈する小皿。252～256 は小皿。口縁部は丸みをもって低く立ち上がる。257 の口縁部は小さく外反し、258 の口縁部は直線的に外側に開く。259～272 は樟葉型瓦器碗。259 は小型の碗でヘラミガキは磨滅により不明である。260～264 は口径 12.6～12.8 cm、器高 3.6～4.4 cm を測る。ヘラミガキは幅 1 mm 弱と極めて細く、内面に間隔を開けて施される。森島康雄編年Ⅳ期－1 期である。265～271 は口径 13.0～13.6 cm、器高 4.2～5.1 cm を測る。ヘラミガキは幅 1 mm 程度、内面にやや間隔を開けて施される。森島康雄編年Ⅲ期－2～3 期である。273 は同安窯系青磁碗。274 は瓦器羽釜。275 は東播系須恵器の捏鉢。森田稔編年Ⅱ期第 2 段階である。

土坑 15 (図 37、図版 77 276～286) 276～281 は土師器皿。いずれも口縁部は外側に開きながら立ち上がる。281 の器壁は 2.5 mm と薄い。282～285 は瓦器。283 は樟葉型の瓦器碗。ヘラミガキは幅 1 mm と細く、間隔を開けて螺旋状に施す。森島康雄編年Ⅲ期－3 期である。286 は東播系須恵器の捏鉢。森田稔編年Ⅱ期第 2 段階である。

溝 24 (図 37、図版 77 287～290) 287 は同安窯系青磁の碗である。288・289 は古瀬戸。288 は天目碗、289 は卸皿である。290 は東播系須恵器の捏鉢。森田稔編年Ⅲ期第 1 段階である。

ピット 28・43・58 (図 37 291～293) 291 はピット 58 から出土した青白磁の碗。292・293 は樟葉型瓦器碗。いずれも森島康雄編年Ⅲ期－3 期である。292 はピット 43 から、293 はピット 28 からの出土。

包含層 (図 37、図版 77 294・295) 294・295 は 2 区遺構検出中に出土した青磁。294 は龍泉窯系青磁碗。内面底部に片切りで花文を施す。295 は同安窯系青磁碗。内面底部に櫛描きで渦巻き状の文様を施す。

3 区出土土器

列石 309 (図 37 296～299) 296 は瓦器の皿である。297～299 は土師器の皿。口縁部は外側に開きながら丸味を持って立ち上がる。

集石 327 (図 37 300～302) 300～302 は土師器の小皿。いずれも口径 7 cm 前後で口縁部は外側に開きながら立ち上がる。

井戸 196 (図 37 303) 井戸 196 からの出土遺物はきわめて少なく、図示できたのはヘソ皿が 1 点のみである。

ピット 233・301・304・320 (図 37 304・305・307・308) 304 はピット 233 出土の土師器の小皿。底部の器壁は 1 mm 程度と極めて薄い。305 はピット 301 出土の土師器の小皿。口縁部

は外側に開きながら直線的に立ち上がる。鎌倉時代後半とみられる。307はピット233出土の龍泉窯系青磁の椀。外面に細弁化した蓮弁を施す。器面には気泡が目立つ。308はピット304出土の瓦器椀。

土坑305(図37-306)白磁の皿が出土する。外面上半と内面に施釉するが、内面底部は輪状に掻きとっている。釉調・胎土ともに粗い。

土坑151(図37、図版77-309)古瀬戸の花瓶が出土する。脚部に2条の沈線を施す。施釉は認められず、焼成はやや軟質である。

溝342(図37-310～314)310・311は土師器の小皿である。口縁部は外側に開きながら直線的に立ち上がる。312は龍泉窯青磁の椀。内面底部に刻印で花文を施す。高台内側には施釉しない。313は古瀬戸の折縁の深皿。314は瓦器の風炉である。口縁部に雷文を施す。

墓163(図38、図版77-315)須恵器の短頸壺である。蔵骨器として使用されたものである。やや扁平な球形の胴部に短い頸部が付く。肩部から体部中位にかけて自然釉が掛かるが、口縁部には付着しない。高台は貼り付け高台。高台内側は丁寧なナデ。畳付けには長さ2～3cmの粘土塊が貼り付く。東海産。時期は8世紀末と考えられる。

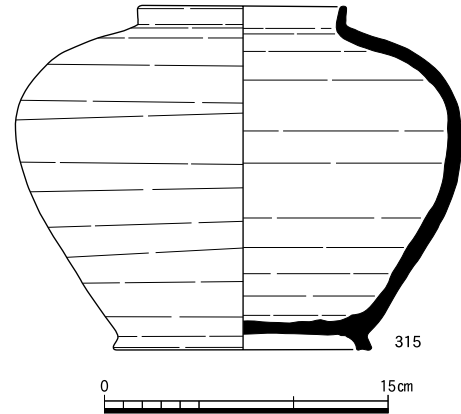


図38 墓163出土蔵骨器実測図(1:4)

2. 瓦類

瓦類は調査区の各所から出土している。量的にはそれ程多くなく、軒丸瓦は9点、軒平瓦は14点、平瓦は376点、丸瓦は132点である。軒丸瓦・軒平瓦は時期的には、平安時代後期から鎌倉時代初頭と鎌倉時代後半から室町時代の2つの時期に限られる。石垣が構築された15世紀代の瓦類は出土していない。平瓦は布目やタタキ痕跡が残るものは少なく、凹凸面は丁寧なナデが施されるものが多し鎌倉時代でも初頭以降のものが多いとみられる。

軒丸瓦(図39、図版78-316～324)軒丸瓦は8種9点出土している。文様の内訳は蓮華文が1点(316)、連珠を持たない巴文が2点(317・318)、連珠を持つ巴文が6点である(319～324)である。時代別では316～318が平安時代後期から鎌倉時代初頭、319～324が鎌倉時代後期から室町時代初頭である。

316は単弁8弁蓮華文軒丸瓦。中房の連子は1+6。瓦当裏面には指で押えた痕跡が明瞭に残る。胎土には3mm前後の白色粒を多く含む。山城産。317は右巻きの巴文軒丸瓦。瓦当面中央に大きな筈キズがある。胎土には3mm前後の白・黒色粒を多く含む。平安時代後期。318は左巻きの巴文軒丸瓦。胎土には3mm前後の砂粒を多く含む。平安時代後期。319は左巻きの巴文軒丸瓦。胎土は精良で砂粒はほとんど含まない。320は左巻きの巴文軒丸瓦。瓦当面の傷みは激しい。胎土には1～3mmの白色粒を多く含む。321は左巻きの巴文軒丸瓦。巴は高く盛り上がる。胎土には1～3mmの白色粒・赤色粒を多く含む。322・323は同筈の右巻きの巴文軒丸瓦。巴の尾は長



図 39 軒丸瓦拓影・実測図（1：4）

く伸びるが圏線化しない。胎土には 3mm 前後の白・黒色粒を多く含む。324 は右巻きの巴文軒丸瓦。巴の尾は長く伸び圏線化する。胎土には砂粒がほとんど含まれない。

軒平瓦（図 40、図版 78 325～338） 軒平瓦は 9 種 14 点出土している。文様の内訳は唐草文が 6 点（325・326・335～338）、剣頭文が 4 点（327～330）、巴文が 4 点（331～324）である。時代別にみると 325～334 は平安時代後期から鎌倉時代初頭、335～338 は鎌倉時代後期から室町時代初頭である。平安時代後期から鎌倉時代初頭の軒平瓦はすべて山城産である。

325 は唐草文軒平瓦。瓦当成形は折り曲げ技法である。326 は唐草文軒平瓦。平瓦部凸面に横方向のゴザ状圧痕が残る。瓦当成形は折り曲げ技法である。327～330 は剣頭文軒平瓦。それ

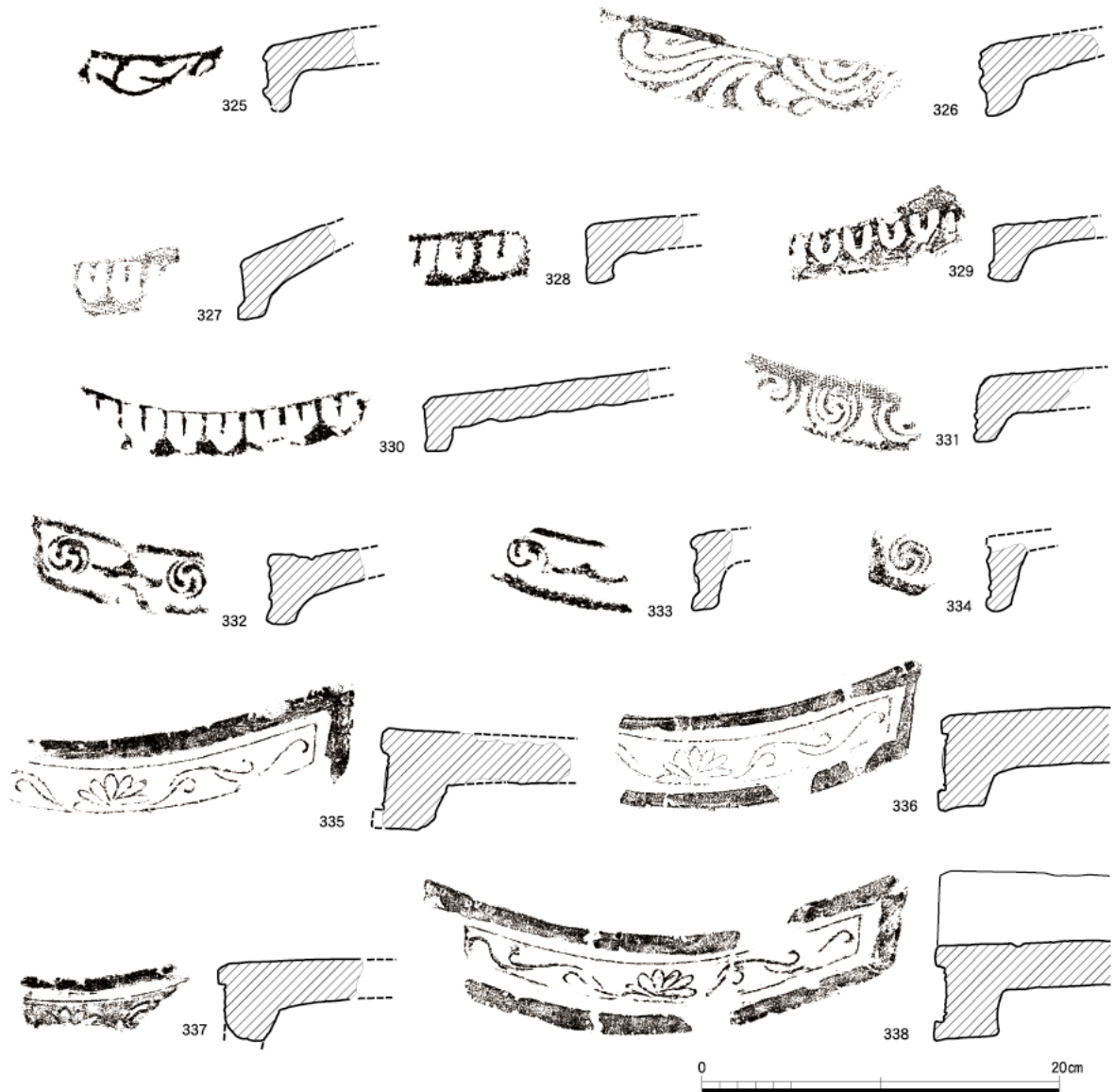


図40 軒平瓦拓影・実測図（1：4）

ぞれ異範である。瓦当成形はすべて折り曲げ技法である。327の平瓦部凹面には縦方向のゴザ状圧痕が残る。331は連巴文軒平瓦。瓦当成形は折り曲げ技法である。332～334は連巴文軒平瓦、同範瓦である。文様は巴文の間に雁行形が配される。瓦当成形はすべて折り曲げ技法である。335～338は唐草文軒平瓦。平瓦部の凹凸面は丁寧なナデが施される。瓦当成形は接合式である。

丸瓦・平瓦（図41 339～344）丸瓦・平瓦は平安時代と中世のものが出土している。それぞれの瓦の細かな時期は特定しがたいが、軒丸瓦・軒平瓦同様に平安時代後期から鎌倉時代初頭と鎌倉時代後半から室町時代の2つの時期に限られると思われる。

339は丸瓦。玉縁のやや下に径1.2cmの釘穴が穿たれる。胎土には砂粒がほとんど含まれない。340は丸瓦。凹面の上部に組み紐の痕跡が残る。胎土には砂粒がほとんど含まれない。341は平瓦。凹面に布目、凸面には縦方向の平行タタキ痕が残る。胎土には砂粒がほとんど含まれない。342は平瓦。凹面はヘラ状工具による斜め方向にナデを施すが布目が残る。凸面はヘラ状工具による

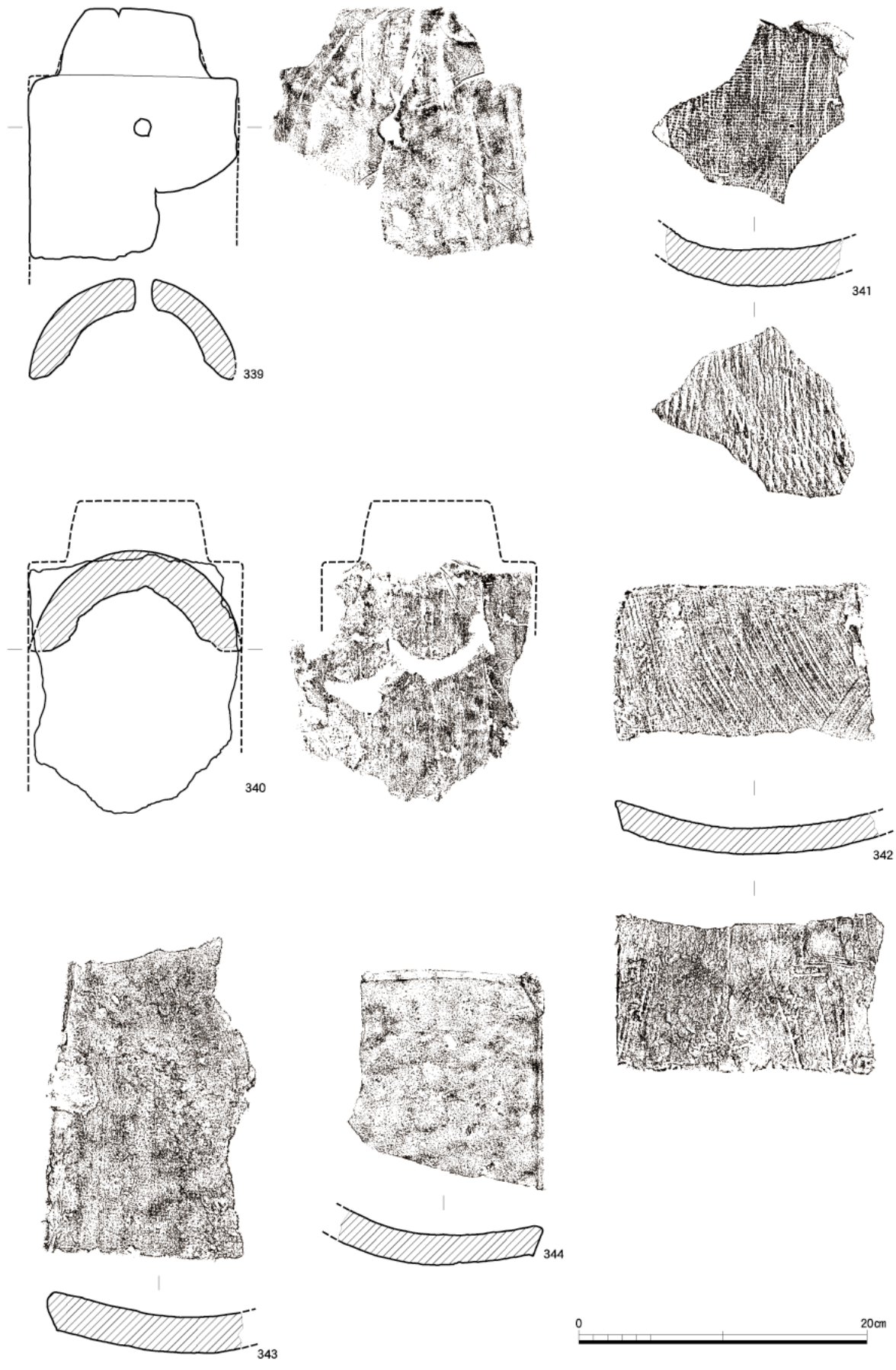


图 41 丸瓦・平瓦拓影・实测图 (1 : 4)

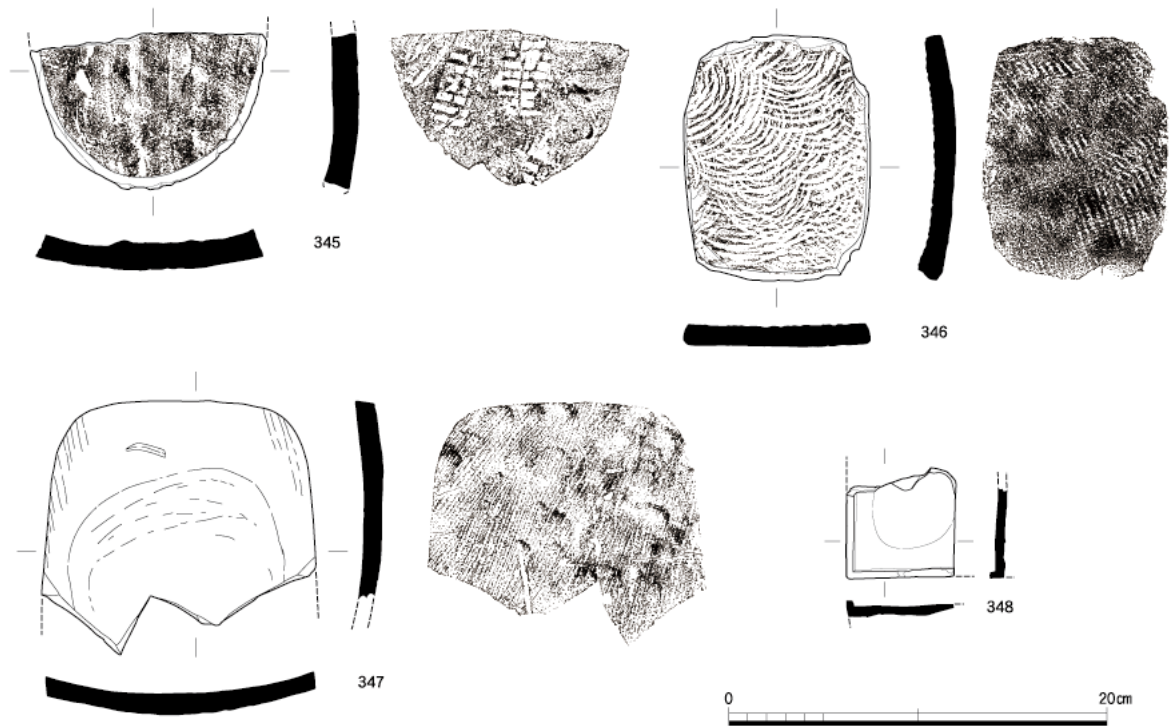


図 42 硯実測図（1：4）

縦方向の粗いナデを施す。胎土には砂粒がほとんど含まれない。343 は平瓦。凹凸面はヘラ状工具によるナデを施す。胎土には砂粒がほとんど含まれない。344 は平瓦。凹面の端面は面取りを施す。凹凸面はナデを施す。凸面には離れ砂が残る。胎土には砂粒がほとんど含まれない。

3. 硯（図 42、図版 79）

硯は石製と須恵器・焼締陶器の甕体部の転用硯が出土している。転用硯は形態が猿面硯に近く、内面を使用面としている。使用痕跡のあるものとないものがある。

345 は常滑焼の甕体部を転用した硯。端面は丁寧に打ち欠いて曲線を作っている。内面は甕製作時のナデ痕跡が明瞭であり、使用された痕跡はない。製作途中で破損して廃棄されたものの可能性がある。346 は須恵器の甕体部を転用した硯。左右の両端面は、打ち欠いた後に滑らかに仕上げられている。内面は、甕製作時の当て具痕跡が残るが、硯として使用されており滑らかになっている。347 は焼締陶器の甕体部を転用した硯。端面は滑らかに仕上げられている。内面は、硯製作時の幅 5 mm の斜め方向の削り痕跡が全面に残る。内面中央部はわずかに窪む。348 は石製の硯。上部と左半部は欠損し裏面は剥離する。

4. 石製品（図 43・44、図版 79・80）

硯以外の石製品には基石・石鍋・砥石・五輪塔などがある。

349 は基石。全体によく研磨されている。色調は黒色。350～354 は砥石。350・351 は粘板岩、これ以外は砂岩である。350・351 は仕上砥、352 は中砥、353・354 は荒砥である。354 は石

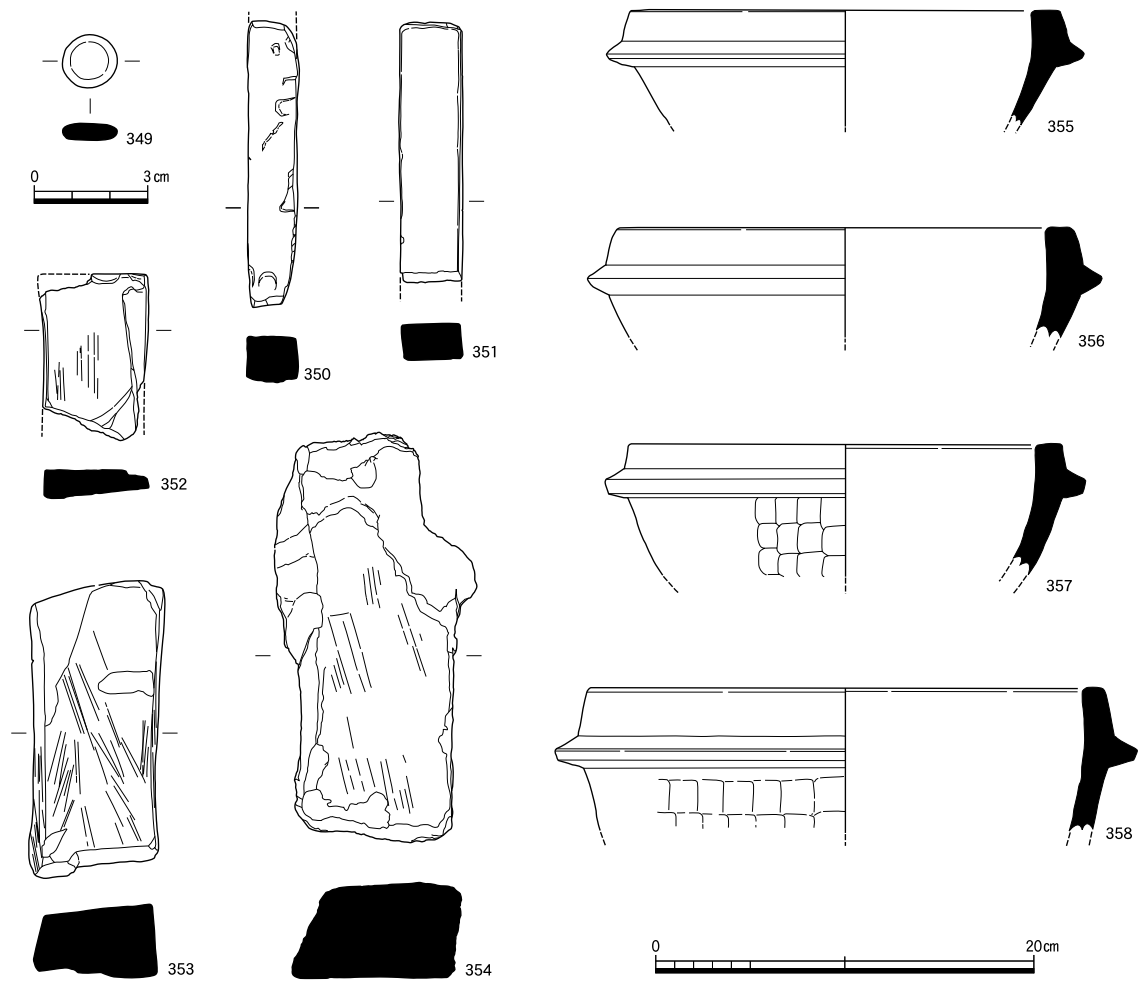


図43 石製品実測図（1：4）

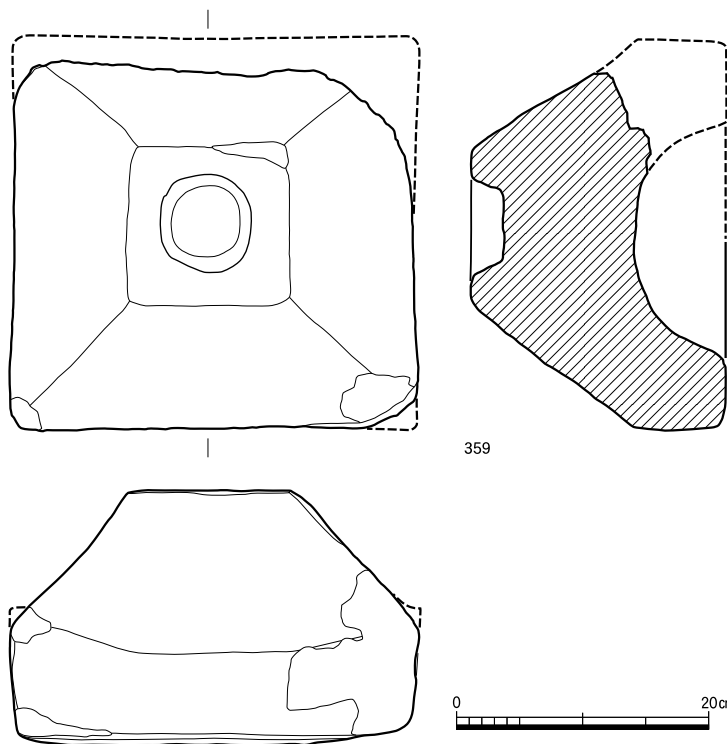


図44 五輪塔実測図（1：6）

質が特に荒い。355～358は滑石制石鍋。鏝の断面形が三角形を呈する355・356と台形を呈する357・358がある。

359は五輪塔の火輪部。花崗岩製。縁辺部は幅があり緩やかな曲線を描く。室町時代のもと思われる。

5. 金属製品・銭貨

（図45、図版80）

金属製品は、釘、用途不明鉄製品、和鏡、椀形滓などが出土している。金属製品は184点が出土しているが、ほとんどが鉄

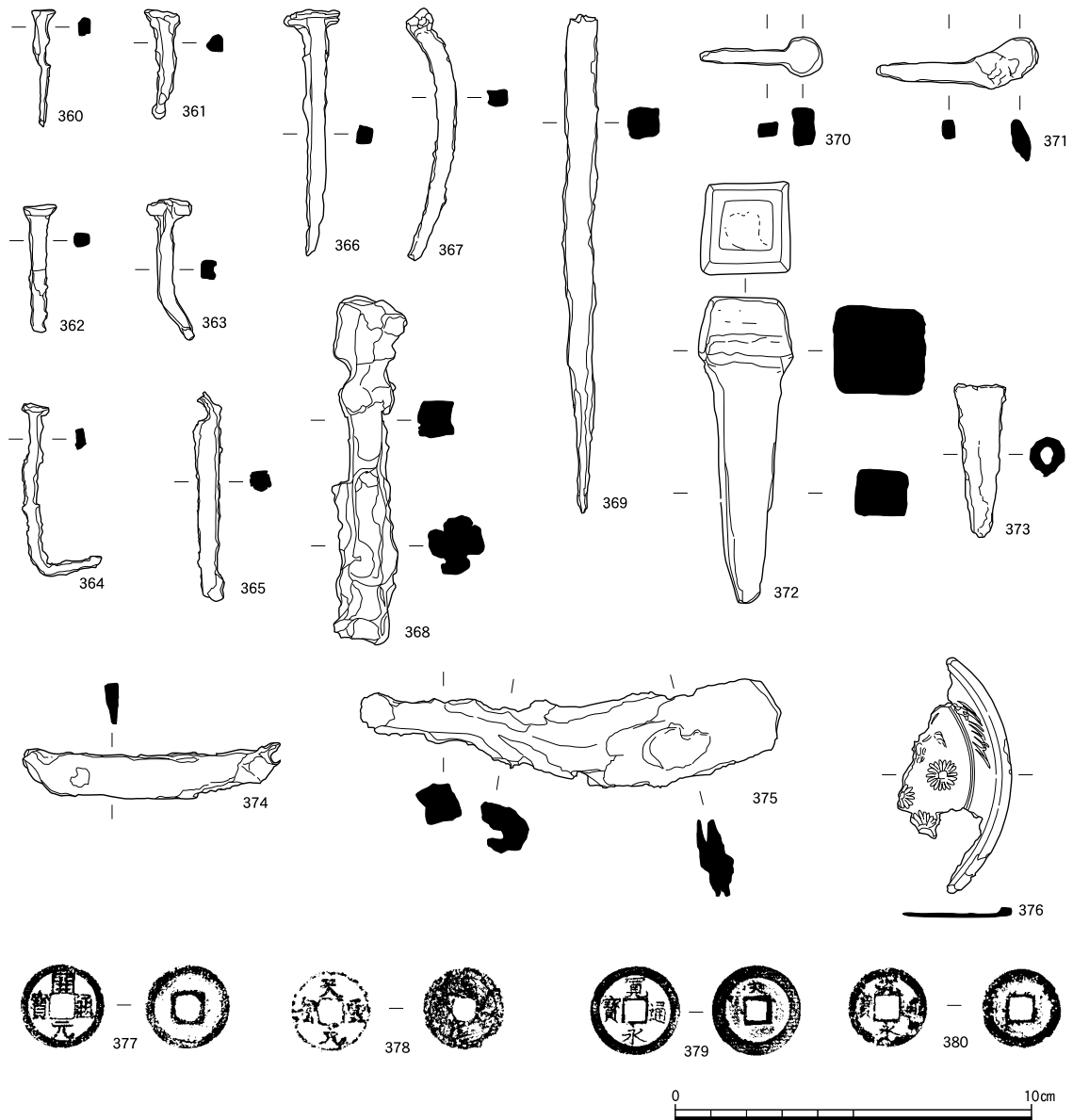


図45 金属製品実測図（1：2）

製品である。鉄製品のなかで最も多い釘は160点が出土しており、出土地点としては1区の石垣背面の造成土からが最も多く113点である。銭貨の出土数は少なく、小片を含めても10点に満たず、銭種を特定できるのは4点にすぎない。⁵⁾

360～369は釘である。頭部から胴部先端近くまで残るものに360・364・366・367がある。頭部が残る360～367はすべて折り曲げである。360は長さ3.3cm、胴部最大幅は4mmと細い。重量は1.0g。361～365は胴部最大幅5mm前後で、364は長さ6cmを測る。重量は361が1.4g、362が1.8g、363が2.4g、364が2.6g、365が4.9g。366は胴部最大幅5mm、長さ7cm、重量7.3gを測る。367は366に近い大きさである。重量は5.9g。368は胴部最大幅1cmを測る釘で、先端部は欠損する。重量は40.9g。369は幅9mmを測り、368のタイプの先端部の可能性がある。重量は41.6g。

370・371は肘壺である。370は長さ3.5cm、重量は2.5g、371は長さ4.5cm、重量は2.9g

を測る。小型の肘壺である。軸部の断面形は370が方形、371は扁平である。本来、頭部の中央には円形の穴が存在するが、肘壺とセットで使用される肘金の軸部が残っている為か穴は埋まっている。大きさからしおり戸などの軽い扉や厨子などの小型の扉に使用されたものと考えられる。

372は鑿。鉄製。長さ8.6 cm、頭部の径2.5 cm、重量は159.9 gを測る。形状は四角錐を呈する。鍛造で頭部には厚さ2 mmの鉄板を巻いている。寸法と形状から大型品の成形に用いる鑿と思われる。

373は石突。長さ4.2 cm、最大径1.5 cm、重量は8.9 gを測る。形状は円錐形を呈する。鍛造の薄板を巻いて成形し内部は空洞である。錫杖あるいは矢に用いられたものとみられる。

374は板状鉄製品。両端部は欠損する。残存長7.5 cm、厚さ0.4 cm、重量は7.4 gを測る。断面は三角形を呈する。

375はへら形鉄製品。軸部の端は欠損する。残存長11.7 cm、重量は51.0 gを測る。鍛造で軸部とへら部は一体で軸部は折り曲げて成形しており、その変換部では折り曲げた状態が観察できる。右手に持って使用した場合、形状から手前から前方への動き、あるいは左から右への動きが考えられる。

376は和鏡。菊花文と鳥の尾羽根の部分が残される。厚さ1 mm以下と極めて薄い。重量は5.4 g。菊花文はスタンプではなく刻みによって施文される。鳥の尾は比較的長く古い特徴を持つ。13世紀後半から14世紀前半の製品とみられる。

377～380は銭貨。377は開元通寶（初鑄845年）、378は天聖元寶（初鑄1023年）、379・380は寛永通寶。380は鉄製である。

381は椀形滓である。直径8 cm、厚さ4 cm、重さ210 gを測る。

第6節 まとめ

今回の発掘調査は、洛西小塩山山麓に位置する山林寺院、勝持寺の旧境内で行われたもので、調査面積が3,760 m²に及ぶ大規模調査となった。勝持寺は小塩山の麓、標高130～170 mに位置する天台宗の山林寺院である。縁起は必ずしも定かではないが、『日本紀略』仁寿元年二月一二条にみえる「大原寺」が勝持寺の前身と考えられる。『太平記』には佐々木道誉（京極高氏）が花見の宴を催した様子が描かれる。寺伝では足利尊氏の庇護を受け、子院の数は49を数えたと伝えられている。今回の発掘調査でもこの時期の遺構・遺物が主となる。勝持寺が所蔵する『勝持寺境内図』（寛永元年）では、参道沿いに多くの子院が存在した様子が描かれている。

今回の発掘調査でも、土地利用の様子が明らかになるのは、鎌倉時代に入ってからであり、さらに室町時代になると、遺構・遺物ともに量が飛躍的に伸びる。石垣の構築を伴う大規模な土木工事を行うなど、調査地の土地利用はピークを迎える。史料が伝えるように勝持寺の子院がこの地に存在した事が明らかとなった。以下では、調査地の土地利用の変遷を辿った後、1区の石垣構築を伴う造成過程を復元し、最後にその意義をまとめたい。

調査地の土地利用の変遷と子院区画の復元（図 46～48）

I 期（奈良時代・8世紀後半） この時期の遺構としては、調査区中央の標高 139.5 m の傾斜地で検出した火葬墓（墓 163）のみである。この遺構が、勝持寺あるいはその前身寺院と関係をもつかは明確ではない。時代は少し降るが平安時代の初頭、淳和天皇が崩御した際、火葬後に小塩山から散骨を行っている。長岡京や平安京の西方に位置するこの地には、天皇や貴族達から葬送の場所としての観念が存在した可能性も考えられる。

II 期（鎌倉時代・13世紀） 建物などを建てる為の平坦面が、尾根先端部や傾斜面に造成される。平坦面 1 は、東から西へ延びる尾根の先端部を掘削して造成された平坦面である。標高約 144 m。平坦面上では 13 世紀の土器類が出土する土坑 112 が検出された。平坦面 2～5 は、尾根裾部の標高 140～137 m 傾斜面を掘削することによって造成された平坦面である。それぞれの平坦面で 13 世紀代の遺構・遺物が検出された。平坦面 2・3 は他の平坦面と比較して規模が小さく、2 つの平坦面で一つの区画を形成していたものと考えられる。これ以外の平坦面 1・4・5 はそれぞれが独立した区画と考えられる。土地区画としては 4 つの区画が存在した事になり、いずれも子院として機能していたと思われる。また、平坦面 3 の南辺と平坦面 4 の北辺は、それぞれが 15 世紀に構築される区画施設である石塁 69 と並行しており、13 世紀からこの間に土地境界が存在したことがわかる。

平坦面 1～4 は参道に近く、これらの入口は参道に面していたと思われる。1 区北側の竹林には平坦面が参道まで続いており、平坦面 1 の北側延長部分とみられる。参道南側には、参道に沿って基底部に石垣を伴う土塁状の高まりが続いているが、約 2 m 途切れている部分がこの平坦面に接して存在する。参道から平坦面 1 への入口の遺構と考えられる。室町時代になると平坦面 1 には東面する門 122 が設けられるが、これ以降も参道からの出入り口は確保されていたのであろう。平坦面 5 は位置的に参道に入口を設けることはできない。寛永の絵図にも描かれている山門脇か

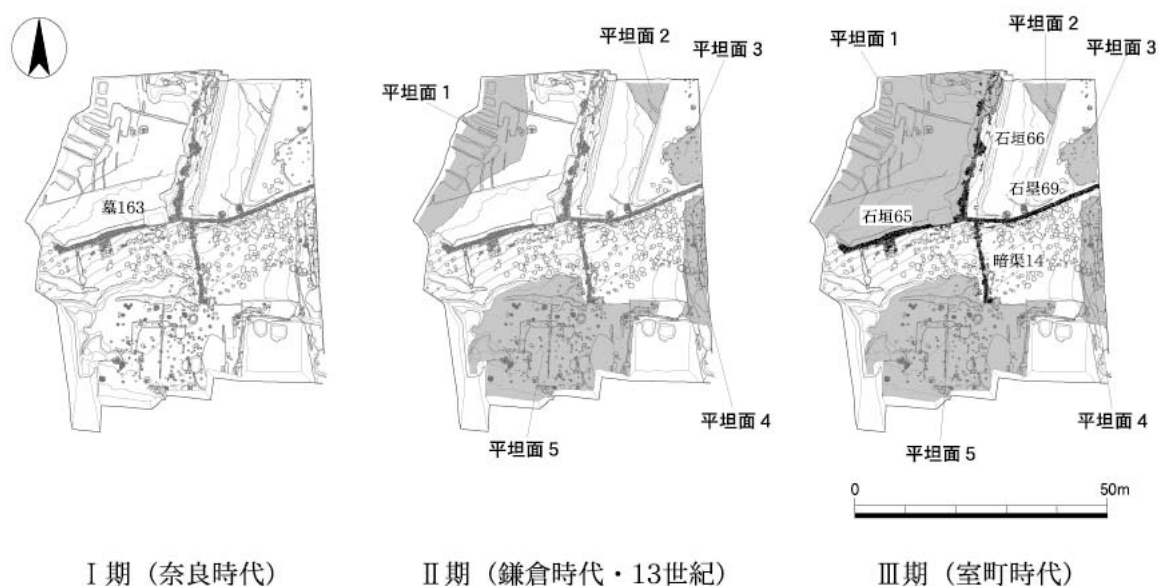


図 46 1～3区遺構変遷図（1：1,500）



図47 区画1～4位置図（1：2,000）

ら南西へ延びる小道は、現在も里道として竹林の中に残る。平坦面5はこの道に面して入口を設けていたものと思われる。

Ⅲ期（室町時代）江戸時代の削平が著しい平坦面2を除いて、各平坦面で遺構・遺物が検出される。

平坦面1では、尾根先端部の東側と南側斜面に造成土を盛り平坦面を拡張する。造成土の南辺には石垣65を、東辺には石垣66をそれぞれ構築して土留めを行う。造成土中からは、15世紀後半の土師器皿が大量廃棄された土器溜116が検出された。また、造成土下層（1区断面2第44層など）からも15世紀後半の土器類がまとまって出土しており、この時期に石垣構築を伴う造成が行われた事がわかる。平坦面1の検出された1区の北端には、門122と階段122が設けられる。門は東面し階段68は2区と1区を繋ぐ。この段階で平坦面2・3のある2区北半部と平坦面1のある1区は、一つの区画となった可能性がある。また、石垣65と66のコーナー部から東に向かって石塁69が構築される。これによって平坦面3と平坦面4の間の境界が明示化される。

各平坦面で検出される遺構・遺物は16世紀の前半までであり、この時期以降、勝持寺の子院は急速に衰退したようである。

以上のように、調査地での勝持寺子院は、13世紀に始まり15～16世紀前半にピークを迎えた。図47は、13～16世紀に存在した平坦区画（子院）を図示したものである。この区画の配置から、

山門と本寺を繋ぐ参道やそこから派生する枝道も、13世紀には設けられていたと考えられる。その事からすると勝持寺の子院は、13世紀代には山門と本寺の間で面的に展開していた可能性が高い。

1 区の 15 世紀造成過程の復元 (図 49)

1 区で確認された平坦面 1 の造成工事は、時期的には 13 世紀前半と 15 世紀後半の 2 つの時期に分かれる。13 世紀の造成は、東西方向に延



図 48 区画 1 入口推定地 (西から)

びる尾根の西先端部を掘削し平坦面にするものである。15 世紀後半の石垣構築を伴う造成工事は、この平坦面の拡張を行ったものである。造成土中では雨水処理・地崩れ防止の為に礫面列石・石垣構築など、当時の造成が綿密な計画に基づく複雑な工程を持って行われた事が窺えた。ここでは煩雑さを避けるため大きく 3 段階に分けて述べる。

第 1 段階 13 世紀に先端部が削平されている尾根の東斜面から西方向へ造成土を盛る。地形的に最も高い、尾根東斜面と南東斜面のコーナー部より北側から行っている。造成土がずれる事を防止する為、裾部には列石 406 などを配置する。また、南東斜面でも列石 403 を配置し一部で造成を開始する。この段階は、石垣 65 背面造成第 4 面及び石垣 66 背面造成第 2 面が相当する。

第 2 段階 南東斜面では張り出し 410 を土によって構築する。これの終了した後、尾根先端の東斜面と南東斜面のコーナー部から南東方向に向かって造成を行う。造成土の裾部には、列石 389 やその上部に石垣 127 を構築し土留めを行う。石垣 127 は造成工事の次の段階では造成土中に埋没する。石垣 65 基底部は、地形的に低い東端から高い西へ向かって一定の長さで構築される。列石 371 を伴う石垣 65 基礎部分もこの段階で構築される。この段階は、石垣 65 背面造成第 2・3 面および石垣 66 背面造成第 1 面が相当する。

第 3 段階 造成土は、南東斜面に構築した張り出し 410 から南東方向へ入れる。石垣 65 の構築は、石垣構築部分の造成土を掘削して行うのではない。先に石垣を一定の高さと距離で構築した後、その部分に対して造成土を入れている。石垣の裏込石の設置は、地形的に低くなる石垣 65 中央部より東側で入念に行われている。石垣 65 の構築終了後、天場石は土で覆われ露出しない。これは大きな石を用いない天場石の落下を防ぐ為と考えられる。この段階は、石垣 65 背面造成第 1 面が相当する。

『勝持寺境内図』との比定 (図 50～52、表 3)

勝持寺には江戸時代の初め寛永元年 (1624) に描かれた境内図が残されている。本寺や山門を定点として現況地形と比較した場合、全体の地形などはかなり正確に描かれている事がわかる。坊院名は、安養寺を除いてすべて「院 (坊) 跡」となっている。江戸時代の初めには本寺と安養寺を除いて子院はなくなっていた事がこの絵図からもわかる⁶⁾。現在、勝持寺の旧境内には、人工的に造成された子院跡とみられる多くの平坦面が存在する。江戸時代に描かれた境内図が、どの

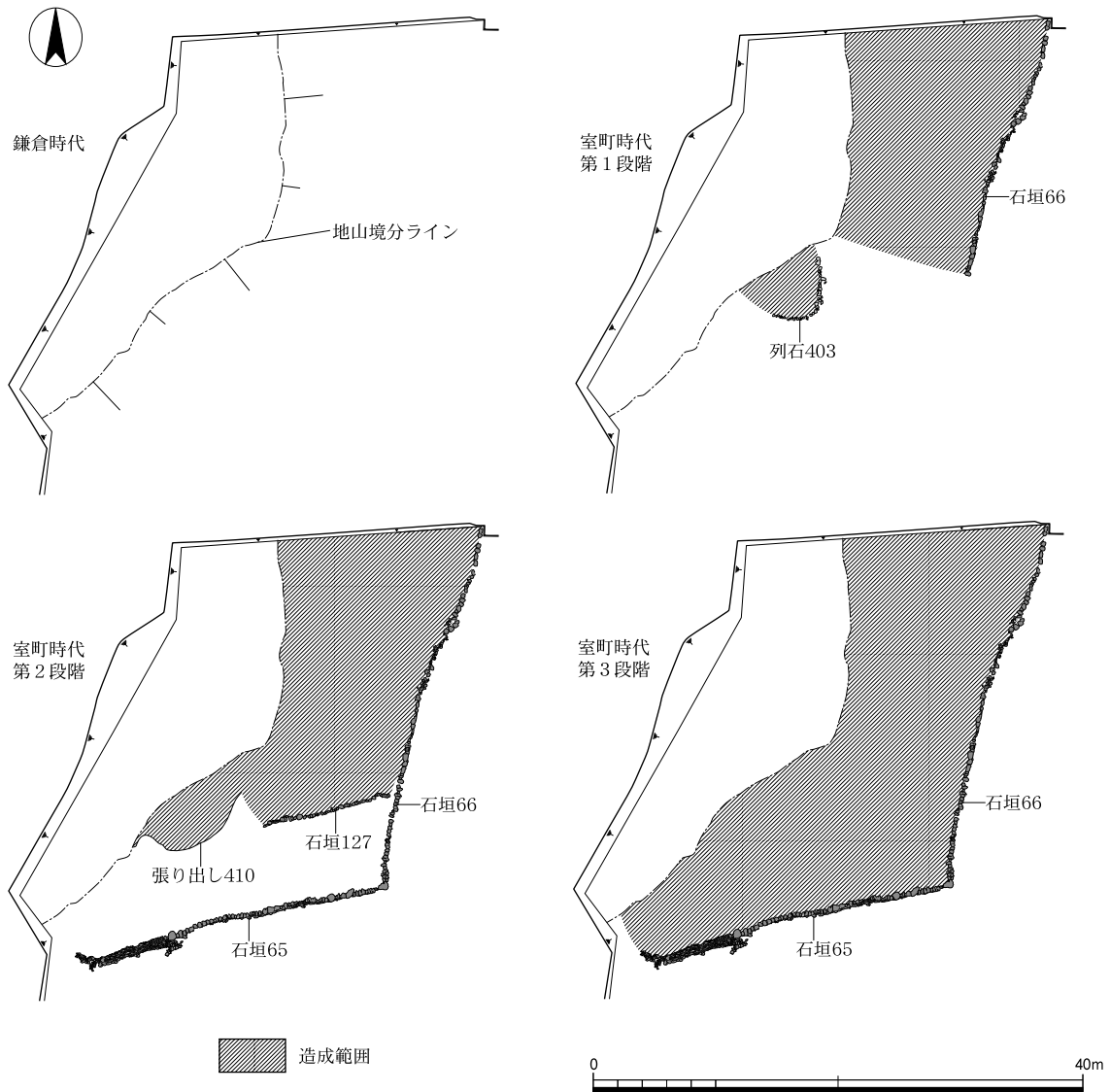


図 49 造成過程復元図 (1 : 600)

程度中世の勝持寺の姿を伝えているのかは検討する必要もある。しかし、絵図の描かれた坊院名は、その段階での伝承や記録をもとにした事は想像に難くなく、境内図と発掘調査成果・現況地形の比定は、一定の意味を持つと考える。

現在、勝持寺には地形の変化などによって区画される平坦面が10箇所⁷⁾で確認する事ができる。これらは子院跡と思われる、発掘調査で検出された4つの区画と合わせ14箇所となる。発掘調査で確認された区画1は絵図と坊院名を比定すると「阿弥陀坊」、区画4は「正行坊」となる。参道を挟んで北側の区画9は「岡之坊」、区画10は「浄瑠璃院」となる。区画9・10のそれぞれには、参道に面して方形に少し落ち込んだ部分がある。参道から子院への入口の痕跡とみられる。また区画9の北側には東西方向の石塁が残されている。本寺の北、辻和球場との間に位置する区画7は、絵図では「阿弥陀堂跡」「釈迦堂跡」「塔跡」と記されており、辻和球場を含め本寺の旧地であった可能性がある。現在も平坦面の裾部に石垣が残る。また、辻和球場の北側にも区画6の平坦面が残る。旧境内地域では中世の瓦が採集される。(図50-参2)の瓦が採集された区画13は境

内図には子院跡としては描かれていないが、これ以外にも複数の瓦が採集されており、子院の跡地である可能性が高い。区画5は、次章で述べるように、平成23年度の発掘調査によって子院跡である事が確認された。以上の事から勝持寺旧境内地は、北限が辻和球場北側の谷地形、南限は社家川、西限は小塩山裾部で、東限は区画10～12東側の南北道路付近と考えられる。南北約500m、東西約400mの範囲が想定される。

表3 区画・坊院名比定一覧表

区画名	調査区・遺構名	推定坊院名	備考
区画1	1区・平坦面1	阿弥陀坊	
区画2	2区・平坦面2、3	不明	
区画3	2区・平坦面4	不明	
区画4	3区・平坦面5	正行坊	
区画5	平成23年度調査7区	不明	
区画6		不明	
区画7		旧本寺か	
区画8		安養寺	
区画9		岡之坊	参道に面して門状地形 北側に石
区画10		浄瑠璃院	参道に面して門状地形
区画11		霊山坊	
区画12		不明	室町時代の瓦表採
区画13		不明	室町時代の瓦表採
区画14		不明	室町時代の瓦表採

石罫 69 について

石罫 69 は、2 区の北半部と南半部を分割する区画施設である。検出長 27 m、基底部幅 0.8 m、遺存高は北側で 0.8 m を測るが、基底部の幅などからすると、それほどの高さを持って構築されていたとは考え難く、本来の高さは 0.9 ～ 1.5 m 程度と考えられる。発掘調査においては、類似の遺構の検出例はほとんどない。絵巻物では 14 世紀の初頭に成立した『法然上人絵伝』『春日権現験記』に堂の区画施設として積石の石罫が描かれている。今回検出された石罫 69 とよく似る。文献史料においては、奈良の興福寺の子院である大乘院の造営記事の中に「石築地」という言葉が記されている。大乘院の石築地の規模は、長さ 70 丈 (210 m)、基底部幅 1 丈 (3.0 m)、高さ 6 尺と大規模なもの構築された事がわかる⁸⁾。また、『蒙古襲来絵図』に描かれるいわゆる元寇防塁も「石築地」と表現されている。このように中世における文献史料や絵画史料では、石を積み上げた区画施設を「石築地」と呼称していた事がわかる。14 世紀以降の史料に見られる「石築地」が寺院に伴うものである点も注目される。

石垣 65 について

石垣 65 は 15 世紀後半に構築されたもので長さ 26 m、高さ 2.5 m を測る。中世の石垣としては古い段階のもので規模も大きい。石垣の特徴としては以下の点があげられる。

1. 30 ～ 70 cm 程度の周辺から採取される自然石を用いる。
2. 石垣の下半部に裏込を持つ。
3. 積石はいわゆる縦使いにして、後ろ側を 20 ～ 30° 傾けながら積んでいく。上下の石が接する部分は広い。
4. 石垣の勾配は約 70° を基本とし、目地は縦・横ともに通らない。

石垣 65 は 16 世紀以降に城郭で構築される石垣と比較して、石が小さく強度は劣ると思われる。

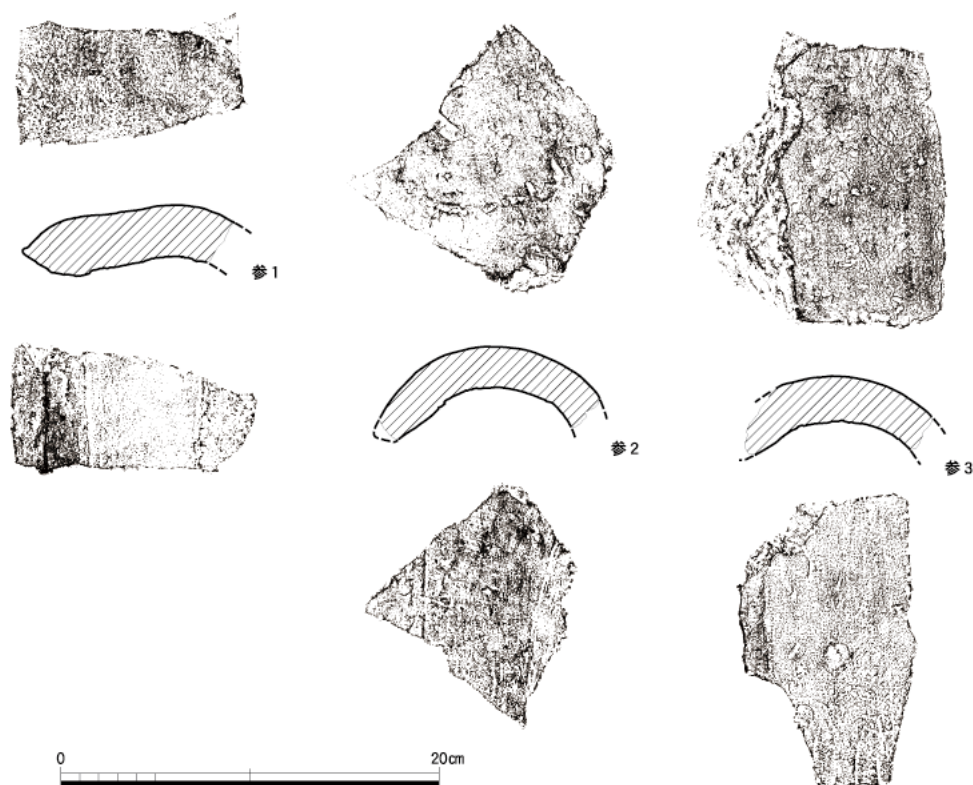


図 50 勝持寺採集瓦拓影・実測図（1：4）

石垣背面の造成土中に構築された石垣 127 や礫敷は、石垣 65 の脆弱性を補う為に造成土そのものの強度を高める必要性から施されたものと考えられる。

同時期の石垣として、福井県勝山市の平泉寺の子院跡（検出長数 100 m・高さ 1.2 ～ 2.5 m）、滋賀県米原市の能仁寺跡（検出長 14 m・高さ 1.5 m）、京都市の東山殿（銀閣寺）（検出長 20 m・高さ 2.4 m、2 段築成）、和歌山県岩出市の根来寺の子院跡（検出長 40 m・最大高 3.8 m）などがある。これらの遺跡で確認されている石垣の細部の特徴は異なっており、それがこの時期の石垣の在り方であったようである。

中世における史料上の最古の石垣は、天文 5 年（1536）の滋賀県観音寺城（近江守護職佐々木氏）の石垣普請記事である。この石垣普請に際しては、金剛輪寺（天台宗）の普請集団「西座」が深くかかわる事が知られている。また、足利義政による東山殿の「石蔵」構築時には延暦寺配下の「あなうもの」⁹⁾が関係したことが史料により知ることができる。

中世に建築を伴う大規模な土木工事は、山地または平地でも寺院が行うことが多く、この為、寺院内で土木技術が発達したと考えられる。武家がそのような工事を行う場合は、東山殿造営時の「あなうもの」の参加にみられるように、寺院側から技術者を借り受けられたと思われる。西山の山中には、善峰寺、三鈷寺、十輪寺、金蔵寺など創建が平安時代に遡る山林寺院が存在する。三鈷寺や金蔵寺の周辺には、今回発見された石垣とよく似た石垣が残されている所もあり、西山周辺には、在地の技術者集団がいた可能性もある。

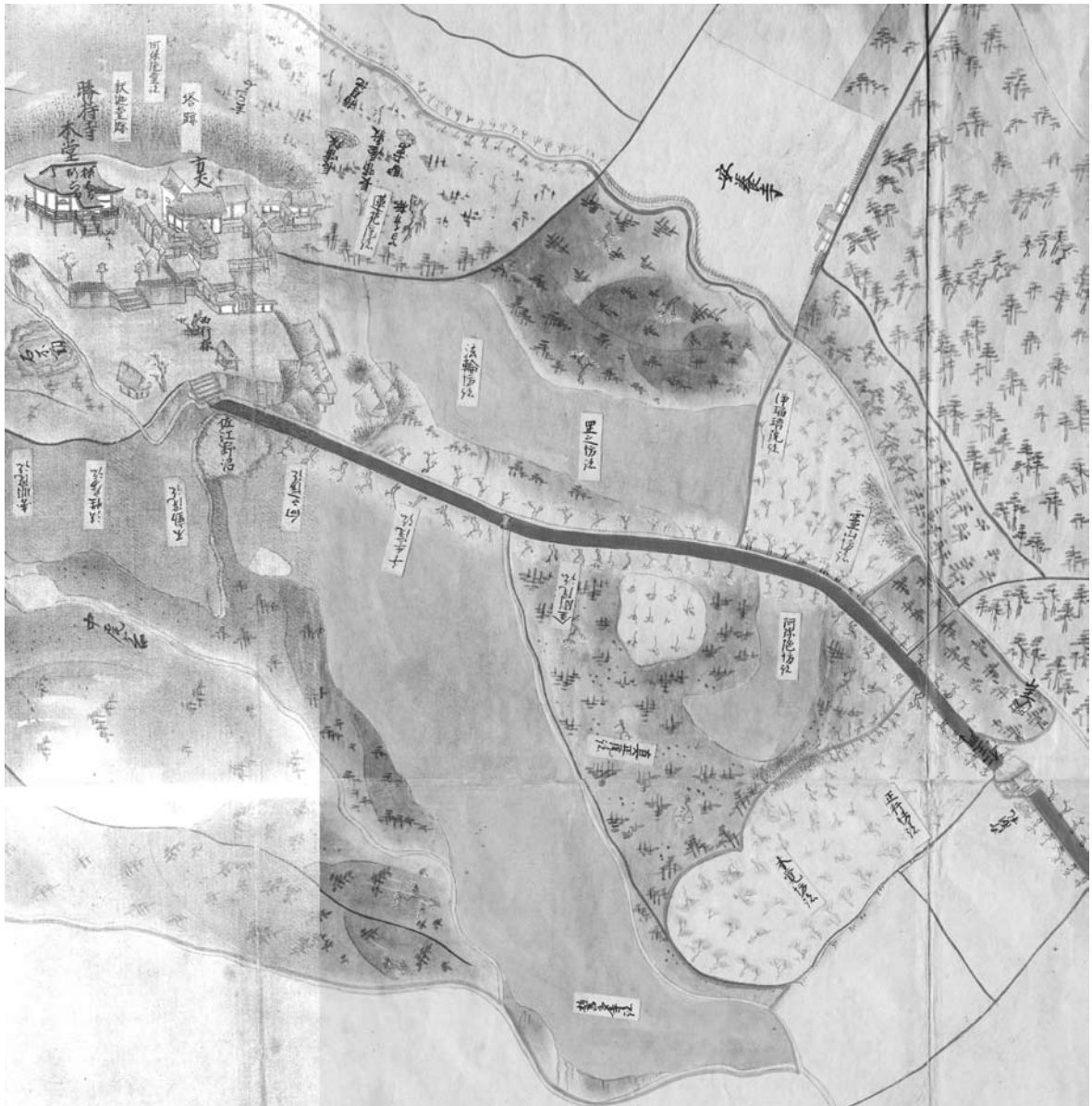


図 51 「勝持寺境内図」(寛永元年) 勝持寺所蔵

結語

今回の発掘調査によって、勝持寺子院群の展開が 13 世紀前半に始まり、15 世紀後半にピークを迎える事が確認された。同様の傾向は全国の中世山林寺院の調査でも確認されつつある¹⁰⁾。ただし、その背景は必ずしも明らかにはなっていない。勝持寺でも、この時期の寺の活動がどのようなものであったのか不明な点が多く、考古資料・文献史料を含めて今後の課題である。

これまでに行われた勝持寺周辺の発掘調査では、中・高位段丘の開発が 13 世紀から活発化し、耕地の整備とともに新たな集落も成立する事が明らかになっている。これらの集落は室町時代後半まで続く¹¹⁾。このように中世における勝持寺周辺の調査成果の時期的な画期と今回の勝持寺の調査成果とは符合する。寺院の動向が周辺地域と無関係であるとは考え難く、地域において寺院が果たした役割を捉えていく必要がある¹²⁾。

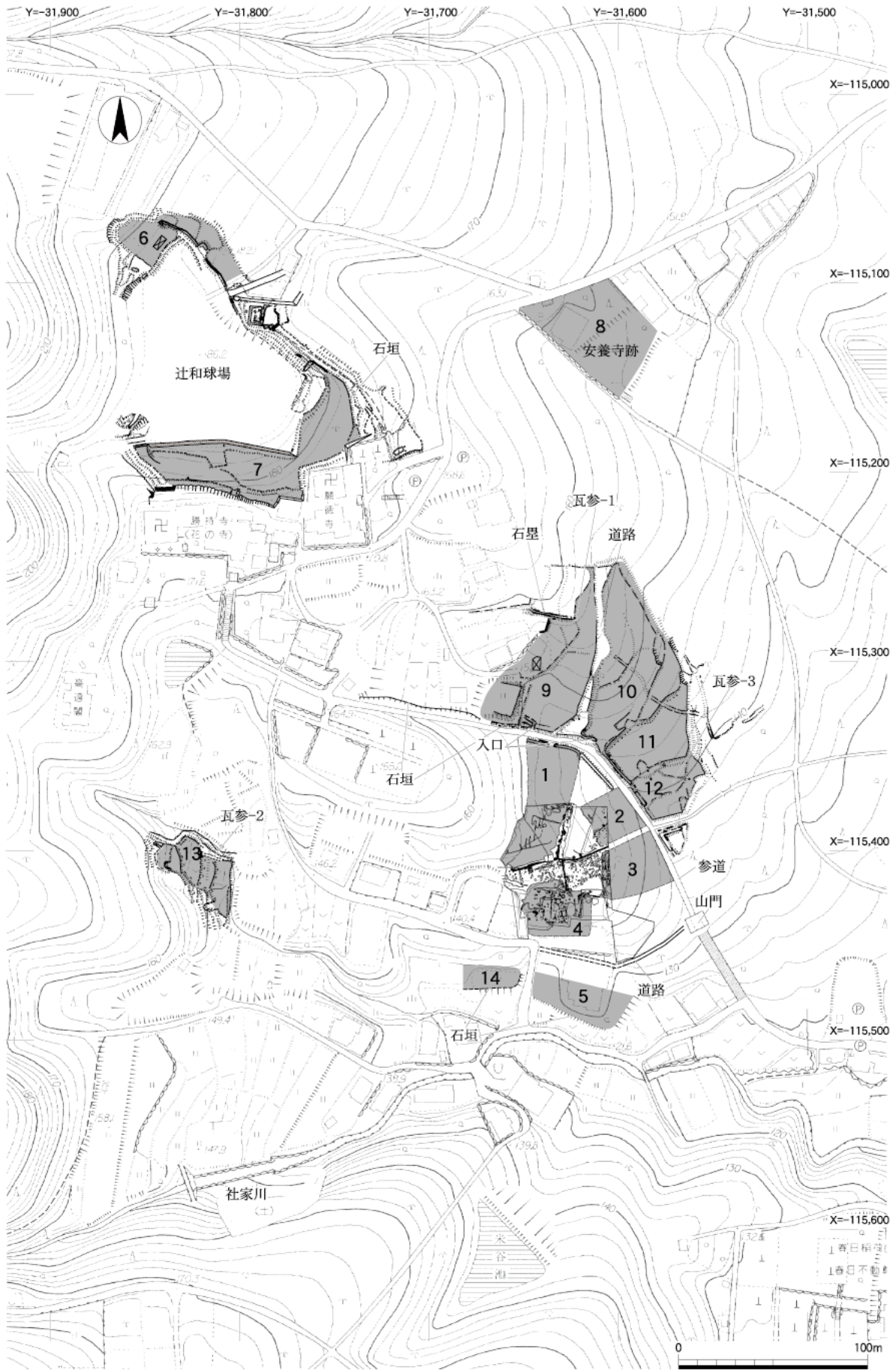


图 52 勝持寺子院復元図 (1 : 3,000)

註

- 1) 石材の鑑定はの橋本清一氏（山城郷土資料館）による。橋本氏によると石垣・石塁などに使用される石材は、「丹波帯の京都西山の断層崖下の崖錐中の崖から崩れた完全な角礫状のものと周辺の小河川から採取した河床礫を大量に採取したものである。」橋本氏からは石垣 65・66、階段 68、石塁 69 を構築する個々の石の大きさ・石材・円磨度・風化度、色調などを記した詳細なデータの提示を受けた。整理期間の関係などから十分に生かす事ができなかった。謝意とお詫びを申し上げる。
- 2) 礫敷きの機能については、西田一彦氏（関西大学名誉教授）、西形達明氏（関西大学都市システム工学部教授）から現地に於いて御教示を得た。記して謝意を表す。
- 3) 遺物の編年・時期は以下の文献を参考にした。

土器類のうち瓦器・施釉陶器・焼締陶器・輸入陶磁器などは (a) に依った。土師器は形態からみて乙訓地域独自のものと中世京都の都市遺跡から出土する土師器皿と類似するものがある。土師器皿に関しては (a) の他に乙訓地域独自の土師器皿については (b) を、京都土師器皿 (c) を参考にした。

 - a. 『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 1995 年
 - b. 山口 均「乙訓地域の中世土器（土師器皿）編年について」『向日市埋蔵文化財調査報告書第 71 集 長岡京跡 修理式遺跡・中海道遺跡』（財）向日市埋蔵文化財センター 2006 年
 - c. 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要 第 3 号』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996 年
- 4) 土師器皿の年代などに関しては平尾政幸氏にご教示を得た。
- 5) 金属器の用途、年代に関しては久保智康氏（京都国立博物館）のご教示を得た。
- 6) 現在、大原野神社南側にある正法寺は、元は勝持寺の子院の安養寺が移転したものと伝えられている。中村信容氏（勝持寺住職）のご教示による。
- 7) 図 51 の元図となった境内地平断面測量図は永恵裕和氏（京都大学大学院生）の作成による。
- 8) 岡本智子「「イシクラ」考—織豊期の石垣とその工人—」『織豊系城郭の成立と大和』2007 年
- 9) 『久守記』長享 2 年（1488）正月 17 日条
- 10) a. 笹生 衛「考古学からみた中世の寺院と堂—東国の事例と変遷を中心に—」『中世寺院 暴力と景観』2007 年
b. 『中世「山の寺」研究の最前線』「山の寺」科研総括シンポジウム資料 日本中世における「山の寺」（山岳研究都市）の基礎的研究 研究会編 2012 年
- 11) 南 孝雄「第 6 章 まとめ」『灰方窯跡・灰方の塚跡・南春日町片山遺跡・勝持寺旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-8 （財）京都市埋蔵文化財研究所 2010 年
- 12) 石垣 65 の調査は、15 世紀代に構築された大規模な石垣を解体しながら行うという、これまでに例のない調査となった。近世の石垣とは構造的に異なる点も多く、調査を進めながら戸惑う事も少なからずあった。このような調査を進めるに中で多くの方々から御助言・御教示を得た。中でも北垣聰一郎、中井均の両氏は幾度も調査中現地に足を運んで頂いた。この報告がそのようなご協力に出来るものかどうかは、はなはだ心もとないが、最後に改めて感謝の意を表したい。

第4章 平成23年度の調査

発掘調査は平成23年8月1日に5区から開始し、5区と並行して6区東部の仮設進入路調査を行った。この2箇所の調査終了後、6区西部の調査を開始した。その後、7区を開始したが、6区西部と7区は隣接し密接な遺構の状況を呈するため同時に調査を進めることとした。

各調査区とも、表土などは重機で掘削し、その後人力による調査を実施した。調査の進捗に従い、検出遺構については平面実測・断面実測・立面実測などで記録した。また、広域の調査区平面図および6区石垣平面・立面図ならびに主要な断面図については、オルソ測量を行った。写真撮影については、各調査区で全景写真撮影ならびに個別近景写真撮影を行っている。3次調査は、7区の終了を以て、平成23年11月30日に全調査を終了した。また、前述した石垣移築工事は、3次調査に併行して実施した。

3次調査では、調査区ごとに概要を述べる。6区仮設進入路区は、石垣の構築状態の調査が主体であり、6区で検出した石垣の東延長であることから、6区で概要を述べることとする。

第1節 5区の遺構

5区の現況は、ほぼ全体が竹林で、5区の北側は約1m以上高まり、2次調査で検出された石垣が東に向かって延長する。5区北半は東下がり平坦面であるが、南半には独立した状態の小高い丘陵がある。丘陵の南半は2次調査の4区に相当する。丘陵は調査区内のへ向かって下がり、平坦面へと続く。標高は、調査区南端で約137.6m、裾部で約135.5mある。調査区の北半は、北西から山門に向かって緩傾斜を呈し、標高は、北西隅で標高約136.6m、南東隅で標高約134.5mあり、約2m程の高低差がある。

1 基本層序（図53）

現地表から竹林表土・竹林造成土が厚さ0.1～0.4mある。調査区西側では、竹林造成土下に厚さ0.1～0.2mの盛土層があり、直下は地山となる。参道寄りには、平坦面を形成するため2～3層の盛土層で造成し、厚さ約0.6mに達する。盛土層掘り下げ中に、縄文時代の石鏃（図72-432）が1点出土した。盛土上面には、整地土層と考えられる土層が、溝90西肩口以西に遺存していた。整地土層下は地山となる。遺構検出面での標高は、北西隅で約136m、南東隅で約134mある。

表4 平成23年度調査遺構概要表

時代	遺構	備考
鎌倉時代 ～室町時代	5区：平坦面、溝、柱列、ピット、土坑	
	6区：石垣	
	7区：谷地形、柱列、ピット、土坑	

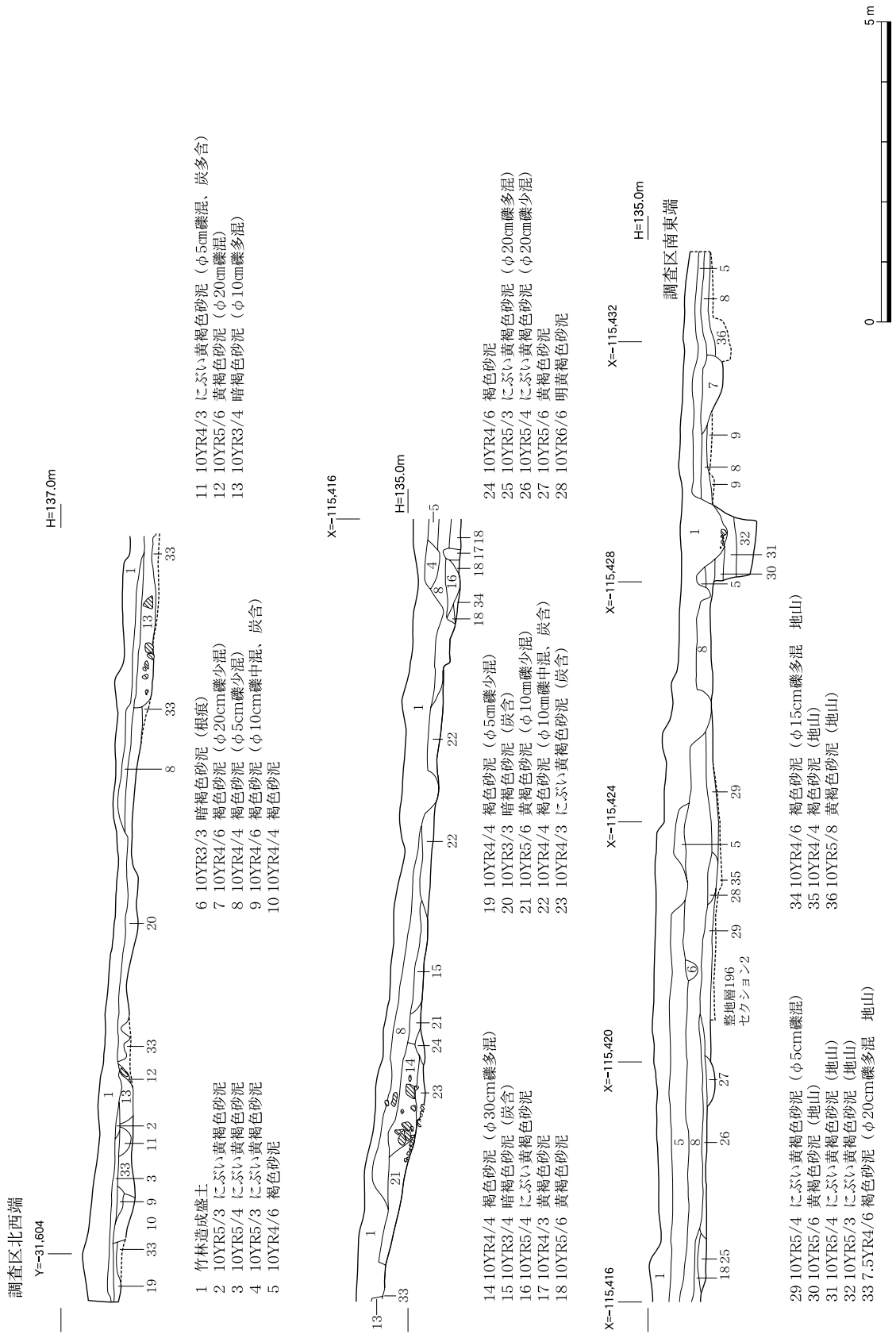


図 53 5区断面図 (1 : 100)



图 54 5区平面图 (1 : 200)

2 遺構 (図 54、図版 89)

遺構は整地土層ないし地山上面で検出した。造成平坦面・溝・柱穴・井戸・土坑などがある。図 54 に図示した遺構のうち、径 1 m 前後の楕円形を呈するものは、大半が竹根による攪乱坑である。

なお、平成 22 年度 2 区の平坦面 4 で検出した柱穴・ピットは、5 区に展開する可能性があることからここで概要を示す。

(1) 溝

溝は、調査区北端で溝 187 を、調査区北東部で溝 90 を検出した。

溝 90 (図 55、図版 89) 溝 90 は、北から南へ延長し、X=-115,420 付近で直角に東折する溝である。東へは調査区外へ延長する。北部は肩口が乱れる。延長方向は、約 N -12° - W 振れる。溝上部や西肩口に沿って北端から南へ約 9 m にわたり拳大の礫が集中する箇所がある。一部では礫を組み合わせる箇所があり、石組 171 としたが、大半は崩落した状態を呈する。また、東折する箇所でも東西約 4 m にわたり拳大の礫が集中する箇所がある。検出規模は、現存南北長約 15 m、現存東西長約 6 m、深さ約 0.5 m ある。遺物は土師器・須恵器系陶器・瓦器・輸入陶磁器・鉄釘などが出土したが、小片である。この溝に囲まれた範囲を平坦面 6 とした。

溝 187 (図 55) 溝 187 は、東西方向に延長する溝で、東へは調査区外へ延長する。西へは 2 区で検出された溝 25 に連続すると考えられる。延長方向は、溝 12 が N - 4° - W 振れるのに対し、E - 5° - S 振れ、内角は約 9° 鋭角となる。大半が井戸・土坑などによって削平を受け、部分的に遺存するに過ぎない。検出規模は、現存長約 13 m、深さ約 0.4 m ある。遺物は土師器・瓦器などが出土したが、小片である。遺構の分布状況からこの溝以南、X=-115,428 以北の範囲を平坦面 4 とした。

(2) 造成平坦面

造成平坦面は、2 面検出した。丘陵側の地山層を削り、東側へ盛ることで平坦面 4・6 を造成する。この平坦面は、一連の造成工程により造作され、全体で一つの区画と考える。

平坦面 4 (図 54) 平坦面 4 は、2 区南半部東端で検出した平坦面 4 の東延長部に相当する。平

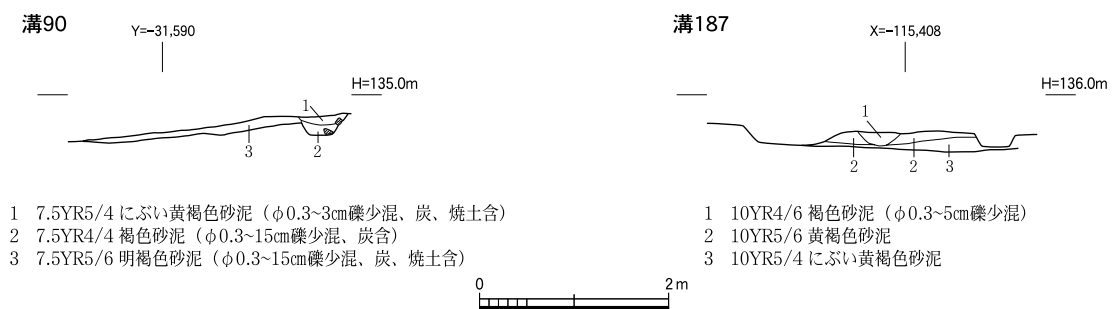


図 55 5 区溝 90・187 断面図 (1 : 80)

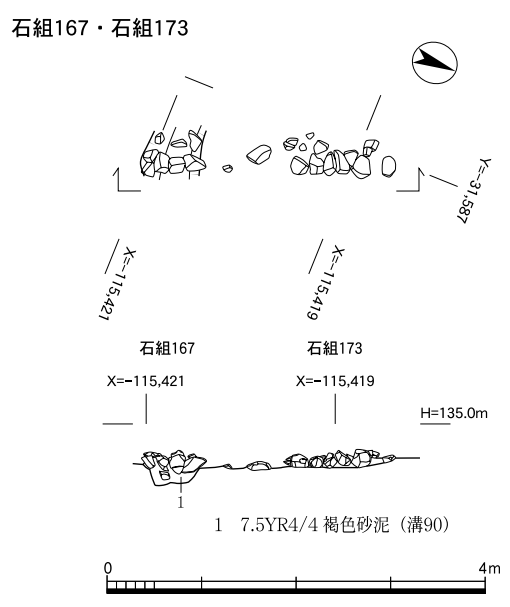
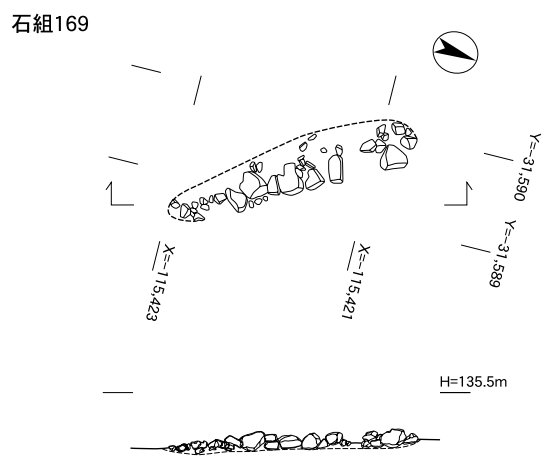
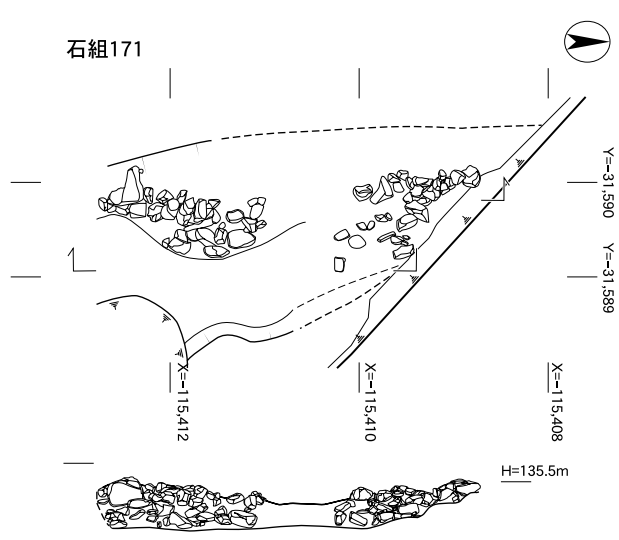


図 56 5区石組 167・169・171・173 断面図 (1 : 80)

平坦面 4 西肩口から東へ約 17 m の地点間の平坦面である。この東端で南北方向の溝 90 および礫積みで区画施設を敷設し低い段差を造り出している。整地土層とした土層は、整地層 197 と整地層 196 を検出した。1 ~ 2 cm 程度の小礫を多量に包含する土層で、当該地の地山からは検出しない土層であることから、人為的な整地土層であると考えられる。標高は、平坦面 4 の西端で約 136 m、溝 90 肩口で約 135 m あり、東に向かって緩傾斜を呈する。平坦面 4 のおおよその面積は、約 280 m² である。

平坦面 6 (図 54、図版 89) 平坦面 6 は溝 90 西肩口から東側に広がる平坦面である。標高は、溝 90 中央の東肩口で約 135 m、調査区東端で約 134 m あり、東に向かって緩傾斜を呈する。平坦面 5 上では顕著な遺構は未検出である。

(3) 石組

石組 167・173、石組 169、石組 171 を検出した。石を 1 段ないし数段重ねた、直線方向を示す石列遺構である。

石組 167・173 (図 56、図版 90) 石組 167・173 は、溝 90 の南西隅部で検出した。このうち、石組 167 は溝 90 の上面で検出している。長径 0.1 ~ 0.25 m の自然石を 1 段南北方向に組み合わせる。明瞭な掘形は持たず、石を据える程度の造作である。石組 167・173 の東面はほぼ南北方向に揃う。主軸方向は N -22° - W 振れる。石組 173 の現存長は約 0.7 m、高さ約 0.2 m である。石組 167 の現存長は約 1.2 m、高さ約 0.2 m である。

石組 169 (図 56、図版 90) 石組 169 は、

溝 90 の南西隅部の西側約 1 m の地点、溝 90 の西肩口に沿う位置で検出した。明瞭な掘形は見られない。長径 0.1 ～ 0.3 m の自然石を 1 段南北方向に組み合わせる。主軸方向は N - 15° - W 振れる。現存長は約 2.6 m、高さ約 0.2 m ある。

石組 171 (図 56) 石組 171 は、溝 90 の北部、溝西肩口に接した状態で検出した。当該地点では、北端から南へ約 10 m にわたり自然石が集中するが、その中で石組と考えられる南北方向に約 4 m 延長する部分を石列 171 とした。中央部は攪乱などで崩落する。長径 0.05 ～ 0.36 m の自然石を数段組み合わせる。主軸方向は N - 5° - W 振れる。現存長は約 4 m、高さ約 0.5 m ある。

石組 199 (図 59、図版 90) 土坑 199 は、調査区東端北部の溝 90 上面で検出した。南西半を検出したにとどまり、北東部は調査区外へ広がる。平面形は円形を呈すると考えられ、土坑内に 0.05 ～ 0.25 m の礫を円形に組む。検出面での現存規模は、径約 1.9 m、深さ約 0.4 m、石組み内径約 0.9 m ある。遺物は土師器、瓦器、中世須恵器、丸瓦・平瓦などが出土したが、小片で時期は不明である。

(4) 柱穴・小ピット

多くは北西部の造成平坦面 4 上で検出した。西端ならびに北端には複数の柱穴が並ぶ傾向があり、柱穴列 1 ～ 3 とした。この他、複数の柱穴・小ピットを検出しているが、建物などにまとまるものはない。また、単独で検出した柱穴 193・198 から遺物が出土しており、図示した。

柱穴列 1 (図 57) 柱穴列 1 は、調査区西端で検出した、平成 22 年度 2 区検出のものの東半である。北から柱穴 107 - 柱穴 35 - 柱穴 52 - 柱穴 29 - 柱穴 31 が南北に連続することから柱穴列 1 とした。検出位置は、2 区で検出された溝 25 の東肩口に接して、南北方向に延長する。柱間は一定ではない。各柱穴の平面形は、歪な円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、長軸 0.2 ～ 0.3 m、深さ 0.12 ～ 0.25 m、柱間 1.0 ～ 3.4 m ある。主軸方向は N - 3° - W 振れる。

柱穴列 2 (図 57) 柱穴列 2 は、溝 187 の南肩口に接して東西方向に延長する。西から柱穴 133 - 柱穴 132 - 柱穴 131 - 柱穴 183 - 柱穴 135 - 柱穴 144 - 柱穴 40 が東西方向に連続することから柱穴列 2 とした。柱間は一定ではない。各柱穴の平面形は、円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、長軸 0.25 ～ 0.8 m、深さ 0.05 ～ 0.28 m、柱間は 1.2 ～ 1.7 m ある。主軸方向はほぼ座標東を示す。

柱穴列 3 (図 57) 柱穴列 3 は、調査区北端の溝 187 の南肩口に接して、東西方向に延長する。西から柱穴 35 - 柱穴 16 - 柱穴 18 - 柱穴 174 - 柱穴 154 - 柱穴 176 が東西方向に連続することから柱穴列 3 とした。柱間は一定ではない。各柱穴の平面形は、円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、長軸 0.24 ～ 0.36 m、深さ 0.1 ～ 0.16 m、柱間 2.0 ～ 2.2 m ある。主軸方向は E - 4° - S 振れる。

柱穴 193 (図 57、図版 90) 調査区中央部で検出した小柱穴である。周辺に連続すると想定できる柱穴・ピットはない。平面形はほぼ円形を呈し、検出面での規模は径約 0.25 m、深さ 0.06 m ある。ほぼ中央部に底部を上にした状態で瓦器椀 (図 70 - 403) を 1 個体据えていた。

柱穴 198 (図 57、図版 90) 調査区中央北部で検出した小柱穴である。この柱穴も周辺に連続

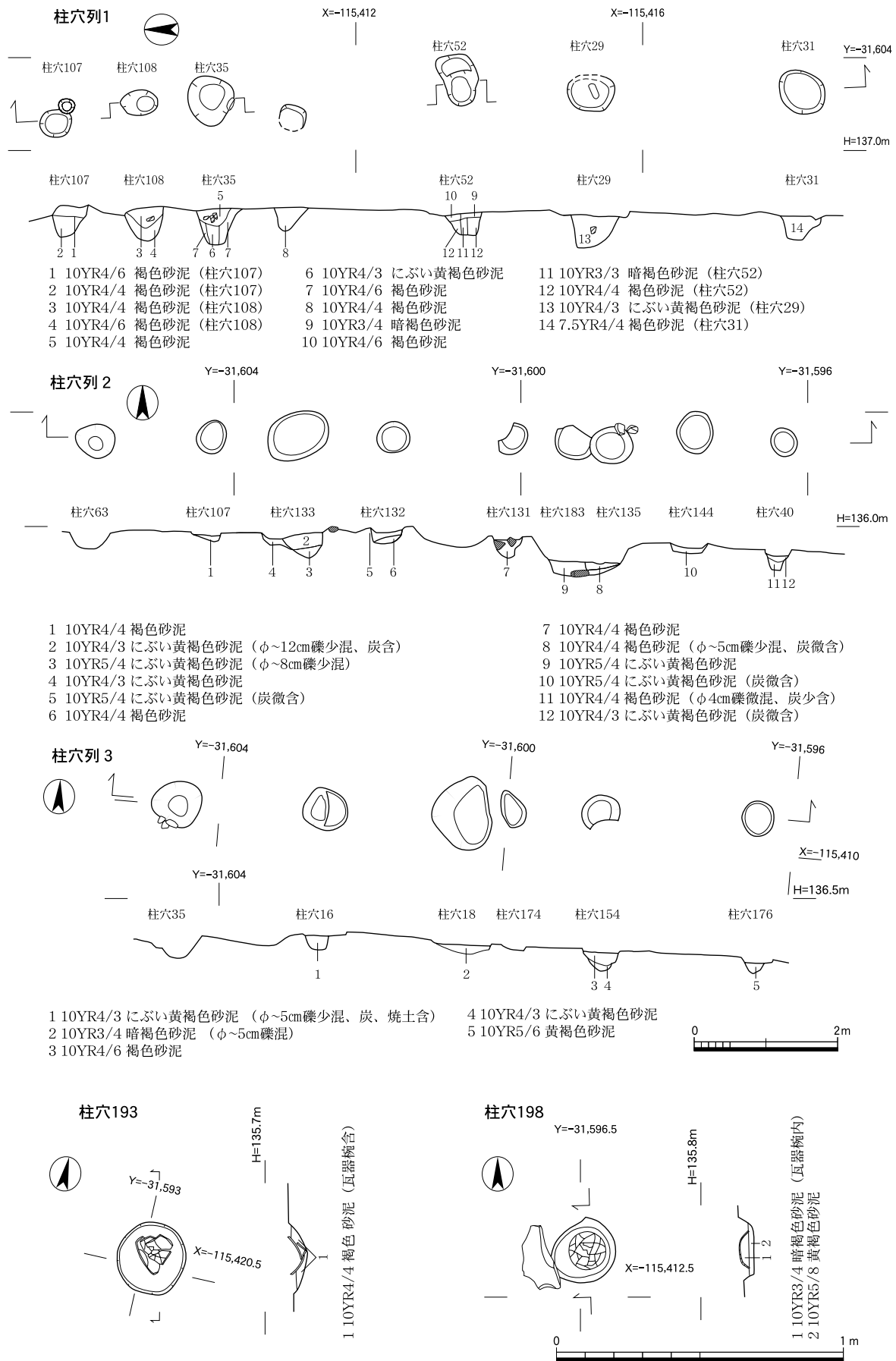


図 57 5区柱穴列1~3実測図 (1:80)、柱穴193・198実測図 (1:20)

すると想定できる柱穴・ピットはない。平面形は楕円形を呈し、検出面での規模は径 0.22 m、深さ 0.06 mある。ほぼ中央部に瓦器椀（図 70 - 402）を 1 個体据えていた。

(5) 井戸

井戸は、調査区の西端で井戸 8・25・104・172 の 4 基検出した。このうち、西端の 1 基（井戸 25）は 2 区東壁際で検出し、未掘であったもの（土坑 25）で、5 区の調査で井戸と判明した遺構である。井戸 8・172 は円形石組の井戸側を有する。当該箇所では降雨後には断面からの湧水が強いことを確認している。

井戸 8（図 58、図版 91） 井戸 8 は調査区北西隅で検出し、北肩口の一部は調査区外にある。掘形の平面形は円形を呈し、掘形内中央に円形石組の井戸側を据える。掘形の検出面での規模は、径約 1.2 m、深さ約 1.75 mある。井戸側は、長径 0.1 ~ 0.25 mのやや小降りの川原石を円形に積み上げ、底面から約 1.7 m遺存していた。内径は 0.45 mある。検出面から約 1.5 mで井戸側はすぼまり、径は約 0.35 mある。水溜状の施設と考えられる。遺物は、土師器・瓦器・焼締陶器・瓦などが出土したが、小片で時期は不明である。

井戸 172（図 58、図版 91） 井戸 172 は、調査区南西隅で検出した。掘形の平面形はやや歪な円形を呈し、掘形内中央に円形石組の井戸側を据える。掘形の検出面での規模は、径約 2.1 m、深さ約 2.5 mある。井戸側は、長径 0.1 ~ 0.5 mのやや大振りの川原石を円形に積み上げ、高さ約 1.4 m遺存していた。内径は約 1.0 mある。検出面から約 2.4 mで、平面形がほぼ方形の木枠を据える。木枠は一辺 0.55 m、幅約 0.2 m、厚さ 0.02 mある。水溜の施設と考えられる。遺物は、土師器・

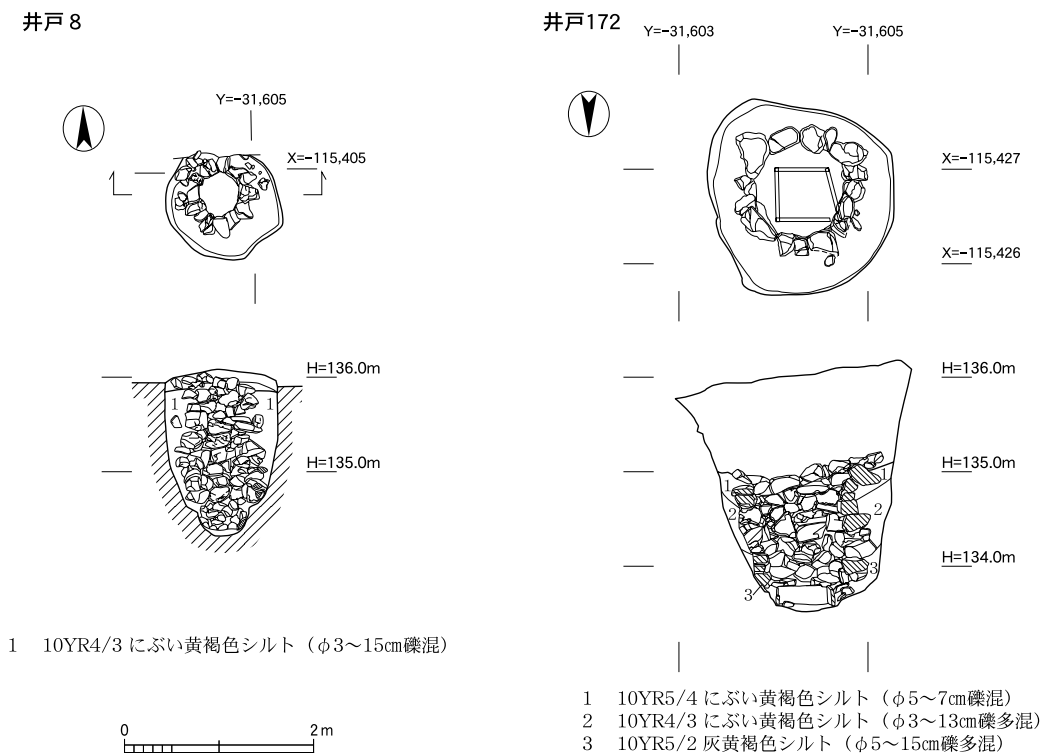
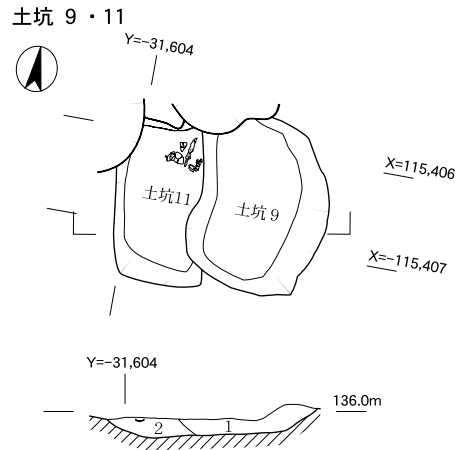
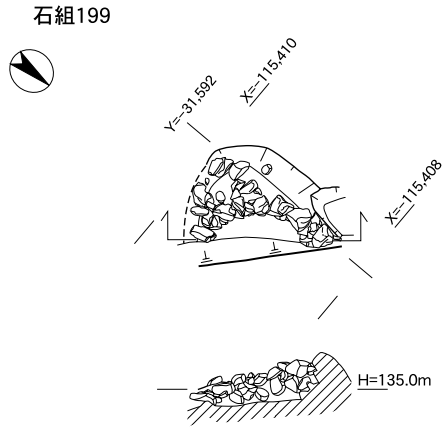
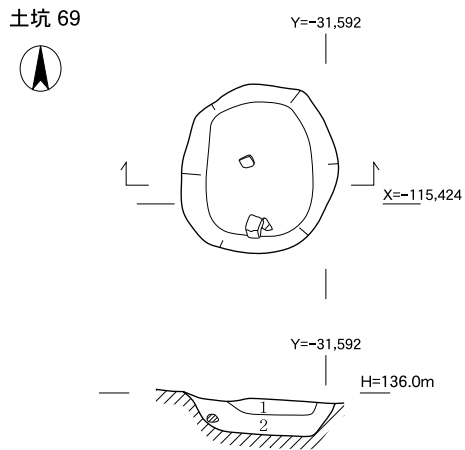


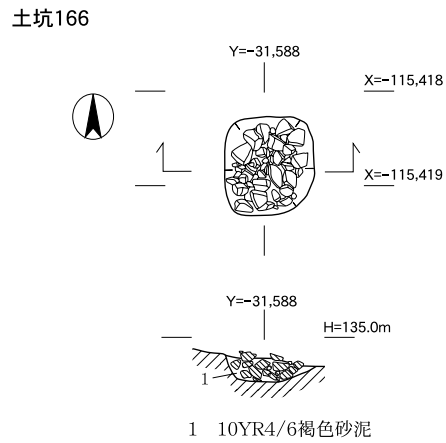
図 58 5区井戸 8・172 実測図 (1 : 80)



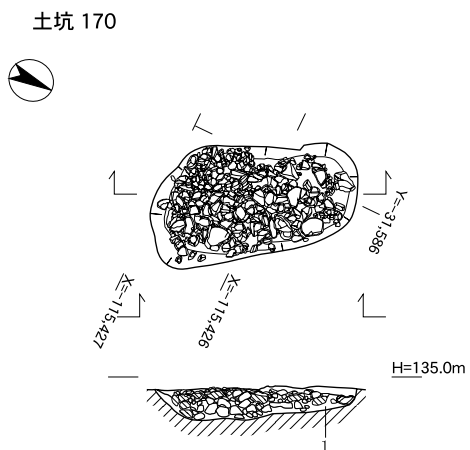
1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (φ10cm礫少混、炭多含)
 2 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 (シルトブロック、φ10cm礫少混)



1 10YR5/6 黄褐色砂泥 (φ0.3~4cm礫少混、炭少含)
 2 10YR4/6 にぶい黄褐色砂泥 (φ0.3~6cm礫少混、炭少含)



1 10YR4/6褐色砂泥



1 10YR5/6 黄褐色砂泥 (φ5~25cm礫多混)

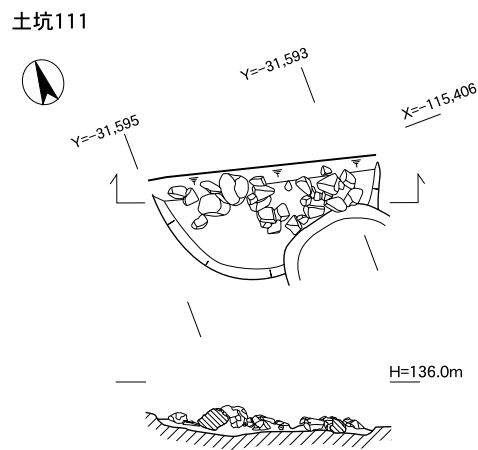


図 59 5区石組・土坑実測図 (1:80)

瓦器・焼締陶器・鉄釘などが出土したが、小片で時期は不明である。

井戸 25・104 (図版 91) 井戸 25・104 は、ともに井戸 8 に近接して検出した井戸である。平面形は井戸 25 がほぼ円形、井戸 104 はやや楕円形を呈する。いずれも井戸側は未検出である。井戸 25 の検出面での規模は、径約 1.2 m、深さ約 2.9 m である。井戸 104 の検出面での規模は、径約 1.5 m、深さ約 2.2 m である。井戸 104 から土師器・瓦器・焼締陶器・鉄釘などが出土した (図 70 - 386 ~ 395)。

(6) 土坑

土坑は、概して調査区北部と南部で検出した。遺物を埋納するもの、礫が充填されるもの、石組を有するものなどがある。

土坑 9 (図 59) 土坑 9 は、調査区北西部で検出した。北西隅は井戸 8 によって削平を受ける。平面形は南北に長い歪な楕円形を呈し、検出面での規模は、長軸約 1.9 m、深さ約 0.3 m である。遺物は土師器、瓦器、中世須恵器、輸入青磁、丸瓦・平瓦などが出土したが、図示したもの (図 70 - 382 ~ 385) 以外は小片である。

土坑 11 (図 59、図版 90) 土坑 11 は、東肩口が土坑 9 により削平を受ける。平面形は南北にわずかに長い長方形を呈し、検出面での規模は、長軸約 2.3 m、深さ約 0.2 m である。底面北西部の 1 箇所から刀子 (図 72 - 430)、白磁皿・瓦器椀 (図 70 - 396 ~ 399) がまとまって出土しており、土坑墓の可能性もある。遺物は土師器・瓦器・中世須恵器・輸入青磁・白磁・丸・平瓦などが出土したが、図示したものの以外は小片である。

土坑 69 (図 59) 土坑 69 は、調査区南部で検出した。平面形は南北に長い楕円形を呈し、検出面での規模は、長軸約 1.8 m、深さ約 0.4 m である。遺物は土師器、瓦器、中世須恵器、丸瓦・平瓦などが出土したが、小片で時期は不明である。

土坑 111 (図 59、図版 90) 土坑 111 は、調査区北端東部で検出した。南半を検出したにとどまり、北は調査区外へ広がる。南半の平面形は円形を呈し、検出面での現存規模は、径約 2.4 m、深さ約 0.3 m である。坑内に径 0.1 ~ 0.3 m の礫を詰める。遺物は土師器、瓦器、中世須恵器、丸瓦・平瓦などが出土したが、小片で時期は不明である。

土坑 166 (図 59) 土坑 166 は、溝 90 南部上面で検出した。平面形は隅の丸い方形を呈し、検出面での規模は、長軸約 1 m、深さ約 0.3 m である。坑内には底面まで径 0.05 ~ 0.25 m の礫を充填する。遺物は焼締陶器などが出土したが、小片で時期は不明である。

土坑 170 (図 59、図版 90) 土坑 170 は、調査区南東部で検出した。主軸方向は北西 - 南東方向を示し、平面形は南北に長い歪な楕円形を呈する。土坑内に 0.05 ~ 0.3 m の礫を多量に充填し、底面まで達する。検出面での規模は、長軸約 2.2 m、深さ約 0.3 m である。遺物は土師器、瓦器などが出土したが細片で時期は不明である。また、縄文時代の石鏃 (図 72 - 431) が 1 点出土している。

第2節 6区の遺構

6区は東西に長い調査区で、仮設道調査区を含め東西方向に総延長約58mにわたる。調査地点周辺の現況は、6区北側から南東側にかけて石垣が部分的に露呈し、南東側に現存する石垣は高さ約6mに達する。6区南端の現道路との比高差は3mを越える。南面はコンクリートを吹き付けてあり、石垣の有無は確認できない。平坦面は西端が飲食店跡地、以東が耕作地の跡地で、西側から3段の段差を形成する。高低差は、西端が最も高く約127.4m、東端で約122.4mある。

1. 基本層序 (図60)

石垣が構築されていた斜面を除き、耕作地として利用されてきたため、耕作土層、床土が堆積し、床土下は地山となる。地山上面での標高は、6区西端で約125.4m、6区西部で約125.3m、6区東部で約124.0m、6区仮設道で約122.2mある。

2. 遺構 (図61、図版81～88)

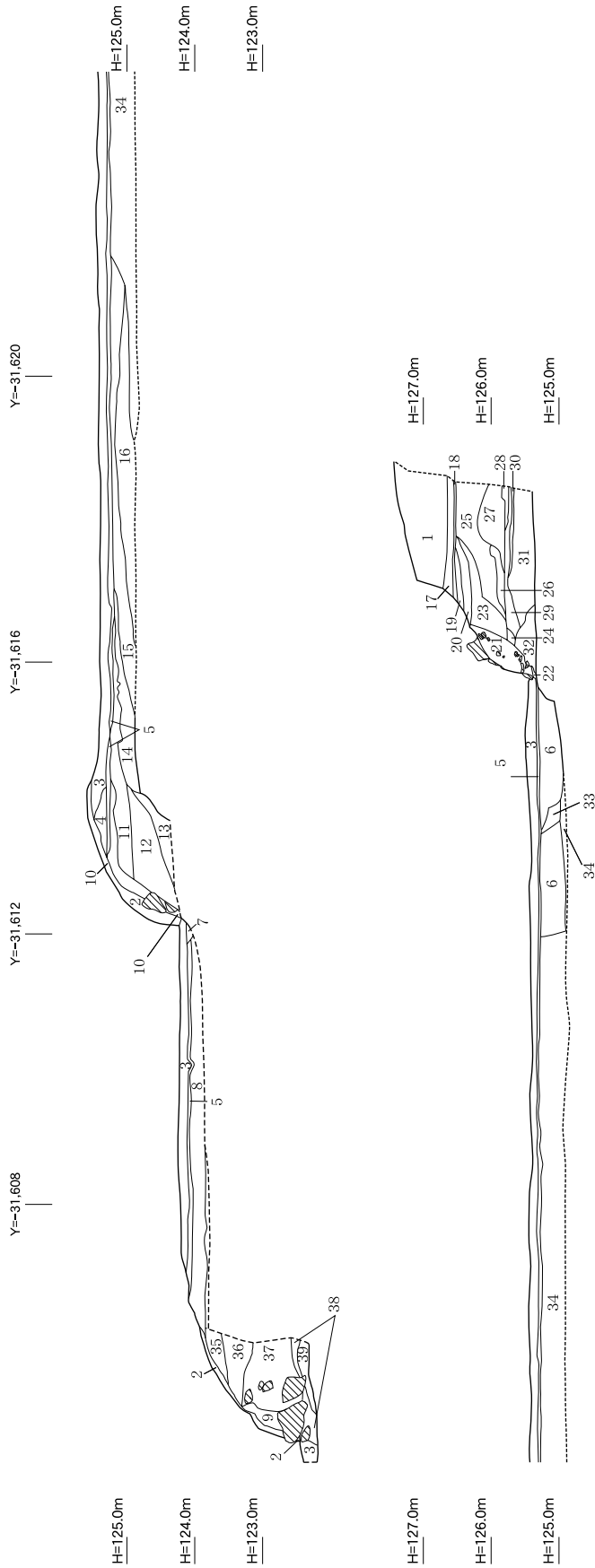
南面・南東面および東面する石垣(石垣402)を検出した。石垣402には西側および中央部、東部でそれぞれ崩落した箇所があり、西側および東端の崩落箇所には、後世新たに積み直した石垣(石垣401)がある。また、石垣402に対し概して直交する位置で、西側(石垣403)、中央部(石垣404)、東部(石垣405)で石垣ないし石垣が崩落したと考えられる箇所がある。

(1) 石垣402 (図版93～98)

石垣402は、凹凸を含め総延長約58m検出した。調査区西端から東南東方向へ断続的に蛇行しつつ連続し、東部で北東方向角度を変えるが、隅部には角を付けず緩やかに湾曲し、平面形は半円形を呈する。石垣は北北東から北東方向へ角度を変えながらさらに延長し、山門に向かうようである。

遺存状況は、石の崩落箇所が多く概して良好ではない。上端部についても、後世耕作地として利用されたことから削平を受けたと考えられるが、平坦面である7区の調査では石垣上端面とほぼ同一高で複数の遺構を検出しており、わずかな削平にとどまったと考えられる。

石垣背面の土層構造は、検出地点によって大きく異なるため、検出箇所によって石垣の構築方法や構造にも差異が見られる。また、石垣遺存状況から、検出地点の地点表示を次の通りとする。まず、石垣は西端から約7m連続して途切れ、東へ約7～15m間は後世の石垣である石垣401を除き、石垣402は全く遺存していない。この間の石垣背面は、7区で後述する谷地形に相当するため、第Ⅰ単位と仮称する。次に、15～25m間は、一部崩落があるものの石垣は3段遺存し、石垣背面はほぼ地山に相当する間で、第Ⅱ単位と仮称する。さらに、25～34m間は、地山平坦面が西から連続し、ほぼ平坦を呈する箇所であるが、ここから東へは約1mの段差となる。石垣背面には盛土層が幅を増し始める。現存する石垣底面は地山面から約1mの高さにあり、1段遺



- | | | |
|--|---|--|
| 1 盛土 | 13 10YR4/4 褐色砂泥 (粘質 φ0.3~8cm礫少混、炭少含) | 26 7.5YR4/4 褐色シルト (φ0.3~10cm礫少混、炭少含) |
| 2 表土 | 14 10YR6/6 明黄褐色シルト (φ0.3~8cm礫少混、炭少含) | 27 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥 (粘質 φ0.3~15cm礫多混) |
| 3 耕作土-1 | 15 7.5YR4/4 褐色砂泥 (粘質 φ0.3~6cm礫少混、炭少含) | 28 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂 |
| 4 耕作土-2 | 16 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (φ0.3~10cm礫少混、炭少含) | 29 2.5Y4/6 オリーブ褐色粗砂 (φ0.3~5cm礫微混、炭少含) |
| 5 床土 | 17 10YR3/3 暗褐色シルト (φ0.3~2cm礫微混、炭微含) | 30 10YR5/6 黄褐色粗砂 (シルト、φ0.3~1cm礫少混) |
| 6 10YR4/6 褐色砂泥 (φ0.3~10cm礫少混 攪乱、野垂) | 18 7.5YR4/6 褐色粘質土 (炭微含) | 31 10YR5/6 黄褐色粗砂 (シルト、φ0.3~10cm礫少混) |
| 7 10YR3/2 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 (φ0.3~10cm礫少混 野垂) | 19 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト (φ0.3~4cm礫微混) | 32 10YR5/3 ~5/4 にぶい黄褐色砂泥 (粘質 φ0.3~15cm礫少混) |
| 8 10YR4/6 黒褐色砂泥 | 20 10YR6/6 灰黄褐色粘土 (下部に粗砂、φ0.3~3cm礫多混) | 33 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂 (粘土、φ0.3~4cm礫少混) |
| 9 10YR4/4 褐色砂泥 (粗砂混 石垣埋土) | 21 10YR5/6 黄褐色シルト (φ0.3~30cm礫少混、炭少含) | 34 10YR4/4 褐色砂泥 (粘質 φ0.3~15cm礫少混) |
| 10 10YR4/4 褐色砂泥 (φ0.3~10cm礫少混) | 22 10YR3/3 暗褐色粗砂 | 35 10YR4/4 褐色砂泥 (φ0.3~8cm礫中混) |
| 11 10YR4/4 褐色砂泥 (φ0.3~3cm礫少混) | 23 10YR4/6 褐色シルト (φ0.3~10cm礫少混) | 36 7.5YR4/4 褐色砂泥 (φ0.3~18礫少混、炭、土師片少含) |
| 12 7.5YR4/4 褐色砂泥 (粘質 φ0.3~2cm礫少混、炭少含) | 24 7.5YR6/6 橙色シルト (粘質粗砂 φ0.3~2cm礫少混) | 37 7.5YR4/6 褐色砂泥 (φ0.3~50cm礫多混 地山) |
| | 25 10YR6/6 明黄褐色粘土 (黄褐色粘土、φ0.3~15cm礫少混) | 38 10YR3/3 暗褐色砂泥 φ0.3~25cm礫少混) |
| | | 39 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色砂泥 (φ0.3~7cm礫多混) |

図 60 6区南壁断面図 (1:100)

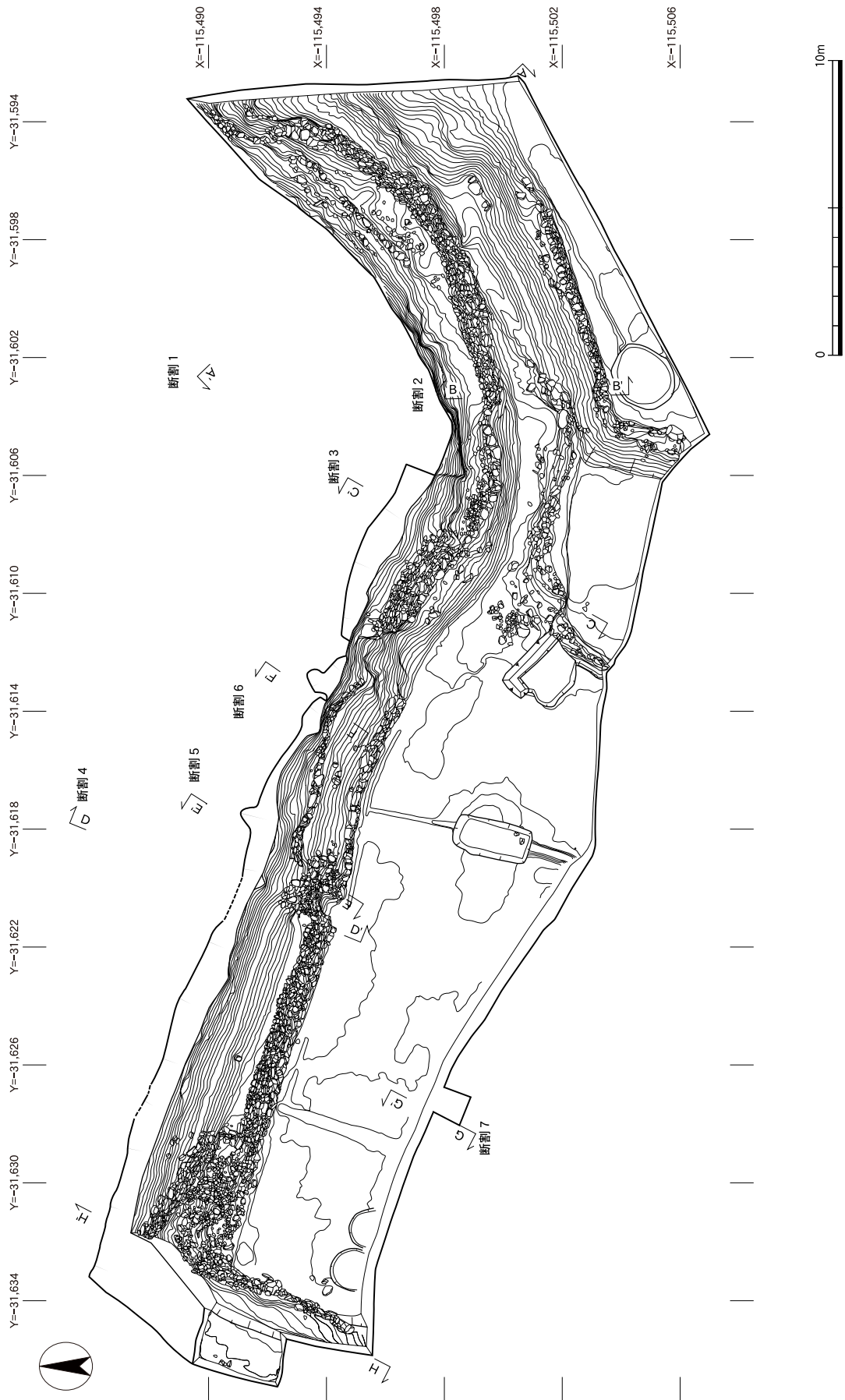


图 61 6区平面图 (1 : 200)

存しており、第Ⅲ単位と仮称する。第Ⅲ単位東端からは北東方向へ湾曲し延長する。この34～48 m間は、石垣背面の盛土層も幅は広く、深い。この間を第Ⅳ単位と仮称する。

第Ⅰ単位（図版 82・84・93～95・98） 第Ⅰ単位では、調査区西端から約7 m連続して石垣が連続する。石垣上端は調査区西端から約3 mまではほぼ平坦であるが、東へは約17°の傾斜で下がる。この傾斜角度は基礎石底面も同様であり、本来の造作であろう。石材には長径0.2～0.5 m程度の礫を使用する。石垣面の傾斜角度は約52°ある。当該地の地山面はほぼ平坦で、構築手順（図65－断割8）は、地山面上にまず、背面の谷579に堆積した土石流の地山土層を基盤とし、地山面上に厚さ0.45 mの土層をほぼ水平に造成する。石垣検出面からの深さは、約2.4 mある。埋土中に礫を多用することはない。その後の石垣造成工程には、大別して3工程がある。第1工程は、石垣背面の谷579肩口から斜面に沿って造成土を幅約0.6 m、厚い箇所約0.7 m積み上げる。埋土中には礫を多用することなく、径0.1～0.25 mの礫がまばらに分布する。第2工程は、多種に渡る土層を用いて、幅約1.6 m、深さ0.35 m程造成土を積み上げる。径0.05～0.3 mの礫がまばらに分布し、底部では径0.05～0.1 mの礫をやや多く詰める。第3工程では石垣を構築する工程となるが、さらに石垣据え付け基盤と石垣構築に分かれる。石垣据え付け基盤は、石垣直下であり、幅約1.5 m、厚さ約0.4 mの土層中に径0.04～0.2 mの礫を密に詰め、石垣構築の基盤とする。基盤上面にさらに土層を敷き、石垣を据え付ける。石垣には径0.1～0.2 mの礫を用いる。

なお、東へ約7～15 m間に石垣が遺存していないことは、背面の谷地形内の地山堆積土層が土石流と考えられる軟弱な土層であることに起因し、崩落した可能性がある。また、この地点は、常時地下水が湧出している。

第Ⅱ単位（図版 82～84・88・93・95・96） 第Ⅱ単位では、西から約8 mの間に石垣が遺存し、東約2 m間は崩落したと考えられ、石垣は遺存していない。石垣は3段遺存する。この単位は、西部では地山がやや緩やかな傾斜を呈し、石垣との間に造成土が堆積するが、東部では、石垣との間には奥行きが狭い造成土が堆積するに過ぎない。この箇所の石垣は、直線的に延長せず、背面側に窪む特徴を有し、2～4 mの間隔で各々中央部が内側に0.3～0.5 m程度窪む箇所が3箇所ある。

下段の石垣は、石垣検出下面から約1 mの高さを有する。平面形は背面側に窪む直線的な「く」字状を呈し、開き角度は、約160°ある。石垣は径0.1～0.6 mのやや大型の礫を積み上げる。石垣背面には、奥行き約1.6 m、厚さ約0.8 mの造成土を盛る。径0.1～0.3 mの礫を密に詰める（図版88－断割4）が、東に行くに従って、まばらとなる（図62－断割5）傾向にある。下段石垣前面と次の中位の石垣との間は約0.8 mの平坦部があり、連続しない。

中位の石垣は西から約2 m間にある。以東は崩落したと考えられ、石垣は遺存していない。石垣底面は、石垣検出下面から約1 m上部にあり、高さ約1.4 m遺存していた。平面形は背面側に窪む楕円形を呈する。石垣は径0.1～0.4 mの礫を積み上げる。石垣背面は奥行き約1 m、厚さ約0.5 mの造成土を盛り、径0.05～0.2 mの礫をまばらに詰める。

上段の石垣は、中位の石垣の東側に位置し、長さは約6.5 mある。石垣底面は、石垣検出下面

から約 1.8 ～ 2.2 m にあり、やや崩落箇所がある。高さ 0.5 ～ 0.9 m 遺存していた。平面形は背面側に窪む中央部が湾曲する楕円形を呈する。石垣は径 0.1 ～ 0.3 m の礫を積み上げる。石垣背面は地山斜面を奥行き約 0.4 m 掘り窪め、直接地山上から石垣を構築する（図 62 - 断割 6）。背面の土層には径 0.05 ～ 0.2 m の礫をまばらに詰める。

第Ⅲ単位（図版 83・84・88・93・95・97）第Ⅲ単位では、西端から約 9 m 連続して石垣が連続するが、西端から約 4 m 以東は、最下段の石垣が遺存するに過ぎない。この間は、地山を東に向かって掘り下げ、西端と東端との標高差は約 1.4 m ある。石垣前面の傾斜角度は約 59° ある。石垣西部では、地山面から約 1.4 m 上部で石垣底面となり、その間には石垣は未検出である。石垣背面は、西半では南へ下がる緩傾斜を呈する地山上に盛土層を盛り、盛土層上から掘形を掘って、石垣構築用の造成土を積み上げ、石垣を構築する。東半では、石垣基底部下は、地山が露呈する。

下部には地山の傾斜に沿って幅約 1.5 m、厚さ約 0.8 m の造成土を盛る。造成土には径 0.1 ～ 0.3 m の礫をまばらに詰める。下部の造成土層や、第Ⅱ単位からの連続を想定すれば、下部にも石垣は造作されたと考えられる。

検出した石垣は、下部の造成土上ならびに東半では地山直上に構築する。石垣 402 の中でも高く遺存し、高さは約 2.2 m ある。石垣背面は奥行き約 3.3 m、厚さ約 1.9 m ある。径 0.1 ～ 0.3 m の礫を積み上げる。明瞭な箇所では約 13 石の礫を積み、背面の造成土の堆積状況から 3 ～ 4 段階程度の石積み構築順がある。下段では石垣を 3 段積み、背面には奥行き約 2.8 m、厚さ約 0.5 m の造成土を盛り、径 0.05 ～ 0.2 m の礫を密に詰める。上部では 3 ～ 4 石積み上げ背面に厚さ 0.4 ～ 0.5 m の造成土を盛り、造成土中にはまばらに礫が分布する。

第Ⅳ単位（図版 83 ～ 87・92）第Ⅳ単位では、南西端から約 14 m 連続して石垣が連続する。

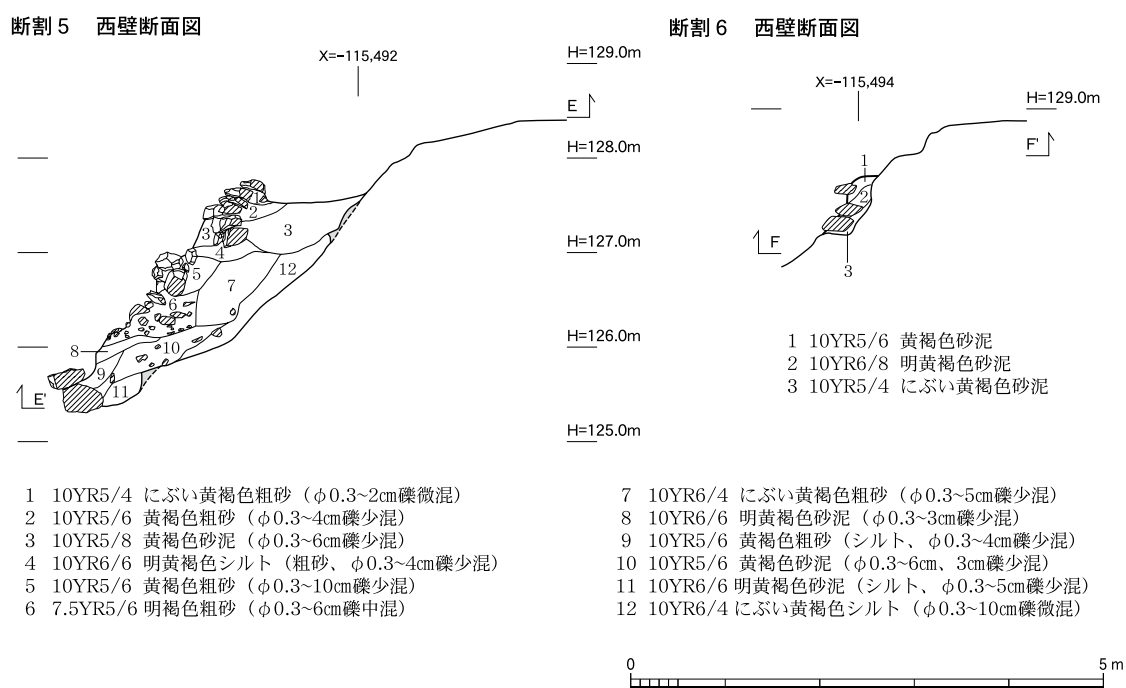


図 62 6区石垣断割図 1 (1 : 80)

石垣検出高は、想定検出下面から 2.7 ～ 3.1 m の高さがある。その間、石垣は未検出であるが、石垣 401 の掘形背面に、同石垣掘形とは土層状況の異なる土層堆積があることから、石垣が存在した可能性は高いと考えられる（図版 87 - 断割 2）。その他、石垣下端までは地山が露呈し、石垣は概して地山に接して構築される。石垣背面は盛土層が広く厚く堆積する。盛土層の幅は、7 区の断割箇所で見出した肩口から 6 区石垣までの直線距離で、断割 1 で約 16 m、断割 2 で約 12 m あり、盛土層の厚さは、図版 87 - 断割 1 で約 3.4 m、断割 2 で約 2 m に達する。石垣は 3 段検出した。

下段の石垣の平面形は、前面に張り出すように弧状を呈する。検出長は約 12 m、高さは最も高い箇所約 2.2 m あり。石垣は径 0.1 ～ 0.9 m の礫を積み上げるが、径 0.3 ～ 0.6 m の礫を多用する傾向にある。石垣前面の傾斜角度は 69° あり。石垣背面は、奥行き約 1.2 m、厚さ約 1.7 m あり、石垣の積み上げに従って 3 段階程度の造成土を盛る。造成土中には、径 0.1 ～ 0.3 m の礫がまばらに分布する程度である。

中位の石垣は 1 石が遺存する。平面形はほぼ直線状を呈し、検出長は約 4.5 m あり。径 0.2 ～ 0.4 m の礫を用いる。石垣検出高は、検出下面から 4.8 m の高さがある。

上段の石垣は調査区北東隅で見出した。検出高は、検出下面から 5 m の高さがある。平面形はほぼ直線状を呈し、検出長は約 1 m、高さ約 0.8 m あり、径 0.1 ～ 0.4 m の礫を用いて 2 ～ 3 石を積み上げる。

なお、図版 87 - 断割 1 の 17 層は、上述した石垣背面の造成土の下層に位置する土層である。奥行き約 2.2 m、厚さ約 0.5 m あり、径 0.05 ～ 0.25 m の礫を密に詰めており、石垣背面の裏込め石を詰めた状況に酷似しており、先行する石垣が構築されていた可能性がある。

(2) 石垣 403 (図 63、図版 82・94)

6 区西端、石垣 402 に直交するが、石垣 402 - 石垣 403 間が崩落しており、石垣 402 との直接的な連続性は不明である。石垣はほぼ直線的に延長し、検出長約 5 m、高さ約 1.2 m あり。石垣は、径 0.1 ～ 0.7 m の礫を積み上げる。土層堆積から、石垣 402 の下部盛土層が形成されたのち、石垣 403 の掘形が形成される。当該地の石垣形成時の掘形は、奥行き約 2 m、深さ約 1.2 m あり、石垣構築時には奥行き約 0.7 m、深さ約 0.7 m あり、径 0.05 ～ 0.15 m の礫がまばらに混入する。

(3) 石垣 404 (図 60、図版 83・88)

6 区中央東寄り南半で見出した石垣背面と考えられる土層であり、石垣は未検出である。石垣 402 とほぼ直交する位置にある。西から連属する地山平坦面は、この箇所で見下がり、約 1 m の段差が生じる。石垣背面

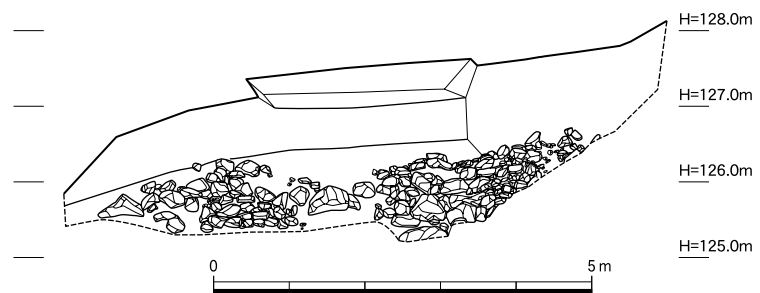


図 63 6 区石垣 403 立面図 (1 : 100)

の奥行きは約2 mあり、盛土中には径0.1～0.3 mの礫がまばらに混入する。図60－11～13層、図版88－断割3の21層以南の土層に相当する。

(4) 石垣405 (図版83・84・94)

石垣404から南東へ約8 mに位置し、石垣402におおよそ直交する石垣である。石垣は2石残存していた。背面は地山を垂直に掘り切り、石材は地山に直接据える。

(5) 石垣401 (図版84・92・98)

石垣401は2箇所で見出した。耕作地化した頃に石垣402の崩落箇所を補完する目的で造作された石垣である。下端に胴木を据え、その上端から石垣を構築する。石垣前面の平面形は、ほぼ直線方向を示す。西側の石垣は第I単位にあり、長さ約8 m、高さ約1.2 m、石垣前面の傾斜角度は約80°ある。東側の石垣は第IV単位にあり、長さ約7 m、高さ約0.8 m、石垣前面の傾斜角度は約70°ある。

なお、当該地の耕作地化に伴い、西端で2基、東部で1基の肥溜め土坑を見出した。

(6) 南端石垣 (図版88・98)

6区南端は、現況ではコンクリートで覆われるため、石垣の有無を確認する目的で断割を実施した。結果、現地表から約0.3 mで地山を見出したにとどまり、石垣ないし石垣に伴う掘形などは検出することはできなかった。

第3節 7区の遺構

7区は、6区西部に北接する調査区で、既存の飲食店跡地に相当する。現況はほぼ平坦面を呈するが、調査区外北部は急激に高まり、山門から西へ延長する東西道路を介し平成22年度の3区に至る。現地表面の標高は、調査区北東端では約129.6 m、西端では約129.1 mある。調査区の規模は、東西長約40 m、南北幅は西に向かって狭まり、約8～20 mある。

1. 基本層序 (図64・65)

調査区東部と西部では層序が異なる。既存の飲食店の造成盛土層が厚く堆積する。

東部では、盛土層が厚さ約1.0 m、耕作土層が厚さ約0.1 m、床土層が厚さ約0.05 m堆積し、地山となる。地山面はほぼ平坦である。南東部では、6区仮設道区で見出した石垣に伴う盛土層の肩口があり、東に向かって強い傾斜で東に向かって落ち込む。また、調査区北東部では地山が高まり、現地表下約0.15 mで見出している。

西部では、盛土層が厚さ約0.5 m、耕作土層が厚さ約0.1 m、床土層が厚さ約0.05 m堆積する。床土層下は、整地土層および盛土層が堆積する。整地土層下南部では谷地形を埋めた盛土層となる。盛土層下は無遺物層となり、土石流の堆積と下層に大阪層群の黄褐色ないし明黄褐色のシルト層

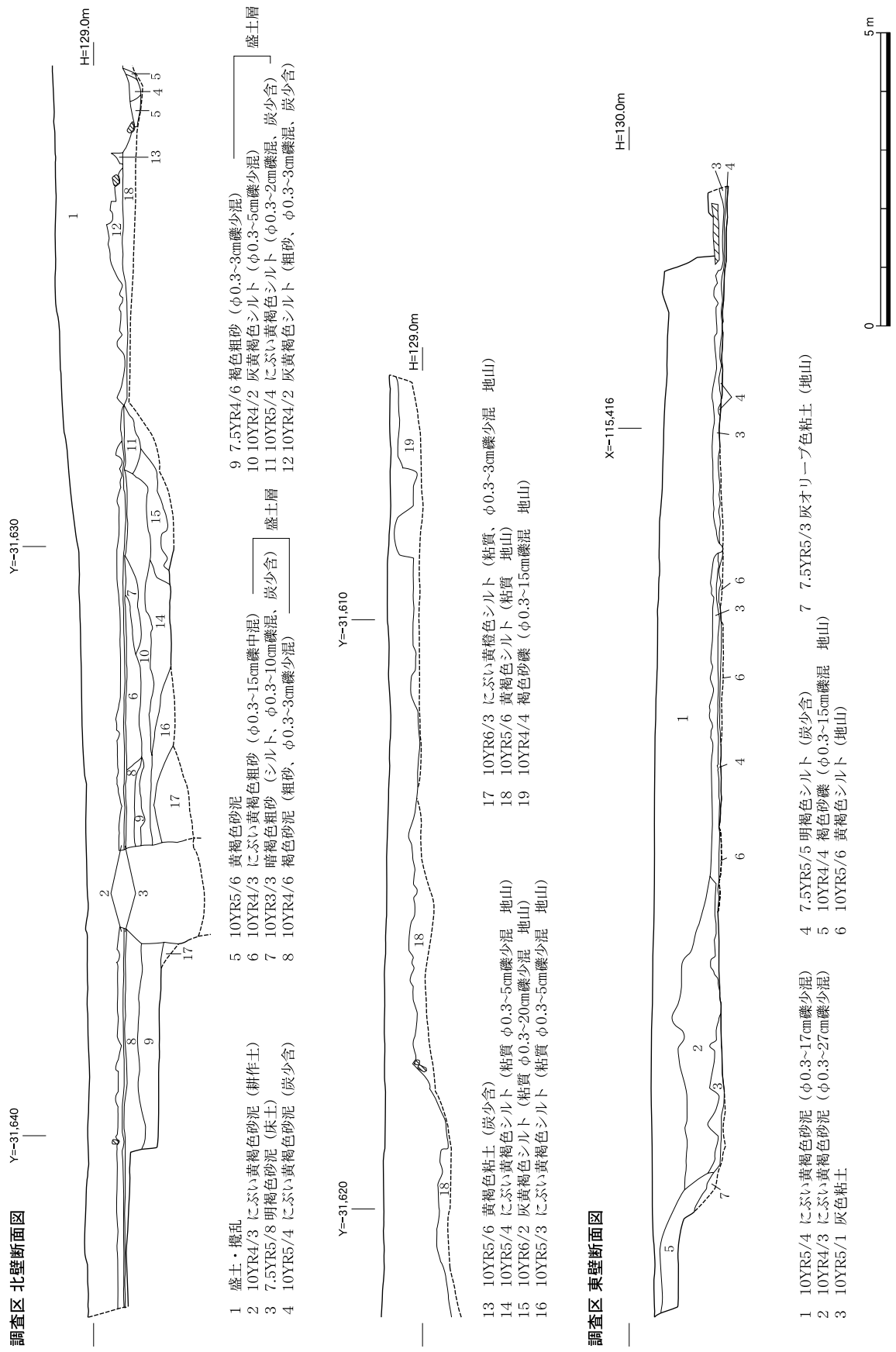
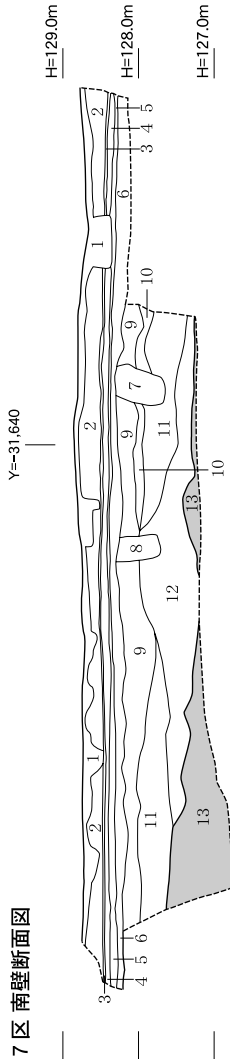


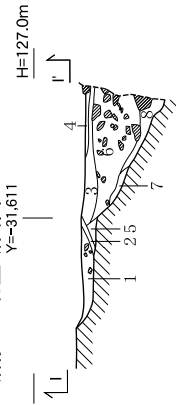
図 64 7区調査区断面図1 (1 : 100)

7区南壁断面図



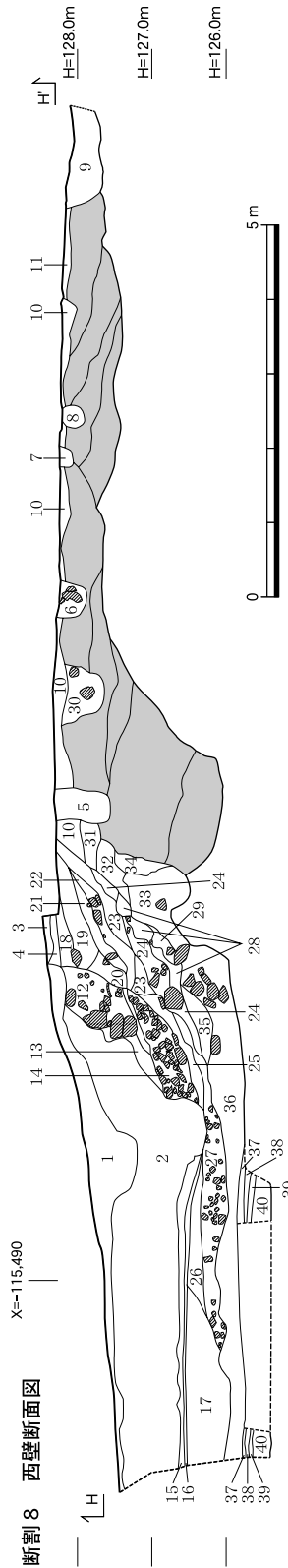
- 1 盛土
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (粘質 φ~0.5cm礫少混)
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト (粘質 φ~1cm礫少混)
- 4 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト (粘質 炭微含)
- 5 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト (粘質 φ~1cm礫少混、炭含)
- 6 10YR5/2 灰黄褐色シルト (φ0.3~3cm礫少混)
- 7 10YR4/4 褐色シルト (φ0.3~6cm礫少混、炭少含)
- 8 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (φ0.3~4cm礫混、炭少含)
- 9 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (粘質 φ0.3~3cm礫少混)
- 10 10YR6/6 明黄褐色シルト (粘質 φ0.3~3cm礫少混)
- 11 10YR4/4 褐色シルト (φ0.3~15cm礫少混、炭少含)
- 12 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト (φ0.3~30cm礫中混、炭少含)
- 13 10YR3/4 暗褐色粗砂 (シルト、φ0.3~15cm礫多混 地山)

断面9 北壁断面図



- 1 10YR4/6 褐色砂泥
 - 2 10YR5/8 黄褐色砂泥
 - 3 10YR4/4 褐色砂泥
 - 4 10YR7/8 黄褐色砂泥
 - 5 7.5YR4/6 褐色砂泥
 - 6 7.5YR4/4 褐色砂泥
 - 7 10YR5/6 褐色砂泥
 - 8 10YR4/6 褐色砂泥
- 整地層
- 盛土層

断面8 西壁断面図



- 1 表土
 - 2 盛土
 - 3 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト (粘質 炭微含 耕作土)
 - 4 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト (粘質 φ~1cm礫少混、炭含 床土)
 - 5 10YR3/4 暗褐色砂泥 (φ0.3~5cm礫中混、炭少含)
 - 6 10YR4/4 褐色粗砂 (φ0.3~5cm礫少混、炭少含)
 - 7 7.5YR4/4 褐色シルト (粗砂、φ0.3~5cm礫少混)
 - 8 10YR4/4 褐色粗砂 (シルト混、炭少含)
 - 9 10YR4/6 褐色シルト (粗砂、φ0.3~10cm礫少混、炭少含)
 - 10 2.5Y5/3 黄褐色シルト (φ0.3~5cm礫少混、炭少含)
 - 11 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 (φ0.3~5cm礫少混、炭少含)
 - 12 2.5Y4/6 オリーブ褐色粗砂 (φ0.3~5cm礫少混、炭少含)
 - 13 10YR6/3 にぶい黄褐色粗砂 (φ0.3~3cm礫多混 石垣402)
 - 14 10YR3/3 暗褐色粗砂 (φ0.3~25cm礫多混 石垣402基盤層)
 - 15 10YR2/3 暗褐色シルト (φ0.3~2cm礫微混 耕作土)
 - 16 7.5YR4/6 褐色 粘質土 (炭微含 床土)
 - 17 10YR6/6 明黄褐色粘土 (粘土ブロック、φ0.3~15cm礫少混)
 - 18 10YR5/2 灰黄褐色シルト (粗砂、φ0.3~3cm礫少混)
 - 19 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (粘質 φ0.3~3cm礫少混)
 - 20 10YR3/3 暗褐色砂泥 (φ0.3~8cm礫微混、炭少含)
 - 21 10YR4/4 褐色砂泥 (φ0.3~15cm礫少混、炭少含)
 - 22 10YR3/4 暗褐色砂泥 (φ0.3~20cm礫少混、炭少含)
 - 23 10YR3/3 暗褐色砂泥 (φ0.3~6cm礫少混、炭少含)
 - 24 10YR3/3 暗褐色砂泥 (φ0.3~30cm礫少混、炭少含)
 - 25 10YR4/4 褐色砂泥 (φ0.3~15cm礫少混、炭少含)
 - 26 10YR7/6 明黄褐色粗砂 (φ0.3~8cm礫少混)
 - 27 10YR3/4 暗褐色砂泥 (φ0.3~15cm礫多混、炭少含)
 - 28 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土 (φ0.3~10cm礫微混、炭少含)
 - 29 10YR3/3 暗褐色砂泥 (φ0.3~8cm礫少混、炭少含)
 - 30 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 (φ0.3~20cm礫多混、炭少含)
 - 31 10YR5/6 黄褐色粗砂 (φ0.3~15cm礫多混、炭少含)
 - 32 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂 (φ0.3~8cm礫中混、炭少含)
 - 33 10YR3/4 暗褐色粗砂 (φ0.3~15cm礫多混)
 - 34 10YR4/6 褐色粗砂 (φ0.3~5cm礫少混)
 - 35 2.5Y3/1 黒褐色粘土 (φ0.3~4cm礫微混)
 - 36 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥 (粘質 φ0.3~15cm礫多混)
 - 37 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂 (地山)
 - 38 2.5Y4/6 オリーブ褐色粗砂 (φ0.3~5cm礫微混)
 - 39 10YR5/6 黄褐色粗砂 (φ0.3~1cm礫少混)
 - 40 10YR5/6 黄褐色粗砂 (φ0.3~10cm礫少混)
- 地山 (土石流堆積)

図 65 7区調査区断面図2 (1:100)

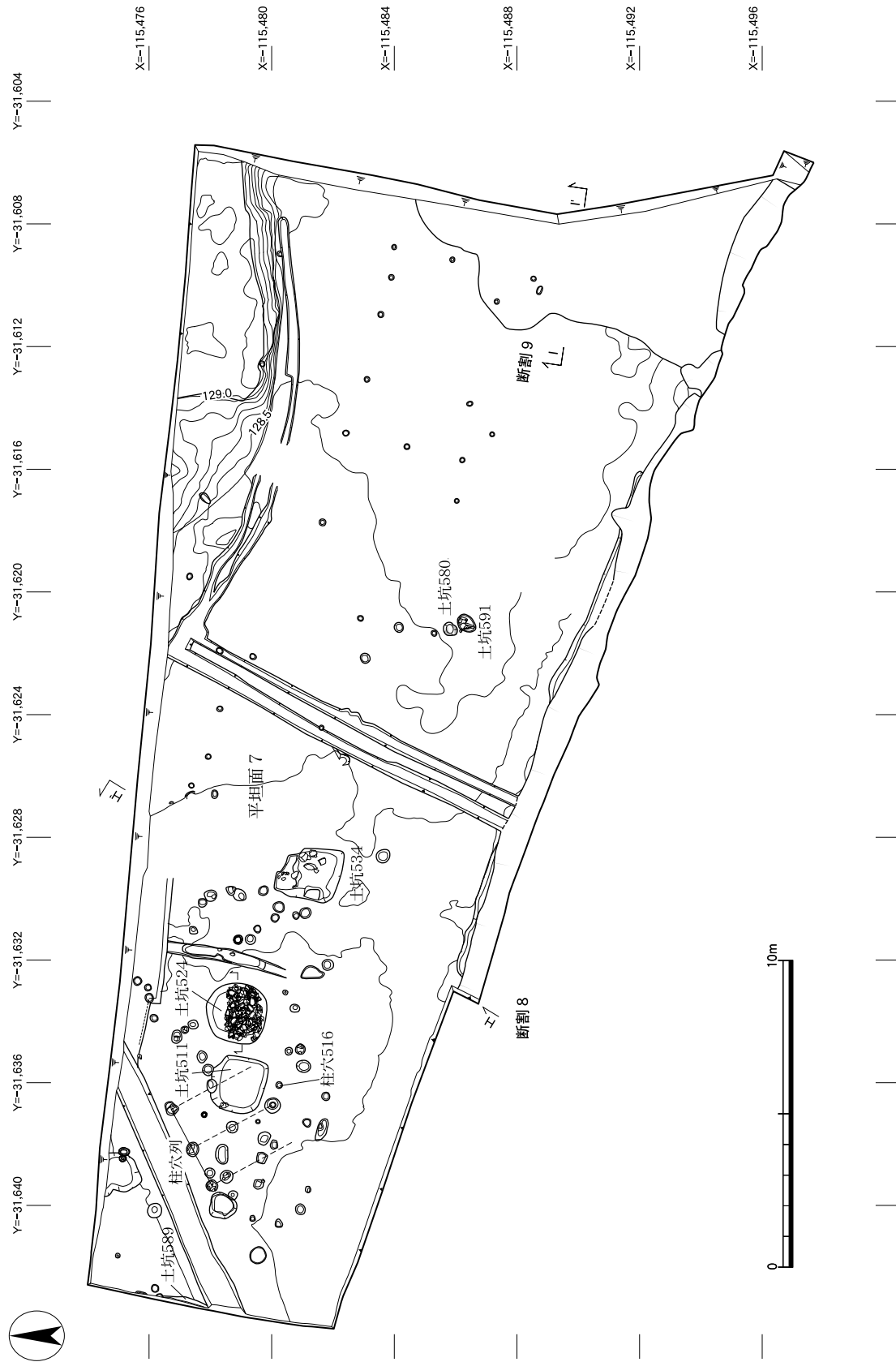


图 66 7区平面图1 (1:200)



図 67 7区平面図2 (1:200)

が堆積する。上記整地土層上面を含む7区の平坦部分を平坦面7とした。

2 遺構 (図 66・67、図版 99)

7区における遺構分布を概観すると、Y=-31,626 以東では柱穴や土坑などの遺構は未検出である。Y=-31,626 以西では、整地土層の上面で西半で柱穴・ピット・土坑を、整地土層の下面で谷地形などを検出した。また、7区南端では6区で検出した石垣の掘形が東西に延長するが、6区の項で述べているため、参照されたい。

(1) 柱穴・小ピット

柱穴・小ピットは、67基検出したが、建物など構造物に係る柱穴と考えられる柱筋の揃うものは少ない。東半に分布する小ピットは、旧飲食店基礎杭痕である。

柱穴列 (図 68) 柱穴列は柱穴 522・544・545 からなる。柱筋が通り、柱間は約 1.45 m ある。掘形内に根石を据える。主軸方向はN-28°-W振れる。この柱筋に対し直交する位置で柱穴 547、柱穴 513・515、柱穴 546 を検出したが、根石は据えておらず、建物としてまとまるものではない。柱穴の平面形は円形ないしやや歪な楕円形を呈し、長軸 0.36～0.5 m、深さ 0.2～0.33 m ある。柱間は約 1.5 m あるが、柱穴 522 - 柱穴 547 はやや広く約 1.9 m ある。遺物は土師器・瓦器が出土したが、細片である。

柱穴 516 からは、瓦器小椀 (図 70 - 420) が出土した。

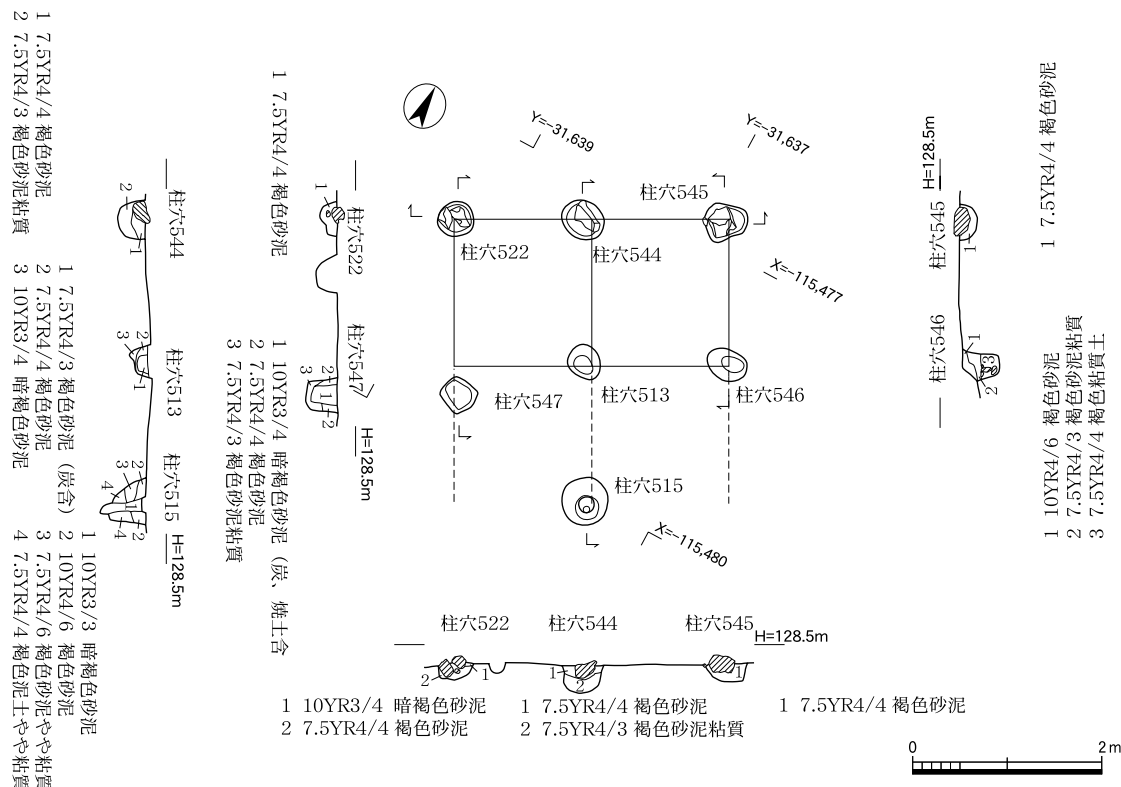


図 68 7区柱穴列実測図 (1 : 80)

(2) 土坑

土坑は西部および中央南部で検出した。規模により大型のものと小形のものがある。また、土坑の検出状況では、礫を詰めるもの、側面から底面が焼けているもの、焼土・炭が混入するものなどがある。

土坑 511 土坑 511 は、平面形がやや歪な方形を呈し、検出面での規模は、長軸約 1.8 m、深さ約 0.3 m である。底面は平坦である。埋土は炭を少量含む。遺物は土師器・瓦器・焼締陶器・瓦・砥石などが出土した。室町時代後期と考えられるが、小片のため時期は不明である。

土坑 524 (図 69、図版 100) 土坑 524 は、土坑 511 の東に接して検出した土坑である。平面形がほぼ円形を呈し、検出面での規模は、径約 2.0 m、深さ約 0.3 m である。底面は平坦で、上部まで拳大の礫を北端を除いて詰め込む。埋土は粘質を帯び、炭を少量含む。遺物は土師器・瓦器・中世須恵器の小片などが出土した。室町時代後期と考えられるが、小片のため時期は不明である。

土坑 534 (図 69、図版 100) 土坑 534 は、土坑 524 の南東側で検出した土坑である。平面形がやや歪な方形を呈し、検出面での規模は、長軸約 2.2 m、深さ約 0.1 m である。底面は平坦で、北東部に長径 0.05 ~ 0.45 m 礫がまばらに分布する。礫の一部は熱で焦げている。埋土下層には炭を多く含む。遺物は土師器・瓦器・中世須恵器・焼締陶器・輸入陶磁器・丸瓦の小片などが出土した。室町時代後期と考えられるが、小片のため時期は不明である。

土坑 580 (図 69、図版 100) 土坑 580 は、調査区中央南部で検出した土坑である。平面形はやや歪な円形を呈し、検出面での規模は、径約 0.45 m、深さ約 0.3 m である。肩口から底面にかけて

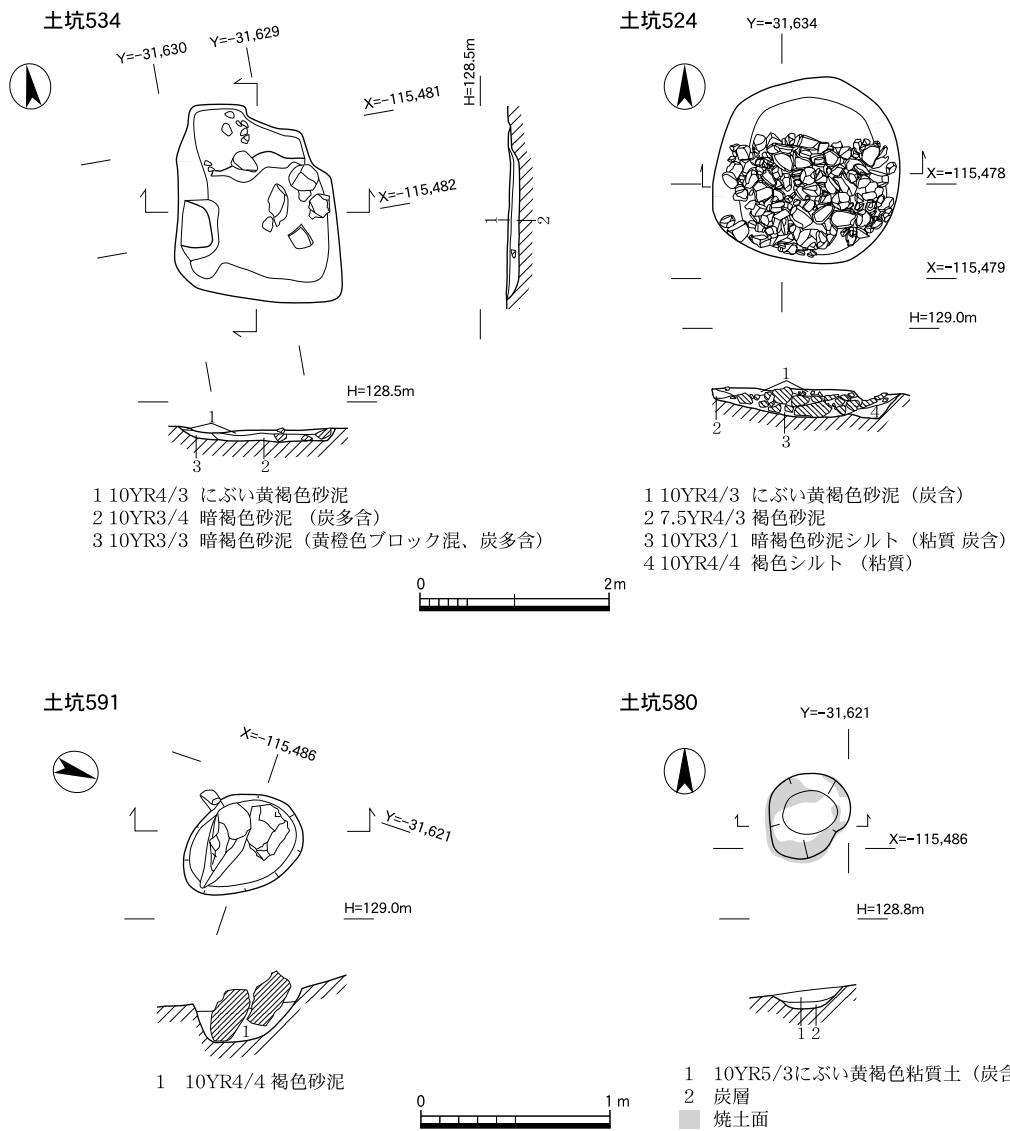


図 69 7区土坑実測図 (1 : 80、1 : 40)

て熱を帯び赤変している。埋土下層には厚さ 0.03 mの炭層が堆積する。遺物は出土していない。

土坑 591 (図 69、図版 100) 土坑 591 は、土坑 580 の南東部で検出した土坑である。平面形は楕円形を呈し、検出面での規模は、長径約 0.7 m、深さ約 0.4 mある。底面に長径約 0.5 m・0.3 mの礫を 2 石据える

土坑 589 土坑 589 は、調査区西端で検出した土坑で、大半は調査区外へ広がる。検出面での規模は、現存長約 1.5 m、深さ 0.16 mある。埋土には焼土・炭を多量に包含する。

(3) 谷 579 (図版 100)

谷 579 は、7区西半、Y=-31,626 以西で検出した。東肩口は北西から南東方向を示す。下半は遺物を包含しない土石流の堆積物があり、この土層を介して当該地域の丘陵が集めた雨水が現在でも伏流水として湧き出す。この上面を鎌倉時代後半に埋め立て、上面を整地して平坦面 7 を造成したと考える。

第4節 5～7区の遺物

出土した遺物は、遺物整理箱で49箱で、縄文時代から近世までである。出土遺物には土器類、瓦類、石製品、金属製品などがあり、大半は土器類が占める。土器類には土師器、瓦器、須恵器系陶器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器などがある。瓦類には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦などがある。石製品には石鏃、滑石製鍋、砥石などがある。金属製品には刀子、鉄釘がある。大半は細片で図示できるものは少ない。土師器・瓦器とも器面が磨滅するものが多い。以下、主要遺構ごとに出土遺物の概要を述べる。遺物の年代については、形態・時期的に近似する京都の土器編年¹⁾を援用した。

1. 土器類

5区出土土器（図70、図版101）

土坑9（382～385）土師器皿、瓦器椀・鍋・羽釜、須恵器系陶器甕・鉢、輸入陶磁器青磁椀などがあるが大半は細片である。382・383は土師器皿である。384は瓦器椀で、底部外面には低い高台を貼り付け、体部内面は粗いヘラミガキを施す。385は輸入陶磁器青磁椀で、体部外面に蓮弁を配する。Ⅷ期古前後と考えられる。

土坑11（396～399）土師器皿、瓦器椀・鍋・羽釜、須恵器系陶器甕・鉢、輸入陶磁器青磁椀・白磁椀、鉄釘などがあるが大半は細片である。396～399と金属製品刀子（430）は坑内北部からまとまって出土した。397～399は瓦器椀である。底部外面には低い高台を貼り付け、内面は粗いヘラミガキを施す。398の底部内面には暗文を施す。396は輸入陶磁器白磁椀で、ほぼ完形である。Ⅶ期と考えられる。

土坑6（400）土師器皿、瓦器椀・鍋・羽釜、須恵器系陶器甕・鉢、焼締陶器甕、鉄釘などがあるが大半は細片である。400は土師器皿である。Ⅷ期古前後と考えられる。

柱穴144(404) 瓦器椀などがある。404は瓦器椀である。体部内面には粗いヘラミガキを施す。Ⅶ期と考えられる。

表5 平成23年度調査遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代	石製品		石鏃2点		
鎌倉時代～室町時代	土師器、瓦器、須恵器系陶器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、土製品、瓦、石製品、金属製品		土師器23点、瓦器9点、須恵器系陶器1点、輸入陶磁器7点、施釉陶器1点、土製品1点、鉄製品1点、軒丸瓦2点、軒平瓦4点		
合計		50箱	51点（3箱）	47箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物をランク分けしたため、出土時より1箱多くなっている。

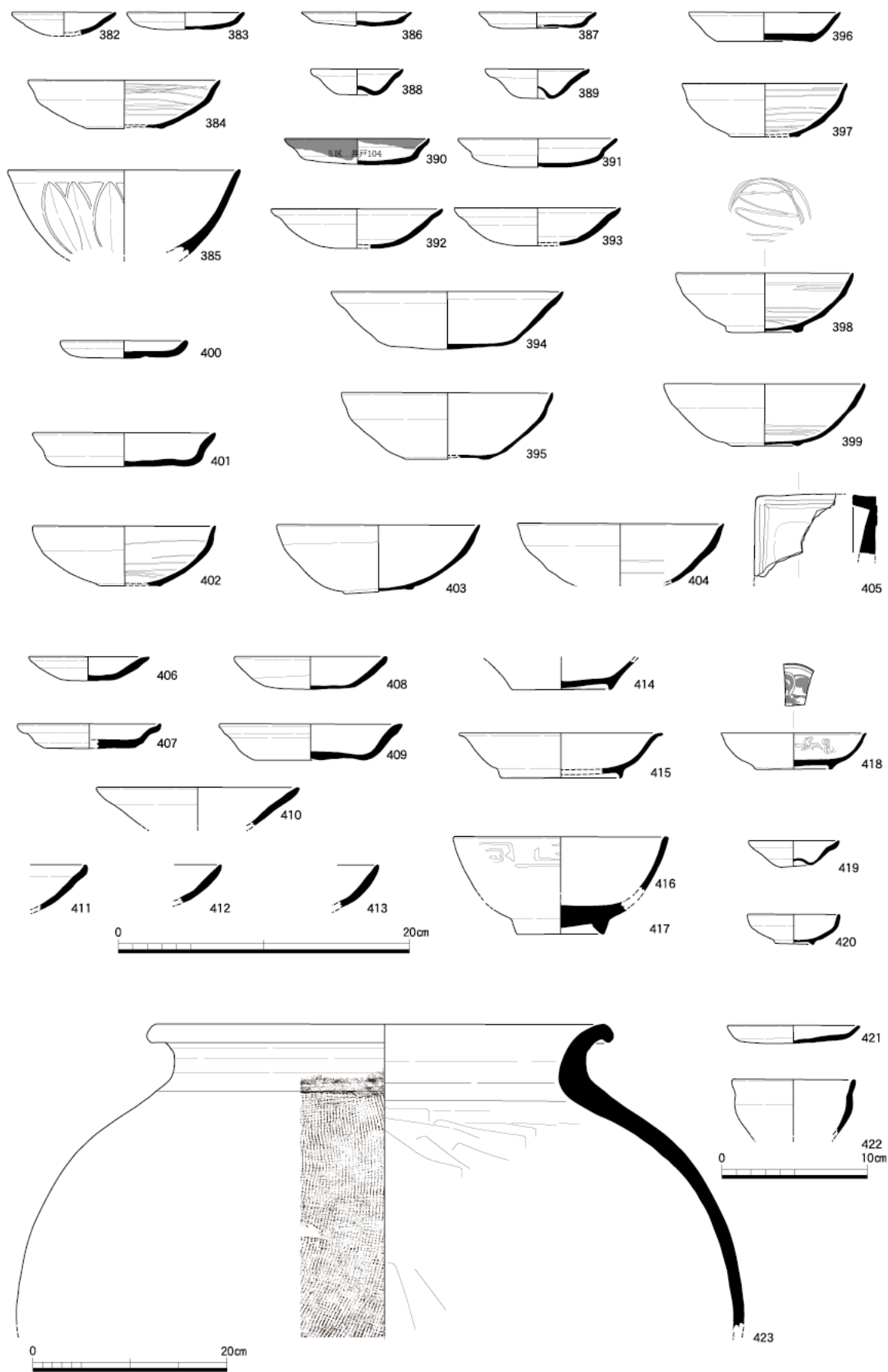


図70 出土土器実測図（1：4、423のみ1：6）

井戸 104 (386 ~ 395) 土師器皿、瓦器椀・鍋・鉢、須恵器系陶器甕・鉢、鉄釘、砥石などがあるが大半は細片である。386 ~ 391 は土師器皿、392 ~ 394 は白色系の土師器椀である。395 は瓦器椀である。器面は磨滅する。Ⅷ期新前後と考えられる。

柱穴 146 (401) 土師器皿などがある。401 は土師器皿である。Ⅷ期古前後と考えられる。

柱穴 193・198 (402・403) 402・403 は瓦器椀である。底部外面に低い高台を貼り付ける。402 は体部内面に粗いヘラミガキを施す。403 の器面は磨滅する。Ⅶ期新前後と考えられる。

なお、整地層から須恵器系陶器の硯 (405) が出土した。海から陸にかけての破片である。

6区出土土器 (図 70、図版 102)

石垣 402 (406 ~ 418) 土師器皿、瓦器椀・鍋・羽釜・火鉢、須恵器系陶器甕・鉢、焼締陶器甕・鉢・壺、施釉陶器皿・椀・筒型容器、輸入陶磁器青磁椀・白磁椀・染付椀・華南盤、石製品滑石製羽釜・硯などがあるが大半は細片である。406 ~ 413 は土師器皿である。409 はやや新しい傾向にあり、Ⅺ期に属する可能性がある。414 ~ 418 は輸入陶磁器である。414 は白磁椀で、高台は基筒底を呈する。415 は白磁皿である。416・417 は青磁椀で、同一個体と考えられる。口縁部外面に雷

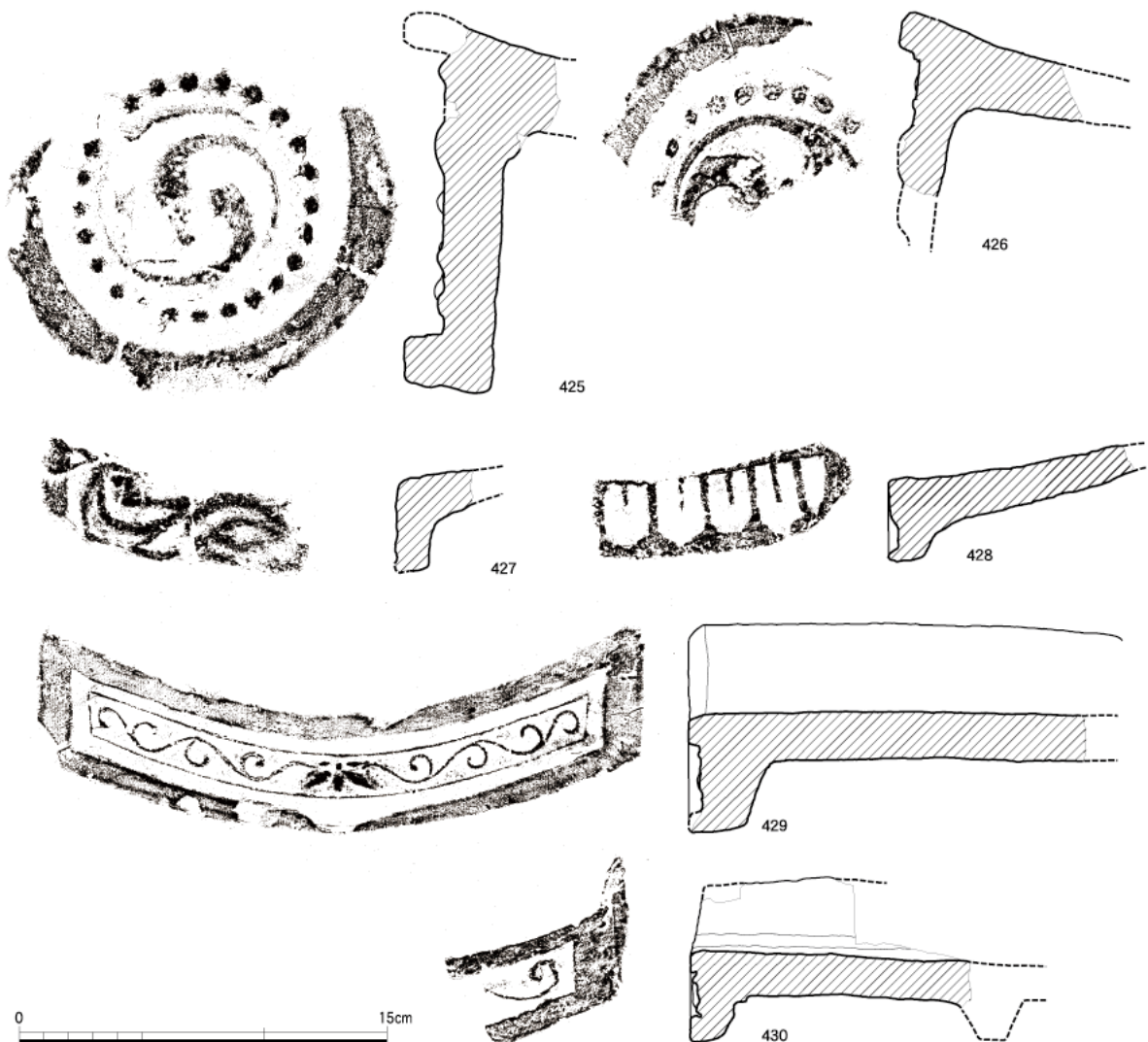


図 71 出土軒瓦拓影・実測図 (1 : 4)

文を巡らす 418 は染付磁器皿で、底部内面に染付文様を、体部内面に浅い陰刻文様を施す。

7区出土土器 (図 70、図版 102)

谷 579 (421 ~ 423) 土師器皿・椀、瓦器椀・鍋・羽釜・火鉢、須恵器系陶器甕・鉢、焼締陶器甕、施釉陶器皿、輸入陶磁器青磁椀・青白磁椀・壺などがあるが大半は細片である。421 は土師器皿である。422 は土師器椀で、深い体部から口縁部は上方に開く。423 は須恵器系陶器甕である。口縁部から体部の破片で、体部外面はタタキ、内面は横方向のナデを行う。

土坑 524 (419) 419 は土師器皿である。IX期古前後と考えられる。

柱穴 516 (420) (420) は瓦器椀である。底部外面に高台を貼り付ける。

2. 瓦類 (図 71、図版 102)

瓦類には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦などがあるが、大半は小片である²⁾。

軒丸瓦 (424・425) 424 は、6区石垣 402 の掘形から出土した三巴文軒丸瓦である。鎌倉時代ないし室町時代と考えられる。425 は、7区の谷地形上部の整地層から出土した三巴文軒丸瓦である。鎌倉時代と考えられる。

軒平瓦 (426 ~ 419) 426 は、5区の土坑 168 から出土した左行唐草文軒平瓦である。平安時代後期と考えられる。427 は、5区の土坑 5 から出土した剣頭文軒平瓦である。平安時代後期と考えられる。428 は、石垣 402 の掘形から出土した唐草文軒平瓦である。室町時代と考えられる。429 は、6区石垣 402 の掘形から出土した外向唐草文である。鎌倉時代から室町時代と考えられる。

3. 金属製品 (図 72、図版 101)

金属製品には、鉄釘・刀子があるが、大半は錆が激しく、小片である。

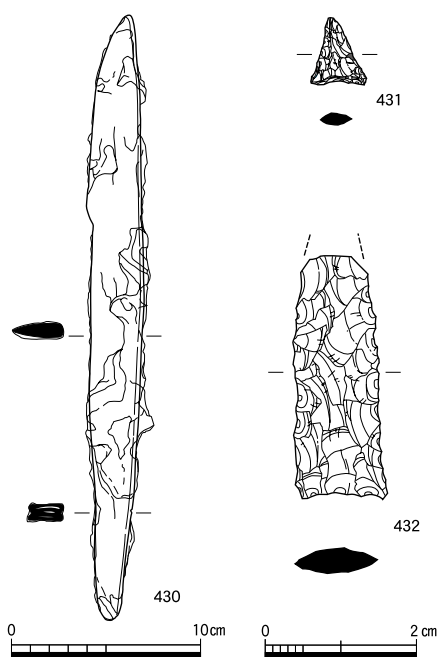


図 72 刀子・石製品実測図 (1:4, 1:1)

430 は、5区の土坑 11 から出土した鉄製刀子である。土器類とともにまとめて出土した。刀身はほぼ全面が錆に覆われるが、切先から約 22 cm で幅が狭まる傾向にあり、以下が茎と考えられる。

4. 石製品 (図 72)

石製品には、石鏃・石槍・石鍋・硯・砥石などがあるが、石鏃を除き細片である。

431 は、サヌカイト製の打製石鏃である。5区土坑 170 の埋土に混入して出土した。小型石鏃で、平面形は二等辺三角形、脚部から下方へ広がる。基部は凹基式。432 は、サヌカイト製の打製石槍である。5区盛土中から出土した。先端部は欠損する。胴部は長く、基部は平基式。

第5節 まとめ

今回の調査地点は、勝持寺山門から発し北西方向に延長する参道の西側に位置する5区と、同様に山門から西へ断続的に延長する参道の南側に位置する6・7区である。

5区は、平成22年度調査の2区に東接する調査区で、2区で検出された平坦面4に相当する。当該地は参道に向かって緩やかに下がる緩傾斜面であり、当該地の平坦面4を1面で造成するとすれば、西端では2mを越える段差が生じることになる。従って、参道間にさらに1段の段差を敷設し、2箇所の段差造成することによって同時に平坦面4の東にも平坦面（平坦面6）を造成したと考えられる。また、平坦面4の東半部では、細礫を多く含む整地土層と考えられる土層の広がりを検出しており、平坦面4の整地に係る土層と考えている。柱穴・ピットは、概して平坦面4に分布するが、2区との境界ならびに北端で柵と考えられる柱列が想定できる程度であり、建物としてまとまるものはない。当該地の平坦面は子院の一部であり、主要建物は壇状の高まりを有する建物であった可能性がある。

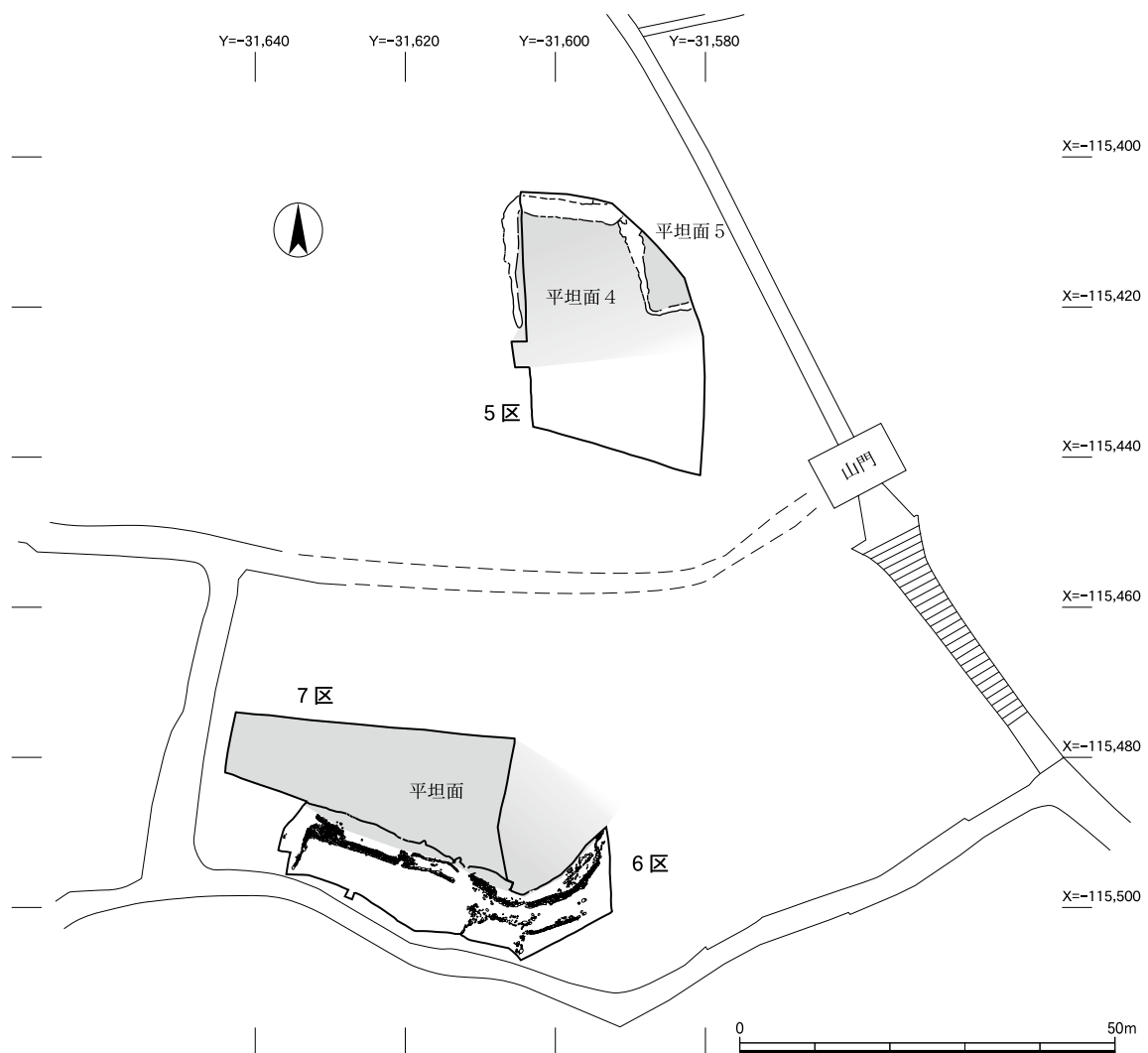


図73 平坦面配置図 (1 : 1,000)

石垣造成前 平坦面

石垣造成後 平坦面

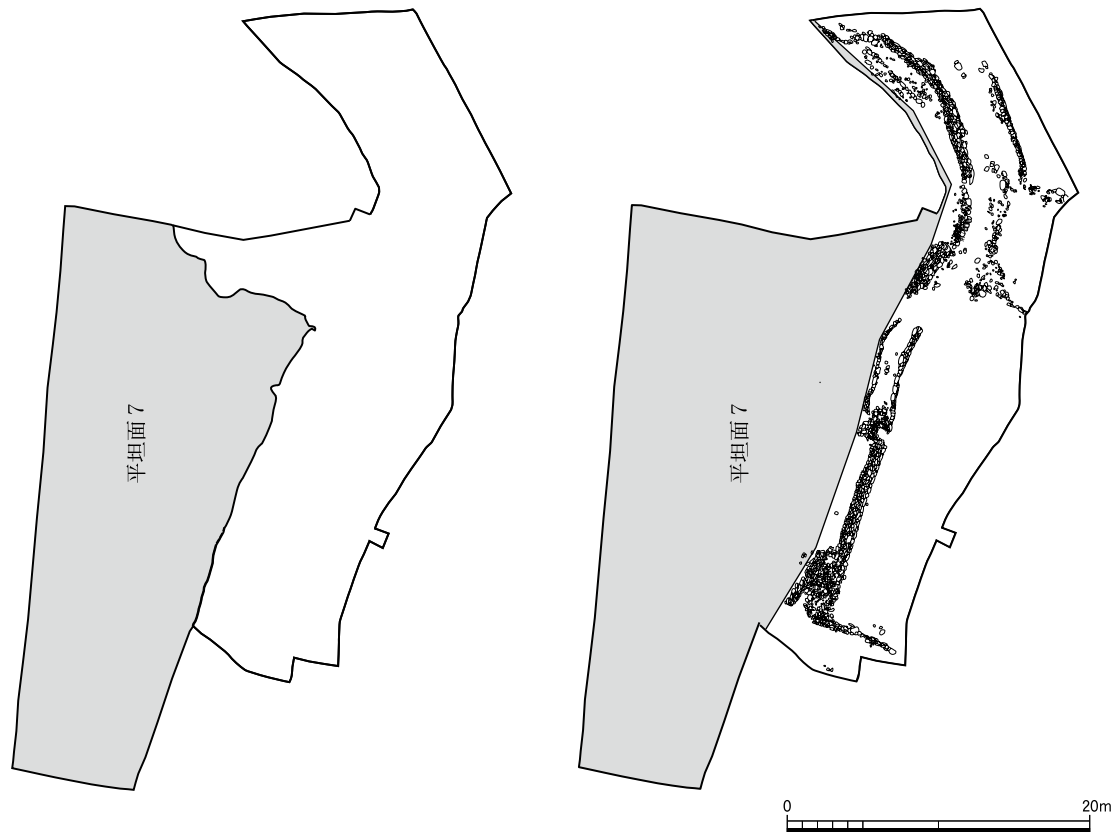


図 74 平坦面変遷図 (1 : 500)

6・7区では、平坦面7を検出した。平坦面の広がりには当初からのものではなく、鎌倉時代に開発が開始された頃には、平坦面7は狭かったようであるが、室町時代後期に造成土とともに石垣が構築され、平坦面7は南および東へ平坦面が拡張される。東へは、平坦面形成肩口から石垣上端まで約13mに及ぶ。南は、盛土で造成した後、石垣背面から約2mの箇所掘形を掘り、石垣を構築したことが判明した。平坦面上面では、柱穴・土坑などを検出した。しかし、東へ石垣を築き平坦面を確保しているにも拘わらず、検出箇所は西部が主体であり、中央南部で限定的に小土坑を検出したに過ぎない。また、石垣上端は平坦であり、7区上面が強く削平を受けたとは想定できない。従って、当該地においても、5区の状況と同様、主要建物は壇状の高まりを有する建物であった可能性はある。この6・7区については、勝持寺絵図によれば、該当する子院の名称を付した付箋はない。しかし、検出した遺構群は、子院の存在を示すと考えられる。このことは、勝持寺山門に発する現参道の両側に造営された子院群とともに、山門から西へ派生する参道に沿っても子院が造営されたことを示しており、勝持寺子院範囲を考察する上でも、今回の調査の中で石垣検出とともに重要な成果といえる。

今回検出した石垣は、出土遺物も少なく、すべて同時期に構築されたかについては不明であるが、石垣裏面から16世紀を下限とすると考えられる遺物が出土しており、平成22年度調査検出の石垣に比べ後出の石垣であることが判明した。従って、この箇所に造営されたと考えられる子院の

形成時期は13世紀に開始し、16世紀前半の造営を最後に、その後終焉を迎える。

なお、平成22年度調査で検出した石垣・石塁は、現地保存および移築保存なされる運びとなった。石垣は、覆土で覆うことにより現地保存することができた。石塁は、調査対象地隣接地に移設保存することができた。移築保存箇所は、第2次調査の1区北方、参道から約3m南側で、竹林を介し参道側から垣間見る石塁は、現存する参道際の石塁とともに、往時を偲ぶ遺構として調査成果とともに評価できよう。

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要 第3号』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 2) 瓦については、以下の文献を参考にした。
『木村捷三郎収集瓦図録』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年
山崎信二『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第59冊 奈良国立文化財研究所 2000年
長谷川行孝「瓦」『東福寺防災施設工事・発掘調査報告書』東福寺 1990年

付表1 平成22年度調査 掲載遺物一覧表

遺物 No.	器種	器形	地区	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	色 調	備考
1	土師器	皿	1区	土坑121	7.2	1.7		35	7.5YR8/4浅黄橙色 赤色粒含む	
2	土師器	皿	1区	土坑121	8.4	1.7		90	10YR8/2灰白色~10YR8/4浅黄橙色 赤色粒含む	
3	瓦器	鉢	1区	土坑121				小片	N3/0暗灰色 赤色粒・黒色粒含む	
4	土師器	受け皿	1区	土坑112	7.2	1.7		25	7.5YR7/4にぶい橙色 赤色粒含む	
5	土師器	皿	1区	土坑112	7.5	1.1		50	10YR8/4浅黄橙色 赤色粒含む	
6	土師器	皿	1区	土坑112	8.2	1.2			7.5YR8/4浅黄橙色 赤色粒含む	
7	土師器	皿	1区	土坑112	8.6	1.9		35	5YR8/4淡橙色~2.5Y3/1黒褐色 赤色粒・黒色粒含む	
8	土師器	皿	1区	土坑112	10.7	1.6		25	10YR8/3浅黄橙色 赤色粒含む	
9	土師器	皿	1区	土坑112	11.0	1.7		25	10YR8/3浅黄橙色 赤色粒含む	
10	土師器	皿	1区	土坑112	11.4	1.5		25	10YR8/4浅黄橙色 赤色粒含む	
11	土師器	皿	1区	土坑112	10.9	2.2		95	7.5YR8/3~7.5YR8/4浅黄橙色	
12	土師器	皿	1区	土坑112	11.0	2.5		35	10YR8/3浅黄橙色 赤色粒含む	
13	土師器	皿	1区	土坑112	11.6	2.3		80	10YR7/3にぶい黄橙色	
14	土師器	皿	1区	土坑112	12.0	2.4		50	10YR7/3にぶい黄橙色 赤色粒含む	
15	土師器	皿	1区	土坑112	13.1	2.9		90	10YR8/1~10YR8/2灰白色	
16	瓦器	椀	1区	土坑112	13.6	4.5		95	器表N6/0~N4/0灰色 断面N8/0~N7/0灰白色	
17	瓦器	椀	1区	土坑112	14.2			20	N4/0灰色 黒色粒含む	
18	瓦器	椀	1区	土坑112	13.8	5.2		75	N3/0暗灰色 黒色粒含む	
19	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第3面	7.6	1.4		35	7.5YR7/6橙色 赤色粒含む	
20	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第4面	6.8	1.1		50	7.5YR8/4浅黄橙色 赤色粒含む	
21	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第4面	7.6	1.8		90	5YR7/4にぶい橙色 赤色粒含む	
22	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第4面	7.2	1.0		35	7.5YR7/4にぶい橙色 赤色粒含む	
23	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第4面	7.9	0.8		25	7.5YR8/6浅黄橙色 赤色粒・黒色 粒含む	
24	土師器	へそ皿	1区	石垣65 背面造成土第1面	6.4	1.9		75	7.5YR8/4浅黄橙色 赤色粒含む	
25	土師器	へそ皿	1区	石垣65 背面造成土第2面	6.7	1.5		75	7.5YR8/6浅黄橙色 赤色粒含む	
26	土師器	へそ皿	1区	石垣65 背面造成土第1面	6.8	1.6		65	10YR8/3浅黄橙色 赤色粒含む	
27	土師器	へそ皿	1区	石垣65 背面造成土第3面	6.8	1.5		50	10YR7/4にぶい黄橙色 赤色粒含む	
28	土師器	へそ皿	1区	石垣65 背面造成土第1面	7.2	1.8		35	10YR8/3浅黄橙色 赤色粒含む	
29	土師器	へそ皿	1区	石垣65 背面造成土第1面	6.6	1.7		20	10YR7/4にぶい黄橙色 赤色粒含む	

遺物No.	器種	器形	地区	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	色 調	備考
30	土師器	へそ皿	1区	石垣65 背面造成土第2面	6.4	1.7		50	7.5YR8/4浅黄橙色 赤色粒・黒色粒含む	
31	土師器	へそ皿	1区	石垣65 背面造成土第1面	6.5	1.8		70	7.5YR7/6橙色 赤色粒含む	
32	土師器	へそ皿	1区	石垣65 背面造成土第4面	6.4	2.0		60	7.5YR8/3浅黄橙色 黒色粒含む	
33	土師器	へそ皿	1区	石垣65 背面造成土第4面	7.0	2.0		25	7.5YR7/4にぶい橙色 赤色粒含む	
34	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第3面	8.6	2.1		90	7.5YR7/6橙色 赤色粒含む	
35	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第2面	8.2	1.9		25	7.5YR6/6橙色 赤色粒含む	
36	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第2面	8.4	1.8		35	10YR8/4浅黄橙色 赤色粒含む	
37	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第4面	8.6	2.0		80	7.5YR8/6浅黄橙色 赤色粒含む	
38	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第4面	8.7	2.0		35	7.5YR7/6橙色 赤色粒含む	
39	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第3面	9.6	2.0		90	7.5YR8/4浅黄橙色 赤色粒含む	外面油煙付着
40	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第3面	9.0	1.7		25	7.5YR8/6浅黄橙色 赤色粒含む	
41	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第1面	9.4	1.4		20	7.5YR7/4にぶい橙色 赤色粒含む	
42	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第3面	9.0	2.0		25	7.5YR7/3にぶい橙色 赤色粒含む	
43	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第1面	9.5	1.9		25	7.5YR8/4浅黄橙色 赤色粒含む	
44	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第4面	9.7	1.4		25	7.5YR7/4にぶい橙色～10YR5/1褐灰色 赤色粒含む	
45	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第4面	10.1	1.9		20	7.5YR7/4にぶい橙色 赤色粒含む	
46	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第4面	11.1	2.1		20	7.5YR8/4浅黄橙色 赤色粒含む	
47	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第1面	11.2			10	10YR7/4にぶい黄橙色 赤色粒含む	
48	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第4面	12.6	25.0		25	5YR8/4淡橙色 赤色粒含む	
49	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第4面	11.6	2.1		100	7.5YR8/4浅黄橙色 赤色粒含む	
50	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第1面	11.7	2.8		25	7.5YR8/4浅黄橙色 赤色粒含む	口縁油煙付着
51	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第1面	12.0			15	7.5YR7/4にぶい橙色 赤色粒含む	
52	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第1面	12.7	2.4		25	7.5YR8/4浅黄橙色 赤色粒含む	
53	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第3面	13.7	2.6		95	7.5YR7/6橙色 赤色粒含む	
54	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第3面	13.9	2.5		25	10YR8/4浅黄橙色 赤色粒含む	
55	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第1面	13.4	2.5		25	7.5YR8/4浅黄橙色 赤色粒含む	
56	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第1面	14.4	2.6		25	7.5YR7/4にぶい橙色 赤色粒含む	
57	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第3面	15.2	2.6		20	10YR7/4にぶい黄橙色 赤色粒含む	
58	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第4面	15.6	2.4		20	2.5Y5/1黄灰色 赤色粒含む	

遺物 No.	器種	器形	地区	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	色 調	備考
59	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第4面	15.7	2.1		40	10YR8/4浅黄橙色 赤色粒含む	
60	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第4面	15.8	2.3		25	10YR8/4浅黄橙色 赤色粒含む	
61	土師器	皿	1区	石垣65 背面造成土第4面	16.3	2.8		15	10YR8/3浅黄橙色 赤色粒含む	
62	瓦器	鉢	1区	石垣65 背面造成土第1面				小片	N4/0灰色 黒色粒含む	
63	瓦器	鉢	1区	石垣65 背面造成土第4面				小片	7.5Y4/1灰色 赤色粒含む	
64	輸入白磁	椀	1区	石垣65 背面造成土第2面			5.0	底部25	素地 7.5YR8/1灰白色 釉 10YR8/1灰白色	
65	輸入白磁	椀	1区	石垣65 背面造成土第4面			2.3	底部100	10GY8/1明緑灰色	
66	輸入染付	皿	1区	石垣65 背面造成土第2面			6.1	底部15	釉10GY7/1明青灰色	
67	輸入青磁	椀	1区	石垣65 背面造成土第4面			5.3	底部100	5GY6/1オリーブ灰色	
68	輸入青磁	椀	1区	石垣65 背面造成土第2面			5.0	底部100	素地 2.5Y7/2灰黄色 釉 10GY6/1緑灰色	
69	輸入青磁	椀	1区	石垣65 背面造成土第2面			7.0	底部40	素地 10Y7/1灰白色 釉 10Y6/2灰オリーブ色	
70	輸入青磁	杯	1区	石垣65 背面造成土第1面	38.8				釉10Y6/2~10Y5/2オリーブ灰色	龍泉窯系
71	施釉陶器	椀	1区	石垣65 背面造成土第4面			4.8	底部100	素地 2.5Y8/2灰白色 釉 5Y6/4オリーブ黄色	古瀬戸
72	施釉陶器	椀	1区	石垣65 背面造成土第2面			4.8	底部100	素地 2.5Y6/3にぶい黄橙色、黒色粒 含む 釉 7.5Y5/3灰オリーブ色	古瀬戸 平椀
73	施釉陶器	皿	1区	石垣65 背面造成土第4面	14.4	3.4		10	素地10YR8/2灰白色~7.5YR7/6橙色 赤色粒含む 釉2.5Y7/3浅黄色	古瀬戸 卸皿
74	施釉陶器	皿	1区	石垣65 背面造成土第1面	15.7			15	素地 10YR8/2灰白色 黒色粒含む 釉 7.5Y5/3灰オリーブ色	古瀬戸 卸皿
75	焼締陶器	播鉢	1区	石垣65 背面造成土第1面	19.5	6.7	11.0	15	5YR5/4にぶい赤褐色	備前
76	焼締陶器	播鉢	1区	石垣65 背面造成土第1面			14.3	40	10YR6/3にぶい黄橙色~7.5YR6/3、 断面2.5Y7/1灰白色~2.5Y7/2灰黄色	丹波
77	土師器	へそ皿	1区	石垣66 背面造成土第1面	6.4	1.5		40	10YR8/4浅黄橙色 赤色粒含む	
78	土師器	へそ皿	1区	石垣66 背面造成土第2面	6.4	1.8		40	10YR8/2灰白色 赤色粒含む	
79	土師器	皿	1区	石垣66 背面造成土第1面	9.0	1.9		25	7.5YR7/4にぶい橙色 赤色粒・黒色 粒含む	
80	土師器	皿	1区	石垣66 背面造成土第1面	10.4	2.4		65	10YR7/4にぶい黄橙色 赤色粒含む	口縁油煙付着
81	土師器	皿	1区	石垣66 背面造成土第1面	8.4	1.0		25	10YR8/4浅黄橙色 赤色粒含む	
82	土師器	皿	1区	石垣66 背面造成土第1面	9.2	1.3		35	7.5YR8/4浅黄橙色 赤色粒含む	
83	土師器	皿	1区	石垣66 背面造成土第1面	9.8	1.5		25	7.5YR7/6橙色 赤色粒含む	
84	土師器	皿	1区	石垣66 背面造成土第2面	10.3	1.6		25	5YR7/6橙色 赤色粒含む	
85	土師器	皿	1区	石垣66 背面造成土第1面	8.6	1.3		90	7.5YR8/2灰白色	
86	土師器	皿	1区	石垣66 背面造成土第1面	9.0	1.5		35	10YR7/3にぶい黄橙色 赤色粒含む	
87	土師器	皿	1区	石垣66 背面造成土第1面	11.0	2.7		50	7.5YR8/6浅黄橙色 赤色粒含む	

遺物 No.	器種	器形	地区	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	色 調	備考
88	土師器	皿	1区	石垣66 背面造成土第2面	11.0	2.3		25	10YR8/3浅黄橙色	
89	土師器	皿	1区	石垣66 背面造成土第2面	9.7	1.8		35	7.5YR8/4浅黄橙色 赤色粒含む	
90	土師器	皿	1区	石垣66 背面造成土第1面	11.8	2.3		65	2.5Y8/2灰白色 赤色粒含む	
91	土師器	皿	1区	石垣66 背面造成土第1面	12.8	2.5			2.5Y8/1灰白色 赤色粒含む	
92	土師器	皿	1区	石垣66 背面造成土第2面	13.2	3.7		35	10YR8/3浅黄橙色 赤色粒含む	
93	緑釉陶器	皿	1区	石垣66 背面造成土第1面			7.0	底部50	素地 10YR7/2にぶい黄橙色 釉 7.5Y5/3灰オリーブ色	東海産
94	須恵器	壺	1区	石垣66 背面造成土第1面			4.0	10	N5/0灰色 黒色粒含む	
95	灰釉系陶器	椀	1区	石垣66 背面造成土第2面			6.6		2.5Y8/2灰白色	
96	瓦器	椀	1区	石垣66 背面造成土第1面	12.7	4.9		60	N4/0灰色 黒色粒含む	
97	瓦器	椀	1区	石垣66 背面造成土第2面	15.2			20	N3/0暗灰色	
98	瓦器	鉢	1区	石垣66 背面造成土第2面				小片	N5/0灰色	
99	施釉陶器	壺	1区	石垣66 背面造成土第1面				肩部20	素地 2.5Y8/2灰白色 黒色粒を含む 釉 10YR2/3黒褐色	古瀬戸 鉄釉花瓶
100	施釉陶器	皿	1区	石垣66 背面造成土第2面			7.5	底部100	10Y8/1灰白色	古瀬戸 卸皿
101	焼締陶器	甕	1区	石垣66 背面造成土最下層				小片	5YR7/8橙色	信楽
102	焼締陶器	甕	1区	石垣66 背面造成土第2面				小片	5YR7/6橙色	信楽
103	輸入青白磁	合子蓋	1区	石垣66 背面造成土第1面	5.6	2.8			釉 2.5GY7/1明オリーブ灰色	
104	輸入青白磁	椀	1区	石垣66 背面造成土第1面	14.9			口縁10	素地 N8/0灰白色 釉 5GY7/1明オリーブ灰色	
105	輸入白磁	椀	1区	石垣66 背面造成土第1面	15.0			口縁20	素地 2.5Y8/2黄橙色 釉 5Y5/2灰オリーブ色	
106	輸入白磁	小椀	1区	石垣66 背面造成土第1面			3.8	底部100	素地 2.5Y8/1灰白色 釉 2.5GY8/1灰白色	
107	輸入青磁	皿	1区	石垣66 背面造成土第1面	15.0	2.3		10	素地 5Y7/1灰白色 釉 5Y6/3オリーブ黄色	龍泉窯系
108	輸入青磁	椀	1区	石垣66 背面造成土第1面	17.0			口縁15	素地 5Y7/1灰白色 釉 10Y6/2オリーブ灰色	龍泉窯系
109	輸入青磁	鉢	1区	石垣66 背面造成土第1面	15.8			口縁25	素地 N8/0灰白色 釉 10Y5/2オリーブ灰色	龍泉窯系
110	輸入青磁	椀	1区	石垣66 背面造成土第1面			5.7		素地 5Y8/1~5Y7/1灰白色 釉 7.5Y6/1~7.5Y6/2灰オリーブ色	龍泉窯系
111	焼締陶器	播鉢	1区	石垣66 背面造成土最下層				小片	2.5YR5/4にぶい赤褐色	備前
112	焼締陶器	播鉢	1区	石垣66 背面造成土第2面	23.0	6.8		15	7.5YR6/4にぶい橙色	備前
113	瓦器	播鉢	1区	石垣66 背面造成土第1面	29.0			20	2.5Y8/1灰白色 黒色粒を含む	櫛目10条1単位
114	須恵器	鉢	1区	石垣66 背面造成土最下層	31.0	11.8	13.4	25	N6/0灰色 黒色粒を含む	東播系須恵器
115	須恵器	鉢	1区	石垣66 背面造成土最下層	26.7	10.4	9.5	70	7.5Y6/1灰色 黒色粒を含む	東播系須恵器
116	土師器	皿	2区	土器溜116	7.2	1.4		100	5YR6/8橙色 赤色粒・黒色粒を多く含む	赤色系

遺物 No.	器種	器形	地区	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	色 調	備考
117	土師器	皿	2区	土器溜116	7.4	1.4		75	5YR6/8橙色 赤色粒・黒色粒を多く含む	赤色系
118	土師器	皿	2区	土器溜116	9.0	0.8			10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系
119	土師器	皿	2区	土器溜116	7.6	1.3		30	10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系
120	土師器	皿	2区	土器溜116	8.1	1.4		30	10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系
121	土師器	皿	2区	土器溜116	9.2	1.7			5YR6/8橙色 赤色粒・黒色粒を多く含む	赤色系
122	土師器	へそ皿	2区	土器溜116	6.9	1.6		100	10YR8/3浅黄橙色 赤色粒・黒色粒を多く含む	白色系
123	土師器	へそ皿	2区	土器溜116	7.0	1.8		95	10YR8/3浅黄橙色 赤色粒・黒色粒を多く含む	白色系
124	土師器	へそ皿	2区	土器溜116	6.9	1.8		98	10YR8/3浅黄橙色 赤色粒・黒色粒を多く含む	白色系
125	土師器	へそ皿	2区	土器溜116	7.0	1.8		100	10YR8/3浅黄橙色 赤色粒・黒色粒を多く含む	白色系
126	土師器	へそ皿	2区	土器溜116	7.1	1.7		45	10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系
127	土師器	へそ皿	2区	土器溜116	7.1	1.8		100	10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系
128	土師器	へそ皿	2区	土器溜116	7.2	7.4			10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系
129	土師器	へそ皿	2区	土器溜116	7.0	1.9		100	10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系
130	土師器	へそ皿	2区	土器溜116	6.8	1.8		98	10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系
131	土師器	へそ皿	2区	土器溜116	6.9	1.9		100	10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系
132	土師器	へそ皿	2区	土器溜116	7.2	1.9		80	10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系
133	土師器	皿	2区	土器溜116	8.2	1.4		70	10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系
134	土師器	皿	2区	土器溜116	8.2	2.0		55	10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系
135	土師器	皿	2区	土器溜116	8.6	1.9		90	10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系
136	土師器	皿	2区	土器溜116	9.5	1.9		70	10YR8/3浅黄橙色 赤色粒・黒色粒を多く含む	白色系
137	土師器	皿	2区	土器溜116	7.9	2.3		100	10YR8/3浅黄橙色 赤色粒・黒色粒を多く含む	白色系
138	土師器	皿	2区	土器溜116	9.0	2.3		30	10YR8/3浅黄橙色 赤色粒・黒色粒を多く含む	白色系
139	土師器	皿	2区	土器溜116	9.0	2.7		30	10YR8/3浅黄橙色 赤色粒・黒色粒を多く含む	白色系
140	土師器	皿	2区	土器溜116	12.1	2.9		80	10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系
141	土師器	皿	2区	土器溜116	12.1	2.6		30	10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系
142	土師器	皿	2区	土器溜116	12.9	2.1		30	10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系
143	土師器	皿	2区	土器溜116	13.2	2.5		10	10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系
144	土師器	皿	2区	土器溜116	13.2	2.4		70	10YR8/3浅黄橙色 赤色粒・黒色粒を多く含む	白色系
145	土師器	皿	2区	土器溜116	12.8	2.5			10YR8/3浅黄橙色 赤色粒・黒色粒を多く含む	白色系

遺物 No.	器種	器形	地区	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	色 調	備考
146	土師器	皿	2区	土器溜116	12.7	2.4		80	10YR8/3浅黄橙色 赤色粒・黒色粒を多く含む	白色系
147	土師器	皿	2区	土器溜116	13.0	2.4		35	10YR8/3浅黄橙色 赤色粒・黒色粒を多く含む	白色系
148	土師器	皿	2区	土器溜116	11.8	2.3		25	10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系
149	土師器	皿	2区	土器溜116	12.2	2.2		55	10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系
150	土師器	皿	2区	土器溜116	13.0	2.5		85	10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系
151	土師器	皿	2区	土器溜116	13.0	2.6		75	10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系
152	土師器	皿	2区	土器溜116	12.4	2.5		60	10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系
153	土師器	皿	2区	土器溜116	13.0	2.2		90	10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系
154	土師器	皿	2区	土器溜116	12.4	2.5		95	10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系 口縁歪みあり
155	土師器	皿	2区	土器溜116	13.6	2.6		25	10YR8/3浅黄橙色 赤色粒・黒色粒を多く含む	白色系
156	土師器	皿	2区	土器溜116	14.8	2.8		70	10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系
157	土師器	皿	2区	土器溜116	14.1	2.7		75	10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系
158	土師器	皿	2区	土器溜116	14.8	2.9		100	10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系
159	土師器	皿	2区	土器溜116	14.6	2.9		55	10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系
160	土師器	皿	2区	土器溜116	14.4	2.8		75	10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系
161	土師器	皿	2区	土器溜116	15.8	3.3		85	10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系
162	土師器	皿	2区	土器溜116	16.6	2.3			10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系
163	土師器	皿	2区	土器溜116	15.3	3.0		30	10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系
164	土師器	皿	2区	土器溜116	18.0	2.6			10YR7/6明黄褐色 赤色粒・黒色粒を僅かに含む	橙色系
165	土師器	皿	1区	断面2第44層	7.8	1.2		60	7.5YR7/4にぶい橙色	
166	土師器	皿	1区	断面2第44層	8.0	1.1		70	10YR8/3浅黄橙色	
167	土師器	皿	1区	断面2第44層	9.1	1.6		85	5YR7/6橙色	
168	土師器	皿	1区	断面2第44層	9.6	1.5		30	7.5YR8/4浅黄橙色	口縁油煙付着
169	土師器	脚付皿	1区	断面2第44層	8.6	4.2		口縁90 脚部45	10YR8/3浅黄橙色	
170	土師器	脚付皿	1区	断面2第44層	8.3	4.4		口縁40	10YR8/3浅黄橙色	
171	土師器	皿	1区	断面2第44層	11.0	2.5		20	10YR8/4浅黄橙色	口縁油煙付着
172	土師器	皿	1区	断面2第44層	12.0	2.2		20	7.5YR7/4にぶい橙色	
173	土師器	皿	1区	断面2第44層	7.1	1.4		85	7.5YR6/6橙色	
174	土師器	皿	1区	断面2第44層	7.7	1.6		55	10YR8/3浅黄橙色	

遺物 No.	器種	器形	地区	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	色 調	備考
175	土師器	皿	1区	断面2第44層	9.3	1.7		100	10YR8/4浅黄橙色	
176	土師器	皿	1区	断面2第44層	9.4	1.5		100	外面 7.5YR8/4浅黄橙色 内面7.5YR7/6橙色	
177	土師器	へそ皿	1区	断面2第44層	6.7	1.8		100	10YR8/1+8/2灰白色	
178	土師器	へそ皿	1区	断面2第44層	7.0	1.5		100	10YR8/4浅黄橙色	
179	土師器	へそ皿	1区	断面2第44層	7.3	1.7		100	10YR8/4浅黄橙色	
180	土師器	へそ皿	1区	断面2第44層	7.1	1.7		95	7.5YR8/4浅黄橙色	
181	土師器	へそ皿	1区	断面2第44層	6.8	1.8		95	7.5YR7/6橙色	
182	土師器	へそ皿	1区	断面2第44層	6.9	1.8		90	7.5YR8/4浅黄橙色	
183	土師器	へそ皿	1区	断面2第44層	7.1	1.9		100	10YR8/3浅黄橙色	
184	土師器	へそ皿	1区	断面2第44層	7.2	1.9		90	7.5YR8/4浅黄橙色	
185	土師器	皿	1区	断面2第44層	8.2	2.0		65	10YR8/2灰白色	
186	土師器	皿	1区	断面2第44層	8.0	2.2		100	7.5YR8/4浅黄橙色	
187	土師器	皿	1区	断面2第44層	8.5	2.3		80	外面 10YR8/4浅黄橙色 内面 7.5YR8/3浅黄橙色	
188	土師器	皿	1区	断面2第44層	8.7	2.3		100	10YR8/3浅黄橙色	
189	土師器	皿	1区	断面2第44層	8.3	2.3		80	10YR8/4浅黄橙色	口縁油煙付着
190	土師器	皿	1区	断面2第44層	8.5	2.0		95	7.5YR8/3浅黄橙色	
191	土師器	皿	1区	断面2第44層	8.5	2.2		60	7.5YR8/4浅黄橙色	
192	土師器	皿	1区	断面2第44層	8.6	2.1		85	7.5YR8/4浅黄橙色	
193	土師器	皿	1区	断面2第44層	12.6	3.2		35	10YR8/3浅黄橙色	
194	土師器	皿	1区	断面2第44層	12.8	2.9		35	10YR8/4浅黄橙色	
195	土師器	皿	1区	断面2第44層	13.4	2.5		40	10YR8/4浅黄橙色	
196	土師器	皿	1区	断面2第44層	12.0	2.1		50	10YR8/4浅黄橙色	
197	土師器	皿	1区	断面2第44層	12.6	3.2		40	10YR8/2灰白色	
198	土師器	皿	1区	断面2第44層	13.6	2.8		40	10YR8/4浅黄橙色	
199	土師器	皿	1区	断面2第44層	12.8	2.4		40	10YR8/3浅黄橙色	
200	土師器	皿	1区	断面2第44層	13.0	2.7		25	10YR7/3にぶい黄橙色	
201	土師器	皿	1区	断面2第44層	12.4	2.4		25	10YR8/3浅黄橙色	
202	土師器	皿	1区	断面2第44層	12.6	2.6		口縁100	10YR5/1褐灰色+7.5YR7/4にぶい 橙色	口縁油煙付着
203	土師器	皿	1区	断面2第44層	12.3	2.6		100	10YR8/4浅黄橙色	

遺物 No.	器種	器形	地区	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	色 調	備考
204	土師器	皿	1区	断面2第44層	13.4	2.5		50	外面 10YR8/3浅黄橙色 内面 10YR8/4浅黄橙色	
205	土師器	皿	1区	断面2第44層	14.7	3.3		30	7.5YR8/4浅黄橙色	
206	土師器	皿	1区	断面2第44層	15.0	2.9		50	7.5YR8/3浅黄橙色	
207	土師器	皿	1区	断面2第44層	14.7	2.8		30	10YR8/4浅黄橙色	
208	土師器	皿	1区	断面2第44層	15.6	2.8		35	外面 7.5YR7/3にぶい橙色 内面 7.5YR8/3浅黄橙色+7.5YR7/6	
209	土師器	皿	1区	断面2第44層	15.6	2.7		25	10YR8/4浅黄橙色	
210	土師器	皿	1区	断面2第44層	16.0	2.9		70	7.5YR8/4浅黄橙色	
211	土師器	皿	1区	断面2第44層	15.8	2.8		30	10YR8/4浅黄橙色	
212	土師器	皿	1区	断面2第44層	16.2	3.2		45	10YR8/4浅黄橙色	
213	土師器	皿	1区	断面2第44層	15.0	2.6		50	10YR8/4浅黄橙色	
214	土師器	皿	1区	断面2第44層	16.1	2.4		20	10YR8/4浅黄橙色	
215	土師器	皿	1区	断面2第44層	14.2	2.9		45	10YR8/3浅黄橙色	
216	土師器	皿	1区	断面2第44層	15.2	3.0		10	外面2.5Y6/2灰黄色+7.5YR6/2灰褐色 内面 10YR8/3浅黄橙色	
217	土師器	皿	1区	断面2第44層	17.6	2.8		45	7.5YR8/4浅黄橙色	
218	土師器	皿	1区	断面2第44層	19.7	2.9		20	10YR8/3浅黄橙色	
219	土師器	皿	1区	断面2第44層	21.2	3.6		25	10YR8/4浅黄橙色~10YR7/3にぶい 橙色	
220	土師器	皿	1区	断面2第44層	20.0	3.7		10	10YR8/3浅黄橙色	
221	施釉陶器	椀	1区	断面2第44層	14.8			20	10YR8/2灰白色	古瀬戸 平椀
222	施釉陶器	椀	1区	断面2第44層	15.0	4.9		20	10YR8/3浅黄橙色	古瀬戸 平椀
223	施釉陶器	椀	1区	断面2第44層	14.8	6.0	4.6	口縁10 底部100	10YR8/3浅黄橙色	古瀬戸 平椀
224	施釉陶器	椀	1区	断面2第44層	15.2	5.6	4.6	口縁35 底部100	10YR8/3浅黄橙色	古瀬戸 平椀
225	須恵器	鉢	1区	断面2第44層	25.2			10	5Y7/1灰白色	
226	須恵器	鉢	1区	断面2第44層	27.6	10.2		口縁15	2.5Y8/2灰白色~2.5Y7/2灰黄色	東播系須恵器
227	須恵器	鉢	1区	断面2第44層	28.6	9.0		45	5Y7/1灰白色~5Y6/1灰色	東播系須恵器
228	瓦器	鍋	1区	断面2第44層	27.5			20	2.5Y6/2灰黄色	
229	瓦器	鍋	1区	断面2第44層	29.0			20	10YR8/3浅黄橙色	
230	瓦器	羽釜	1区	断面2第44層					10YR7/2にぶい黄橙色+ 10YR6/1褐灰色	
231	瓦器	羽釜	1区	断面2第44層	28.4			口縁20	外面 2.5Y4/1黄灰色~10YR7/4 内面 10YR6/2灰黄褐色+10YR8/4	
232	瓦器	羽釜	1区	断面2第44層	23.3				5Y2/1黑色	

遺物 No.	器種	器形	地区	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	色 調	備考
233	瓦器	羽釜	1区	断面2第44層	27.0			25	2.5Y8/2灰白色	
234	焼締陶器	甕	1区	断面2第44層	41.6			15	5Y8/1灰白色	常滑あるいは 信楽か
235	土師器	皿	2区	溝12	8.4	1.5		20	10YR7/3にぶい黄橙色	
236	瓦器	椀	2区	溝12	13.4	4.6		20	2.5Y7/2灰黄色+2.5Y3/1黒褐色	
237	瓦器	椀	2区	溝12	14.2	4.3		90	2.5Y3/1黒褐色～5Y3/1オリーブ黒色	
238	瓦器	椀	2区	溝12	13.2	4.6		85	2.5Y4/1黄灰色+5Y5/1灰色	
239	瓦器	椀	2区	溝12	13.3	4.3		45	N2/0黒色～5Y6/1灰色	
240	瓦器	椀	2区	溝12	13.8	4.6		90	2.5Y3/1黒褐色	
241	瓦器	椀	2区	溝12	14.2	4.7		98	2.5Y4/1黄灰色+5Y5/1灰色	
242	瓦器	椀	2区	溝12	14.0	4.5		90	2.5Y4/1黄灰色+5Y5/1灰色	
243	瓦器	椀	2区	溝12	14.2	4.6		20	5Y6/1～5Y4/1灰色	
244	土師器	皿	2区	土坑90	13.6	2.9		35	7.5YR8/4浅黄橙色～7.5YR7/4にぶい 橙色	
245	瓦器	椀	2区	土坑90	15.0			30	2.5Y8/1灰白色～2.5Y4/1黄灰色	
246	土師器	皿	2区	平坦面4西肩部	9.2	1.2			10YR7/3にぶい黄橙色	
247	土師器	皿	2区	平坦面4西肩部	9.2	1.5			10YR7/2～10YR7/3にぶい黄橙色	
248	輸入青白磁	椀	2区	平坦面4西肩部	10.8				素地 10YR6/4にぶい黄橙色 釉 10Y7/1～10Y8/1灰白色	
249	瓦器	椀	2区	平坦面4西肩部	10.6	3.1		30	N3/0暗灰色	
250	瓦器	椀	2区	平坦面4西肩部	12.8	4.2			2.5Y4/1黄灰色	
251	土師器	皿	2区	土器溜11	6.0	0.8		25	10YR8/1～8/2灰白色	
252	土師器	皿	2区	土器溜11	7.8	1.3		30	7.5YR7/4にぶい橙色	
253	土師器	皿	2区	土器溜11	7.8	1.2		95	7.5YR7/4にぶい橙色	
254	土師器	皿	2区	土器溜11	8.0	1.6		25	7.5YR5/1褐灰色～7.5YR7/4にぶい 橙色	
255	土師器	皿	2区	土器溜11	7.9	1.1		100	7.5YR6/6橙色	
256	土師器	皿	2区	土器溜11	8.6	1.4		50	10YR8/2灰白色+7.5YR8/2灰白色	
257	土師器	皿	2区	土器溜11	12.0	1.7		20	7.5YR7/6～7.5YR6/6橙色	
258	土師器	皿	2区	土器溜11	12.2	2.1		55	10YR6/2灰黄褐色～10YR7/2にぶい 黄橙色	
259	瓦器	椀	2区	土器溜11	8.2	2.9		60	2.5Y8/3淡黄色～2.5Y4/1黄灰色	
260	瓦器	椀	2区	土器溜11	11.8			20	N4/0灰色	
261	瓦器	椀	2区	土器溜11	12.0	3.7		80	5Y5/1～5Y4/1灰色	

遺物 No.	器種	器形	地区	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	色 調	備考
262	瓦器	椀	2区	土器溜11	11.9	3.7		95	5Y5/1~5Y4/1灰色	
263	瓦器	椀	2区	土器溜11	12.0	3.6		50	2.5Y7/2灰黄色~2.5Y7/3浅黄色+ 2.5Y4/1黄灰色	
264	瓦器	椀	2区	土器溜11	12.8	4.4		40	5Y5/1灰色~5Y3/1オリーブ黒色+ 2.5Y7/2灰黄色	
265	瓦器	椀	2区	土器溜11	13.6	4.3		45	5Y7/1灰白色~5Y4/1灰色	
266	瓦器	椀	2区	土器溜11	13.6	4.3		35	5Y7/1灰白色+N4/0灰色	
267	瓦器	椀	2区	土器溜11	13.6	4.6		80	5Y5/1灰色~5Y3/1オリーブ黒色	
268	瓦器	椀	2区	土器溜11	14.6	4.5		30	7.5Y4/1灰色~7.5Y2/1黒色	
269	瓦器	椀	2区	土器溜11	14.6	5.2		55	2.5Y7/3浅黄色+2.5Y3/1黒褐色	
270	瓦器	椀	2区	土器溜11	13.2	3.9		30	N4/0灰色~N3/0暗灰色	
271	瓦器	椀	2区	土器溜11	13.0	4.4		50	2.5Y8/1灰白色~N5/0灰色	
272	瓦器	椀	2区	土器溜11	13.8	4.0			N6/0~N4・0灰色	
273	輸入青磁	椀	2区	土器溜11	16.0	7.1	5.0	20	釉5Y5/3灰オリーブ色	龍泉窯系
274	瓦器	羽釜	2区	土器溜11	28.0				口縁25	
275	須恵器	鉢	2区	土器溜11	27.8				N6/0灰色	東播系須恵器
276	土師器	皿	2区	土坑15	8.4	1.6		20	10YR7/4にぶい黄橙色	
277	土師器	皿	2区	土坑15	12.0	2.1			10YR7/1灰白色~10YR7/3にぶい黄 橙色	
278	土師器	皿	2区	土坑15	12.2	2.2		90	7.5YR7/4にぶい橙色~7.5YR7/6橙色	
279	土師器	皿	2区	土坑15	13.0	2.3		80	10YR8/2灰白色~10YR7/2にぶい黄 橙色	
280	土師器	皿	2区	土坑15	13.8	2.5		75	10YR8/3浅黄橙色~10YR7/3にぶい 黄橙色	
281	瓦器	皿	2区	土坑15	8.8	1.7		90	10YR7/2~10YR7/4にぶい黄橙色	
282	瓦器	皿	2区	土坑15	9.1	1.7		75	N4/0灰色~N3/0暗灰色	
283	瓦器	椀	2区	土坑15	13.8	4.5		95	2.5Y7/2灰黄色~2.5Y7/1灰白色	
284	瓦器	羽釜	2区	土坑15	21.8				5Y6/1~5Y5/1灰色	
285	瓦器	鍋	2区	土坑15	30.0				外面10YR4/1褐灰色~10YR1.7/1黒色 内面・胎土10YR6/2~5/2灰黄褐色	
286	須恵器	鉢	2区	土坑15	27.8				N6/0灰色~5Y6/1灰色	東播系須恵器
287	輸入青磁	椀	2区	溝24	15.0				5Y6/3オリーブ黄色~5Y5/3灰オリー ブ色	
288	施釉陶器	椀	2区	溝24	15.0				釉 10YR4/3にぶい黄褐色~10YR2/1 黒色	古瀬戸 天目椀
289	施釉陶器	皿	2区	溝24	12.4	2.5		45	2.5Y7/2灰黄色~2.5Y7/3浅黄色	古瀬戸 卸皿
290	須恵器	鉢	2区	溝24	30.0				5Y6/1灰色~7.5Y6/1灰色	東播系須恵器

遺物 No.	器種	器形	地区	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	色 調	備考
291	輸入青白磁	椀	2区	柱穴58	10.0				釉 7.5Y8/1灰白色	
292	瓦器	椀	2区	柱穴43	13.8				N5/0~N4/0灰色	
293	瓦器	椀	2区	柱穴28	12.6	4.1		45	5Y5/1灰色~7.5Y5/1灰色	
294	輸入青磁	椀	2区	検出中			6.2	底部100		龍泉窯系
295	輸入青磁	椀	2区	検出中			6.5	底部100	素地 2.5Y8/2灰白色 釉 5Y6/2灰オリ ープ色+2.5Y6/2灰黄色	同安窯系
296	瓦器	皿	3区	石列309	10.0	1.4			5Y6/1灰色~N4/0灰色	
297	土師器	皿	3区	石列309	8.7	1.4		95	10YR7/3~10YR7/4にぶい黄橙色	
298	土師器	皿	3区	石列309	9.6	2.0			5YR7/6橙色~7.5YR7/6橙色	
299	土師器	皿	3区	石列309	13.4	2.4		95	10YR8/2灰白色~10YR7/2にぶい黄 橙色	
300	土師器	皿	3区	集石327	6.9	1.1		100	10YR7/4にぶい黄橙色	
301	土師器	皿	3区	集石327	7.0	1.4		50	7.5YR7/4にぶい橙色	
302	土師器	皿	3区	集石327	7.5	1.5		60	7.5YR7/4にぶい橙色~7.5YR7/6橙色	
303	土師器	へそ皿	3区	井戸196	7.8	1.9		100	7.5YR7/4にぶい橙色~7.5YR7/6橙色	
304	土師器	皿	3区	柱穴320	6.9	1.3		70	5YR7/8橙色	
305	土師器	皿	3区	柱穴301	8.4	1.6		25	7.5YR7/6~7.5YR6/6橙色	
306	輸入白磁	皿	3区	土坑305	9.7	2.5		40	2.5Y7/1灰白色~2.5Y7/2灰黄色	
307	輸入青磁	椀	3区	柱穴233	12.0				5GY7/1明オリープ灰色	龍泉窯系
308	瓦器	椀	3区	柱穴304	12.6				5Y8/1灰白色~5Y4/1灰色	
309	施釉陶器	花瓶	3区	土坑151			6.8	50	10YR8/3浅黄橙色~10YR7/1灰白色	古瀬戸
310	土師器	皿	3区	溝342	8.5	1.9		45	外面 10YR8/3浅黄橙色 内面 10YR7/4にぶい黄橙色	内面斑状に 煤付着
311	土師器	皿	3区	溝342	8.7	1.7		60	7.5YR8/4浅黄橙色	
312	輸入青磁	椀	3区	溝342			5.8	底部25		龍泉窯系
313	施釉陶器	鉢	3区	溝342	27.2			口縁20	素地 2.5Y8/4淡黄色 釉 2.5Y8/3淡黄色	古瀬戸
314	瓦器	風炉	3区	溝342	28.0			口縁20	外面 2.5Y5/1黄灰色 内面 2.5Y6/1黄灰色	
315	須恵器	壺	3区	墓163	10.8	18.2	13.6	50	5Y7/1灰白色 黒色粒含む	須恵器壺A 東海産

遺物 No.	種類	出土地点	色 調・胎 土	備考
316	軒丸瓦	3区 集石17	N5/0灰色	蓮華文
317	軒丸瓦	1区 石垣65背面造成土第2面	N5/0~N4/0灰色	巴文
318	軒丸瓦	1区 石垣66背面造成土第1面	5YR7/6橙色+7.5Y6/2灰褐色	巴文
319	軒丸瓦	1区 石垣65背面造成土第1面	2.5Y7/1灰白色	巴文
320	軒丸瓦	3区 溝342	2.5Y8/2灰白色~N6/0灰色	巴文
321	軒丸瓦	1区 断面2第44層	2.5Y5/1黄灰色+N4/0灰色	巴文
322	軒丸瓦	3区 溝342	2.5Y6/1黄灰色	巴文
323	軒丸瓦	1区 石垣66背面造成土第1面	N6/0灰色~N7/0灰白色 φ0.8~2mmの小石2~3%含む	巴文
324	軒丸瓦	1区 石垣65背面造成土第1面	5Y7/1灰白色	巴文
325	軒平瓦	2区 検出中	2.5Y8/1灰白色~2.5Y6/1黄灰色 φ0.5~1.5mmの小石1%含む	唐草文
326	軒平瓦	2区 石塁69裏込	N8/0灰白色~N6/0灰色 φ0.8~1mmの小石1~2%含む	
327	軒平瓦	2区 溝6	10YR6/2灰黄褐色~10YR6/3 断面N3/0暗灰色 φ0.5~4mmの小石2~3%含む	剣頭文
328	軒平瓦	2区 石塁69基底石覆土	2.5Y7/4浅黄色~2.5Y5/1黄灰色 φ0.5~1.8mmの小石1~2%含む	剣頭文
329	軒平瓦	2区 石塁69基底石覆土	5Y6/1~5Y5/1灰色 φ0.8~5mmの小石2~3%含む	唐草文
330	軒平瓦	2区 石塁69基底石覆土	2.5Y7/1灰白色~2.5Y6/1黄灰色 φ0.5~5mmの小石1%含む	剣頭文
331	軒平瓦	1区 石垣65背面造成土第2面	5Y6/1灰色	連巴文
332	軒平瓦	2区 検出中	5Y6/1灰色~5Y7/1灰白色 φ0.8~1.5mmの小石1~2%含む	巴文
333	軒平瓦	3区 検出中	2.5Y6/1黄灰色~7.5YR8/4浅黄橙色	
334	軒平瓦	2区 平坦面3	N5/0~N4/0灰色 φ0.5~2mmの小石2~3%含む	連巴文
335	軒平瓦	3区 検出中	2.5Y6/1黄灰色+2.5Y6/2灰黄色	
336	軒平瓦	3区 集石201	5Y6/1灰色~N6/0灰色	
337	軒平瓦	1区 石垣65背面造成土第2面	5Y7/2灰白色	唐草文
338	軒平瓦	1区 土坑121	5Y7/1灰白色~5Y6/1灰色 φ0.8~6mmの小石1~2%含む	唐草文
339	丸瓦	3区 溝342	5Y7/1灰白色+5Y6/1~5/1灰色	
340	丸瓦	3区 溝342	5Y7/1灰白色~5Y6/1灰色	
341	平瓦	1区 石垣65背面造成土第2面	N4/0灰色~5Y7/1灰白色	
342	平瓦	2区 検出中	5Y7/1灰白色+N6/0灰色	
343	平瓦	3区 溝342	2.5Y7/2灰黄色	
344	平瓦	1区 石垣65背面造成土第2面	N5/0灰色	
参1	丸瓦	調査地周辺表採	2.5Y6/1黄灰色~N4/0灰色	
参2	丸瓦	調査地周辺表採	10YR6/1~10YR5/1褐灰色	
参3	丸瓦	調査地周辺表採	2.5Y6/1黄灰色	

遺物 No.	種類	出土地点	色調	備考
345	転用硯	1区 石垣66背面造成土第1面	外面 5Y5/3灰オリーブ色 内面 2.5Y6/1黄灰色~2.5Y7/2灰黄色	常滑甕転用
346	転用硯	1区 石垣66背面造成土第2面	外面 10YR6/1褐灰色+7.5YR6/1灰色 内面 N4/0~N5/0灰色	須惠器甕転用
347	転用硯	1区 石垣66背面造成土第2面	7.5YR5/1褐灰色~7.5YR5/2灰褐色 断面2.5Y8/1灰白色	常滑甕転用
348	石製硯	1区 石垣65背面造成土第2面	N5/0~N4/0灰色	粘板岩
349	基石	1区 検出中	5Y4/1灰色	砂岩 径14mm、厚さ4.5mm
350	砥石	2区 土坑90	10R6/2灰赤色~10R6/3にぶい赤橙色	粘板岩
351	砥石	3区 溝342	10YR8/4浅黄橙色	粘板岩
352	砥石	1区 断面2第44層	2.5Y6/2灰黄色+2.5Y5/1黄灰色	砂岩
353	砥石	1区 土坑121		砂岩
354	砥石	3区 検出中	2.5Y7/2灰黄色+10YR6/2灰黄褐色	砂岩
355	滑石製鍋	2区 落込70下層黒色土下	2.5Y7/2灰黄色~2.5Y6/3にぶい黄色	口径25.2cm
356	滑石製鍋	2区 石垣69基底石覆土	5Y7/1灰白色~5Y5/1灰色	口径24.2cm
357	滑石製鍋	1区 石垣65背面造成土第2面	5Y6/2灰オリーブ色~10YR4/2灰黄褐色	口径22.8cm
358	滑石製鍋	2区 平坦面4西肩部	2.5Y7/1灰白色~2.5Y7/3浅黄色	口径30.8cm 外面煤付着
359	五輪塔	3区 近世溝		花崗岩 29.4cm×32.4cm×20.2cm 重量 24.5kg
360	鉄釘	1区 断面2第44層		
361	鉄釘	1区 断面2第44層		
362	鉄釘	1区 石垣65背面造成土第2面		
363	鉄釘	1区 石垣65背面造成土第2面		
364	鉄釘	1区 石垣65背面造成土第2面		
365	鉄釘	1区 石垣65背面造成土第2面		
366	鉄釘	2区 石垣69基底石覆土		
367	鉄釘	2区 石垣69基底石覆土		
368	鉄釘	1区 石垣66背面造成土第2面		
369	鉄釘	2区 平坦面4西肩部		
370	肘壺	1区 石垣65背面造成土第2面		
371	肘壺	1区 石垣65背面造成土第2面		
372	鑿	3区 集石327		
373	石突	2区 平坦面4西肩部		
374	板状鉄製品	2区 平坦面4西肩部		
375	籠形鉄製品	2区 検出中		
376	和鏡	2区 検出中		
377	銭貨	1区 石垣65背面造成土第2面		開元通寶
378	銭貨	1区 石垣65背面造成土第2面		天元通寶
379	銭貨	2区 検出中		寛永通寶
380	銭貨	3区 検出中		寛永通寶 (鉄銭)
381	鉄滓	2区 石垣69基底石覆土		

付表2 平成23年度調査 掲載遺物一覧表

遺物No.	器種	器形	地区	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	色 調	備考
382	土師器	皿	5区	土坑9	7.2	1.5		小片	10YR8/2~2.5Y8/2灰白色	
383	土師器	皿	5区	土坑9	8.1	1.2		小片	10YR8/3~8/4浅黄橙色	
384	瓦器	椀	5区	土坑9	13.2	3.3	5.6	25	N3/0暗灰色 φ1.0mm以下の長石・チャート含む	
385	輸入青磁	椀	5区	土坑9	16.0	5.8		25	胎土7.5Y7/1灰白色 釉5GY6/1オリーブ灰色	
386	土師器	皿	5区	井戸104	7.6	2.0		60	7.5YR8/6浅黄橙色 φ2.0mm以下の長石・チャート・赤色粒含む	
387	土師器	皿	5区	井戸104	8.0	1.1		30	10YR7/4にぶい黄橙色 φ1.0mm以下の長石・チャート・赤色粒含む	
388	土師器	皿	5区	井戸104	6.5	1.8		65	2.5Y8/1灰白色 φ1.0mm以下の長石・チャート含む	
389	土師器	皿	5区	井戸104	7.2	2.1		100	10YR8/3浅黄橙色 φ0.5mm以下の長石・チャート含む	
390	土師器	皿	5区	井戸104	10.0	1.8		100	10YR8/2灰白色 φ1.0mm以下の長石・チャート含む	
391	土師器	皿	5区	井戸104	11.0	2.0		50	7.5YR8/4浅黄橙色 φ1.5mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒含む	
392	土師器	皿	5区	井戸104	11.8	2.7		20	10YR8/3浅黄橙色 φ1.0mm以下の長石・チャート含む	
393	土師器	皿	5区	井戸104	11.4	2.6		20	10YR8/3浅黄橙色 φ1.0mm以下の長石・チャート含む	
394	土師器	皿	5区	井戸104	16.0	4.0		25	10YR8/2灰白色 φ0.5mm以下の長石・チャート含む	
395	瓦器	椀	5区	井戸104	14.6	4.6	5.6	25	N3/0暗灰色 φ2.0mm以下の長石・チャート・石英含む	
396	輸入白磁	皿	5区	土坑11	10.4	2.1		100	胎土N8/0灰白色 釉7.5Y8/1灰白色	
397	瓦器	椀	5区	土坑11	11.4	3.7	3.0	30	N3/0暗灰色 φ1.0mm以下の長石・チャート含む	
398	瓦器	椀	5区	土坑11	12.2	4.1	5.2	30	N3/0暗灰色 φ1.0mm以下の長石・チャート含む	
399	瓦器	椀	5区	土坑11	13.8	4.3	4.7	25	N3/0暗灰色 φ1.5mm以下の長石・チャート・石英含む	
400	土師器	皿	5区	土坑6	8.8	1.2		60	5YR7/6~7.5YR7/6橙色	
401	土師器	皿	5区	柱穴146	12.6	2.4		85	5YR7/6~7.5YR7/6橙色	灯明皿 口縁部に煤付着
402	瓦器	椀	5区	柱穴198	12.6	4.2	4.3	65	N3/0暗灰色 φ1.0mm以下の長石・チャート含む	
403	瓦器	椀	5区	柱穴193	14.0	4.7	4.8	65	5Y8/1灰白色 φ1.0mm以下の長石・チャート含む	
404	瓦器	椀	5区	柱穴144	14.2	4.1		30	N3/0暗灰色 φ1.0mm以下の長石・チャート・石英含む	
405	須恵器	碗	5区	検出中					5Y7/1灰白色	長5.7cm、幅5.6cm、厚1.6cm
406	土師器	皿	6区	石垣402掘形	8.3	1.7		30	7.5YR8/4浅黄橙色	
407	施釉陶器	皿	6区	石垣402掘形	9.9	1.7		20	胎土2.5Y8/2灰白色 釉2.5Y7/3浅黄色 φ1.0mm以下の長石・チャート含む	
408	土師器	皿	6区	石垣402掘形	10.6	2.4		100	7.5YR7/6橙色	
409	土師器	皿	6区	石垣402掘形	12.6	2.5		40	7.5YR7/4~10YR~7/4にぶい黄橙色	
410	土師器	皿	6区	石垣402掘形	14.0			小片	10YR8/2灰白色	

遺物No.	器種	器形	地区	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	色 調	備考
411	土師器	皿	6区	石垣402掘形				口縁のみ小片	10YR7/3~7/4にぶい黄橙色	
412	土師器	皿	6区	石垣402掘形				口縁のみ小片	7.5YR7/4~7/6橙色	
413	瓦器	鉢	6区	石垣402掘形				口縁のみ小片	7.5YR7/4~10YR7/4にぶい黄橙色	
414	輸入白磁	椀	6区	石垣402掘形		2.0	6.9	50	胎土2.5GY8/1灰白色 釉10GY8/1明緑灰色	
415	輸入白磁	椀	6区	石垣402掘形	14.0	3.1	8.2	15	胎土5Y8/1灰白色 釉5YR8/1灰白色	
416	輸入青磁	椀	6区	石垣402掘形	14.8	3.8		口縁20	胎土10YR7/3にぶい黄橙色 釉7.5Y6/2灰オリーブ色	417と同一個体
417	輸入青磁	椀	6区	石垣402掘形		6.1	6.0	底部50	胎土10YR7/3にぶい黄橙色 釉7.5Y6/2灰オリーブ色	416と同一個体
418	輸入染付	皿	6区	石垣402掘形	10.0	2.5	5.4	15		
419	土師器	皿	7区	土坑524	6.3	1.9		100	7.5YR8/2~8/3浅黄橙色	
420	瓦器	小椀	7区	柱穴516	6.4	2.1	2.7	60	N3/0暗灰色	
421	土師器	皿	7区	谷579	9.1	1.4		75	10Y8/1灰白色	
422	土師器	鉢	7区	谷579	8.5	3.9		小片	10Y8/1~8/2灰白色	
423	須恵器	甕	7区	谷579	47.1			口縁~肩50	N5/0灰色 φ1.5mm以下の長石・チャート・石英含む	最大径74cm

遺物No.	種類	文様の特徴	手法の特徴	備考
424	軒丸瓦	右回り3巴紋。頭部は離れ、尾は長く互いに接する。外区珠紋は密。	瓦当部側面上半横ナデ・裏面ナデ。丸瓦凸面縦ナデ・凹面布目・側面縦ナデ。瓦当部裏面上部に丸瓦を当て、粘土を付加して接合。	胎土はにぶい黄橙色、砂粒を少量含み、やや軟質。鎌倉時代~室町時代。
425	軒丸瓦	左回り3巴紋。頭部は離れ、尾は長く互いに接しない。外区珠紋は密。周縁は高い。	瓦当部側面不明・裏面ナデ。瓦当部裏面上部に溝を掘り、丸瓦を挿入し、粘土を付加して接合。	胎土は黄灰白色、砂粒を多量に含み、軟質。鎌倉時代。東福寺に類例がある。
426	軒平瓦	左行唐草紋。唐草は大きく反転する。左側部には周縁あり。	段顎。瓦当部成形は折曲技法。瓦当部凹面布目、凸面・裏面横ナデ。平瓦凹面布目・凸面押さえ・側面縦ナデ。	胎土は灰白色、砂粒を少量含み、軟質。平安時代後期。山城産。
427	軒平瓦	唐草紋。唐草は大きく巻き込む。周縁は素文で、左右両側が広い。	段顎。平瓦凹面の両側縁に縦棧、凸面中央部に横棧が付く。瓦当部成形は不明。瓦当部凹面端部横ケズリ、凸面横ナデ、裏面横ナデで下端横ケズリ後横ナデ。顎裏面上端に凹型台の圧痕あり。平瓦凹面縦ナデ・凸面押さえ後ナデ・側面縦ナデ、縦棧部縦ナデ。	胎土は灰白色、微砂を含み堅致。表面は焼成時に燻し、黒灰色を呈する。室町時代。
428	軒平瓦	陰刻剣頭紋。右端は紋様が切れる。	段顎。瓦当部成形は半折曲技法。瓦当部凹面布目・糸切り痕跡、凸面横ケズリ・裏面横ナデ。平瓦凹面布目・凸面ナデ・側面縦ケズリ後ナデ。	胎土は暗緑灰色、砂粒を少量含み、やや軟質。平安時代後期。山城産。幡枝窯に類例がある。
429	軒平瓦	外向唐草紋。中心飾りは下向の五葉紋で、中心に珠紋を配す。唐草は両側に4転する。	段顎。瓦当部成形は不明。顎裏面上端に凹型台の圧痕がある。瓦当部凹面端部横ケズリ、凸面・裏面横ナデ、平瓦凹面布目・凸面ナデ・側面縦ナデ。	胎土は暗緑灰色、白砂粒を少量含み、堅致。表面は焼成時に燻し、黒灰色を呈する。鎌倉時代~室町時代。

遺物No.	種類	出土地点	大きさ	備考
430	金属製品 刀子	5区 土坑11	長32.0cm 幅3.4cm 厚0.9cm、残存率100%	
431	石製品 石鏃	5区 土坑170	長0.89cm 幅0.74cm 厚0.16cm、残存率100%	
432	石製品 石槍	5区 盛土	長3.2cm 幅1.25cm 厚0.35cm、残存率80%	

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	しょうじきゅうけいだい							
書名	勝持寺旧境内							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2011-5							
編著者名	南 孝雄・辻 裕司							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2012年3月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しょうじきゅうけいだい 勝持寺旧境内	きょうとしにしきょうく 京都市西京区 おおほらのみなみかすがちやう 大原野南春日町 ちない 地内	26100	—	34度 57分 32秒	135度 39分 14秒	2010年10月 6日～2011 年8月31日 2011年8月 1日～2011 年11月30日	3,760㎡ 1,770㎡	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
勝持寺旧境内	寺院跡	奈良時代	火葬墓	須恵器		鎌倉時代から室町時代の山林寺院の子院群を確認する。子院群は13世紀に成立し、15世紀に石垣構築などを伴う再整備を行う。16世紀に衰退する。		
		鎌倉時代	土坑、溝、柱穴	土師器、瓦器、瓦類				
		室町時代	石垣、石塁、階段、門、掘立柱建物、井戸、柵、溝、土坑、暗渠	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、硯、石製品、金属製品、銭貨				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011-5
勝持寺旧境内

発行日 2012年3月20日

編集
発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961